

第百十九年(通卷一七七号)

山

岳

二〇二四年

山岳 二〇二四年 目次

【特別読物】

Mountain fever 山恋い——岡野金次郎評伝……………鈴木 利英子・鈴木 遥……………8

【記録】

アンナプルナ山群セティ・コーラのゴルジュ帯下降……………大西 良 治……………40

第3回・第4回「グレート・ヒマラヤ・トラバース」…重 廣 恒 夫・吉 井 修・飯 田 邦 幸……………58

【改革の10年】

公益法人化10年が過ぎて……………宮 崎 絃 一……………100

ヒマラヤキャンプへの思い……………花 谷 泰 広……………106

カナダの岩、山、仲間たち……………松 原 尚 之……………129

【調査・研究】

乗鞍岳大量遭難と高頭仁兵衛……………木 下 喜 代 男……………148

七ツ森より九疑山へ——漢字文化圏の2つの山を巡って……………柴 崎 徹……………162

図書紹介

- 犬糧事始(角幡唯介)……渡辺興亜……証言 雪崩遭難(阿部幹雄)……森田栄
二……202 / 私の心の山(尾崎喜八)……近藤雅幸……205 / ライチヨウ、翔んだ。(近
藤幸夫)……鍛冶哲郎……208

追悼

- 山口節子さん(近藤 緑)……213 / 奥原教永さん(米倉逸生)……217 / 櫻井昭吉さ
ん(吉田理二)……221 / 大石 惇さん(山本良三)……225 / 浦 一美さん(渡部秀樹)
……231

会務報告	237
支部の活動報告	259
委員会の活動報告	321
山岳図書目録	A19
英文サマリー	A13

表紙デザイン 小泉 弘

表紙画 小谷 明

油彩 バタゴニア パイネの夜明け

特別
讀物

Mountain fever 山恋

——岡野金次郎評伝

鈴木利英子・鈴木遥

なぜいま岡野金次郎なのか

神奈川県平塚市の湘南平に、高さ3mもの立派な岡野金次郎の碑が立っている。ここからは岡野が愛した丹沢山塊や富士山、箱根、伊豆の山々、そして、相模湾の向こうには三浦半島、房総半島やスカイツリーまでを望むことができる。そんな風光明媚なこの場所に岡野金次郎の碑が建立されたのは、岡野の死から3年後の1961（昭和36）年のことである。

郷土の歴史を残すのには「碑石に刻することが最良の方法」だという考えのもと、碑の建立は当時の平塚市が力を入れていた文化事業の一環だった。碑文は「文人市長」と

呼ばれた平塚市長（当時）の戸川貞雄が筆を執った。

山を愛し 山を楽しみ

晩年平塚に住み 平塚で終わった

日本山岳界に於ける先駆者

岡野金次郎翁を偲ぶ

平塚で育った登山家の村井米子（『食道楽』で有名な村井弦斎の娘であり、女性で初めて穂高岳から槍ヶ岳を縦走した人物である）は『山愛の記』の「第一章 忘れえぬ人々」のなかで、「平塚市の湘南平に、岡野金次郎翁のレリーフがあるが、その風貌そのままだった」と記している。



冬晴れの湘南平にある岡野金次郎の記念碑。左手に富士山が望める。2024年2月26日撮影

その岡野金次郎の碑の前で、生誕150周年を迎えた今年5月25日に、日本山岳会神奈川支部の主催で「第1回岡野金次郎碑前祭」が開催された。

全国から100名以上の参加者が集まり、来賓として平塚市長や日本山岳会会長、岡野金次郎・小島烏水の親族らが招かれた。私（鈴木利英子）も招待客のひとつだったが、日本山岳会会員でもない私がこの晴の舞台に立ち会うことができたのは、山と溪谷社から刊行される山岳ノンフィクション『孤高に生きた登山家 岡野金次郎評伝』の著者（鈴木遙との共著）として岡野の調査や研究を続けてきたからである。まだ刊行前にもかかわらず、この素晴らしい碑前祭に参加できて、大変光栄と感謝している。

日本山岳界の先人を顕彰する山岳イベント「山岳祭」（四国支部が小島烏水祭、信濃支部がウエストン祭など）はすでに全国12ヶ所で行なわれており、神奈川支部による「岡野金次郎碑前祭」は13番目の山岳祭となる。

このタイミングだったのは生誕150周年の記念行事と当初は考えていたが、碑の建立からすでに63年もの歳月が経っている。それならば、岡野の生誕150周年を待たなくても、もっと前に山岳祭を開催しても良かったはずだ。なぜいま、岡野金次郎なのか。

実は来年、日本山岳会は創立120周年を迎える。その記念事業の一つとして、各地で行なわれている山岳祭を絶やさず将来に繋げるために「引き継がれる山岳祭」というプロジェクトが立ち上がった。その一環で、創立120周年に先駆けて「第1回 岡野金次郎碑前祭」が計画されたのだという。第1回と冠しているように、岡野金次郎碑前祭はこの先も続いていく予定と聞いている。

主催者がどこまで意識していたのかは分からないが、来年に日本山岳会が創立120周年を迎えるのは岡野金次郎の功績が大きい。なぜなら岡野金次郎は「日本近代登山の父」と呼ばれる英国人ウォルター・ウエストンの発見者であり、ウエストンと出会い、友人の小島烏水に紹介したことで、3人での交流が始まったからである。

ウエストンの勧めもあって日本初の山岳会の設立話が持ち上がり、1905（明治38）年10月に山岳会（のちの日本山岳会）が設立されるのだが、もし岡野金次郎がいなければ、日本山岳会の設立も近代登山の普及や進歩ももっと遅れていただろう。日本における登山の歴史は別の展開を遂げていたかもしれない。

少なくとも、岡野金次郎が日本の近代登山の時間の針を早めたことで、2025年に日本山岳会は創立120周年



神奈川支部主催の「第1回 岡野金次郎碑前祭」にて。日本山岳会会長と岡野・小島両家の親族たち

を迎えることになる。岡野金次郎は、日本山岳会における周年イベントのキーパーソンなのである。
登山家岡野金次郎とはどのような人物なのか。詳細は『孤高に生きた登山家 岡野金次郎評伝』によるとして、その人物像の概略を追っていく。

私と岡野金次郎との出会い

私（利英子）が岡野金次郎と出会って、評伝を書くことになったきっかけについてまず触れたいと思う。

それは2011年に平塚市中央公民館主催のノンフィクション講座を受講したことにさかのぼる。この連続講座のタイトルは「ノンフィクション入門——学んでから、書いてみよう地域人物史・女性史——」。講師は女性史研究家の江刺昭子氏で、講座では平塚ゆかりの人物をひとり選んで1200字の評伝を提出する課題が出された。

夫に課題について相談をすると、晩年に平塚で暮らしていた岡野金次郎という登山家がいるという。登山を趣味とする夫は、日本山岳会の創設者として有名な小島烏水の山の同行者として岡野金次郎がいたということは以前から知っていた。しかし、その碑が湘南平に設置されたことで、

初めてこの登山家が平塚ゆかりの人物だと知ったという。近代登山の先駆者でありながら、全体像がはつきりしないこの登山家の概要を聞いた私は、この人物を課題の評伝対象者に即決した。とはいえ評伝を提出するまでの期間は3ヶ月ほどで、文字数も1200字にすぎない。自宅にそろっていた山岳関係の歴史書とネットで簡単に調べた情報を基に、形式的なものを提出するに留まった。

講座の修了後、受講者のなかから有志7名が集まって、平塚ゆかりの人物の評伝集を作ること目標に「平塚人物史研究会」を立ち上げるようになった。メンバーに加わった私は、今度は公的に発表することを念頭に、岡野金次郎についてさらに一歩踏み込んだ調査をすることになった。

調査に先駆けて、今もおそらく平塚にいるであろう岡野の親族を探すことから始めることにした。長女の嫁ぎ先である小永井家が今も平塚市内にすることが分かり、訪問して貴重な遺品や資料を見せてもらうことができた。

平塚人物史研究会では、ほかのメンバーもそれぞれに平塚ゆかりの人物をひとりずつ取り上げて、2013年に冊子『平塚ゆかりの先人たち』を発行することができた。

『平塚ゆかりの先人たち』が完成すると、小永井氏はほかの親族たちに手紙を添えて冊子を郵送してください、それ

を読んだ親族たちが評伝を書いた人に会いたいと平塚に集まってくれた。そこからほかの親族たちともつながり、一緒に食事をしたり、湘南平の碑やお墓を訪問したりと、孫の世代である親族たちとの交流を重ねるようになった。

『平塚ゆかりの先人たち』は平塚ゆかりの人物の評伝集であるため、私が担当した岡野金次郎の評伝も平塚に関する部分を中心にまとめている。しかし、岡野が登山家として活躍したのは平塚に移住するより前の時期であり、平塚転居前のことを調査し明らかにすることこそ、より大きな価値があると考えた。また、新たな親族との交流を通じて、冊子発行後に分かったこともたくさんあった。

岡野金次郎という人物をより多くの人たちに知ってもらいたい。娘の遙に平塚以外の調査と書籍の執筆について相談し、共同で書籍制作を進めることになった。

岡野金次郎の登山家人生

岡野金次郎の生涯は謎が多い。日記こそまめに書き続けていたが、関東大震災ですべて焼失してしまった。登山家として全盛期だった明治期から大正期にかけて、岡野の登

山記録は非公開のものも含めてほとんど残っていない。

しかし、生前にはほぼ無名だった岡野は、そこから小島鳥水より長く生きたことで、晩年から死後へと思いがけない展開を遂げていく。純粹に山に登る岡野のような生き方によくやく時代が追いつき、次の世代の登山家たちに徐々に評価されていったのだ。

小島が山登りを引退してからも、健脚な岡野は全国すべての山を踏破すべく誰よりも早い時期から、この時代に誰よりも長く、誰よりも多くの山へと精力的に足を延ばしていった。そして、登山家人生を終えた後も、死後数十年にわたって徐々に評価を高めていった。その一連の出来事は、先駆的なことを成した人たちがどのようなプロセスを経てのちの人々に評価され、歴史がどのようにつくられていくのかを私たちに雄弁に語ってくれる。

岡野金次郎の足取りを追うことは、山岳界の歴史をたどり直して、その歴史のつくられ方を再検証していくことでもあった。

mountain fever (山恋い) に目覚めるまで

岡野金次郎は1874(明治7)年4月15日、神奈川県橘樹郡程ヶ谷(現・横浜市保土ヶ谷区)で父庄次郎、母サ

クの第一子として誕生した。弟ふたりと妹ふたりの5人兄弟の長男である。

その後、一家は久良岐郡戸部町字山王山(現・横浜市西区西戸部町)に移住し、金次郎は少なくとも小学生のころから、西戸部で過ごしている。

自宅の目と鼻の先には小島鳥水(本名・小島久太)の家があり、小島は1学年上(誕生日は約4ヶ月違い)で同じ老松小学校(現・横浜市立本町小学校)に通っていた。

金次郎の父庄次郎は、1886(明治19)年7月に三井物産横浜支店に勤務中、当時、横浜港を中心に流行したコレラに感染して急死した。金次郎はこのときまだ13歳だったが、家督相続をして、母と弟ふたり、妹ふたりの生活を支えなければならなくなった。

若くして一家の大黒柱となった金次郎は、小学校を卒業後、警察の給仕をして働いた。そのため学歴は低かったが、父の死後5年が経ったころから英語の個人指導を受けるために「血の出るような月謝」を払って、横浜在住の米国人のもとに通い始めた。

こうして身に着けた語学力が、のちに世界周遊の旅、外資系企業への就職、ウェストンとの出会いといった様々な事柄に結びついていく。

1891(明治24)年の17歳の春、丹沢山塊の麓にある母の実家に遊びに行った。家の目の前にそびえる丹沢山塊を見て「登ってみたい」と祖母に話すと、コマドリを捕りに行く近所の人を案内人に頼んでくれて、尊仏山(塔ノ岳)に登頂することができた。

それまで横浜近郊の身近な山々をハイキングするくらいしか登山経験のなかった岡野にとって、これは初となる本格的な登山体験であった。岡野はこれを「マウンテン・フィーバー Mountain fever(山恋い)の始まり」と称している。

Mountain fever(山恋い)は岡野のお気に入り言葉であり、のちに冒険登山へと踏み出していく運命の第一歩となった。

また、尊仏山に登るきっかけをつくった祖母は熱心な歌舞伎ファンで、岡野は青少年時代にとどき芝居見物に連れて行ってもらって、芝居趣味を植え付けられた。登山と芝居見物(加えて浮世絵収集)はこの先、小島との共通の趣味になる。

小島烏水との出会いからふたりの登山家デビューへ

20歳を迎えた1894(明治27)年、久良岐郡日下村関(現・横浜市港南区笹下)の役場で徴兵検査が行なわれ、小

島烏水との運命的な出会いがあった。

ふたりは初対面の挨拶から自然と会話が始まり、家がすぐ近くということも分かって、この役場からふたりの自宅がある西戸部までの2里(約7・8km)の田舎道を、山の話や芝居の話に興じながら歩いて帰った。

その日からほとんど毎晩のように、ふたりは賑やかな人出の伊勢佐木町通りや野毛・吉田町・元町などを散歩した。また、好きな芝居の立見をすることもあった。

静寂な大自然に憧れるふたりは、毎週日曜になると、丘陵地帯を縫う旧東海道の険しい急坂(権太坂)からまだ五十三次(宿場)の面影が残っていた保土ヶ谷宿へと遠足したり、横浜南部の丘陵や三浦半島の山々などを歩き回ったりした。

よほど意気投合したのだろう。20歳のふたりは、ほぼ毎日ともに過ごす気の置けない間柄になっていた。

ふたりの出会いから1年後の1895(明治28)年の春、岡野は小島を誘って尊仏山に登った。平塚から歩いて、まづ山麓にある現・秦野市堀西の岡野の祖母宅に立ち寄り、そこから尊仏山の山頂を踏んだ。

ちなみにこの尊仏山登山は、丹沢山塊で山に登ること自体を目的とした登山の最初の記録となっている。そして、

これがふたりの登山家デビューとなった。

晩年、小島が岡野宛に出したハガキには、「無邪気にして愉快なりし逍遙遊を、いまだに菜の花が咲くこの季節になると思い出します——」と印象深い思い出として記した。しかし、この手紙を岡野に投函した1948（昭和23）年の12月に、小島は74歳で亡くなっている。

尊仏山がふたりにとって本格的な登山、いわば登山家としての始まりの象徴的な出来事だったのでろう。

尊仏山登頂を果たしたふたりは、翌年の1月には続いて箱根の駒ヶ岳と神山に登って、登山実績を積み重ねていった。

世界周遊の旅を終えて横浜の外資系企業に就職

岡野には「世界を一周したい」という夢があった。しかし、一家を養わなければならない立場にあり、とても大名旅行のできる身分ではない。

そこで1897（明治30）年、23歳の岡野は日本郵船の商船「土佐丸」（明治26年にイギリスから購入した日本初の大形船）に船の技術員として乗り組み、日本から香港、ボンベイ（現・ムンバイ）、ポートサイドを経由してヨーロッパへという航路で世界周遊の旅を実現させた。

岡野はこの旅で異国の見聞を広め、さらには欧州の山水（自然の景色）や登山趣味を知ったという。「趣味として山に登る」という欧州では一般的な概念が当時の日本ではまだほとんど確立されていなかったため、こういった知識はその後、本格的な登山を極めていく大きな後押しになったことと思われる。

1898（明治31）年に世界周遊の旅を終えて帰国すると、10月にスタンダード石油会社（Standard Oil Company of New York、現・ENEOSホールディングス）の日本支店に経理職として入社した。

1904（明治37）年には、旧外国人居留地である山下町8番地に下田菊太郎設計の立派な洋風社屋が建設され、関東大震災による倒壊で建て替えられるまで、岡野は毎日ここに通っていた。この新社屋竣工と同年に、小島の勤務先である横浜正金銀行本店（建物は現在、神奈川県立歴史博物館）も竣工している。

スタンダード石油会社の支配人ハッパー（筆名ジョン・スチュワート・ハッパー、別名広重ハッパー）は、米国人として海外に歌川広重の名を広めた浮世絵研究家で、同じ山好きとして岡野の登山活動に協力的だった。そのような職場環境に加えて、退職後に支給される恩給にも恵まれて

いたことが、岡野の登山活動を長期にわたって大きく支えていた。

入社2年後の1900（明治33）年8月、岡野は神奈川県足柄下郡小田原町幸町（現・小田原市）の関トヨと26歳で結婚した。

そのわずか2ヶ月後に、岡野は小島とふたりで新婚旅行名義の休暇を利用して乗鞍岳に出掛けた。トヨは自分たちの新婚旅行のほが岡野と小島を送り出すはめになり、「乗鞍は五合以上は這松が一杯繁茂して登る道がなかったの

で、這松の上を這って登ったそうで、ズボン等はわかめの様にずたずたにさけて帰って来ました」と振り返っている。これ以降、岡野は支配人ハツパーの計らいにより、毎年夏に2週間の休暇を取得するようになった。小島も毎年2週間の休暇（小島が取得できる最大の日数が2週間だった）を取得して、ふたりは毎年夏に、大がかりな登山活動をする

槍ヶ岳登頂と近代登山の幕開け

乗鞍岳の山頂でふたりは槍ヶ岳を目標し、それがきっかけで今度は槍ヶ岳の登山計画に乗り出すことになる。

小島が長野県松本の役場宛に問合せすると「登山路など

なく、古来登山するものはないから見合わせた方がよい」とあり、なかには「猛獣毒蛇の住家で生還は期せられない」という振るった一節まであったことを、岡野は晩年まで鮮明に記憶していた。

この役場からの返事を最初に手に取ったのは、運の悪いことに小島の母であった。「岡野は山の悪友」だと言われて槍ヶ岳登山に反対されていると聞かされた岡野は、「敵は本能寺だ。お袋には槍へは行かないことにして、行こう」と答え、秘密裏に「槍ヶ岳登山計画」を進められていった。

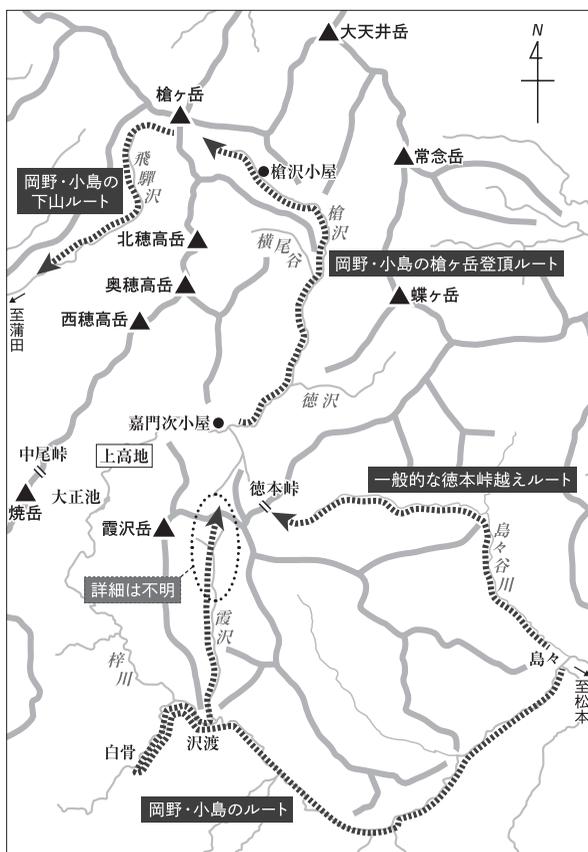
1902（明治35）年の夏に2週間の休暇を取得して、ついにふたりは槍ヶ岳へ向けて出発した。

松本から槍ヶ岳の登山口である島々へ行く途中、人に会うごとに槍ヶ岳の登山道を探ねたが皆「知りませぬ」と返事をした。土地の人が「白骨しらほねに行けば道を知っている。猟師がいるかも知れない」と言ったので、白骨の大石屋に泊まることにした。しかし、宿の主人は槍ヶ岳の登山道を知らず、呼んでくれた猟師も槍ヶ岳など登ったことがなく、道も知らないという。

実は島々から白骨へというのは全くの方向違いで、これが苦難の始まりだった。小島いわく「槍などへ登ったことのない、にわか仕立ての素人案内」だった大石屋の主人と



岡野が使用していたゲートル



岡野と小島の槍ヶ岳登山ルート概要。『孤高に生きた登山家 岡野金次郎評伝』より

若い猟師、筒木市太郎を案内人として雇って、とにかく行けば大体の見当がつくかもしれないと、槍ヶ岳へ向けて出発した。

しかし実際、このときの上高地までの行程は、鳥々から徳本峠を経て上高地に至る一般的な徳本峠越えとは異なり、遠回りな上にはなほだ困難なものだった。

作家で登山評論家の近藤信行（『小島鳥水 山の風流使者伝』で大佛次郎賞を受賞）は、小島が書いた『槍ヶ岳探険記』を基にこのときのルートを特定するために、登山家の山崎安治とともに探険登山に出かけている。そのときは「霞沢岳の東面―小島鳥水追跡紀行」にまとめられているが、今でもどのようなルートをたどったのかはミステリーとなっている。

「沢渡の奥の霞沢の分水嶺を登って峠の頂上に出た。當時、地理上の名称は明かでなかったが、カミコーチの全貌が一望のもとに展開された。花崗岩の白い砂の上を澄み切った溪流（梓川）が流れ、今と違って、白樺が一面に茂っていた森林美の壮観に暫し忘我の境に恍惚とし、勇氣百倍して一氣にカミグチに下り、犬の小屋のような建物（後で嘉門次小屋と分る）に泊めて貰った」と岡野が述べているように、ふたりは苦勞して1日で上高地の嘉門次小屋にた

どり着いた。

小屋にはふたりの漁師がいて、ひとりには梓川を渡るとき、足をすくわれて流され、岩に当たって全身に重傷を負ったが、相棒の猟師に助けられて介抱されていた。岡野と小島もそのふたりとともに小屋に泊まり、無傷の方の猟師が槍ヶ岳登山の大体の地図を鼻紙に書いてくれて、槍の天辺から蒲田の谷へ下りられることも確言してくれた。

翌朝出発し、今のような林道のなかった当時のことであるから、一日中、所々臍ぐらいまで深い梓川の溪流を渡渉して槍沢の小屋に着いた。

そこには喜作か玉え門らしい猟師がいたようだが、のちに北アルプス屈指の人気コースとなる「喜作新道」を開拓した小林喜作と、為右衛門吊岩の名でも知られ、喜作を初めて槍ヶ岳に案内した先輩猟師の為右衛門のことであれば、槍登山で右に出る者がいないエキスパートである。この猟師にこの先の道を教えてもらってふたりは、登頂を果たすことになる。

ところが、この登頂は日本の近代登山の幕開けとなる画期的な出来事となったにもかかわらず、岡野の回想は「彼が鎗の頂上までの道を教えてくれた。生憎一日中濃霧で展望がきかず、穂高も見えなかった。今のような登山靴なし

に、雪溪を下って一旦鎗澤の小屋に戻った」と、あまりにもあつけない。

一方で小島の『鎗ヶ岳探険記』を基に書かれた安川茂雄の『近代日本登山史』では、「午後三時半、ガスにつつまこまれたまま四人は山頂に立った。(略)ついに宿望の槍山頂を踏んだのかと思うと烏水も岡野もその感動は大きかった。しばらく山頂にいたが眺望もきかないので四人はすぐ往路を下りはじめた」と書かれている。さらに翌日も再挑戦し、「霧で眺望がきかない一回目」と翌日の「見晴らしの良い二回目」とで、二度、槍の山頂を踏んだことになっている。

実は小島は『鎗ヶ岳探険記』の中で登頂に挑む部分を「第一回の登山」と「第二回の登山」のタイトルを付けて記しており、「第一回の登山」は登頂に触れずに、読む人によって解釈の分かれる曖昧な書き方になっている。これについて岡野は晩年の日記で、最初の挑戦では「槍の肩に達して尖頭に登れず」、山頂に立つことはできなかったこと、翌日に再挑戦して登頂を果たすことができたことを記している。

槍ヶ岳登山直後に書かれた小説仕立ての『鎗ヶ岳探険記』に対して、晩年の1934(昭和9)年に小島は改めて『ア

ルピニストの手記』の中で当時の槍ヶ岳登山を振り返った。そこでは小島自身、「一回の登山は霧で失敗したが、絶頂から霧の絶え間に、蒲田の谷を、チラと見おろして、見当もついたので、翌日の登山は、幸いにして天気もいくらかよく、絶頂をきわめて、蒲田下りをやった」と一回目が失敗に終わったことをはっきりと示している。

山頂での様子も東西南北の眺めがいかに素晴らしかったかを詳細に記した『鎗ヶ岳探険記』に対して、『アルピニストの手記』では「幸いにして天気もいくらかよく」と大きくトーンダウンして、岡野の証言と一致したものになっている。

二回目の挑戦で午前9時ころ山頂を踏むと、ふたりはそこから上高地に引き返すのではなく、案内人の筒木市三郎とともに、蒲田に下山することにした。もうひとりの案内人である大石屋の主人は、小屋に残した荷物とともに上高地に戻り、中尾峠経由で蒲田温泉に向かい合流することになった。

蒲田への下山ルートは、肩から蒲田川の右俣と思われる。道があるわけもなく、前日に猟師から「槍の天辺から蒲田の谷へ下りられる」と教わった上での行動だったが、これもまた苦しい道のりだった。

28歳の岡野と小島は日本人登山者として初めて槍ヶ岳の山頂を踏んだ。当時は今のような登山装備もなく、槍ヶ岳への満足な情報も得られず、詳しい案内人も不在の状況で、ふたりは非常に困難なルートをたどって、苦勞の末に登頂を果たすことができた。

ふたりの登頂は、のちに「日本の近代登山の幕開け」と称される象徴的な登山となった。また、この槍ヶ岳の実績によって、岡野金次郎と小島鳥水は「日本近代登山のパイオニア」と評価されるようになった。

ウェストンとの出会いと日本山岳会の設立

1902（明治35）年夏の槍ヶ岳からの下山後ほどなくして、会社でハッパーが借りていた英語の本を梱包し返却する場に偶然居合わせた岡野は、その本に槍ヶ岳や乗鞍岳などの飛驒の山々の写真が載っているのに気づいた。ウォルター・ウェストンという英国人が書いた『Mountaineering and Exploration in the Japanese Alps』（『日本アルプスの登山と探検』）という本で、ウェストンが自分たちより10年も前に槍ヶ岳に登っていたことを知って驚いた。

さらに著者のウェストンが横浜在住の宣教師で、山手（旧外国人居留地）にある教会の牧師をしていることを突き止

めると、英文の手紙を書き、彼の自宅を訪問した。

ウェストンはまず、岡野らがどういう経路で槍ヶ岳へ登ったのかを尋ね、そこから山の話が繰り広げられた。まだ日本にない登山用具についても説明した。2回目の訪問では小島を連れて行き、そこから3人での交流が始まった。ウェストンはイギリスのアルパイン・クラブ（山岳会）を日本でも作るよう、ふたりに勧めていた。

1904（明治37）年3月、ウェストンは横浜のオリエンタルパレスホテルのグリルに小島、岡野、武田久吉、高野鷹蔵の4人を招待し、日本でのアルパイン・クラブの設立に向けて昼食会を催した。

そこから小島を中心に山岳会の設立に向けた動きが活発になっていった。とりわけ4つの要素が重要な役割を果たすことになる。ひとつ目がウェストンから受け継いだ小島の熱意、ふたつ目が山岳会設立の核となる武田や高野らの所属する日本博物学同志会の存在、そして、3つ目が仲間に加わった弁護士・城数馬の社会的信用、4つ目が新潟在住の山岳研究家・高頭仁兵衛の財力である。

こうして準備は整ったが、山岳会を設立しても果たして入会する物好きがどれだけいるか予測がつかない。日本博物学同志会の支会として結成した方が得策だろうという話



1912年、神田一橋の帝国教育会で、ウェストンの講演会が開かれた。その後の宴会の様様と思われる。中央にウェストンとフランシス夫人、2人をはさんで向かって右に小島烏水、左に岡野金次郎。両側には創立時の会員が並ぶ

になった。こうしてウエストンとの出会いから3年後の1905(明治38)年10月14日、日本博物学同志会の支会として、日本初の山岳会(のちに日本山岳会)が設立された。そして翌年4月には、山岳会の機関誌『山岳』創刊号が刊行された。

発起人は小島烏水、高頭仁兵衛、城数馬、武田久吉、高野鷹蔵、梅澤親光、河田黙の7名で、岡野は会員にこそなったが、発起人に名を連ねなかった。

まだ日本で一般的な登山の概念さえ知られていなかった当時、山岳会は山岳紀行文を発表する場として機関誌『山岳』の発行を重視していた。純粹に山に登ることに強くこだわりの、成果を発表することには関心がなかった岡野は、山岳会の運営方針と合わず、距離を置くようになったと思われる。

それと対照的に、小島は日本山岳会の創設者として山岳界での確固たる地位を確立していく。

日本初の山岳講演会

『山岳』で登山記録を発表せず、記録の上で存在を示さなかった岡野が、会員として唯一名を挙げたのがウエストンの講演会だった。

1912(明治45)年3月、日本山岳会は英国から再び来日したウエストンを招いて、日本アルプスの講演会を開催した。講演前半の日本アルプスについては小島が通訳をし、後半の欧州アルプスについては岡野が通訳をした。

これは日本山岳会の主催でありながら、実質は岡野と小島のふたりの力添えで実現した講演会だった。日本で初めてウエストンを公に紹介する場でもあり、「日本最初の山岳講演会」とも言われている。

鋸岳第一高点に初登頂

ウエストンの講演会と同年の7月、38歳の岡野と小島は案内人の水石春吉と強力を伴って、南アルプスの鋸岳に挑み、第一高点の初登頂に成功した。

ルートは、黒戸尾根から甲斐駒ヶ岳に登って信州側に下り、黒川(戸台川)の谷の大岩の無人小舎(赤河原の岩小舎)に泊まる。翌朝、赤河原の岩小舎から釜無川との峠まで登り、三角点ピークまで稜線沿いに進み、そこから第一高点に登頂した。下山は山頂から少し戻った角兵衛沢のころから角兵衛沢右俣を下り、赤河原の岩小舎に戻った。

第二高点には前年7月に日本山岳会パーティが登頂に成功していたが、最高峰の第一高点に登頂した登山家は岡野

と小島が初めてだった。

ここでは、岡野自らが第一高点に挑み成功したことを「前人未踏」と述べている。しかし、実際には1904年に測量部員の三宅勝次郎らによって埋石が行なわれており、正確には登山家としての初登頂である。この登頂は、小島にとつても岡野にとつても代表的な登山実績のひとつになっている。

ふたりは翌日に仙丈ヶ岳へ向かい、山を下りたところで明治天皇の死を知った。その後、小島が海外に赴任し長く日本に不在だったこともあり、これがふたりでの最後の冒険登山となった。

時代は明治から大正へと移行し、新しい時代の始まりとともに、近代登山の前線で活躍する日本の登山家たちも世交代していった。

銀行員の小島は1915(大正4)年から11年半にわたってアメリカに赴任した。小島が渡米してから間もなくして、岡野はひっそりと日本山岳会を退会した。正確な退会時期は身近な人たちでさえ把握しておらず、渡米翌年には、会員名簿からすでに岡野の名前は消えていた。

日本山岳会退会後の山行

小島とともに鋸岳第一高点に初登頂した翌年の1913(大正2)年12月、天城の山中で珍しく何年にもない大雪に遭い、独りで遭難しかけた。

小島という山の相棒が不在の状態でのこの出来事をきっかけに、独りで山に登ることがいかに危険かを思い知り、ウエストーンからの教えでもあった「山に独りでは登らない」というルールを徹底するようになった。

週末は駒ヶ岳や神山、金時山など箱根の山々に登るのが好きで、毎年、菜の花の咲く季節には丹沢、冬は大晦日から5日まで伊豆・湯ヶ島の湯元館に泊まり、天城山上で初日の出を雪の中から眺めるといった、毎回お決まりの山行もあった。

大正期には子どもたちを連れて家族でも山に行っていた。

青年時代から日記形式で書き溜めてきた正確な登山記録や、長年苦心して収集した愛蔵の浮世絵コレクションなどがあったが、1923(大正12)年9月1日の関東大震災で横浜の自宅が焼失したため、すべて失ってしまった。日記の焼失によって、登山家全盛期だった明治期から大正期にかけての山の記録は、非公開のものも含めてほとんど残っていない。

勤め先のスタンダード石油会社横浜支店も社屋が倒壊し、神戸支店へと一時的な移転することになった。震災の復旧がある程度進んだ翌年に再び関東に戻り、一家は東京の蒲田に住むことになった。

復旧が落ち着いてくると、岡野も仕事をしながら毎週、日曜日と休日の日記をつけていたが、週末に箱根周辺のお山へ登り、毎年夏の休暇には白馬岳や槍ヶ岳、立山から針ノ木岳などを歩いてきた。

また、歌舞伎座、帝劇、新橋演舞場などで観劇を楽しみ、家族とも充実した生活を送っていたことが日記から分かる。

1931（昭和6）年の年末にスタンダード石油会社を57歳で定年退職すると毎日、日記をつけるようになった。そして、以前から日本中の主な山を全部踏破する夢を持っていたため、数々の就職口にも耳を貸さず、退職と同時にすぐさま山へと出掛けていった。

定年の翌1932（昭和7）年から太平洋戦争開戦前の1940（昭和15）年までの9年間は精力的に各地を巡行し、特に退職直後の1年間はほとんど家を留守にしていた。その足取りは九州・四国・本州・北海道・樺太の山々に及んだ。

1940（昭和15）年には3ヶ月にわたって、満州各地

と朝鮮の金剛山やその他の山々を踏破した。翌年は日本の統治下にあつた朝鮮、樺太、台湾の中で唯一未踏だった台湾の新高山（玉山）を志して渡航準備を進めたが、時局のため渡航を断念した。そのことを非常に残念がっていた。

小島烏水との交流を再開

1927（昭和2）年に小島がアメリカから帰国すると、翌年1月に岡野は小島の新居を訪れた。さらに1931（昭和6）年12月末に定年退職したのをきっかけに、岡野は各地の山行から帰宅するとたびたび小島と会って登山報告などをするようになった。

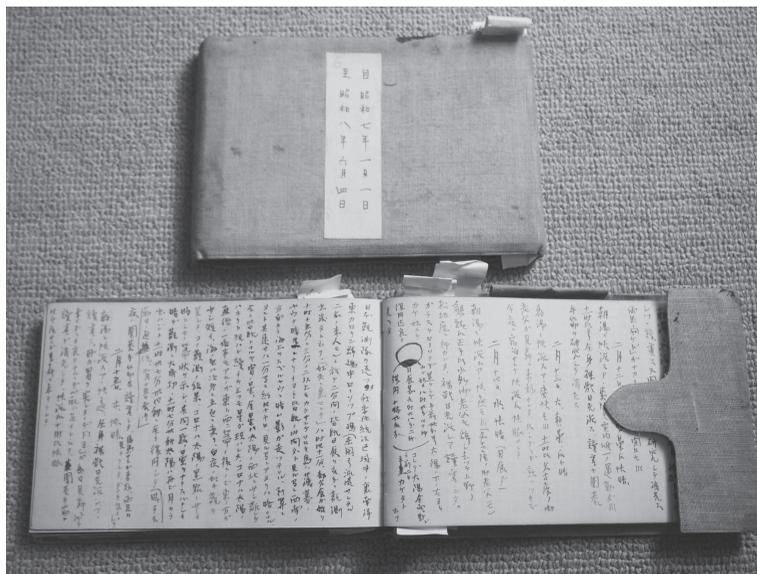
1936（昭和11）年には日本山岳会主催のヒマラヤ（ナンド・コット）登山の講演に出席して、久々に小島と高頭会っている。

岡野は1940（昭和15）年に神奈川県平塚市に転居した。若いころから一貫して朝夕の散歩を日課としていたが、その習慣は平塚でも変わらず、「あのお爺さんが通るから、今何時だ」（毎日散歩に来るから）スパイではないか」などと噂が飛び交うほどだった。

一方小島は、岡野の転居の翌年に脳溢血（1回目）で倒れてからは体調が悪化し、良いときと悪いときを繰り返す



関東大震災後の岡野金次郎日記 20 冊。三男満の手で順番が分かるように整理されている。右下は震災直後で紙が不足しているときに書き始めた 1 冊目の日記



日常生活、山行の記録、小島烏水との交流の記録などを退職後は毎日、細かい字で綴っている

ようになる。訪ねて行っても「面会謝絶」だったり、ようやく病気が快復した小島から会いたいと手紙が来て久々に自宅を訪ね、「山の如く積った話」で盛り上がった。頻繁ではないものの「古い山の友」としての密な交流が続いていた。

69歳になったふたりは、小島の病気が快復したタイミングで一緒に秋の箱根登山の計画を立てた。しかし結局実現せず、小島の病状はさらに悪化していった。

1945（昭和20）年6月、戦局悪化のため小島は山形県東村山郡出羽村七浦に一時疎開し、岡野にも転居のハガキを出している。

それから1ヶ月もしない7月16日の夜、平塚は大規模な空襲を受け、岡野家の暮らす借家は焼失してしまった。関東大震災の教訓から、震災翌日以降の日記は退避させていて焼失を免れた。

その後、岡野は神奈川県足柄下郡吉浜町（現・湯河原町吉浜）で妻トヨの親戚が所有する管理小屋のような建物を一時的に借りることになり、一家は吉浜に転居した。引越し当初は戦時下だったため、日々の散歩は燃料確保のために海岸で枯れ木を拾うなど実益も兼ねていた。畑を耕し、隣組の仲間入りをして、皆で支え合いながら終戦を迎

えた。

ふたりはその後も手紙のやり取りを続けていたが、1948（昭和23）年4月の手紙を最後に、小島は二度目の脳溢血で倒れ、12月に74歳で亡くなった。

日本山岳会との交流

小島の死から約2ヶ月後、『山岳』の編集者である望月達夫から岡野に小島烏水の追悼文を書いてほしいと依頼があった。追悼文は、岡野の語りを三男満が代筆することになった。

『山岳』小島烏水記念号の中に「小島と私」のタイトルで掲載された岡野の寄稿は、岡野から小島に宛てた最後の往復書簡でもあった。それと同時に、これは小島と岡野ふたりの山の思い出を語る体裁をとりつつも、実は岡野が自らの山の活動を詳細に語った、初の公の記録であった。それが実現したのは、岡野が長年距離を置いてきた日本山岳会の機関誌『山岳』であり、小島の死をきっかけに山岳会設立から45年近い歳月を経ての出来事だった。

これが岡野による『山岳』への初めての、そして最後の寄稿となった。

1953（昭和28）年11月に日本山岳会の主催でマナス



マナスル・スライド映写会に参加した岡野金治郎と名誉会員たちの集合写真。出席者はこの日の説明役三田幸夫のほか高野鷹蔵、武田久吉、加賀正太郎、近藤茂吉、鳥山悌成、冠松次郎、神谷恭、望月達夫ら18名(武田の娘と加賀の妻を含む)



岡野金次郎(左)と望月達夫。マナスル登山の講演会を聴きに上京し望月宅に泊まった際に玄関前で撮影

ル登山隊の講演会が開催された。当日、新聞で開催を知った岡野はこの講演が聴きたいと、その足で『山岳』編集者の望月達夫の自宅に向かった。すると望月は「今日の講演は学生相手だから止めにした方がよい。明日は日本山岳会の名誉会員を囲んでのマンサルのスライド映画会があるから、ぜひそれに出て貰いたい」と言う。そこで急遽、名誉会員たちの集いに出席することになった。

集いには名誉会員である高野鷹蔵、武田久吉、三田幸夫、加賀正太郎、近藤茂吉、鳥山悌成、冠松次郎、神谷恭ら豪華な顔が揃い、望月が連れて来た「珍客」の登場に注目が集まった。この集まりで、岡野は日本山岳会の名誉会員になるべきでないかと、その待遇を巡って議論になった。しかし、当時はまだ名誉会員推薦内規などが定められておらず、岡野を名誉会員に推挙する議論は保留された。

「山岳会への復帰」は実現しなかったが、誰よりも早くから山に登り続けた登山家としての生き方によりやく時代が追い付き、岡野金次郎を評価する空気が形成されつつあった。

終の棲家となる平塚へ戻る

1953（昭和28）年8月、岡野夫婦は8年振りに吉浜から同じ神奈川県平塚へ戻ってきた。長女ユキの嫁ぎ先

である小永井家が新宅に転居したため、空き家になった小永井家の旧宅に移り住むことにしたのだ。

翌年3月、80歳の老人が記者のもとを訪れてアロエの効能を語ったという記事が読売新聞に掲載されて、「翁は有名な登山家故小島烏水氏とふたりで日本で初めて日本アルプス槍ヶ岳を踏破した人」だと紹介された。これが話題になり、日本山岳会の大先輩が平塚市民として健在であることを広く知らせる役目を果たした。

この日以降、読売新聞平塚支局の名倉信光記者との交流が始まった。

読売新聞にアロエ語りの記事が掲載されてから2ヶ月後、朝日新聞に「アルピニストの開祖 名著残した小島烏水」という記事が掲載された。執筆者の斎藤昌三は、編集者として古くから小島をよく知る人物で、茅ヶ崎市立図書館の初代館長でもあった。

知人から記事の切り抜きをもらった岡野は、斎藤昌三と会って話がしたいと思い、新聞社に住所を問い合わせた。茅ヶ崎の自宅を訪ねた。数時間にわたって話に花を咲かせて、そこからたびたび斎藤宅を訪ねて山の話などをするようになった。

斎藤はこうして小島・岡野双方と深く交流し、小島の数々

の著作を始めとするふたりに関する文献に精通している稀有な人物となった。岡野の死後に平塚市が湘南平に碑を建ててのゆかりの人物を検討していた際、岡野金次郎こそふさわしいと推薦したのが斎藤昌三である。

また、1955（昭和30）年7月、まだ結成間もない平塚山岳協会（5団体の山岳会が加盟）が主催する山を語る親睦会に岡野が招待され、そこから平塚山岳協会との交流が生まれた。山岳写真展や映画会などを開催するたびに岡野夫婦が出席して、会員たちを喜ばせた。岡野が死去するまでわずか3年ほどの期間だったが、岡野は会員たちに様々な山の話をしたという。

112回目の富士登山

岡野にとって富士山は「我が庭」だった。1902（明治35）年に槍ヶ岳に登頂した帰りに小島と登ったのを皮切りに、特に1941（昭和16）年までの30年間は年に何回も、ときには家族を連れて登っていた。

1956（昭和31）年に最後となる112回目の富士登山をしたときは82歳で、妻を伴っての山行だった。山頂を目指すより二合五勺（次郎坊）の主人に会うことが目的だったが、二合目の小屋で代替わりしていることを知り、引き

揚げた。

80歳ころからの山行は、山頂を目指すのではなく、かつての思い出の山を自らの足で最後にもう一度たどって目に焼き付けていく「山の終活」に近いものだった。そして、最後の富士登山の3ヶ月後（同春秋）に登った赤城山が、結果として最後の登山になった。

交通事故で死去

1958（昭和33）年2月14日の夜、この日の午前の分の日記を書き終えた岡野は、いつものように散歩に出掛けた。そして、旧国道1号を横断するとき、オート三輪にはねられた。近くの病院に運ばれたが、間もなくして亡くなった。83歳だった。

生前はほぼ無名の存在だったが、平塚市記者クラブ所属の記者たちに知られていたため、新聞の全国版やラジオでその死が報道された。そんな名誉を受けたので、親族一同「埋れ木に花が咲いたようだ」という印象を持ったという。告別式では多数の会葬者に見送られ、日本山岳会を代表して神谷恭、村井米子、望月達夫の3人が参列した。御香奠帳には小島鳥水の長男、小島隼太郎の名前も記載されていた。戒名は「岳祖金翁居士」という。

岡野金次郎の死後の評価

岡野と小島ふたりでの槍ヶ岳登頂は、生前の早い時期から日本の近代登山の幕開けと言われていた。しかし、岡野については常に「小島の同行者」という条件がつきまとい、小島の輝かしい実績の陰に埋もれて、岡野自身はごく一部の知る人ぞ知る存在だった。山岳関係者の間でもほぼ無名だったと言っている。

ところが小島の死後、岡野や小島の次の世代に登山家として活躍した「山の後輩」たちとのつながりが、長い年月をかけて様々な連鎖反応を引き起こし、埋もれたまま消え去ろうとしていた岡野の実績を少しずつ、しかしながら着実に表面化させていった。

とりわけ岡野の死去3年後に平塚の湘南平に記念碑が建立されるとは、生前には誰もが想像もできなかった。

岡野が碑の候補に浮上した経緯を振り返ってみると、彼自身の行動が偶然を呼び寄せ、勝ち取ったものであることが分かる。碑の推薦人である齋藤昌三が岡野と知り合ったのも、それ以前に岡野がウェストンと交流するようになり、山岳会の設立につながったのも、晩年の山岳会との交流も、読売新聞記者との交流も、岡野の評価を決定づけるターニ

ングポイントになってくる出来事は、いずれも岡野が自らそれぞれの自宅を訪ねて、山の話をしたのがきっかけだった。

話を聞きたい人の元へ何度でも訪ねていく記者顔負けの岡野の行動がなければ、山岳会のあのような始まり方も、晩年から死後にかけて徐々に功績が認められていく過程も、記念碑に岡野が選ばれることもなかっただろう。

また、岡野金次郎を知る上で欠かせない資料の数々も、岡野が生前に唯一『山岳』に寄稿した「小島と私」を除けば、そのほとんどが岡野の死後に世に出ている。

岡野は「死後に評価された登山家」であり、その再発見の道のりは、死後65年が経った現在もまだ続いている。そのターニングポイントをいくつか振り返ってみたい。

『山岳』での追悼

岡野の死後に、『山岳』に小島栄（鳥水の弟）、岡野トヨ（妻）、望月達夫の3名が追悼文を寄せた。この人選が絶妙であり、生前に岡野自身がこれまでの出来事を唯一詳しく語った『山岳』小島鳥水記念号への寄稿とは異なる切り口で、それぞれの視点から山の実績や人物像が語られている。

当時の日本山岳会で一番の理解者だったといえる望月



1961年11月13日、湘南平に岡野金次郎記念碑が建立された。除幕式に集まった親族たち

は、実は岡野の遠縁だった。望月は小学生のころ、正月に珍しく訪ねて来た岡野から、天城登山で「ひどい深雪に出合って、すんでのことに凍死しそうになったという冒険談」を聞いたことがあった。しかし、岡野が偉大な登山家だと知ったのは大人になってからだった。

山の相棒だった小島烏水という存在を除けば、『山岳』編集者として岡野に小島の追悼文を依頼し、晩年の岡野と日本山岳会をつなぎ、『山岳』の紙面で岡野を追悼する企画を立てた望月達夫は、岡野の評価を高めて記録を継承するという意味で最も貢献した人物だった。偶然にもそのような人物が日本山岳会にいたのである。

湘南平に碑を建立

1955（昭和30）年、平塚市長に就任した戸川貞雄は、郷土史にまつわる文化事業に力を入れていた。湘南平の名付け親であり、その地を1957（昭和32）年に公園として整備し、今の観光地としての土台を築いた人物である。

公園の整備は岡野が死去する前年の出来事であり、死去後に市の文化事業として、湘南平に碑を建てる議案が平塚市議会に提出された。当初は平塚市にゆかりのある曾我兄弟の碑を建てるのが立案されていた。しかし、相談を受

けた斎藤昌三が「親の敵討ちというのは、現代の思想にはない。岡野金次郎という、平塚に住んでいて日本の近代登山に貢献した人がいた。文化事業としてなら、岡野氏の像を建てるのがふさわしい」という意見を述べたことから岡野の名が候補として浮上した。そして、ほとんど無名の存在ながら、湘南平の記念碑として岡野金次郎の像が採用されることになった。

企画の出版物は『故岡野金次郎氏をしのぶ』という冊子になって、碑の除幕式と同時に寄贈品として配布されることになった。平塚市教育委員会・平塚観光協会・平塚山岳協会が制作したこの冊子は、平塚市長と平塚市教育委員会委員長の挨拶を冒頭に、岡野をよく知る4名（斎藤昌三、平塚山岳協会会長だった内田又一、読売新聞記者の名倉信光、次男の岡野敬次郎）がそれぞれに思い出を語っている。

「岡野展」と「小島展」の開催

1961（昭和36）年11月13日に、湘南平で岡野金次郎記念碑の除幕式が行なわれた。さらに同日から1週間、平塚市図書館主催、平塚山岳協会後援による「山岳展 岡野金次郎翁回顧」が平塚信用金庫を会場に開催された。この展示に合わせて岡野の三男満が作成した「岡野金次郎年譜」

が披露されている。家族に年譜の作成を依頼したのは、鳥水の弟、小島栄だった。

実はこの「岡野展」とほぼ同時期に、神奈川県立図書館（横浜市）では小島の展示会「近代登山のパイオニア 小島烏水展」が開催されていた。こちらの展示でも神奈川県立図書館が作成した詳細な「烏水・小島久太年譜抄」が披露されている。

おそらく情報の橋渡しをしていたのは、平塚市に記念碑事業の意見を求められるばかりか、神奈川県立図書館とも親しくしていた斎藤昌三である。「小島展」は岡野の碑の建立に合わせて、岡野にゆかりの深い人物として小島にスポットを当てた企画だったと考えられる。

展示の内容は今となっては分からないが、このとき作成された「岡野金次郎年譜」と「烏水・小島久太年譜抄」がそれぞれ後世に受け継がれていくことになった。

しかし、「岡野金次郎年譜」の山歴は真偽が不明な部分が多くあることが分かっている。特にほとんど記録が残っていない明治・大正期の山行は、槍ヶ岳登山など一部を除いて今も岡野の登山実績について見解が分かれている。『孤高に生きた登山家』では、岡野に関する資料を基に彼の足取りをひとつひとつ再検証し、最新の情報にブラッシュ

アップしている。

生誕百年記念展の開催

1973（昭和48）年12月、日本山岳会は東京・日本橋の丸善3階催物場を会場に「小島烏水 木暮理太郎 岡野金次郎 生誕百年記念展」を開催した。藤島敏男を委員長に、日本山岳会会員の22名で編成された記念展委員会が企画し、委員には山岳界のそうそうたる面々が名を連ねている。

当初は小島と木暮のふたりを記念する企画だったところに岡野を加えた3人展になるきっかけをつくった委員は、おそらく山崎安治、三田幸夫、望月達夫、近藤信行の4名だろう。この生誕百年記念展は小島・木暮・岡野3氏の偉大な登山家を偲ぶだけでなく、彼らの実績を通して「日本人と山との深いつながりを文化的展望のなかで考えよう」という壮大な試みだった。委員たちは半年かけて資料や遺品、関係者の証言などを収集し、展示会の開催と同時に『近代登山の先駆者たち』という約130ページに及ぶ目録を発行した。

この生誕百年記念展によって、岡野と小島の槍ヶ岳登頂が日本の近代登山の幕開けとなったこと、岡野がウェスト

ンを発見したことで山岳会創立の起動点をなしたこと、岡野がいなければ山岳会の創立はもっと遅くなっていた、今とは違った形になっていたかもしれないこと、結果として岡野が日本における近代登山の普及進歩を早めたことが改めて評価され、その実績が日本山岳会の出版物として刻まれた。そこに至るまでには長い歳月が必要だったと思われる。

日本山岳会 100周年から120周年へ

2005年、日本山岳会は創立100周年を迎え、2年後に「本編」と「続編・資料編」から成る『日本山岳会百年史』を刊行した。

そこに山岳会ゆかりの人物を紹介する「人物コラム」のコーナーがあり、本編の中で岡野金次郎が紹介されている。100年に及ぶ日本山岳会のこれまでの刊行物の情報を抽出し、山岳会と岡野の関係性が端的にまとまっている。

岡野は登山家としての全盛期こそ山岳会の方針と相容れず、密接な関係が結ばなかった。しかし、岡野は登山報告会のような場には積極的に足を運び、晩年はわずかながら山岳会との交流を再開した。山岳会の主な事業である機関

誌への寄稿ではなく、後輩の登山家たちとの山への共通の想いが山岳会と岡野を最終的に結び付けたのだ。

そして、そこから死後数十年経っても折に触れて岡野の実績を紹介し、ここまで継承してくれたのは山岳会が縁で岡野とつながった人たちだった。藤島敏男は『近代登山の先駆者たち』で次のように書いている。

山登りは先人の肩にのつて、先きへ上へ進むものだと誰かが書いていた。最先端をゆく登山者達も、時には過去を振り返える心を持ってほしい。

2013年に本格的に始めた岡野金次郎の書籍制作（以下『孤高に生きた登山家』）は、岡野の親族らがそれぞれ家にある資料を点検して整理し、持ち寄るところから始まった。その際に孫の岡野修氏（長男昇の息子）が持参したのが、関東大震災後から死去当日までの出来事がつづられた岡野金次郎の日記だった。かつて金次郎の死後に長女小永井ユキの家に岡野の子ども5人が集まって遺品の分配を行った際、三男満が日記帳の順番を整理した上で、それを長男昇が預かり保管し、このときにはその家族へと受け継がれていた。



日本の近代登山の先駆者 岡野金次郎

日記は岡野の日々の行動や山行がつづられた一点ものの貴重な資料である。世代交代するうちに紛失したり、保存環境によっては劣化したりする恐れもある。そこで親族は協力して日記を電子化し、2020年に「岡野金次郎日記（電子版）」を日本山岳会の資料映像委員会に寄贈した。

さらに未公開のものも含めて様々な資料が集まる中に、小島烏水からの手紙があった。「岡野と小島の実際の仲はどのようなものだったのか」というのは、多くの山岳関係者の関心事である。ふたりの晩年の手紙のやり取りと岡野の日記を照合することで、ふたりの関係性が浮き彫りになっていった。その詳細は『孤高に生きた登山家』の中の「小島烏水との往復書簡」という章で紹介されている。

ふたりの手紙のやり取りや岡野の日記からは、互いを思いやり、強い絆があったことがうかがえる。また、日記にはそのころ交流している人の住所を記していたが、親戚以外に住所を記載するような交友関係は少ないなかで、毎号の住所録に必ず記されているのが小島の名前だった。それほど小島に対する思い入れは強かったのだと思う。

対照的な性格ばかりが強調されるふたりだが、実際には初めて出会ったときから同じような価値観を持ち、互いに惹かれ合っていたのだろう。

また、岡野金次郎の登山家としての評価は小島烏水の文筆あつてのものだった。もし岡野の山の相棒が小島でなかったら、岡野の槍ヶ岳の実績がいかに先駆的だったか、これだけ広く正確に伝わったかは疑わしい。小島が岡野の山行に関わっていなければ、その後の評価はまた違ったものになっていただろう。

岡野は近代登山の先駆者でありながら、日本山岳会と距離を置き、自分の信念に忠実な登山家人生を送った。その生き方を総括すると、「孤高の人」という言葉がしっくりくる。

苦学によって英語を習得することからは勤勉で努力家、山恋いや芝居趣味からは情熱家、服装に無頓着な素朴さ、毎日の散歩や日記などのルーティンの継続など挙げられるが、総じて質実剛健だったと思う。ウエズトンに宛てて書いた手紙や「今日は海岸でみた伊豆の山々の夕景色がなんとも云えず美しかったので、太陽が沈みきるまでみていたよ。ひとりでみるのはもったいないくらい美しかった」と記者に語るなど、ロマンチストでもあった。

一方で自ら登山記録を発表しなかった岡野には数々の謎がある。槍ヶ岳などのごく一部を除いて明治・大正期にどのような登山活動をしていたのか。なぜ日本山岳会の設立

メンバーにならなかったのか。日本山岳会の設立以降の小島との関係性はどのようなものだったのか。なぜ日本山岳会を退会したのか。その人物像はどのようなものだったのか。

『孤高に生きた登山家』はそれらの問いを基に、日本の近代登山史を岡野金次郎の視点でたどり直した評伝となっている。

現在の登山ブームの始まりに岡野がいる。シマウンテン・ファイバー（山恋い）を貫いた岡野の登山活動以降、日本でも多くの偉大な登山家が誕生し、数々の山への挑戦が行なわれてきた。冒険登山だけでなく、時間をかけて全国の山々を踏破するような山への向き合い方も、身近にある小さな山々に登って自然と親しむのも、いずれも岡野が率先して行なってきた山の楽しみ方である。

日本山岳会は来年、創立120周年を迎える。今後の日本山岳会を考えるには、過去を振り返る心を持つのも重要である。これを機に岡野金次郎の登山を考えていただければ幸いである。



岡野金次郎の碑のレリーフ

岡野金次郎略歴

1874	(明治7)	年	0歳	4月15日、神奈川県横浜市保土ヶ谷で誕生
1886	(明治19)	年	13歳	父が勤務中にコレラに感染し急死、13歳で警察の給仕をしながら苦学
1891	(明治24)	年	17歳	尊仏山(塔ノ岳)に初登山
1894	(明治27)	年	20歳	徴兵検査で小島久太(烏水)に会う
1897	(明治30)	年	23歳	日本郵船の商船「土佐丸」に乗船して世界周遊
1898	(明治31)	年	24歳	スタンダード石油会社の日本支店に経理職として入社
1900	(明治33)	年	26歳	小田原市の関トヨと結婚、3男2女の父に。新婚旅行名義の休暇で小島と乗鞍岳に登る
1902	(明治35)	年	28歳	小島と槍ヶ岳に登る(日本近代登山の幕開け)

1903	(明治36)	年	29歳	ウェストンを知り訪問、その後、小島を紹介して交流が始まる
1905	(明治38)	年	31歳	10月14日、日本初の山岳会が設立された。岡野は発起人にはならず一会員となる
1912	(明治45)	年	38歳	小島と鋸岳第一高点に初登頂
1915	(大正4)	年	41歳	小島がアメリカに赴任。直後に岡野は日本山岳会を退会
1923	(大正12)	年	49歳	関東大震災で被災し、一時的に神戸支店へ
1924	(大正13)	年	50歳	東京の蒲田に転居
1931	(昭和6)	年	57歳	33年間勤務したスタンダード石油会社を定年退職
1940	(昭和15)	年	66歳	平塚市の磯部家に転居
1945	(昭和20)	年	71歳	平塚空襲で家が全焼し、湯河原に一時転居
1949	(昭和24)	年	75歳	『山岳』小島鳥水追悼号に寄稿
1953	(昭和28)	年	79歳	8月、平塚市に転居。11月、日本山岳会の名譽会員の集まり(マナスル登山映画会)に出席
1956	(昭和31)	年	81歳	7月、妻とともに112回目の富士登山、これが最後の富士登山となる
1958	(昭和33)	年	83歳	2月14日、平塚市で夜の散歩中に交通事故で死亡

*『山岳』に掲載した内容のみ。詳細版として書籍に「生誕百五十周年 岡野金次郎年譜」を収録している

鈴木利英子

神奈川県平塚市在住。2011年に平塚人物史研究会を有志で立ち上げ、冊子『平塚ゆかりの先人たち』を発行した。現在は地元の山岳会に所属し、国内外の山々を歩いている。

鈴木遥

神奈川県平塚市出身。著書『ミドリさんとカラクリ屋敷』（集英社文庫、第8回開高健ノンフィクション賞次点作）で作家デビューし、フリーランスとして執筆活動を行なう。

『孤高に生きた登山家——岡野金次郎評伝』鈴木利英子・鈴木遥著

岡野金次郎と小島鳥水は、1902（明治35）年、日本人登山者として初めて槍ヶ岳の山頂に立った。のちに岡野はウェストンと邂逅し交友を重ね、小島とともに日本山岳会設立を強く勧められる。しかし、岡野はほとんど記録を発表することもなく、日本の登山史からは忘れられた存在になってしまった。なぜ岡野は日本山岳会の設立者として歴史にその名を残せなかったのか。本書では、遺族が保管していた数々の資料や関東大震災以降の岡野の日記、さらには山岳関係の文献や関係者の証言などを織り交ぜながら、山岳界での岡野の位置づけを検証しつつ、山に生きた岡野の人生をたどっていく。

（2024年9月 山と溪谷社刊 四六判上製、定価2970円）

記 録

アンナプルナ山群セティ・コーラのゴルジュ帯下降

大西良治

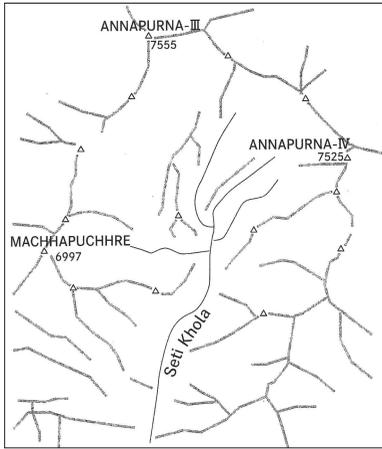
事の始まりは5年前の2019年10月。いつもの遠征パートナーであり、日本のトップ・キャニオニアである田中彰が、衛星画像でSeti,Khola（セティ・コーラ、Kholaは川の意）の存在に気付いたのがきっかけだった。

ネパールになにか良さそうな谷があるとの知らせを受け、確認してみると確かにその谷は非常に興味深い地形を呈している。長い区間で谷の内部が見えず、ずっと狭いゴルジュが続いているようだ。特に森林限界より上流部は岩の露出した荒々しい地形となり。勾配も強く、画像を見ただけでもかなり特異な谷であることは明らかだった。

世界最大級の陰谷

本流の源頭は東に位置するアンナプルナIV峰（7525 m）で、支流を含めた全体を見れば、北にアンナプルナIII峰（7555 m）、西にマチャプチャレ（6997 m）といった名だたる高峰に囲まれた流域を持つ。標高3450 mから始まるゴルジュは、実質的な終点までおよそ5 kmにわたって続き、他に類を見ない規模だ。周辺の谷も広い範囲で調べてみるが、これほどのゴルジュはほかになく、セティ・コーラはヒマラヤ随一、ひいては世界最大級の陰谷である可能性が高いことが分かった。

こんな谷があるならば、行かないわけにはいかない。田中と計画を進めるが、その翌春から新型コロナウイルスが流行し、海外に行けなくなりました。



それから待つこと3年、海外渡航の規制が緩み、計画実現のときが訪れた。NHKディレクターの香川史郎を中心とするテレビ撮影隊も加わることに、遠征チームの規模は大きくなる。撮影隊の現場クルーには、山岳カメラマンであり自身ハードな遠征登山を数多くこなす中島健郎が選ばれ、昨年夏には遠征トレーニンングの一環として、われわれ（私と田中）と共に南アルプスの大井川・赤石沢や北アルプスの黒薙川・柳又谷でキャニオニングをした。

セティ・コーラは集水域が広く、氷河の融雪水が水量に大きく関わる環境のため、乾期で水量の落ち着く2022

年11月中旬から12月中旬を1回目の遠征期間に見据える。当初、キャニオニング・メンバーは4人の予定だったが、結局、最終的に参加できるのは私と田中の2人だけとなった。長い期間の下準備を経て、ようやくヒマラヤ・キャニオニング遠征の幕が開ける。

カトマンズに集合

11月16日、田中とNHK撮影隊の香川、川崎彰子（ディレクター）、関裕一（カメラマン）、小林洵也（音声マン）と共に日本を発ち、機上の人となる。カトマンズ空港でコーディネーターの貫田宗男（『世界の果てまでイッテQ!』の天国じじいでおなじみの登山家）と合流し、後から参加する中島を除く日本人メンバー全員が集う。

各種手続きのためカトマンズで2日滞在する間に、ヒンズー教の寺院やタメルの街中を観光して過ごす。歴史ある寺院の精巧な作りや、趣ある儀式で祈りを捧げる人々を見ると、あらためて異国の地に来た実感が湧く。迷路のように入り組んだ路地に所狭しと立ち並ぶ古びた小店、慌ただしく行き交う群衆やバイク、立ち込める熱気とよどんだ空気。タメルは実に混沌とした街だが、現地の日常を色濃く映す様相に、古きよきアジアの風情を感じた。

ヘリコプターによる事前偵察

11月18日、国内便のイエティ航空でポカラへ移動（同航空会社だが、われわれの帰国1ヶ月後にポカラで墜落事故を起こしたのには驚愕）。入山前の最終準備を行なう。最も重要なのはヘリコプター（以下、ヘリ）での事前偵察。道なきヒマラヤ奥部へ行くには、ヘリが必須だ。今回依頼したのはAIR DYNASTYというヘリ・サービス会社で、パイロットと飛行プランのすり合わせを行ない、翌朝、セティ・コーラへ飛び立つ。わずか10分ほどで上流部へ至り、前方右岸に300mはあるのかという左俣出合の大滝が見えてくる、下を見れば、狭窄したゴルジュの隙間に暗闇が潜んでいる。深さは定かでないが、数百mは確実にあるだろう。

衛星画像で見たとおり、ゴルジュはまったく途切れることなく延々と続き、やはりスケールが途方もない。念願の景観が眼下に収まり、夢へ一歩前進した喜びが満ちる。

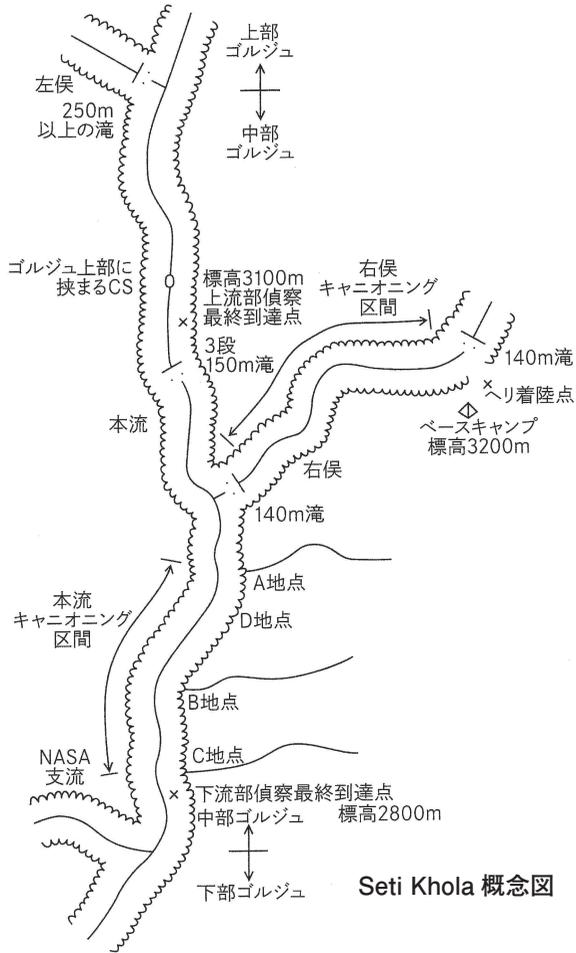
今回の狙いとなるセティ・コーラの本流をメインに右俣、左俣、そして少し下流の左岸支流（昔、N A S Aのヘリが中間部の広河原に着陸したことがあるため、N A S A支流とする）の近辺を飛び回って、ゴルシユ内や周辺の地形、ヘリの着陸可能地点などを偵察する。

本流の左俣出合より上流を「上部ゴルジュ」、左俣出合からN A S A支流出合までを「中部ゴルジュ」、N A S A支流出合より下流を「下部ゴルジュ」とすると、本流で最も惹かれる地形は中部ゴルジュだ。極度に谷幅が狭く、上空から内部を窺うことはできない。ここは人が自ら入って行かなければ未知を解明できない領域である。今回の遠征では、この中部ゴルジュの解明と下降が最大のミッションとなる。

ただ、実際に下降ができたとして、必要になってくるのがエスケープ・ルートだ。オーバーハングした巨大な側壁を登攀するのは不可能で、ゴルジュ内から脱出する手段をあらかじめ確保しておかなければならない。中部ゴルジュの終点に当たるN A S A支流をエスケープ・ルートの候補とし、まずはそこから攻めることで話がまとまった。

ベースキャンプを構える

11月21日、早朝にヘリでN A S A支流へ向かう。標高3200mに広河原があり、そこにベースキャンプを構える。荷物運びや食事の用意のため、撮影隊の手配で6人のシエルバが雇われ、日本人7人と合わせて総勢13人、ヒマラヤ遠征らしい大所帯となった。いつも少人数で遠征に行くわ



Seti Khola 概念図

れわれにとつては新しい体験だ。

2日間の偵察の結果、この支流はエスケープ・ルートには不向きという結論に至った。下部は深いゴルジュが続く水線沿いには進めず、側壁より上の斜面はトゲだらけのヤブが密生し、高巻きルートも不可。

早々に見切りをつけ、11月23日の朝には、もう一つのへり着陸可能地点となる本流の左岸台地（右俣の左岸でもある）にベースを移す。右俣の140m大滝のすぐ近くにもかかわらず奇跡的にフラットな地形で、水も得やすい快適なベースだ。しかも、本流ゴルジュの縁まで15分ほどの歩きで行ける。

この台地には本流ゴルジュへ向かつて3本の沢筋が等間隔に入っており、その末端部（ゴルジュの上端）を偵察の起点とする（上流側からA地点、B地点、C地点と名付けらる）。岩質は石灰岩で、充分強固な支点を得られるのは幸いだった。

偵察開始

11月23日、ポルトを支点にまずはA地点から偵察開始。ラベル（懸垂下降）で垂直部に出ると足元に衝撃的な景観が広がる。恐ろしいほどの深さで切れ込んだ谷は、暗澹た

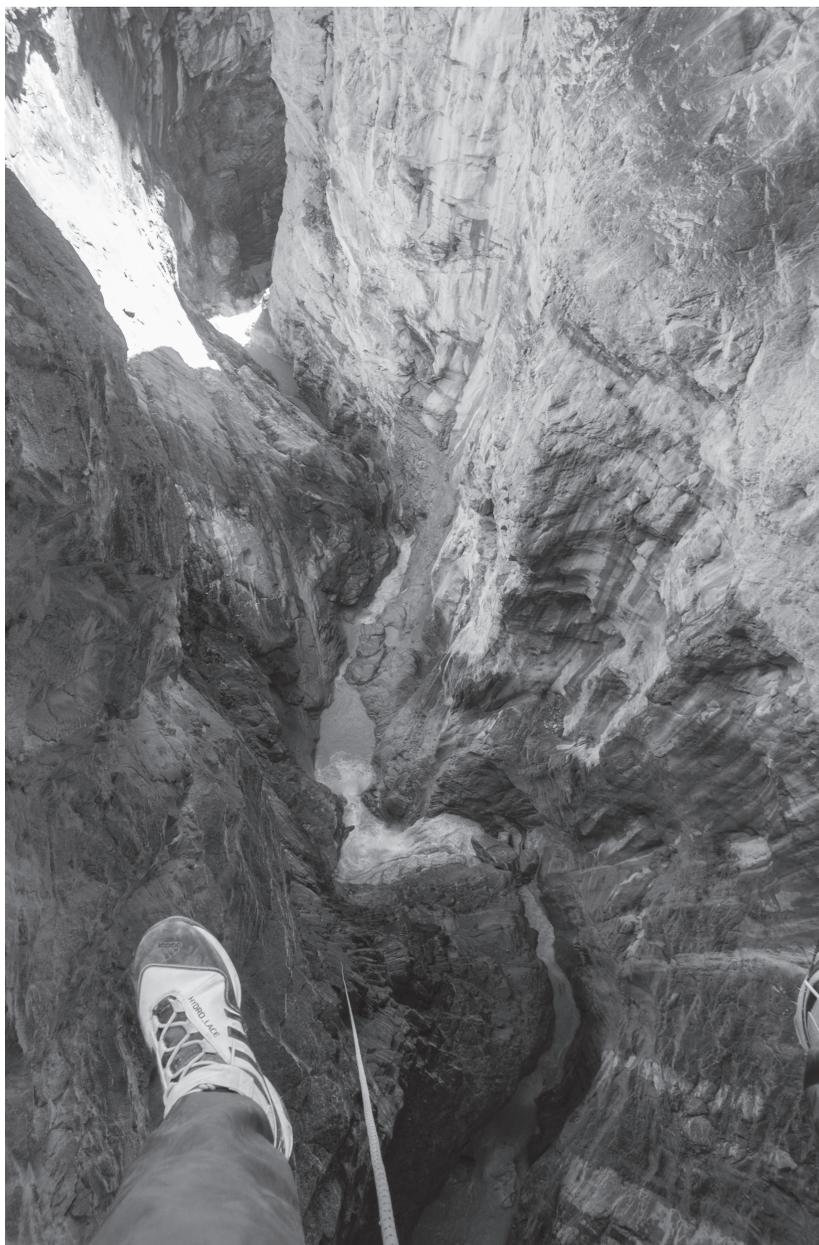
る廊下状を成し、周囲に轟音を響かせている。妖しく輝く白い奔流が、この無機質な海底でただ一つ生を与えられた魔物のようだ。想像を超える光景に、これから始まる探検への期待が大きく高まる。

翌日はB地点の偵察へ移行。ラベルで降り始めるとすぐにオーバーハングとなり、体が側壁から離れていく。下には細く蛇行した流路が見えるが、昨日よりは全体的に谷幅が広く、200mほど先まで一望できて壮観である。わずかに差し込む陽の光で、緻密なゴルジュの造形が浮かび上がり、なんとも美しい。150m降りても下に届かず、空中偵察を堪能してから引き返す。

谷底へ降り立つ

11月26日、C地点の偵察を行なうが、この下降がいちばん強烈だった。ゴルジュの上端から底部まで最長300mあり、しかもその間に160m連続の空中パートがある。高度差だけ見れば、ここが中部ゴルジュで最も深い。

長いラベルを経て、谷底へ降り立つ。ここに来たのは、おそろしくわれわれが初。現実味のない空間だけにまさに夢見心地で、田中の顔にも自然と笑みがこぼれている。その半面、厳しい事実も発覚する。近づくことでようやく気付



11月24日、B地点からラベル偵察。ここはほかのパートより谷幅が広く見晴らしが良い。谷底まで最短距離で180mほど。真下には2段20mの滝の威容が見える

かされたが、水量が異常に多い。おそらくキャニオニングの際には、水線通過が不可能な箇所がいくつも出てくるだろう。それはすなわち、側壁にルートを求める場面が多くなるということだ。通常、難しい渓谷の下降ではクライミング要素が強まるが、これも例外ではない。

この日のハイライトは、帰りの160m連続空中アツセンドイングだった。蜘蛛の糸のように垂れ下がる一本の9mmロープに身を委ね、尺取虫のごとく登り返していく。ロープの伸びで大きく体が上下し、ロープの摩擦防止に設置した当て物がずれていないか気がかりだ。ロープが岩角に接触すれば、切れることも充分あり得る。落石によるロープカットも不確定要素の一つだろう。何かの拍子に突然切れたら……、そんな不安を都度味わうのがセティ・コーラの偵察である。

右俣のキャニオニングから

11月28日、本流の下降に挑戦する前に、まずは谷の浅い右俣の下降で足慣らしをする。ドライスーツの防水性や防寒性をチェックするのも重要な目的だ。140m滝の下から下降を開始し、10m滝のラペルでゴルジュ内へ。25m、30m、20mと続く美しい直瀑を次々とラペル突破。水温は

3℃しかなく、ドライスーツでも寒い。中着がフリース1枚では足りなかったようだ。体が冷えると指も冷えやすくなるようで、3mmのネオプレン・グローブを着けた指の感覚が徐々になくなり、最後の80m滝のラペル中にロープを握れなくなってきたのには少々焦った。短い区間だが右俣の下降を無事に終え、目標の一つを達成した充足感を得る。

本流の上部と不明部分を探る

11月29日早朝、ベースにヘリが飛来し、中島が合流。安全性を重視し、今回は現場同行の撮影ではなくドローン撮影に専念。とはいえ、ドローンの俯瞰映像は貴重であり、ゴルジュ内でも飛ばせる彼のテクニクは頼もしい。これで今回の日本人メンバー8人全員がそろい、残りの行動日もあと6日。渓谷探検も撮影も佳境に入る。

この日は右俣出合から上部の本流ゴルジュを偵察に行く。側壁のバンド・トラバースでゴルジュ内へ。ここはこれまで以上にインパクトのある空間だ。上流側は高い側壁に隔てられた巨大な井戸底地形となり、3段150mの大滝がはるか高みから瀑水を落している。片や、下流測は対岸の側壁が数mにまで迫り、微かにしか光が届かない暗黒の廊下を形成。ここが中部ゴルジュの実質的な最深部と言



11月25日、本流ゴルジュの遠景。NASA 支流出合より下流部の左岸バンド偵察にて。中央の滝は左俣出合の大滝で、推定 250 m 以上。背景前方はヒマラヤでも珍しいモレーンの岩峰群、後方中央右の山はアンナプルナⅢ峰



11月25日、右俣大滝付近のベースキャンプ。山深い峡谷の脇にまさかこんな場所があるとは。日々、ここからゴルジュへ向かい、偵察やキャニオニングを行なった

えるだろう。

翌日は田中と行動を分け、私は3段150 m滝の上部、田中はA地点とB地点の間の不明部分（D地点）の偵察に行く。

右俣80 m滝の上部右岸からスラブをトラバースし、100 mのラベル・トラバースで3段150 m滝の落ち口へ。狭い水路から放たれる膨大な滝水が、うねりながら岩の隙間に落ち行く様は圧巻だ。さらに50 m上流へ進んだところで時間切れ。標高3100 m地点が最終到達点となる。この先も相変わらずゴルジュが続くが、見えている範囲はゴロ状で水線沿いに遡行可能。このルートでの偵察はまだ継続できることが分かった。

一方、田中の偵察で本流の不明部分が明らかとなるが、キャニオニングの際には滝の落ち口を飛び渡らなければならぬ箇所があると言う。この大水量の谷でそんなことが可能な地形があるとはにわかには信じがたいが、渡れなければその場にスタックしてしまうため、実際に近くに行つて距離と高さの確認をしておきたい。

12月1日、田中と共にその地点へ再度偵察に行く。140 mのラベルから激流を足元に左岸側壁を振り子トラバースし、30 m滝上部のテラスへ。

この滝の落ち口が問題のジャンプ・ポイントだ。確かに1 m程度に流路が狭まり、容易に跳び渡れそうに見える。しかし、対岸との高さの差が問題だ。本番では右岸から左岸へ跳び渡ることになるが、左岸の方が高くて跳びづらい。失敗すれば30 m滝にのまれてあの世行きとなるだけに、念のため補助ロープを張っておくことにする。冒険性を減らしてしまふ事前工作には抵抗があるが、失敗が許されないこの谷においては確実性を優先したい。

本流ゴルジュのキャニオニングに挑む

12月2日、いよいよ本流ゴルジュのキャニオニングに挑戦する時が来た。A地点から150 mのラベルで谷底に降り、下降開始。振り返れば、ラベルロープが風に煽られ、もう手の届かない所へ舞い上がっている。これで退路は断られた。

まずは激流ゴロ帯の通過。水の濁りで水深が分からないのが問題だが、土砂の流入で浅い場所が多いのは救いだ。地形と流速、白泡の立ち方を見れば、ある程度の水深の予測はつく。ここは流れの弱点を見極めて突破。

次の8 m CS（チョック・ストーン）滝は右岸をローワーダウンして側壁バンドに降りた後、ピトン主体のエイドで



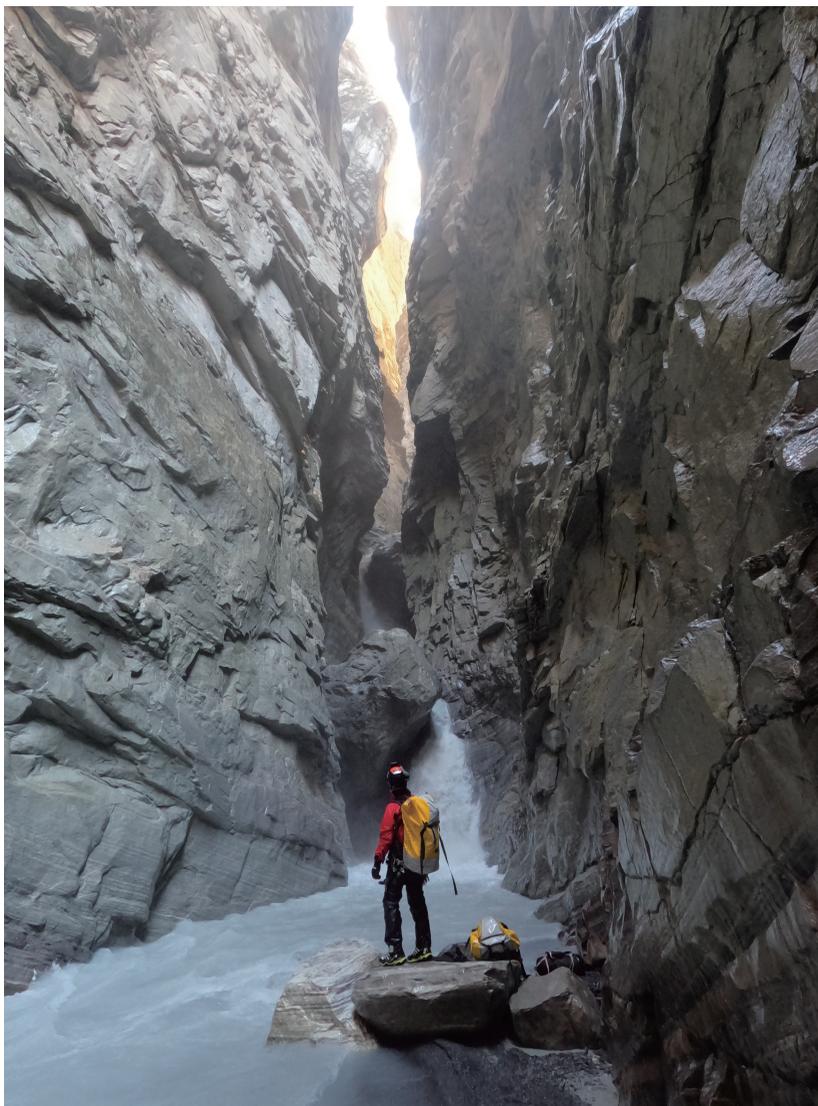
11月25日、右俣140m大滝。晴れていればいつでも美しい虹が懸かる。右俣のキャニオニングはこの滝の下からスタートした。上部にもゴルジュが続き、次回遠征の下降対象の一つである



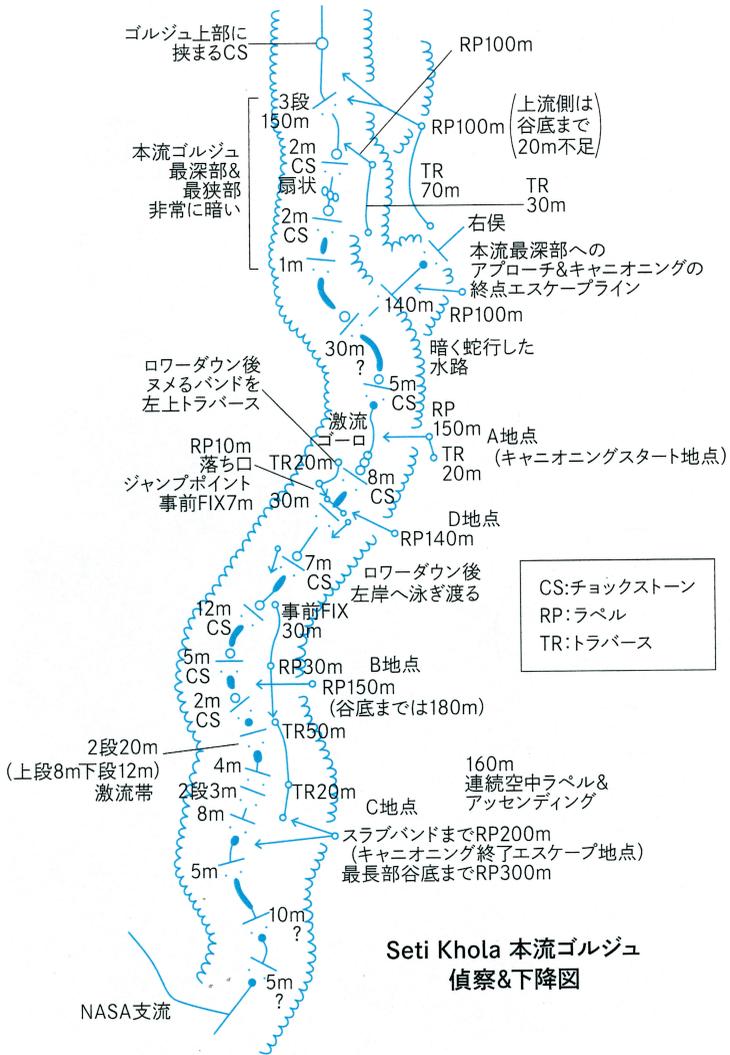
11月26日、C地点からラベル偵察。今回降りた中で最も距離が長く、セティ・コーラの壮大なスケールを味わえる場所だ。左下に見えるのは2段20m滝



12月2日、猛烈な瀑水を落とす2段20m滝の水線下降は不可。側壁を大トラバースして、キャニオニング終了地点を目指す



12月2日、7mCS滝の下降を無事に終え、上流へ目を向ける。上に見える滝は、今回のキャニオニング区間で最大となる30m滝



左上トラバース。石灰質の泥が付着した岩肌は滑りやすく、気が抜けない。バンドの突き当たりでボルトを打ち、再びロワーダウンで30m滝の右岸落ち口へ。昨日設置したフィックスロープでバランスを取りながら左岸ヘジャンプ。容易だが、失敗できないプレッシャーがある。

30m滝は左岸をラペル。滝下は瀑風が吹き荒び、目を開けていられない。実はこの滝、偵察時には15mと目測していたのだが、実際に近づいてみて2倍もの大きさがあることが分かった。この谷はスケールが大き過ぎて、通常の物差しでは測れない。

続く7mCS滝は激流の釜を携えている。右岸から左岸へ泳ぎ渡らねばならず、ここは泳力のある田中が行く。ロワーダウンでいったん滝下のテラスに降り、そこから釜に飛び込み一気に泳ぎ渡った。後続の私はガイドッド・ラペルで下降。

すぐ先の12mCS滝は偵察時に張ったフィックスロープを使って左岸リッジからかわし、ラペルで2段20m滝上段側面のバンドに降り立つ。この滝は怒濤の勢いで水を落とし、釜は荒れ狂っている。水線通過はあり得ない。ここは左岸の外傾バンドをトラバース。傾斜は緩いが、非常にヌメるスラブを一步一步フリクションを確かめながら慎重に

越え、下降の終了地点となるエスケープ・ロープに達する。

水平距離300mほどの短い区間ではあったが、今遠征最大の目標を果たすことができ、達成感と安堵感に包まれる。最後のひと仕事となる200mのアッセンディングを終え、星空のもとベースへ帰還すると、遠征チームのメンバーが喜びと安堵の表情、そして祝福の言葉をもって迎えてくれた。たとえ谷に入ったのがわれわれ2人だけでも、この目標は皆で一緒に成し遂げたという思いがある。

撮影という目的とは別に、毎日われわれの行動を温かく見守り、惜しめないサポートと心強いエールで支えてくれたことに感謝したい。このチームで行なったからこそ遠征は充実し、より意義のあるものになった。

荘厳なる3段150m滝

12月4日、いよいよ行動最終日。田中と共に中部ゴルジュ最深部の3段150m滝へ行き、今回の遠征の締めくくりとする。

薄暗闇のなか、凄まじい瀑風に抗い3段150m滝の下に立つと、ゴルジュ上部の間隙から一筋の光が差し込み、壁の一点を照らし始めた。飛沫にくつきりと現われた光芒が、荘厳な滝の姿をより神々しく飾り、幻想的で美しい情



12月4日、本流ゴルジュ最深部、3段150mの滝の下で今遠征を締めくくる。これほど特異な地形が、この規模で存在する谷はそうそうないだろう

景を映し出している。わずかな時間であったが、最後に相応しい感動的なひとときを過ごすことができ、ここは私にとってこれまでで最も印象深い場所の一つとなった。

翌朝、下山のヘリが到着し、後ろ髪を引かれる思いでセティ・コーラを後にする。思えばこの2週間、休息を惜しむほどに日々偵察や下降に明け暮れていた。これ以上はできないと思えるくらい、やりきった感がある。その甲斐あつてか、本流のメインパートの解明と下降、右俣の下降という大きな成果を得られ、遠征前には想像もできなかった未来が今訪れている。

だが、今回行動した範囲は水線距離でたったの5000m足らず。セティ・コーラにはまだ多くの未知が残っている。しかも、その大部分はこれまでと見劣りしないほど魅力的な地形だ。おそらく、この大ゴルジュにおいて人間ができることは限られるが、次の遠征でも限界に挑戦し、さらなる未知の探索に全力を注ぎたい。

世界最大級のゴルジュは、次はどんな光景を見せてくれるだろうか……。

右俣キャニオニング

2022年11月28日 BC (10:30) | 右俣140m滝下キャニオニング開始 (10:40) | 80m滝下キャニオニング終了 (14:40) | 本流偵察終了 (15:40) | BC (17:00)

本流キャニオニング

2022年12月2日 BC (7:40) | A地点ラベル開始 (8:20) | 谷底到達キャニオニング開始 (9:40) | 8mCS滝上 (10:30) | 30m滝上 (12:00) | 2段20m滝上 (14:10) | キャニオニング終了地点 (16:20) | ゴルジュから脱出完了 (18:50) | BC (19:30)

初出：『ROCK & SNOW 099』山と溪谷社、2023年3月（「ネパールの超巨大ゴルジュ Seti Khola」を改題し一部改稿）

第3回・第4回「グレート・ヒマラヤ・トラバース」

第3回GHT エベレスト登山と変貌

1970（昭和45）年、日本山岳会（松方三郎総隊長）は世界最高峰エベレストの通常ルートからの登頂には成功したが、南西壁の初登攀には失敗した。私が初めてエベレストと対峙したのは1973（昭和48）年の秋、第二次RCC（ロッククライミングクラブⅡ）による「日本エベレスト登山隊」に参加し、南西壁に向かったときである。登山隊は総勢47名という、当時では日本のヒマラヤ登山史上最大クラスの規模であった。ヒマラヤ登山の経験のない者8人が先発隊として、4月初旬にカトマンズに向かった。森田勝、長谷川恒男や加藤保男が一緒だった。

重廣恒夫

先発隊のカトマンズでの仕事は、ベースキャンプまでの偵察の実施、日本からカルカッタ（現・コルカタ）港に送り出した30tの装備や食料の通関と陸送、その隊荷を可能な限り本隊到着までにBCに搬送すること、そして、本隊を迎えるためのBCの設営であった。カトマンズでの仕事に目途がついた7月初旬、私は輸送隊の第1陣としてカトマンズ郊外のラムサンゴから、今で言う「エベレスト街道」をBCに向かった。モンsoon中のキャラバンはヒルの襲来や、ポーター不足による荷物の分散など難法を極めたが、通過する村々ののどかな生活に接したり、移り変わるヒマラヤの景観を堪能したりしながら、8月18日にBCに到着した。休む暇もなくBCの設営、アイスフォールのルート

工作に従事した。登山隊は石黒久・加藤隊員がノーマル・ルートからの秋季の初登頂を果たしたものの、目標とした南西壁は10月28日に8380mに到達したのを最後に、迫り来る冬のエベレストから撤退した。その後BCからカトマンズまでの輸送に従事し、4ヶ月ぶりにカントマンズに戻った。日本を出発してから7ヶ月が経っていた。

その後、何度かトレッキング・ツァーに同行してのネパール訪問はあったが、グレート・ヒマラヤ・トラバース踏査2回目、そして今回の3回目の訪問ではエベレスト街道の変貌ぶりに驚いた。コロナ禍による登山やトレッキングの禁止という停滞期間はあったが、再開後のトレッカーの復活ぶりに目を見張った。

1973年に会ったトレッキング隊は数隊（そのうち日本人は1隊）であったが、50年たった今はルクラからロブチェまで間断なくトレッカーの往来があった。73年に偵察や隊荷の輸送中に滞在したナムチェ・バザールのシエルパの石造りの家は、すべてホテルに変わっていた。そのとき一緒だったシエルパたちも、生存しているほとんどがカトマンズで暮らしている。街道筋には瀟洒なロッジや病院が建ち並んでいたが、偵察や輸送の折に何度か泊まったモンジヨの竹村さん夫妻（東京農大出身で1972年から農園

を開拓）の家は取り壊されていた。

踏査では50年ぶりのエベレストBC訪問を楽しみにしていたが、手前のロブチェで風邪による体調悪化で、一時隊を離脱しなければならなかったのは残念だった。ナムチェ・バザールまで下って静養した後、別動隊と合流していったカトマンズに戻った。その後、日本に帰る2人を見送った後、コンガルまで車で移動して本隊と合流、踏査を再開した。

カトマンズから近い山々は、ジュガール、ランタンそしてガネツシユ山群で、エベレストがカトマンズから160kmぐらい離れているのに比べて、このエリアは70km前後と比較的近く、今回のGHT踏査で使っているホテルから、トレッキング会社の事務所に行く道すがらその山並みを遠望することができる。また、1958（昭和33）年に『日本百名山』を著わした深田久弥が、写真家の風見武秀、画家の山川勇一郎、医師の古原和美氏の4名で軽量登山隊を組織し、ジュガール・ヒマール、ランタン・ヒマールを踏査して紹介したこともあって、その後、多くの日本隊が訪れている。

ランタン山群は首都カトマンズから最も近いヒマラヤ登山やトレッキングの場として多くの人が訪れていたが、私

はこれまでランタン方面には1996（平成8）年に訪れたときにキャンジン・ゴンパからキャンジン・リ（4773m）を登っただけであった。しかし、ティルマンのコルを越えた後にランタン谷に下り、2015年の地震で甚大な被害を受けた現場を目の当たりにして胸が痛んだ。

ランタン山群の最高峰はランタン・リルン（7227m）で、1961（昭和36）年に大阪市立大学隊が挑戦したが、リルン氷河で森本嘉一隊長と大島健二隊員、サーダーのギャルツェン・ノルブ（今西壽雄さんとともに登ったマナスルの初登頂者）を雪崩で失い、日本人初のヒマラヤ遭難となった。大阪市立大学は、その後2回の遠征隊を派遣したが登れなかった。1978（昭和53）年10月24日、第4次遠征隊の和田城志とシエルパのペンパ・ツェリンが念願の頂上に立った。

初登頂者の和田城志は、2015年4月25日11時47分（現地時間）、ランタン谷最奥のランタン・リ（7205m）のベースキャンプ（5300m）にいた。地震発生と同時に周囲の峰、稜線から轟音を伴った雪崩が発生、雪煙の襲来でいくつかのテントが潰れたが、人的な損傷はなく、28日にはヘリコプターでキャンジン・ゴンパに下山、翌29日キャンジン・ゴンパからドンチェに移動した。ヘリコプターか

ら撮った和田さんの写真や動画は、被災したランタン谷の悲惨な状況を誰よりも早く世界に伝えることになった。
なお、詳細は『ヒマラヤ』No.473に掲載。

第3回GHT 2023年プレ・モンsoon

1…隊の名称 East Nepal Traverse of The Japanese Alpine Club Spring 2023

2…派遣母体 (公益社団法人) 日本山岳会

3…目的 クーンブ山群→ロールワリン山群→ジュガール・ランタン山群踏査(ティルマンの
コル越え)

4…期間 2023年4月1日～5月31日(踏査期間
…4月6日～5月24日)

5…メンバー

重廣恒夫 (7931)	1947年10月11日 (75歳)
吉井 修 (12342)	1961年3月4日 (62歳)
飯田邦幸 (12207)	1954年9月1日 (68歳)
〈クーンブ・エリアのみ〉	
味岡四郎 (一般参加)	1960年7月9日 (62歳)
中村三佳 (16124)	1963年7月21日 (59歳)

第3回GHT踏査日誌

4月1日にカトマンズに飛び、4月2日～5日で準備を整えた。

エベレスト街道から別動隊と別れるターメまでの前半とターメからシャブルベシまでの後半とに荷物を分け、後半分をターメに直送する方策を取った。

4月2日には竹中雅幸さんや野村良太さんのジャルキャ・ヒマール登山隊の訪問も受けた。エベレスト登山で混み合うこの時期、ルクラへの航空便はカトマンズからは飛ばない。4月5日未明にジープで出発、結構なデコボコ道を4時間かけてラメチャップ空港に着いた。8時フライトの予定であったが、順番が回ってきたのは11時30分であった。

4月6日 ルクラ→モンジョ

歩行開始。モンジョの手前、1970年代に東農大出身の竹村さんが野菜を作っていた農場の跡があった。重慶隊長によると、1973年のエベレスト遠征のときに泊めてもらったと言う。今は石垣しか残っていない。道中、シャクナゲも桜も咲いて美しかったが、桜は竹村さんらが植えられたものらしい。

4月7日 モンジョ→ナムチェ・バザール
10時40分、標高3140m付近、トイレ小屋のある所からエベレストが見えた。

4月8日 ナムチェ・バザール→キャンジュマ

サガルマータ・ネクストという展示スペースを見学。エベレスト・ビュー・ホテルではミルクティを楽しんだ。エベレストは雪煙を吹いていた。クムジュンで昼食、ヒラリー・スクールやクムジュン・ゴンパ（僧院）を見学した。

4月9日～10日 キャンジュマ→パンボチエ、10日（休養）

ラウササで前回泊まった宿に挨拶。前回の娘さんはカトマンズにいるという。タンボチエでは、JACの先輩である湯浅道男さん、加藤保男さんの慰霊碑を訪ねた。

4月11日～12日 パンボチエ→デインボチエ、12日ナガルジュナ・ヒル往復

高所順応のため、ナガルジュナ・ヒル（5083m）を往復した。北東方向にマカルーやバルンツェが遠望され、半年前が懐かしい。

4月13日 デインボチエ→ロブチエ

トウクラで昼食の後、遭難者の慰霊碑が点在する峠に着く。日本人の名前はなく、1996年の遭難事故のスコッ



モンジョ付近で、サクラのまゝで記念撮影。左から中村、吉井、ラクダン、味岡、飯田、重廣隊長

ト・フィッシャーの慰霊碑を見るに留まる。ロブチェの夜、重廣隊長は風邪がみで、留まることになった。

4月14日 ロブチェーエベレストBCーゴラクシェツプ
4隊員でエベレストBCを目指す。が、味岡隊員が500mを越えたあたりで急に歩行が怪しくなった。味岡隊員はBCを諦め、ゆっくりゴラクシェツプを目指すこととし、3隊員で先へ進んだ。左にプロ・リ、右にヌプツェが素晴らしい。右下はクンプ氷河である。14時50分BCに到着、「EVEREST BASE CAMP 5364m」と書かれた岩の前で順番を待って記念撮影をした。

4月15日 ゴラクシェツプーカラパタール往復ーロブチェ

高山病の症状が出た味岡隊員はロブチェへ直帰。3隊員はカラパタール(5550m)を往復、約400mの標高差、登り2時間半、下り1時間であった。エベレストが見える地点に観光客を乗せたヘリが続々と飛来する。昨今の観光ビジネスには驚くばかりだ。頂上からはエベレストとヌプツェが大きい。下山中にヒマラヤの雷鳥を見た。日本の雷鳥よりひと回りもふた回りも大きい。

4月16日、**17日** ロブチェーゾンラ、**17日**(休養)

各隊員の状況から、今後の行動を次のように決定した。



エベレストベースキャンプで、左から飯田、中村、吉井

重廣隊長と味岡隊員はナムチェ・バザールへ下山。吉井、飯田、中村の3隊員は計画通りとする。本隊3隊員は3ピッチでゾンラに着いた。

4月18日 ゾンラー・チョー・ラ (5420m) 越えー
ンナ

今日はチョー・ラ (峠) 越え、標高差は600m。9時40分水河の縁に出て、チェーン・スパイクを装着。氷河は硬く歩きやすかった。振り返ると谷の一番奥にバルンツエが遠望され、11時、チョー・ラに立った。トレッカーが減る区間だが、さすがエベレスト街道、コルの上にはたくさんの人、上半身裸でランチする西欧人もいた。

4月19日 タンナー・ゴキョ

氷河の中で、「神の鳥」と言われるネパールのアヒルを見た。美しい湖とロツジ群が見え始めて、ゴキョに到着した。

4月20日 ゴキョー・ゴキョー・リ往復

ゴキョー・リ (5483m) を往復、約750mの標高差、登り2時間50分、下り1時間10分であった。頂上からは北にチョー・オユー、東にエベレスト、ローツェ、東から南に下ってアマ・ダブラム、タムセルクと絶景である。この日、重廣隊長と味岡隊員が無事ナムチェに戻った。



曇天ではあったが、エベレスト（中央）とヌプツェ。カラバタールから

4月21日 ゴーキョーレンジヨ・ラ（5360m）越え
ルムデ

今日はレンジヨ・ラ越え。標高差は570m。コルに近くと岩の尖峰が現われ、道も岩の道となり、11時10分、レンジヨ・ラに立った。下りは一気に下る。その後の平坦な道が長かった。到着後、夕刻から雪となった。

4月22日～23日 ルムデーターメ、23日（休養）

新雪を踏んで、ターメに着いた。重廣隊長は風邪が好転せず、別動隊とともにいったんカトマンズまで下ることになった。午後、吉井・中村の2隊員でJACの先輩・大西保氏の慰霊碑を訪問。翌23日、中村隊員はナムチェへ下山していった。

4月24日 ターメ～パルチェムチェ・ツォ

今日からは飯田・吉井の2隊員で、テシ・ラプツァ・ラを目指して、約2000mを登って行く。この日は曇天のもと960m登って、避難小屋の前にテント張った。

4月25日 パルチェムチェ・ツォ～テシ・ラプツァ・キャンプの手前

雪が降り、ルート・ファインディングに苦慮。ポーターの1人に高度障害が出ている。12時10分、テントを張ることになったが、まだ5200m付近であった。



4月18日、チョー・ラを越える。中央奥がバルンツェ、左の尖峰はロブチェ・イースト

4月26日 テシ・ラプツァ・キャンプの手前
プツァ・ラ(5755m) 越え、グレイシャー・キャンプの手前

26日は晴れた。が、高度障害のポーターは立ち上がるのも難しい状況。ナイケともう一人のポーターの3人で、応分の荷を残したままターメに戻ることにした。

アイゼン、ハーネスを装着して出発。高度の影響もあり、厳しい登りが続いた。フィックス2本、アツセンダーを使って登るなどして、12時、急登を終えた。左にトラバースして、13時45分テシ・ラプツァ・ラに立つ。白く凍りついたバルチャモ(6273m)が美しい。クレバスがあり、慎重に回り込んで下降を開始。壮大な景色のなかを一目散に下りた。氷河へは60mのフィックスを張って下降、私たちが氷河上のテントに入ったのは16時30分。荷下ろしに時間がかかり、全員がそろったのは18時だった。

4月27日 グレイシャー・キャンプの手前、カブク

氷河の中を10時間近い下り。11時30分、宇宙船のような避難小屋があった。これがグレイシャー・キャンプだった。氷河の中を登り下りし、長い道のりであった。

4月28日 カブク、ナ

昨日と同じように登り下りを繰り返す。氷河湖の監視所



4月21日、レンジョ・ラ越えでゴークョを振り返る。中央奥はエベレスト



テシ・ラブツァ・ラで。正面はバルチャモ、6273 m

が出てきて、ようやくナノの村に着いた。

4月29日 ナノドガン

ターメに戻ったポーターの動向が心配で、連絡のつく場所に早く下山したい。森林限界より下になり、シヤクナゲが美しい。が、ドガンでも電波は得られない。

4月30日～5月1日 ドガン～シミガオン、休養

シミガオンに到着。高山病のポーターは無事と連絡が取れ、さらに15時35分、ターメに戻ったナイケともう1人のポーターが3日間の差を縮めて到着した。もちろん荷物も回収、驚異的な体力で前途に支障がなくなった。天気悪く、ガウリサンカールを見ることはできなかった。

5月2日 シミガオン～コンガル

3時間ほどの歩行で車道が通るコンガルに出た。15時20分、重廣隊長がカトマンズからジープで戻って来られた。

5月3日 コンガル～ヤルサ

重廣隊長復帰の初日は、集落の外れから600mを一気に登った。気温は一時28度Cくらい、汗だくに。つい数日前までは氷雪の世界で、この寒暖差はきつい。

5月4日 ヤルサ～チリンカ

終日、雨に降られたが、村々を縫って歩いた。予定の口ティンよりひとつ手前の村のバツティ(茶店)泊。

5月5日 チリンカ～ビグ村

表畑では収穫が行なわれている。ビグ村のゴンパまでは登らず、水場の関係で学校の軒下にテントを張った。

5月6日 ビグ村～テワ

ビグ・ゴンパまで登った。きれいに整備された寺院であった。その後1000m以上登った。サノ・ジャンダンには行き着けず、峠の手前のテワでテント泊。

5月7日 テワ～ジャグマデイ

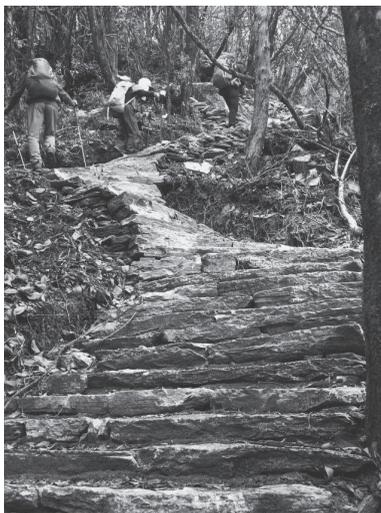
出発してすぐティンサン・ラに着いた。その後、道迷いで停滞。サノ・ジャンダンを通る地図上のルートよりずっと北側を歩いている。道を探りつつ下り、地図に載っていない集落、ジャグマデイでテント泊。

5月8日 ジャグマデイ～ラストリゾート

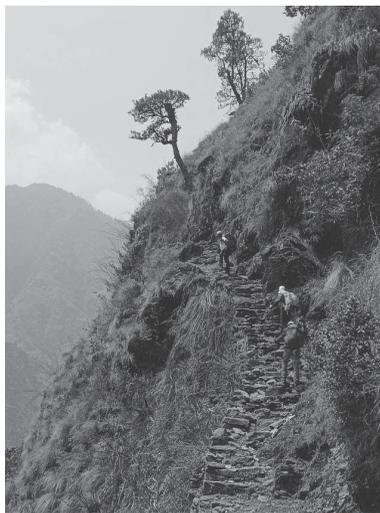
約1200m下って、今回の行程中最も標高の低いラストリゾート(1170m)に着いた。中国国境のコダリに向かう車道が走り、大きな町と期待していたが(リゾート地は対岸にあった)、観光用のバンジージャンプはあるものの、小さな村であった。

5月9日 ラストリゾート～リステイ

今日は1000m強の登り。ひたすら石畳の階段を登る。これを築いてきた人の営みに感心する。リステイは



テンバタンからカルカ間も石段が続く。ネパールならではの道だ



キャンシンからテンバタンへの石段が続く

バッテリー泊。充電や通信に精を出した。

5月10日 リステイミリンシエルモ・カルカ

今日も1000m強の登り。ゴンパのあるチャガムの村を抜けて、地図のルートより西側下方の道を歩いた。夕食時、ポーターがカエル7匹を捕り、スパイシーな味付けで食べた。

5月11日 ミリンシエルモ・カルカキキャンシン

今日は半日行程、キャンシンの集落の手前下方でテント泊。

5月12日 キャンシンキテンバタン

今日は2520mからいったん1861mまで下って、2160mまで登り返した。下りは幅2mあるかという立派な石段。登りは左に落ちたらアウトという道が続いた。

5月13日 テンバタンキカルカ

タルプから15分上流へ進んだ所で谷を離れ、西へ石段を登って行く。地図と異なり、真東からパンチ・ポカリに向かう新しい道。長い長い石段で、よくぞ造ったと今日も感心する。

5月14日～15日 カルカキパンチ・ポカリ、15日(休養)

パンチ・ポカリの南の峠に向かって登る。13時に峠を越え、霧の中、雪の平原を下る。視界が回復すると5つ(パ

ンチ)の池(ポカリ)が見え、数軒のバツティがあつた。

5月16日 パンチ・ポカリ〜インターメディアアリー・キャンプの少し下

朝一番、チェーン・スパイクを履いて急登。見下ろすと雪の中に5つの池が美しい。が、後はガスが懸かり、視界を得られぬまま2つ峠を通過した。

5月17日 インターメディアアリー・キャンプの少し下〜ティン・ポカリの手前

涸沢を彷彿させる美しい場所もあつたが、あまり視界のない一日。4つ峠を越えたが、ティン・ポカリは現われな

い。
5月18日 ティン・ポカリの手前〜ハイキャンプ・サウス側の氷河上4700m付近

今日から冬靴、ヘルメット着用で出発。一昨日からの雪が深い。12時、視界不良のなか道を間違えたと言う。今日はここにテントを張り、明日仕切り直しを期す。

5月19日 ハイキャンプ・サウス側の氷河上4700m付近〜西側氷河の5100m付近

昨日の間違いを解消するため、氷河への下降点を探して登るが見つからない。氷河の縁を正しいポイントまで下りることになった。9時30分、分岐の目印を見つけ、氷河に

下りた。その後は視界の悪いなかをひたすら登った。このとき、正しいルートよりまだ1本西の氷河に入っていたのだ。英国の男女2名の隊が私たちのトレースを追つてついできた。ほどなくともにキャンプを設営。

5月20日 西側氷河の5100m付近〜ティルマンのころに続く氷河の4700m付近

今日はいよいよコル越えのはずだった。岩壁を左に順調に登つたが、11時、コルと思つた所には壁が立ち塞がっている。標高は5400mですでにティルマンのころより高い。間違いだつたのだ。インリーチでおかしいのではという思いもあつたが、ガイドのラムカジが反対側から一度コルを越えたことがあるので、先導を任せていた。私たちも英国隊も大変なシヨックであつた。前日の正しいポイントにいったん戻つて、登り返す形になった。

5月21日 ティルマンのころに続く氷河の4700m付近〜ティルマンのころ(5308m)越え〜ランシサ・カルカの手前4150m付近

今日はコルを越え、一気にランタン谷を目指す。すでにポーターの食糧は尽きていた。ティルマンのころは正面下部に懸垂氷河を有し、なかなかの景観。先行した英国隊は懸垂氷河の右岸側を登つたが、時間とともに落石の恐れが



5月21日、ティルマンのコルへ

あるので、私たちの隊はルートを左岸側に取った。懸垂氷河の上に出ると傾斜は緩まり、13時5分、ティルマンのコルに立った。あとは一目散の下り。始めは右手の青い氷河に見とれて下ったが谷が北東にカーブしてからが長かった。途中から夜間行軍、キャンプサイトに飯田・吉井が着いたのは翌午前1時、重廣隊長は午前4時になった。

5月22日 ランシサ・カルカの手前4150m付近
キャンプ・ゴンパ

夜が明けると絶景。眼の前にガンチェンボ、遠く白いのはウルキンマン。ランタン谷に出ると、昨日食糧調達に先行了したコックらが朝食を準備して待っていた。ランタン谷の上流は頂上部に懸垂氷河を持つランシサ・リヤモリモト・ピークが美しい。14時ころ、2015年の地震で発生した土石流の跡に出た。下にランタン村と350人もの人が埋もれている。

5月23日 キャンジン・ゴンパ→ラマホテル

ブツダハウスで昼食。道は樹林の中を右岸と左岸を交互に進んで行き、ラマホテルに着いたのは暗くなる寸前であった。

5月24日 ラマホテル→シヤブルベシ

12時過ぎに車道に出て、シヤブルベシに下山完了した。夕刻からローカル・ポーター慰労の打ち上げ、とてもいい時間であった。

翌25日はチャーター・バスで中国との国境(ラスワディ)を確認に行ったが、国境監視所には近づけなかった。4日間カトマンズで後片付けを行なったのち、5月31日に帰国した。

(吉井修)

グレートヒマラヤトラバース 3 回目

No.	日時	曜日	行 程	標高	宿泊	出発 時間	到着 時間	所要 時間	登り 累計	下り 累計	距離 (km)	重廣行動
1	4月1日	土	Kathmandu	1300	Hotel							
2	4月2日	日	Kathmandu	1300	Hotel							
3	4月3日	月	Kathmandu	1300	Hotel							
4	4月4日	火	Kathmandu	1300	Hotel							
5	4月5日	水	KTM~Ramechhapu~Lukla	2840	Bhatti							
6	4月6日	木	Lukla~Monjo	2835	Bhatti	13:34	15:53	2:19	417	241	4.8	
7	4月7日	金	Monjo~Namche	3440	Bhatti	8:22	12:10	3:48	756	156	4.8	
8	4月8日	土	Namche~Khumjung~Khyangjuma	3550	Bhatti	8:16	14:55	6:39	666	444	7.1	
9	4月9日	日	Khyngjuma~Pangboche	3930	Bhatti	8:11	15:08	6:57	954	631	9.2	
10	4月10日	月	Rest	3930	Bhatti							
11	4月11日	火	Pangboche~Dingboche	4410	Bhatti	9:28	12:15	2:47	387	54	4.4	
12	4月12日	水	Dingboche ⇄ 5083m 往復 (順応)	4410	Bhatti	8:11	13:31	5:20	753	743	4.7	
13	4月13日	木	Dingboche~Lobuche	4910	Bhatti	8:22	15:16	6:54	707	83	7.5	
14	4月14日	金	Lobuche~EverestBC~Gorakshep	5140	Bhatti							Lobuche
15	4月15日	土	Gorakshep~Kalapatthar 往復~Lobuche	4910	Bhatti							Lobuche
16	4月16日	日	Lobuche~Dzongla	4830	Bhatti	9:46	13:01	3:15	32	495	4.5	Lobuche~Phreiche (4240)
17	4月17日	月	Dzongla	4830	Bhatti	8:29	12:03	3:34	132	481	5.8	Pheriche~Pangboche (3930)
18	4月18日	火	Dzongla~Cho・La (5420m)~Thangnak	4700	Bhatti	8:26	12:11	3:45	188	777	6.1	Pangboche~Phunke Tenga (3250)
19	4月19日	水	Dragnag~Gokyo	4734	Bhatti	8:21	10:36	2:15	365	59	2.5	Punke Tenga~Khyangjima
20	4月20日	木	Gokyo ⇄ Gokyo Ri 往復	4734	Bhatti	8:14	10:17	2:03	104	311	4.1	Khyangjima~Namche
21	4月21日	金	Gokyo~Renjo・La (5350m)~Lumde	4368	Bhatti							Namche
22	4月22日	土	Lumde~Thame	3820	Bhatti							Namche
23	4月23日	日	Thame	3820	Bhatti	12:35	15:02	2:27	176	746	4.9	Namche~monjiyo
24	4月24日	月	Parchemuche Tsho (4780m)	4780	Bhatti	8:01	14:44	6:43	736	669	12.1	monjiyo~Lukla
25	4月25日	火	Tashi Labsta Camp (5665m 手前)	5200	Bhatti							Lukla~Kathmandu
26	4月26日	水	Glacier Camp の手前	4780	Tent							Kathmandu
27	4月27日	木	Kabug	4820	Tent							Kathmandu
28	4月28日	金	Na	4180	Tent							Kathmandu
29	4月29日	土	Dokhang	2791	Tent							Kathmandu
30	4月30日	日	Simigaon	2036	Bhatti							Kathmandu
31	5月1日	月	Rest	2036	Bhatti							Kathmandu
32	5月2日	火	Gonggar	1440	Bhatti							Kathmandu (Jeep) Gonggar
33	5月3日	水	Yarsa	2036	Bhatti	8:03	15:37	7:34	1064	470	9.6	
34	5月4日	木	Chilingkha (L otingの手前)	1924	Bhatti	7:52	15:58	8:06	662	668	15.2	
35	5月5日	金	Bigu Gaon (B igu G ompa の500m 下)	2157	Bhatti	7:46	14:32	6:46	861	556	9.1	
36	5月6日	土	Tewa (峠近く)	3274	Tent	7:11	16:55	9:44	1594	474	11.8	
37	5月7日	日	Jyagmadhi	2471	Tent	7:11	15:23	8:12	307	1109	7.6	
38	5月8日	月	The Last Resort	1170	Bhatti	7:38	14:54	7:16	321	1534	11.9	
39	5月9日	火	The Last Resort~Listi	2260	Bhatti	7:52	12:50	4:58	1069	4	3.5	
40	5月10日	水	Listi~Khaka	3014	Bhatti	7:22	16:47	9:25	1052	340	11	
41	5月11日	木	Khaka~Kyangsin	2520	Tent	7:32	11:51	4:19	231	730	5	
42	5月12日	金	Kyangsin~Tembathang	2160	Tent	7:03	14:56	7:53	741	998	8.4	
43	5月13日	土	Tembathang~Kharka	3236	Tent	7:05	15:13	8:08	1179	167	6.8	
44	5月14日	日	Kharka~Panchi Pokhari	4070	Bhatti	7:07	14:31	7:24	1035	207	5.2	
45	5月15日	月	Rest	4070	Bhatti							
46	5月16日	火	Panchi Pokhari~Kharka (Intermediary Camp)	3976	Tent	7:29	15:01	7:32	407	495	4.9	
47	5月17日	水	Kharka (Intermediary Camp)~Tin Pokari 手前 (425m)	4179	Tent	7:41	15:55	8:14	652	447	5.5	
48	5月18日	木	Tin Pokari 手前~H igh Camp South (4700m) 付近	4696	Tent	7:44	13:02	5:18	543	18	3	
49	5月19日	金	H igh Camp South 付近~H igh Camp South 付近	5111	Tent	7:36	15:57	8:21	577	153	3.1	
50	5月20日	土	H igh Camp South 付近~H igh Camp South 下	4711	Tent	8:28	17:22	8:54	422	824	4.7	
51	5月21日	日	H igh Camp South 下~Langshisa Kharka 手前	4141	Tent	6:44	4:14	21:30	740	1313	9.9	Tilman Pass (5308m) 通過
52	5月22日	月	Langshisa Kharka 手前~Kyangin Gompa	3830	Tent	8:12	17:04	8:51	357	704	12.8	
53	5月23日	火	Kyangin Gompa~Lama Hotel	2488	Bhatti	8:27	19:09	10:41	279	1654	17.7	
54	5月24日	水	Lama Hotel~Syabrubesi	1503	Bhatti	7:01	14:34	7:33	297	1327	10.8	
55	5月25日	木	Syabrubesi~Kathmandu	1300	Hotel	7:10	17:35	10:25	3589	3386	108.1	Charter Bus
56	5月26日	金	Kathmandu	1300	Hotel							
57	5月27日	土	Kathmandu	1300	Hotel							
58	5月28日	日	Kathmandu	1300	Hotel							
59	5月29日	月	Kathmandu	1300	Hotel							
60	5月30日	火	Kathmandu 22:30発	1300								
61	5月31日	水	AM 9 時30分成田着									

ティルマンの「コル」への迷走

5月18日 ティン・ポカリ下キャンプ地へ間違った南側ハイキャンプ下(4696m) 歩行距離…3km

キャンプ地を出発すると、正面に岩峰群を登ったコルに続く氷河のモレーンが見える。長いモレーンを歩いて雪のリッジに出たところに、ティルマンのコルへのルートを示す金属棒を確認した。しかしその後、周りは濃いガスに包まれて視界がなくなった。先行していたガイドがルートを見失い下山して来たのと、雪も降りだったので尾根の途中ではあったが整地してテントを張った。GPSでティルマンのコルから3・2kmと確認できたが、終日、山容は見えなかった。

5月19日 南側ハイキャンプ下へ西側氷河途中(5111m) 歩行距離…3・1km

朝方は天気も良くルートの間違っていることを確認したので、正規のルートへのトラバースを試みたが、氷河への下りが急崖となり下降ができなかった。いったん昨日確認した金属標まで戻り氷河へ下った(しかし、ここでも視界が悪く氷河に分岐があることを見抜けず、左側の氷河に

入ってしまった)。その後、イギリス隊も追いついて来たのでそのまま登高を続け、5100m地点にテントを張った。GPSはコルまで1・2kmを示していた。

5月20日 西側氷河途中へ南側ハイキャンプ下(4711m) 歩行距離…4・8km

見事に晴れ上がったので勇躍ティルマンのコルに向かう。展望も良かったので、本来ならばこの時点で眼前の光景がコルに向かうルートとは違うことを見抜くべきであった。しかし、ガイドも過去にランタン側からの経験しかなく、上部岩壁が見える場所まで登った標高5400m(峠まで780m)地点で間違いに気づき、引き返すことになった。金属標に近い所まで下り、左手の岩壁の裾を回り込み、17時25分、正規のキャンプ地に近い4711mにテントを張った。南面には18日から迷走した岩稜の下部やサイドモレーンの急崖がうっすらと見えた。GPSはコルまで2・6kmを示していた。

5月21日 南側ハイキャンプ下へティルマンのコルへラ
ンシサ・カルカ手前(4141m) 歩行距離…9・9km
6時40分、キャンプサイトを出発。8時54分、4900



18日、深い霧のため、ルートを見失ってしまった



5月17日、ティンボカリのキャンプサイトにて



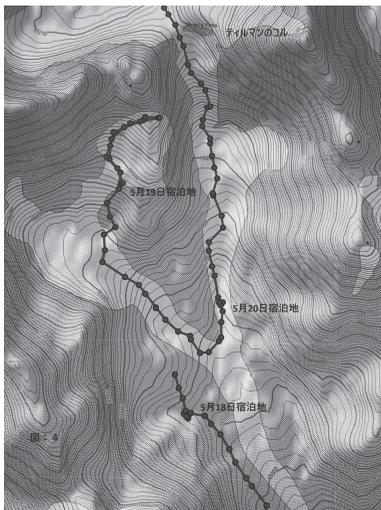
ティンボカリ上部よりティルマンの科尔方面を望む



ティルマンのコルは近い



21日、暗闇の中をケルンを頼りに下る



図① ティルマンのコルのGPSの軌跡



21日、ティルマンのコルを俯瞰する

mを通過。GPSはコルまで1・4 kmを示していた。13時4分、テイルマンのコルに到着。このころから視界が悪くなった。コルの南面も北面も眼前に懸垂氷河があり緊張した。コルからの下山は冷たい風が強くなった。長いモレーンを歩き、北側のハイキャンプを通り過ぎ、暗闇の中を3度の大きな落石で恐怖に慄きながらルンゼを下り、ランシサ・カルカ手前の台地に到着するまでには長い時間を要した。

迷走の理由

視界不良が第一の要因であるが、第二の要因はガイドやポーターとの距離が開き過ぎたことにある。途中で何度かおかしいなと思いつつながら、それを先行パーティに伝えることができなかった。GPSで進行方向の確認を行なっていたが、コルまで距離があるので地図とコンパスの確認だけでは方向の差異が少なく、携行した地図(12万5000分の1)のスケールでは詳細な地形を認識するのが難しく、進む方向を見誤ってしまった。その迷走ぶりは、GPSの軌跡を見れば一目瞭然である(図①)。

ランタン谷の今

予定ではテイルマンのコルを越えてからは北のハイキャンプ(4720 m)に泊まる予定であったが、迷走のお陰で日程が狂い、食料が底をついていたのでランシサ・カルカの手前まで下る羽目になってしまった。眠る暇もなくランタン・コーラを渡ってキャンジン・ゴンパに向かった。しばらく下ると眼前が開け、両側の山稜から崩落した岩屑雪崩の跡が幾筋も見えたが、2015(平成27)年に起きたネパール地震の影響だろう。また、河原は白い碎石を敷き詰めたように見え、雪崩の跡が生々しかった。

ランタン谷は1919年から世界の山を登ってきたH・W・テイルマンが、1949年に当地を訪れたときに「世界一美しい谷」と言わしめた花の谷である。しかし、以前訪れたランタンで2番目に大きなキャンジン村は、確かに復興はしているものの、地震当日の雪崩の爆風でほとんどすべての家屋が全・半壊した爪痕がまだ残っていた。次に通過したランタン村は、巨大雪崩と土石流に村と住民数百人が埋められ壊滅した。犠牲者の名前を刻んだモニュメントで被害の大きさは想起できたが、昔の光景を思い出すことはできなかった。ただ、新しい家が建ち、畑で働く村人がいたことがせめてもの慰めであった。また、当時トレッキングをしていただけの外国人で被災し亡くなった人も多く、



ランタン村に建立されたモニュメント

シヤブルベシに下る道すがらいたる所で見た、遺族が設置したであろうモニュメントに胸が痛んだ。
 それもあつてか、前に来たときは多くのトレッカーで賑わっていた街道も、往き来する人は少なく、昔の繁華なランタン谷の1日も早い復興を願つた。
 (重廣恒夫)

日本山岳会東ネパール踏査隊 2023 春 会計報告

【収入の部】

項目	合計
個人負担金	4,600,000
本部助成金	1,000,000
募金	334,523
普通預金金利	8
合計	5,934,531

【支出の部】

項目	国内支出額	国外支出額	合計
装備費	0	459,866	459,866
食糧費	15,161	263,593	278,754
輸送費	4,090	127,625	131,715
都市部滞在費	0	96,796	96,796
キャラバン費	0	777,892	777,892
人件費	0	2,004,254	2,004,254
保険料	445,890	179,550	625,440
登山料	0	101,500	101,500
交通費	0	381,355	381,355
医薬品	0	0	0
航空券代	903,750	0	903,750
雑費	330	-384	-54
手数料	2,585	33,250	35,835
通信費	62,428	0	62,428
ビザ代	75,000	0	75,000
為替損	0	0	0
支出合計	1,509,234	4,425,297	5,934,531
(手許現金残)		0	0
総合計	1,509,234	4,425,297	5,934,531

第4回 GHT 「温故知新」のナムン峠

その昔、ヒマラヤ登山を目指すようになった理由のひとつに、1950（昭和25）年、フランス隊の人類最初の8000m峰登頂、53（昭和28）年、イギリス隊のエベレスト初登頂や56（昭和31）年の日本山岳会によるマナスル初登頂などが契機になったという人が多かった。私もその例にもれず、中学校2年生のときにアンナプルナ隊のモーリス・エルゾグの『処女峰アンナプル』を読み、その翌年、ガストン・レビュファの『雪と岩』に触発されて、岩登りを始めたことに端を発する。今回はその山々を展望する踏査で、まさに「温故知新」の旅であった。

カトマンズからチャーター・バスで3回目踏査終了点のシヤブルベシに復帰した。街にはトレックカーが溢れていたが、東のランタン谷方面に向かう人たちが多いのか、西方のガネツシユ山群で会ったトレックカーは3パーティ7人だけであった。途中のパンサン峠（3830m）からは、眼前にマナスル（8163m）とP29（7871m）とヒマール・チュリ（7893m）とパウダ・ヒマール（6672m）が連なり感動した。いずれも日本隊が初登頂した山である。ちょうどこのころ、ネパール最大の祭りダサインの

時期に当たり、カトマンズなどの都市部から帰省する家族や、動物を解体して祭りの準備をする村を通過した。

マナスル街道に入ると往來する欧米人トレックカーが増えたが、日本人に会ったのは4人だけで、コロナ禍以降急激な円安もあって出足が鈍い感じがした。10月29日、サマ部落から向かったマナスル・ベースキャンプへの道には、好天が続いたせいなのかもう登山隊の姿はなかった。しかし、ラルキヤ峠（5135m）を通過するトレックカーは多く、峠での記念写真撮影は順番待ちをするほどだった。ピムタン（3590m）に下るとマナスルを裏側（西面）から眺められるようになり、右手にツラギ（7059m）やブンギ（6538m）などの、玄人筋に好かれそうな山々が見えて楽しい。

気懸かりだったナムン峠を往復してアンナプルナ街道に戻り、マルシャンデイ・コーラ（川）沿いの道を西に進む。マナン（3540m）までの自動車道路が通じているので車で移動するトレックカーも多く、乾いた未舗装道路なので通行する車が巻き上げる砂塵には閉口した。マナン（3540m）からルートは北に向かうが、後方にはアンナプルナ山群の山々が見えて飽きることがない。地図を広げての山座同定は、過去に『岩と雪』などで垣間見た記録を思い

出す、高齢トレッカーの楽しみのひとつである。たどり着いたトロン峠（5416m）はラルキヤ峠を遥かに超える数のトレッカーで賑わっていた。峠からムクチナートに下る途中、左手前方にダウラギリ山群が見え始め、北側には来春に向かう西ネパールの赤茶けた大地と山並みが広がっていた。

それにしても、昔の人の行動力には脱帽するほかない。ネパールが鎖国を解いた直後の1950年、フランス隊がアンナプルナー峰の初登頂を果たしたのは誰もが知る栄光であるが、彼らの当初の目標はダウラギリI峰（8167m）であった。ツクチェから偵察に向かったが余りの峻険さに断念。マルファからテイリリツォ峠を越えてマナンに至り、トロン峠を越えてムクチナートに下山した。そして、街道をレテまで下って西面からアンナプルナー西氷河に入って登頂に成功したのである。ヒマラヤ登山の嚆矢となった『処女峰アンナプルナ』を読み返しながら身震いするのは、私だけではないだろう。

第4回GHT 2023年ポスト・モンスーン

1…隊の名称 日本山岳会中央ネパール踏査隊2023秋

Central Nepal Traverse of The Japanese

Alpine Club Autumn 2023

2…派遣母体 (公益社団法人) 日本山岳会
 3…目的 ガネツシユ山群↪マナスル山群↪アンナプルナ山群踏査(ナムン峠往復)
 4…期間 2023年10月7日↪11月25日(踏査期間: 10月12日↪11月14日)

5…メンバー

重廣恒夫 (7931)	1947年10月11日 (76歳)
吉井 修 (12342)	1961年3月4日 (62歳)
飯田邦幸 (12207)	1954年9月1日 (69歳)
藤井正善 (7410)	1947年3月18日 (76歳)

第4回GHT踏査日誌

10月8日から10日はカトマンズで踏査の準備。

10月11日 (晴)

朝6時25分、ガイドやカトマンズから同行するポーターを乗せたバスがホテルに迎えに来て、前回、第3回の最終地点シヤルベシ (Syabrubesi) へ向かう。稲の収穫時期と見えて、黄金色の大地の中に延びる悪路をバスは大きく揺れながら走る。途中の小さな集落でローカル・ポーター

が乗り込んで来て今回のメンバー全員がそろった。懐かしい顔もあり、前回参加したポーターが数人いることが分かる。軍と警察の検問所を何度も通過して、14時によくシヤブルベシ着、標高1503m。前回と同じホテルに入る。

10月12日 (快晴、13時ころにわか雨)

今日から4回目のグレート・ヒマラヤ・トラバースが始まる。4ヶ月ぶりのシヤブルベシだったが、まったく同じたたずまいで、季節まで止まったように感じられた。

久しぶりの重廣隊長のストレッチが心地良い。8時15分スタート。歩き出してすぐ藤井隊員が遅れだす。約30分ごとに休憩を入れ、ゆっくり歩く。体調が悪いようだ。

12時25分、標高2237mの峠着。13時20分ごろより雨、雨具を着用。

14時、チャウラッター (Chaurhattar) 着、標高2305m。約800m登ったことになる。シヤブルベシの集落のはるか遠くの上並みの山に、真白く三角のランタンII峰(6596m)が見えた。

10月13日 (晴、雲多し)

7時55分発。水平な自動車道をひたすら進む。

9時35分、分岐。左のゴダン (Godan) に向かう。

10時45分、沐浴施設とヒンズー寺院のあるパールバタイー Kund (Parvatikund) に着く。神話になっている聖なる水が潤沢に流れている。

16時35分、ユリ・カルカ (Yuri-Karka) 着、標高3420m。今日は1000m以上標高を上げた。

10月14日 (曇)

7時55分発。9時35分クルプダダ・パス (Khurpudada Pass) 着、3710m。

11時55分、ソムダン (Sondang) 着、標高3258m。午前中に行動を終えて、午後はゆっくりと過ごす。

10月15日 (曇、10時以降はガス。ときおり日が差す)

7時55分発。しばらく車道を行き、ショートカットの急登を一気に登って行く。

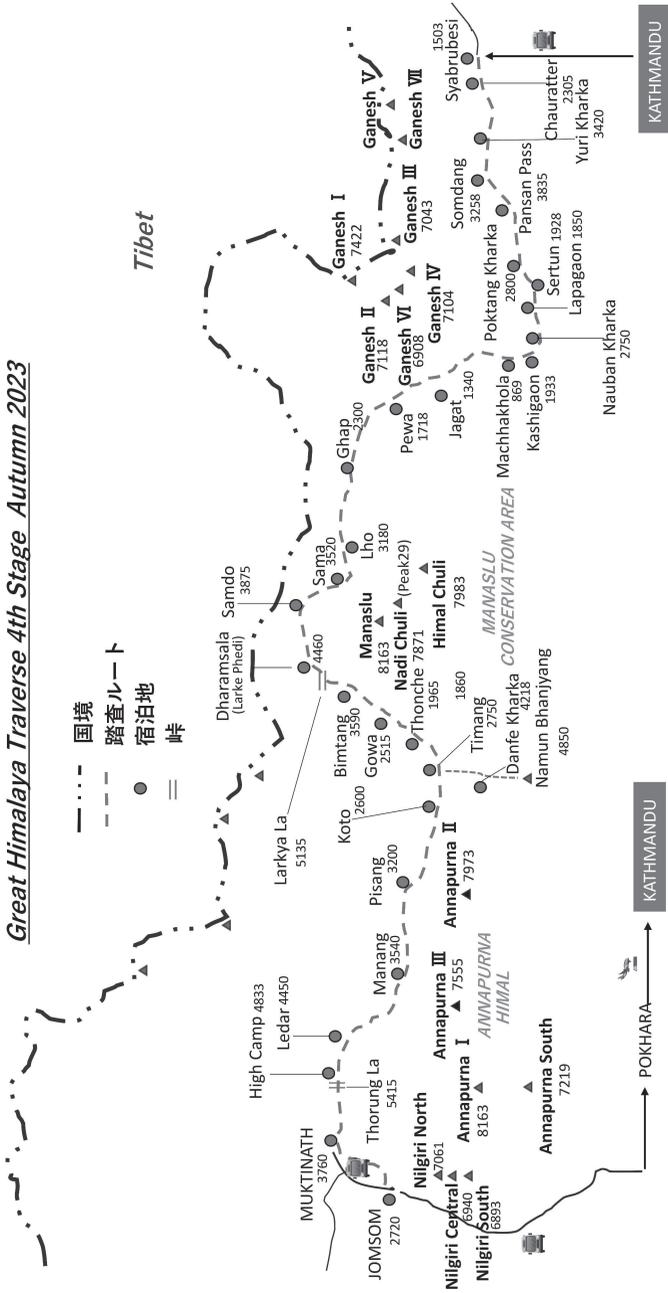
12時15分、パンサン・パス (Pansan Pass) 着、標高3830m。峠にはホテルがあるが営業していない。テント泊。ホテルが閉鎖されているため水がなく、調理スタッフはかなり遠い場所まで水を汲みに行った。

10月16日 (曇のち晴のちガス)

7時55分発。3830mの峠から一気に下って行く。

11時15分、ポクタン・カルカ (Poktang-Karka) 着、標高2800m。1000m下った。昨日、水に苦労したか

Great Himalaya Traverse 4th Stage Autumn 2023





10月14日、ソムダンの快適なテントサイトで。午後はゆっくりと過ごす

らか、今日のテントサイトは潤沢に水がある。それにしても早くテントを張ったもんだと思っていたら、昨日からダサインという祭りが始まり、ポーターたちはご馳走の肉とロキシー（蒸留酒）を求めて早く着いたのだと言う。ダサインはネパール最大の祭りで、約15日間続く。晴着を着てご馳走を食べ、女神が人々を苦しめた魔物を退治してくれたことを祝う。

10月17日（朝6時過ぎまで雨、曇のち9時ごろから晴）

ネパールの気象庁が「モンスーン明け」を発表。

7時50分発。ジグザグの車道をショートカットして最短コースを下って行く。

11時50分、最低部の川、ラパ・コーラ（Japa Khola）を橋で渡る、標高1667m。その後は登りだけになる。

12時ごろ、後ろから来た女性に梨を4個もらったので早速食べた。酸味があり美味しい。女性は子どもがカトマンズの学校にいるので、この先の集落にある銀行から送金をするのだと言う。

13時5分、セルトゥン（Serun）着、標高1928m。ホテルとは名ばかりの建物だが、ツイン部屋を4部屋使い、4人それぞれの個室として使用。明日がレストなので快適に過ごすことは大切だ。

10月18日（晴、13時より雨）

休息日。夜、ポーターたちはダサインのお祝いをしていくように、歌声が聞こえる。

10月19日（快晴）

7時45分発。少し下りぎみの車道を進む。

11時20分にひとつ目の橋を渡ると、すぐにふたつ目の橋を渡る。ここが今日のルートの最低部の標高1234mで、以後登りとなる。

14時10分、ラパガオン (Tapagaon) の外れの学校の校庭に到着、テントを張る、標高1850m。多くの子どもたちが集まって来て、私たちのテントが物珍しいと見え、長い間見ていた。その中に8年生（高校2年くらい）の女の子がいて、片言の英語で会話を楽しんだ。

10月20日（快晴、16時30分ごろより雨）

7時45分発。集落の中をひたすら登る。ダサインのご馳走作りのため、集落の至る所で鶏や水牛、山羊を解体している。登りが終わると下りになり、13時40分、最低部標高1658mを過ぎるとまた登りとなる。

16時10分、2975mの峠を越えて少し下り、17時15分、ナウバン・カルカ (Nauban Karka) 着、標高2750m。

10月21日（快晴、午後より雲が出て、16時ごろにわか雨）

7時50分発。出発時にマナスル三山が見えた。マチャ・コーラ (Machakholra) を目指すが、時間切れになった場合は途中で泊れば良いと出発。道は一気に下って行く。

12時15分、小さな川を橋で渡ると以後は登りとなり、なかなか進めない。

16時、カシガオン (Kashigaon) の学校の校庭着、標高1918m。着いたときには私たちのテントがすでに張ってあった。やはりマチャ・コーラまでは行けなかったのだ。

10月22日（快晴）

8時15分発。集落の中の道を下る。ここでも至る所で山羊や鶏を解体している。ダサインで都会から子どもたちが帰ってくるので、精いっぱいのご馳走を用意するのだと言う。ネパールの四大河川のひとつブディ・ガンダキ (Budi Gandaki) を目指して一気に下る。

11時35分、標高788mの橋を渡る。

13時、マチャ・コーラ着、標高869m。ここで今までお世話になったローカル・ポーターたちは解雇になる。17時から送別会をして、賃金プラス、ポーターを渡す。これ以後の踏査はロッジでの宿泊が多くなるためコックもカトマンズに帰す。料理長のカンヤの食事も今日で最後となった。

10月23日 (快晴)

休み。食料や装備を整理して不用品はカトマンズに送る。

10月24日 (快晴、標高が低いので暑い)

7時20分発。集落を抜けて車道に出る。

9時50分、タトパニ (Tatopani) に着く。タトは熱い、パ

ニは水の意。温泉が出ている。久しぶりにお湯で頭を洗

う。タトパニを出て車道を歩くと、途中で滝のように豪快

に水が落ちてくる場所を通過。

15時45分、ジャガット (Jagat) 着、標高1340m。夕

食にガイドが自宅の庭で採れたというアボカドを出してく

れた。ワサビ醤油で美味しくいただく。

10月25日 (快晴)

7時20分発。出発直後、上流に架かっている吊り橋を渡

らず、ショートカットして下流の大きな石を伝って川を渡

る。今日のルートは右岸から左岸、左岸から右岸へと川に

沿うルートを何度も渡りながら進む。

10時、フィリム (Philm) を通過。

11時15分、チソパニ (冷たい水の意) で休息。本当に冷

たい水が潤沢に流れている。

15時55分。ペワ (Pewa) 到着、標高1718m。

10月26日 (快晴)

7時15分発。今日も前日と同じように川に沿って右岸か

ら左岸、左岸から右岸へと何度も渡りながら進む。

10時20分、新しい吊り橋を渡る、標高2045m。かつ

て日本のマナスル登山隊が渡ったであろう橋は、新しく架

け代わっていると思われる。

11時、ビヒフェディ (Bhiphedi) で昼食、通過。

15時25分、ガップ (Ghap) 着、標高2300m。

10月27日 (快晴)

7時20分発。昨日と同じく川に沿って進む。

11時20分、ナムルン (Namrung) で昼食。

14時40分、リヒ (Lini) 通過。

18時35分、ロー (Lho) 着、標高3180m。約900m

標高を上げる。

10月28日 (快晴)

7時25分発。8時、マナスル (8163m) の裾野まで

見える絶景ポイントで休む。

9時45分、サヤラ (Siyala) に到着。ネパールでは珍し

い挽き立てのコーヒーを飲む。マナスル、ピーク29 (78

71m)、ヒマール・チュリ (7893m) の前衛峰が見渡

せる。

12時15分、サマ (Sama) 到着、標高3520m。



パンサン峠からのマナスル3山。左はヒマールチュリ



サヤラの村から望むマナスルの雄姿

10月29日(快晴、午後から曇)

7時、マナスルB Cを目指して出発する。

9時15分、氷河湖が美しく見える。9時45分ごろ懸垂氷河がすさまじい音で崩落。

12時、登高のスピードが遅いため、マナスルB C到着をあきらめ全員で下山する。

15時15分、サマのホテル着。

10月30日(快晴)

7時25分。川沿いの平らな道をゆったりと歩く。マナスルが美しく、昨日登ったB Cまでのルートがよく分かる。

12時5分、サムド(Sando)着、標高3875m。集落は欧米人のトレkkerであふれていた。

10月31日(晴)

7時5分。サムドは山陰にあり日が差さない。寒い中を出発。

7時50分、ラルキャ・バザール(Larkya Bazar)着。寒く暗い中で、男性と女性が向かい合うように装飾品などの土産物を並べて売っていた。

8時20分ごろに陽が差してきて、生き返った思いがした。氷河の左岸をゆっくり登って行く。

10時ごろからマナスルのピナクルやマナスル北峰、ヒ

マール・チュリがよく見えるようになり、気分良く歩く。

11時25分、ラルキャ・フェディ(Larkya Pedi)着、標高4460m。ロッジに宿泊予定だったが、空いているのは4人部屋1室だけであった。あまりにも狭いので、ロッジの近くにテントを張ってもらった。

11月1日(曇)

4時15分。真っ暗な中、ヘッドランプを点けて出発。今日は峠越え、長時間の行動になる。

10時15分、チェーン・スパイクを着用。

10時40分、ラルキャ・ラ(Larkya La)の峠着、標高5106m。

13時35分、峠から下る途中に茶店があり、温かいミルクティーを飲む。そこからは長い緩やかな下りの後、急な斜面を下りて行く。

16時20分、ビムタン(Bintang)着、標高3590m。

11月2日(晴)

7時40分。12時50分、橋を渡った所にバッテリー(茶店)があり、そこで昼食。

15時15分、ゴワ(Gowa)着、標高2515m。

11月3日(晴)

7時50分。10時40分、ダラパニ(Dharapani)の手前の



雪のラルキャラで。左から吉井、重廣、藤井、飯田、ガイドのラムカジ



なんとかナムン峠に到達できた

トンジエ (Thonche) のホテル・カルフォルニアに泊まる、
標高1931 m。

夜中に地震があった。ダラパニは少し揺れた程度で被害
はなかった。震源地は西ネパールのジャジャルコットで、
現地では6万戸以上の家屋に被害が出て、28人が死亡した
という。

11月4日 (晴のち曇)

8時発。9時40分、自動車道を離れて山道に行く。

11時50分、ティマン (Timang) 着、標高2750 m。

11月5日 (晴)

藤井隊員は体調不良のためティマンでステイとし、それ
以外の3名でナムン峠を目指すことになった。

7時50分発。かつては重要な交通路だったらしく、とて
も丁寧な道が造られていた。1ピッチ300 mを登るくら
いのペースで進む。

15時40分、今日のテントサイトの手前のコルを越えると、
下のカルカには10張以上のテントが張ってあった。カトマ
ンズの旅行社が連れて来たフランス隊だと言う。

15時55分、ダンフェ・カルカ (Danfe Kharka) 着、標高
4218 m。

11月6日 (晴、ガスから曇)

7時50分発。山腹を北から南に大きくトラバースしなが
ら高度を上げる。

9時55分、アイゼン着用、4584 m。12時25分、ナム
ン・バンジャン (Nannun Bhanjan) の峠着、標高4850
m。下りは快調。

14時55分、ダンフェ・カルカ着。

11月7日 (曇)

7時50分発。13時25分、ティマン (Timang) 着。

藤井隊員は体調が回復しないため、明朝、ジープでカト
マンズに帰ることになった。

11月8日 (晴)

朝食後、藤井隊員と残ったポーター3名、アシスタント・
ガイドの計5名がジープに乗り込み出発した。

8時5分発。自動車道を歩く。緩やかな下りで歩きやす
い。

10時10分、正面にアンナプルナII峰 (7937 m) が見
える。

10時45分、コト (Koto) 着、標高2600 m。

11月9日 (晴)

7時15分発。自動車道をゆっくり進む。

7時35分、チャーメ (Chame) 通過。

10時35分、アップルファーム着。ここではリングゴを栽培してブランディやワインを作っている。

12時55分、ディクレ・ポカリ (Dhikur Pokhari) 通過。

12時、ドルガドワリの岩壁が見えた。「ドルガ」は天国、「ドワリ」は門、天国の門の意。道は岩壁をくりぬいて造られている。

15時、ピサン (Pisang) 着、標高3208m。

11月10日 (快晴、風強し)

7時25分発。自動車道を進む。

9時10分、アンナプルナIII峰 (7555m) が見えた。

10時20分、フムデ (Hunde) の飛行場を通過。

11時40分、アンナプルナIV峰 (7525m) が見える。

12時5分、ムジェ (Muje) 通過。

14時35分、マナン (Manang) 着、標高3540m。

11月11日 (曇、10時ごろより粉雪)

休息日。10時、マナンのカルチャー・ミュージアムを見学。宿は古い民家をリノベーションした民宿で、快適に過ごす。

11月12日 (快晴)

7時15分発。9時10分、グーサン (Ghusang) 通過。9

時45分、ブルーシートの群れを見る。

11時45分、ヤク・カルカ (Yak Kharka) 通過。

14時10分、レダー (Ledar) 着、標高4450m。

11月13日 (快晴)

7時45分発。10時15分、トロン・フェディ (Thorung Phedi) 通過。

12時5分、ハイ・キャンプ (High Camp) 着、標高4833m。

11月14日 (曇)

4時45分、長時間の登高が予想されるため、早朝の暗い中を出発。

6時40分ごろ、ヘッドランプを消す。

7時40分、トロン・ラ (Thorung La) の峠着、標高54

15m。下りは緩やかだが、所々に凍った雪があり緊張する。

9時20分、ダウラギリII峰 (7751m) が見えてくる。

13時55分、ムクチナート (Mukutinath) 着、標高3540m。

ムクチナートから望むダウラギリI峰 (8167m) は迫力がある。

11月15日 (快晴)

5時30分に起きて、早朝のムクチナート寺院を見学。



ムクチナートの寺院とその背後のダウラギリ

10時20分にチャーター・ジープで出発。11時20分、ジョムソン (Jomsom) 着。

11月16日 (快晴)

7時50分、チャーター・ジープで出発。14時55分にポカラ (Pokhara) 着、標高820m。

11月17日 (快晴)

5時、タクシーでアンアプルナ・ビュー・ホテルへ。井本社長の案内で朝焼けのアンアプルナ山群を見る。その後、山岳博物館を見学。

14時50分、ポカラ空港を出発15時15分、カトマンズ空港着。

18日～23日は使用した装備やデポ装備の点検を行なう。

11月24日、カトマンズ発。

11月25日、成田着。

(飯田邦幸)

2023秋GHT 4th行程コースタイム

No.	日時	曜日	行程	標高	宿泊	出発時間	到着時間	所要時間	登り累計	下り累計	距離(km)	重廣行動
1	10月7日	土	NRT~Kathmandu	1300	Hotel							
2	10月8日	日	Kathmandu	1300	Hotel							
3	10月9日	月	Kathmandu	1300	Hotel							
4	10月10日	火	Kathmandu	1300	Hotel							
5	10月11日	水	Kathmandu~Syabrubesi	1503	Lodge	6:31	14:05	7:27	3148	2663	81.1	
6	10月12日	木	Syabrubesi~Chaurhattar	2305	Tent	8:17	14:00	5:43	934	66	4.4	
7	10月13日	金	Chaurhattar~Yuri Kharka	3420	Tent	7:56	16:36	8:40	1263	160	12.2	
8	10月14日	土	Yuri Kharka~Sondang	3258	Tent	7:57	11:57	4	378	516	5.2	
9	10月15日	日	Sondang~Pansan Pass	3835	Tent	7:55	12:14	4:19	655	75	5.5	
10	10月16日	月	Pansan Pass~Poktang Kharka	2800	Tent	7:56	11:15	3:19	11	1049	4	
11	10月17日	火	Poktang Kharka~Sertun	1928	Lodge	7:53	13:06	5:13	293	1154	7.5	
12	10月18日	水	Sertun	1928	Lodge							Rest
13	10月19日	木	Sertun~Lapagaon	1850	Tent	7:47	14:13	6:26	677	893	10.4	
14	10月20日	金	Lapagaon~Nauban Kharka	2750	Tent	7:48	17:16	9:28	1484	460	9.6	
15	10月21日	土	Nauban Kharka~Kashigaon	1933	Tent	7:51	14:01	6:10	604	1384	11	
16	10月22日	日	Kashigaon~Machhakhola	869	Lodge	8:17	13:03	4:46	226	1290	7.3	
17	10月23日	月	Machhakhola	869	Lodge							Rest
18	10月24日	火	Machhakhola~Jagat	1340	Lodge	7:19	15:45	8:26	1098	608	16.6	
19	10月25日	水	Jagat~Pewa	1718	Lodge	7:19	16:01	7:19	1204	807	15.7	
20	10月26日	木	Pewa~Ghap	2300	Lodge	8:26	15:23	6:57	965	687	9.7	
21	10月27日	金	Ghap~Lho	3180	Lodge	7:21	17:37	10:16	1496	442	15.6	
22	10月28日	土	Lho~Sama	3520	Lodge	7:26	13:02	5:36	689	315	7.7	
23	10月29日	日	Sama	3520	Lodge	7:03	15:16	7:03	914	910	10.2	ManastuB・C近くまで往復
24	10月30日	月	Sama~Samdo	3875	Lodge	7:27	11:00	3:33	407	71	7.4	
25	10月31日	火	Samdo~Larke Phedi	4460	Tent	7:09	11:43	4:34	710	84	5.9	
26	11月1日	水	Larke Phedi~Bimtang	3590	Lodge	4:15	16:21	12.6	746	1496	14.8	Lalke La (5153 m) 越え
27	11月2日	木	Bimtang~Gowa	2515	Lodge	7:44	15:13	7:29	292	1463	13.1	
28	11月3日	金	Gowa~Thonche	1965	Lodge	7:53	14:16	6:23	150	731	8.1	
29	11月4日	土	Thonche~Timang	2750	Lodge	8:01	11:51	3:50	760	86	7.3	
30	11月5日	日	Timang~Danfe Kharka	4218	Tent	7:50	15:55	7:50	1706	98	6.3	
31	11月6日	月	Danfe Kharka	4218	Tent	7:50	14:57	7:07	730	730	6.5	Namun Bhanijan (4850 m) 往復
32	11月7日	火	Danfe Kharka~Timang	2750	Lodge	7:54	13:29	5:35	108	1700	6.6	
33	11月8日	水	Timang~Koto	2600	Lodge	8:07	10:45	2:38	297	286	6.7	
34	11月9日	木	Koto~Pisang	3200	Lodge	7:17	15:02	7:45	998	408	16	
35	11月10日	金	Pisang~Manang	3540	Lodge	7:25	14:33	7:08	653	277	15.2	
36	11月11日	土	Manang	3540	Lodge							Rest
37	11月12日	日	Manang~Ledar	4450	Lodge	7:20	14:09	6:49	820	148	11.2	
38	11月13日	月	Ledar~High Camp	4833	Lodge	7:46	12:04	4:18	742	80	5.5	
39	11月14日	火	High Camp~Mukutinath	3760	Lodge	4:42	13:54	9:12	603	1788	12.8	Thorung La (5415 m) 越え
40	11月15日	水	Mukutinath~Kagbeni~Jomsom	2720	Lodge	6:03	11:25	5:23	290	525	9.5	チャータージープ
41	11月16日	木	Jomsom~Pokhara	820	Hotel	7:50	14:57	7:07	1100	2349	153.6	チャータージープ
42	11月17日	金	Pokhara~Kathmandu	1300	Hotel	14:50	15:15				144	Buddha Air U4 620 便
43	11月18日	土	Kathmandu	1300	Hotel							
44	11月19日	日	Kathmandu	1300	Hotel							
45	11月20日	月	Kathmandu	1300	Hotel							
46	11月21日	火	Khthmandu	1300	Hotel							
47	11月22日	水	Khthmandu	1300	Hotel							
48	11月23日	木	Khthmandu	1300	Hotel							
49	11月24日	金	Khthmandu	1300	Hotel							
50	11月25日	土	~NRT									

ナムン峠への寄り道

ナムン峠を往復した理由

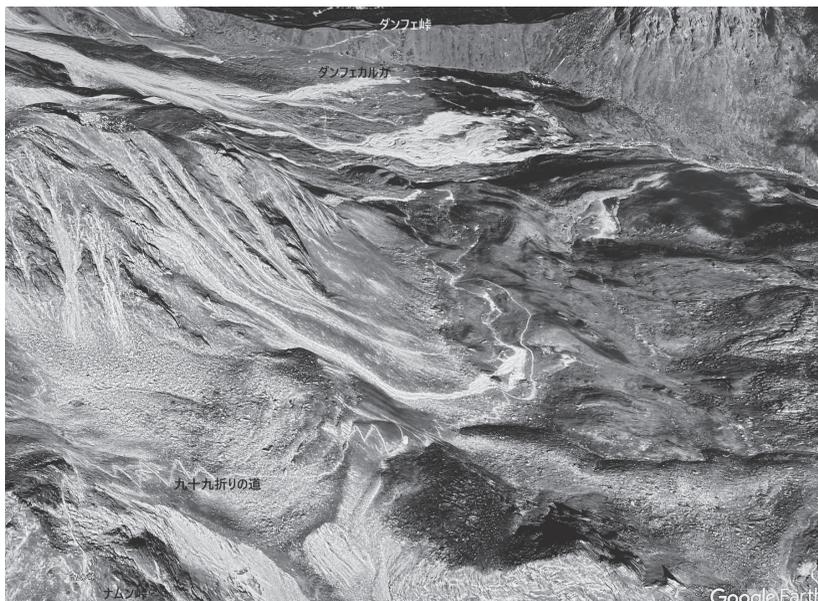
ナムン峠はアンナプルナ・サーキットからは少し外れるが、街道の村ティマンから往復した。まず、1953（昭和28）年にアンナプルナII峰からIV峰に転進した、京都大学学士山岳会（AACK）隊の隊長だった今西壽雄さんが撮影したマナスル三山（マナスル 8613m・P29 7871m・ヒマールチュリ 7893m）の写真を、マナスル登山隊の公式報告書『マナスル 1954〜6』の巻頭に見た。この「ナムン・バンジャンより見たマナスル山群、左よりマナスル、P29、ヒマールチュリの諸峰」と題された、いずれ秀麗な三山をナムン峠から撮りたかったからである。また、134年間に及ぶ鎖国を解いたネパールに1950（昭和25）年に入国し、12年間にわたって1万4000kmを徒歩調査した、トニー・ハーゲン（スイスの地質学者）の著書『The Kingdom in the Himalayas』（町田靖治訳、白水社刊）の文中に「ポカラからマルシャンディ溪谷へと横断するナムン峠（5800m）は、インド測量局の25万分の1の地図には間違っていて載っていたのだろうか。あるいは、地図上に載っているルートを私が見落としただけのこと

だろうか」と、地図の間違いを示唆していたことと、京大隊の『アンナプルナ日記』の「7・ナムン・バンジャン（峠）を越えて」の項に、「ところで、地図によると、ナムン・バンジャンは五七八五米と標示されているが、気象観測係の藤平隊員の測定によると、この峠は五一四〇米の高度しかもっていないことであった。また、私たちの常識的な観察からみても雪線と比較して五七八〇米はないだろうというのが一致した結論であった。バロメーターが正しいということである」と記されていたことが記憶にあったからである。

さらにナムン峠行きを決定づけたのは、第4回の踏査計画を作る過程で検索した情報（ドイツ）で、ネパールで発行されている『Treking Map 100 Series 1:125,000 NP107 ANNAPURNA NAAR & PHUJ』のティマン（Timang）からナムン峠（Nangun Bhanjyang）へのルートや標高が間違っていると提起されていたことにある。指摘ではナムン峠の標高は4900mで、北緯28度28分04秒、東経84度17分29秒に位置するとしていた。確かにグーグルアースで当該地域を確認しても、トレッキング・マップとは異なる場所に九十九折りの道が見てとれたことで、確認のための寄り道をほかの隊員にも了承してもらった。



11月6日、ナムン峠に向かう朝。マナスル（左）とP29



ダンフェ・カルカからナムン峠への道。九十九折りの道をナムン峠へ

11月5日 テイマン⇄ダンフェ・カルカ

歩行時間…7時間50分、歩行距離6・3 km、登り…1706 m、下り…98 m

隊員3名、カトマンズ・スタツフ2名、ポーター3名でダンフェ・カルカを目指す。テイマンのロッジからテイマン橋まで戻り、森林帯につけられた山道をたどる。途中の岩むした積石や棧道が、古くからの交易ルートであることを感じさせる。森を抜け出ると眼下にテイマンの村が見えた。疎林帯を過ぎるといったん傾斜は緩くなるが、その後は急坂となりダンフェ・コル(4295 m)にたどり着く。目前にダンフェ・カルカ(4218 m)の台地が広がっていた。私たち以外には誰もいないと思っていたが、多くのテントが張られているのにびっくりした。聞けば、ポカラからシクレスを経由してナムン峠を越えて来たフランス人パーティ2隊で、この後プー(Phu)からナル(Narh)、ティリツォ湖(Tilicho Tal)を経由してジヨムソンに抜けると言う。ありきたりのルートではなく、古いトレッキングコースを選んで歩く強者集団らしい。

11月6日 ダンフェ・カルカ⇄ナムン峠往復

歩行距離…7時間7分、歩行距離…6・5 km、登り…7

30 m、下り…730 m

キャンプサイトから岩礫の中のケルンに導かれながら峠に向かう。ルートが判然とせず歩きにくい道も、雪道に変わると先日、フランス隊が下って来た足跡もあり歩きやすくなった。しかし、徐々に高度の影響も出てきて歩みが鈍くなる。あそこが峠だと思っていた場所が手前の稜線で、さらに先の峠まで岩壁が屹立していた。また、出発後から雲が出てマナスルからP29を望見したのを最後に、マナスル三山は二度と姿を見せることがなかったのは残念だった。

雪道は急な九十九折りになり、よくぞこんな急崖に造ったと思える石積み階段が岩壁の隙間を縫って峠に続いている。登り始めて4時間半、やっと峠に立った。峠は雲に包まれ視界はないが、道標がナムン峠(4850 m)であることを教えてくれる。いつまで待っても展望は利きそうにないので、数枚の写真を撮ってキャンプサイトに駆け下った。

11月7日 ダンフェ・カルカ⇄テイマン

歩行時間…5時間35分、歩行距離…6・6 km、登り…108 m、下り…1700 m



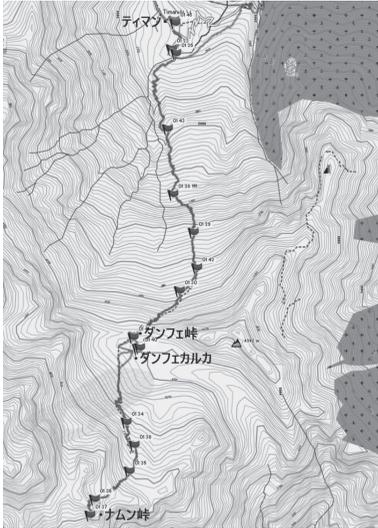
ダンフェ・カルカよりナムン峠へ向かう

カルカより古い道形をたどってダンフェ・コルに登り、一気にティマンまで下る。GPSからガミミンの「Himalayan Topo Routable」に転送した軌跡(写真1)を見たところ、ネパールの官製地図(図1)やトレッキングマップ(図2)のティマンからナムン峠までのルート(グレーのライン)と標高は明らかに異なっていた。また、トポマップにはルート(ブラウン)も少し見て取れた。(図3)

なぜ、トレッキングマップは修正されないのか

帰国後、ヒマラヤの地図や登山研究の大御所である薬師義美さんに手紙を出した。すぐに丁寧な手紙とともに4枚のナムン峠掲載の地図と冊子のコピーが送られてきた。

- ① 海賊版 No.711-D 陸軍参謀本部陸地測量部 1942(昭和17)年版
ナムン峠の標高5784m
- ② 山賊版 No.711-D 出所不明 1958(昭和33)年版
ナムン峠の標高5784m
- ③ インド測量局1960年作成の6万3300分の1の大改訂版の青焼き(薬師氏)
ナムン峠に測量点はないが、等高線から5488m



ティマンからナムン峠への GPS によるルート



ティマンからダンフェ・カルカとナムン峠の位置。5万分の1地図から

となる

- ④ LEOMANN MAPS Nepal Himalaya (N4) 20 分の1 (1995年)
ナムン峠の標高5200m
- ⑤ Around Annapurna 15万5000分の1 (現在、
我々が所持している地図に近い)
ナムン峠の標高5560m

などで、いずれも、インド測量局調製の25万分の1 (Gurkha) 1924-26測量を基に作成されたものである。なお、海賊版・山賊版の詳細については、薬師さんの『ヒマラヤは黒部から——わが山旅の記』(茗溪堂刊)の中の「ネパールの関係する『外邦図』(インド測量局調整)について」を参照願いたい。

ナムン峠踏査に使用した2枚の地図 (Bahundada・BAGACHHAP) は、フィンランド政府支援によるネパール測量局の5万分の1 (2001年発行) で、航空写真 (1996年) と現地検証 (2000年) を行なったと注記されているが、前記のいずれの地図と同様にナムン峠へのルートは、インド測量局調製の25万分の1のラインと同様である。

また、同封されていたJan Kielkoski (ポーランド) の手

にたる『ANNAPURUNA HIMAL = monograph-guide-chronicle』(2015)は、薬師さんも情報や資料を提供されたそうであるが、ナムン峠の標高を5460mとし、ルート図も間違っていて、本来ならばダンフェ・カルカから山腹を這って峠に至るのであるが、ダンフェ峠から西の稜線伝いにナムン峠に向かうラインが引かれていた。

ナムン峠を越えた記録や、カトマンズの旅行代理店の募集要項を見ると、たまに4800m台の標高が出てくるが、ほとんどが5300m台の標高を記載している。ナムン峠を通過するトレkkerはまだ少なく(最近は何々に増えているらしい)、そのほとんどがツアーに参加している。ガイドに引率されての行動では、地図を携行して見ることは少ない。ひよっとしたら、これが今になっても地図の誤りが修正されない理由かもしれない。

(重廣恒夫)

日本山岳会中央ネパール登山隊 2023 秋 会計報告

【収入の部】

項目	合計
個人負担金	4,000,000
本部助成金	1,000,000
募金	0
普通預金金利	0
合計	5,000,000

【支出の部】

項目	国内支出額	国外支出額	合計
装備費	0	375,847	375,847
食糧費	31,274	240,335	271,609
輸送費	0	333,525	333,525
都市部滞在費	0	83,541	83,541
キャラバン費	0	587,729	587,729
人件費	0	1,200,072	1,200,072
保険料	206,040	167,773	373,813
登山料	0	239,373	239,373
交通費	0	5,737	5,737
医薬品	9,019	1,305	10,324
航空券代	880,320	0	880,320
雑費	22,790	370	23,160
手数料	1,485	29,844	31,329
通信費	58,103	0	58,103
ビザ代	45,000	0	45,000
為替損	0	0	0
支出合計	1,254,031	3,265,452	4,519,483
(手許現金残)		480,517	480,517
総合計	1,254,031	3,745,969	5,000,000

—
改革の10年
—

公益社団法人化10年が過ぎて

宮崎紘一

2005（平成17）年12月、国から公益法人改革として、「社団法人を名乗る会は、3年以内に公益社団か一般社団を選択しなければならなので、どちらかを選択するように」という通達があり、理事会で報告された。このとき初めて、「公益社団」か「一般社団」かの検討と選択を迫られたかたちで、この問題が始まったように思う。

当時のJACは、会員の高齢化、会員数の減少とそれに伴う会費収入の減少による財政の逼迫にどう対処するかが課題であった。この問題は、公益法人改革以前から検討課題であり、たびたび問題点を指摘されても具体的な解決策立案に至らなかった。

この問題の解決策の一つとして考えられていた支部の活

性化については、支部活性化プロジェクトにより、支部空白地帯である首都圏に新支部を新設する活動を始めた。時間はかかったが新設された茨城支部、千葉支部、東京多摩支部、埼玉支部、群馬支部、神奈川支部などの各支部は活発に活動しており、会員増にも効果を上げてきた。しかし、「東京新支部」構想はなかなか進まなかった。

2006（平成18）年、平山善吉会長は年頭の挨拶で、中長期の目標として会員の高齢化対策と会員減少による収入減対策、公益法人改革への対応を上げている。「本会も高齢化と若年層の会員離れが進み、会員の平均年齢は64歳と高齢化した。また、退会者や物故者の合計は新入会員数を上回り、会員数は減少している。（中略）実行できるもの

から実行し今日に至っているが、決め手を欠くのも事実である（会報「山」728号）と危機感を募らせている。

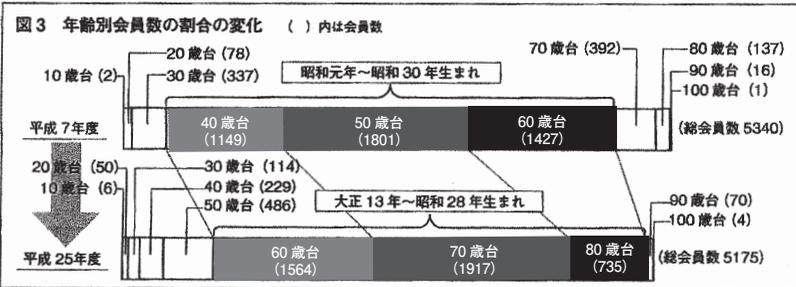
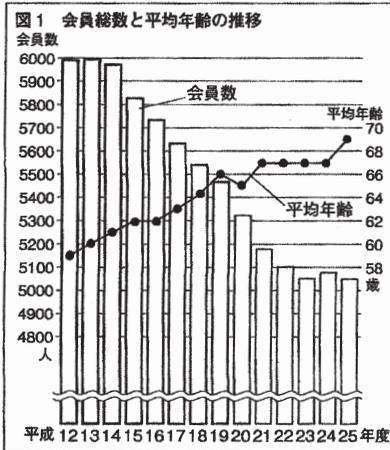
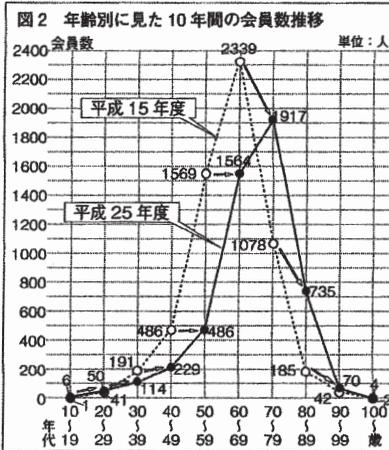
さらに通常総会でも、会長挨拶で次のように述べている。「若者の登山離れ、高齢化、会員減少、これらが相まって登山意欲の衰退という厳しい状況にある。平均年齢は64歳であり、会員は2001年をピークに減少し続けている。（中略）このまま推移すれば2010年に5500人を割り込む見込みだ。会員の減少は会費収入の減少にもつながる」と、創立100周年記念事業が無事終了した報告に続き、高齢化、会員減少問題を取り上げている（会報「山」734号）。しかし、執行部としては国から期日を決められた問題が優先され、公益社団法人化に振り回されて会員の高齢化問題は据え置かれてしまった。

そして、法人改革の詳細が判明するにしたがつて、公益法人のハードルが高いことも分かってきた。そこで「一般社団」という選択も検討する必要がある、理事会の中だけでなく問題を会員に公表したところ、その賛否を巡って議論が沸騰した。JACの素晴らしいところは、問題点の所在や賛否を併記、それを受けた理事会の動きなどを会報「山」で公表、5年間で計100ページを超える記事が掲載されている（会報「山」目録751号～800号 巻頭、

論説参照）。当然その議論は、この選択がJACの今後の進むべき方向性を示唆し、公益社団法人か一般社団法人かの選択、未来の山岳会の在り方そのものを方向づけられるという期待感もあり、そうした提案もなされていた。

2009（平成21）年、尾上昇会長が就任し、それまで3代の歴代会長の下で積み重ねてきた法人改革の問題について、東北大地震の翌日の3月12日に開催された2009年度第2回通常総会で、公益社団法人を選択することが決議された。続いて2010（平成22）年度第1回総会では定款改正が議題となり、5時間にもわたる議論を経て新定款が承認され、ここに公益社団法人を選択する主要な問題が解決された。そして、2011年1月の理事会で公益社団法人申請が決定した。この理事会の様子は会報「山」に10ページにわたり詳しく報告されている。こうした手続きを経て、2012（平成24）年4月、公益社団法人になることが正式に決まった。

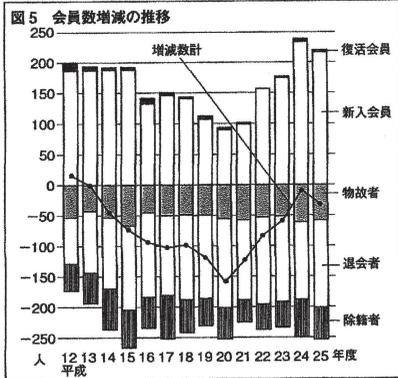
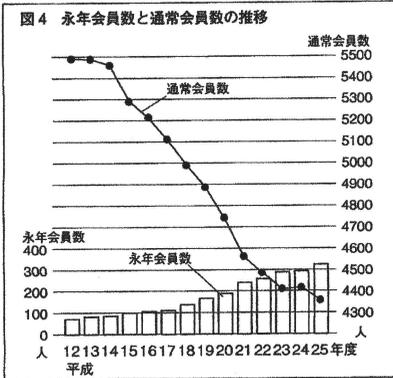
この間の6年間は、当初の課題であった会の会員減少はさらに進み、一方で高齢化問題も後回しにされていた。2014年9月号に高原常務理事と永田理事による労作「高齢化が進む日本山岳会」が会報に発表されて、多くの会員



会員動向 (平成12年度～25年度) 一覧表

年度	平成12	平成13	平成14	平成15	平成16	平成17	平成18	平成19	平成20	平成21	平成22	平成23	平成24	平成25	
年度	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	
会員数	5990	5995	5970	5828	5735	5635	5543	5470	5317	5184	5109	5058	5083	5056	
平均年齢	59	60	61	62	62	63	64	66	65	67	67	67	67	69	
会員種別	名譽会員	38	35	17	29	28	26	26	22	18	17	18	17	14	
	永年会員	73	81	85	100	106	111	138	166	189	240	257	284	299	326
	終身会員	38	143	157	154	161	165	162	153	140	130	122	113	106	91
	通常会員	5490	5484	5460	5289	5191	5095	4984	4887	4736	4560	4483	4409	4420	4361
	青年会員	19	12	13	8	7	10	8	8	8	17	18	18	28	44
	夫婦会員	150	151	156	146	143	140	139	140	139	137	133	135	134	138
団体会員	101	101	102	98	93	90	87	88	83	82	80	79	79	82	
会員増	新入会員数(復活会員)	188	187	187	188	133	146	141	107	90	99	156	174	236	218
	平均年齢	54	54	54	56	55	58	57	57	57	58	53	52	55	55
会員減	物故者	52	42	53	67	45	50	48	49	55	57	52	51	61	58
	退会者	76	102	117	138	139	131	139	137	146	132	144	141	127	143
	除籍者	45	50	66	63	50	70	54	44	50	36	41	41	61	52
	(合計)	173	194	236	268	234	251	241	230	251	225	237	233	249	253

本文にも出てきた2014年9月号の会報「山」から図だけを引用する。当時からちょうど10年、新入会員の積極的な会勧誘の効果は見られるものの、高齢化と会員数減少という事態は改善されているとは思えない。現状を再認識するうえで、10年前の会員数に関する図を採録する



に事態の深刻さが浮き彫りにされた。少し古いが当時の説明に使用された図表を載せておく。問題の深刻さが理解できると思う。問題とされていた永年会員制度の見直しも具体化されていない。一方、会員減少対策の準会員制度も、残念ながら中途半端に終わりそうな状況である。問題は提起されているのであるが、抜本的な具体策をまとめられないまま、会の体質が改善されていない。

公益社団法人として十余年、公益社団法人化はJACに何をもたらしたのだろうか——。私が山岳会の実務から離れた立場でこの問題を考えてみると、従来の社団法人としての公益性が認められはしたが、新公益社団法人としての活動の変化は、理事会のガバナンスが強く求められた結果、評議員会の力が相対的に弱まっているように思う。評議員会による会長・理事推薦権の廃止、役員定年制の設定が布かれたためと思われるが、体質改革にまでは至っていない。役員の2期交代制と併せて、逆に豊富な人材を誇っていたJACの人材活用機会を阻害していないだろうか心配になる。高齢化対策や支部活性化など時間のかかる問題に対応できる会運営の経験者が、執行部に残らないことが気にかかる。せめて、公益法人改革の経過でもわかる

通り、長期間の検討が必要な問題に対応するためにも、会長を含む主要な役員は継続して会運営に携われる方策はなにもものだろうか。

支部にとっては、直接ではないが支部活動のためには公益社団法人を名乗れることは他団体との共同活動などのにきに有利に働き、プラスになっていると思っている。例は少ないかもしれないが、支部が行なう、会員以外を対象とした「登山教室」などで、会員増に効果を上げている。

支部の運営方針は、2007年11月号「山」に掲載された、のち会長となる尾上昇会員の「日本山岳会への提言 登山文化の継承とネイチャークラブへの転進」として問題提起されている。当時の会としてはあまりにも唐突な提言として考えられていたようだが、現実を見ると示唆に富んだ提言であり、真剣に考えてみるべきだと思う。歴史のある支部も世代変わりが進んで、新任の支部長の努力によって変化が見え始めている。しかし、相変わらず会員の多くが在住する東京圏の支部化は進まず、委員会の立ち位置もあいまいで、活性化の力にはなっていない。

法人改革の影響の最大の問題は、公益か一般かの選択と新法人制度対応の諸問題にかまけて、会員の高齢化・会員の減少・財政の逼迫を先送りせざるを得なかったことにあ

る。併せて新型コロナウイルス感染症の流行が問題をさらに先送りさせてしまった。今や、山岳会の改革は待ったなしの状態になっていると言えよう。会員の若返り、会員数の増加をどのように目指すのか。このまま自然減していく会員数では現状維持は見込めない。会員増を考えるならば、従来からの会員意識の思い切った改革が必要になる。

増加している若い未組織登山者と、体力に自信のある定年退職者に訴えかける会の運営姿勢が問われるだろう。そして、入会する若い会員を会で教育し経験を積ませたうえで、日本山岳会の会員として自主的に活動してもらうことだ。しかもクラブライフの楽しさを共有してもらうことで、会員として定着してもらうことが重要だ。

次の世代を担う中堅会員を育てる仕組みを作るには、時間がかかるかもしれないが、会の体力があるうちに着手するべきだろう。新しい会長の下で、日本山岳会の舵取り役である執行部の力量と覚悟に期待したい。現状のままでは組織は多少変わっても、会員の意識は法人改革前とあまり変わっていないように思われる。新執行部・理事会の英断に期待したい。

ヒマラヤキャンプへの思い

ヒマラヤキャンプを始めた理由

ヒマラヤキャンプは、若手が中心になってヒマラヤ未踏峰に挑戦するプロジェクトである。まずプロジェクトの原点となった私自身の体験を記したい。ちょうど20歳のときに1年間の休学をし、信州大学山岳会隊として、当時未踏峰であったラトナチュリ（7035m）登山隊に参加させていただく機会を得た。まだ登山経験は浅く、メンバーに立候補したときは雪山経験は全くない超未熟な登山者であったが、行ってみたいという気持ちに対して、「1年かけてしっかりトレーニングを行なう」ことを条件に、先輩方が快く受け入れてくださった。このチャンスがあったお陰

で、早い段階で初めてのヒマラヤを体験することができた。そして、この登山を通じて先輩たちから多くを学び、かけがえのない時間を過ごすことができた。このときの体験が今日の礎となっている。

しかし時代は流れ、社会人山岳会や大学山岳部など既存の山岳組織の弱体化が進んでしまった。その結果、私のように組織や先輩方のサポートがあったからこそ参加できた、「初めてのヒマラヤ登山」のチャンスが少なくなってしまう。私が20代のころは、多くの社会人山岳会や大学山岳部の組織が海外登山を実践していたが、いまは確実に少なくなっている。そこで若手が中心になってヒマラヤを始めとした海外登山を経験する場、そして、同世代同士で登

花谷泰広

山経験を積み上げる受け皿が必要であると考え、本会員でプロ登山家である竹内洋岳氏にアドバイスをいただき、2015年にこのプロジェクトを立ち上げた。

2019年秋にはプロジェクトをより持続的なものとするため、日本山岳会の創立120周年記念事業として受け入れていただいた。育成事業は一過性ではなく継続が求められることから、個人ではなく組織のプロジェクトにしていく必要があると考えた。日本山岳会は日本で最も歴史がある山岳会であり、公益社団法人でもあることから、その受け皿に最もふさわしい組織であると考えて打診をさせていただいた。今後も日本山岳会がこれまで積み上げてきた歴史や知的財産を次の世代に継承し、他国山岳団体との連携や各支部各委員会等のネットワークを活用して、組織的に次世代の支援をしていきたいと考えている。

このプロジェクトの目的は次の3点である。これらに力を入れて取り組み、私が先輩登山者から受け継いできたものや自ら経験してきたことを、若手にしっかりと伝えられるプロジェクトに成長させたいと考えている。

ヒマラヤ未踏峰登山のチャンスを作ること

これだけ情報化が進んだ世の中で、情報がないというこ

とは最高の贅沢である。有名な山は登山者が多いだけでなく、多くの登山記録や写真・映像が存在し、事前にあらゆる情報を得た上で登山を行なうことになる。しかし、未踏峰は未知の要素が大きく、現地で状況に合わせた判断をして行動を起こさなければならぬ。山の難易度にかかわらず、この経験は未踏峰でしかできない、かけがえのないものだ。ヒマラヤキャンプでは、未踏峰に挑戦することにご

海外登山に関心がある若手が集う場を作ること

既存組織が弱体化していることから、海外登山の意欲はあってもパートナーに恵まれない若手が存在する。そんな若手が集う受け皿を作り、さらなる活動のきっかけになるような場を作りたい。事実、いまのメンバーの居住地は全国各地に散らばっていて、首都圏在住者はほとんどいない。なかなか全員が顔を合わせることは困難であるものの、やはり地方ほど受け皿が少ないことを感じる。

費用を含め、できるだけ手厚いバックアップができる組織体制を構築すること

私は信州大学山岳会隊として学生時代に2度のヒマラヤ



ランダック東面の氷河を行く(2015年)



ランダック頂上にて(2015年)



ロールワリンカンの全容(2016年)



ロールワリンカン山頂直下にて記念撮影(2016年)

登山隊に参加した。そのときに非常にありがたかったことは、個人負担金を最低限に抑えていただいたことである。参加に当たって経済的なハードルを下げていただいたことで、確実に初めてのヒマラヤが近づいた。いまは円安で非常に不利な状況でもある。登山経験を築く初期の活動でできるだけ手厚くバックアップすることで、ヒマラヤキャンプへの参加をきっかけとして、将来的な活動につながるような支援体制を構築したい。

2014年秋から冬にかけて具体的な計画を練り上げ、企業へのスポンサーの打診など準備を進めていき、15年秋に初めてのヒマラヤキャンプを実施した。その後、16年秋、18年春、22年秋、そして、23年秋の5度にわたってネパール・ヒマラヤに登山隊を送り、以下の通り実績を積み上げてきた。

- ◆2015年 ランダック(6220m) 東面からの初登攀(3名)、ランシヤール(6224m) 第2登(2名)
- ◆2016年 ロールワリンカン(6664m) 全員初登頂(6名)

- ◆2018年 パンカールヒマール(6264m) 全員初登頂(6名)

- ◆2022年 プンギ(6524m) 6150m地点まで(3名)

- ◆2023年 シヤルプーVI峰(6076m) 6000m地点まで(3名)

これまでのヒマラヤキャンプを振り返る

2015年の1回目のヒマラヤキャンプは、テストケースとして公募はせず、母校である信州大学山岳会の学生たちを中心に声をかけ、3名の学生と2名の社会人でチームを結成した。山梨県北杜市にある私の事務所をベースに合宿を行ない、親睦を深めながら準備を進めていった。

このときは未踏峰2座の許可を取得しネパールに入国したが、直前にネパール人チームによって目標のピークが登られてしまったことが、現地に着いてから発覚するというハプニングもあった。また、キャラバン中に体調不良者が続出し、私は肺炎でナムチェ・バザールからカトマンズまでヘリで搬送され、翌日には高山病でメンバー1名が、やはりナムチェからカトマンズにヘリで戻って来るなど、



ロールワリンカンのサミットブッシュ(2016年)

波乱の幕開けとなった。

私は数日間の入院の後、ホテルで休養をして本隊に復帰。そのままほとんど休む間もなく登山活動を再開して、ランダックを東面から初登頂することに成功した。またすぐ隣にそびえるランシャールにも登ることができた。ランダック東面は想像以上にルートが険しく、終始私がリードする形となってしまう。登頂を優先するか、登頂はできなくてもメンバーにリードを託すのか非常に葛藤があったが、登頂したいという気持ちが勝ってしまい、フォロワーに終始した後輩たちは不完全燃焼だったかもしれない。

1回目のヒマラヤキャンプを実施して、参加者の国内での登山経験がある程度定めた上で、出発までにおよそ1年かけてチーム作りをすれば、公募でも実施は可能だろうという感触を得た。そこで2回目のヒマラヤキャンプは、「積雪期の登山日数100日以上」という制限をつけて公募することにした。

2016年は、参加者のまとめ役だけでなく私の片腕として活躍してもらうために、まずヒマラヤ登山経験のあるアシスタント・リーダーを1名選んだ。そして、アシスタント以外で登山に参加するメンバー4名は、書類審査と体



バンカールヒマールのサミット・ブッシュ中(2018年)



バンカールヒマールの頂上直下(2018年)



ブンギ 6150 m 地点で撤退を決意(2022 年)



初めて花谷がないメンバーだけでの挑戦となった(2022 年)

力テスト（冬期甲斐駒ヶ岳・黒戸尾根日帰り）を行なって選考。このほか、ベースキャンプ・マネージャー1名を選択し、主にベースキャンプからの情報発信などのマネージャー業務をお願いすることにした。

このとき目指したピークはロールワリンカン。前年に氷河対岸に視認できたピークで、非常に美しい山谷であった。全員が集まるトレーニング山行は毎月行ない、冬には北鎌尾根登山を行なうなど非常に充実した内容であった。ピークの難易度はおそらく歴代のヒマラヤキャンプの中でも最も難しく、力量のあるメンバーが揃ったからこそ目指すことができた山だったと思う。ベースキャンプからの水平距離が長く、体力的にも厳しい登山であったが、登山メンバー6名全員で登頂することができた。このとき初めて動画作品を作成し、スポンサー企業主催の報告会イベントで上映会を開催した。いままも本会ホームページのヒマラヤキャンプのページからリンクをアップしているの、ぜひご覧いただきたい。

2017年は16年と同じ参加条件で募集を行なったが、応募者数が少なかった上に登山経験を満たしていない人が多く、開催を見送ることになった。また、私の身辺も変化

し、専門の山岳ガイドから山小屋の経営者となったことで時間の余裕がなくなってしまう。そこで半年ほど開催時期を繰り下げ、18年の春に実施することにした。前回募集の教訓を踏まえ、積雪期登山経験も100日から50日まで引き下げた。これは大学1年生のときに私が経験した雪山日数と同等程度であり、自分自身が20歳のときに初めてヒマラヤに行ったときのレベル感をイメージした。必要な登山経験を引き下げたことで応募が増え、5名のメンバーとともに3回目のヒマラヤキャンプに行くことになった。

2018年春に目指したピークはパンカールヒマール。マナスル・サーキットからアプローチして、ちょうどマナスルの対岸にある国境稜線上のピークを目指した。参加者の登山経験が下がったことで、ピークの難易度は抑えることにしたが、初めて私ではなくメンバーが自分たちで目標ピークを決めて挑戦する形にした。実際の登山は、当初計画していたルートが氷河の状態が悪くて断念。一度ベースキャンプを撤収して下山し、別ルートから仕切り直すという私も初めての経験をしたが、何度も同行してくれているネパール人サーターの機転の利いた動きでベースキャンプ移設を終え、登山期間最後の5日間でワンブッシュでトラ



サミットブッシュの朝(2018年)

イ。氷河上のルート・ファインディングなど、ほとんどの行動をメンバーだけで解決して見事に初登頂を掴み取った。この登山隊でも動画作品を作成しているので、ぜひご覧いただきたい。

2019年は母校、信州大学山岳会の創立70周年記念事業があったため、ヒマラヤキャンプとしての活動はお休みさせてもらった。しかし、15年に一緒にヒマラヤキャンプに行ったメンバーとロープを組み、挑戦的な登山にもトライできたことが何よりも嬉しかった。しかし、このころからますます多忙になり、個人でこのプロジェクトを進めていくことに限界を感じ始めていた。そこで、冒頭に述べた通り日本山岳会のプロジェクトとして受け入れていただくことになった。

日本山岳会としての初めてのヒマラヤキャンプは、2020年春に開催する予定で計画を進めていた。7名の登山隊に撮影チームが3名同行する大型プロジェクトとなり、メンバーの士気も非常に高かった。しかし、新型コロナウイルスのパンデミックの影響で、出国直前にネパールへの入国ができなくなり計画は延期に追い込まれた。この年の



登山の大部分をメンバー3人で挑戦したシャルプーVI峰(2023年)



タナプーの頂稜とシャルプーVI峰(2023年)



タナブーを越えてシャルブーVI峰を目指す(2023年)



タナブーからシャルブーVI峰を望む(2023年)

秋の実施も検討したが情勢は絶望的となり、いったん登山計画を中止することになった。参加予定メンバーも進学や就職などで状況が変わってしまい、チームもいったん解散。今後のプロジェクトは、世界情勢が落ち着かないことにはどうにもならない状況になってしまった。そんな状況にもめげずに一部のメンバーは気持ちをつなぎ続け、22年秋の実施に向けて動き始めた。この間にずっとお世話になっていたネパールのエージェントは廃業してしまっただが、それでも大量の物資を保管し続けてくださったことに感謝の言葉しかない。

私自身の状況も、コロナ禍を境にさらに大きく変わってしまった。初期のころは山小屋のコロナ対策に追われていただけであったが、21年、22年と事業の拡大が続き、自身自身の登山に割く時間もほとんどなくなってしまった。その結果、22年はカトマンズまで同行するのが精一杯で、新しいエージェントとの交渉やデポ品の整理などのサポートのみを行ない、メンバーをカトマンズから送り出したところで帰国した。このときの登山隊メンバーは3名。私が参加しない形での実施は初めてだったが、コロナ禍の間もトレーニングを続けて着実に力をつけていたメンバーなので、不安はなかった。初めての本格的なヒマラヤ登山であ

るにもかかわらず、自分たちでしっかり考えて行動して奮闘し、目標のプンギの初登頂には至らなかったが立派な登山をしてきた。

5回目のヒマラヤキャンプは2023年の秋に実施した。23年メンバーも、コロナ禍を耐えた3名だった。ヒマラヤキャンプの在籍も長く、国内で多くの山行をこなして着実に力をつけていた。私も55日間の遠征期間のうち30日間だけ同行することができたが、ほぼベースキャンプの往復だけで終わってしまい、登山活動に費やしたほとんどの時間を、初めてヒマラヤを経験する3人で過ごした。想定していたよりもルートが険しく、一進一退を繰り返す登山だった。未踏のシャルプーVI峰と向き合い、少しずつヴェールを剥がしながら前に進んでいったが、本当にあと一步のところまで及ばなかった。結果としてシャルプーVI峰の山頂には立てなかつたが、未踏峰と向き合った時間はかけがえないものだったに違いない。もちろん登れなかつた悔しさはとても大きいだろうが、やり切ったという思いも大きかつた気がする。

前記すべての登山の報告書などは、日本山岳会のホームページから閲覧可能となっている。より詳しい内容は、ぜ

ひサイトにアクセスしてご確認いただきたい。

今後の展望

ヒマラヤキャンプでは、年に一度のペースで登山隊をヒマラヤに送り出している。その都度、目標とするピークを自分たちで調べて設定し、情報収集や実際のトレーニング、そして、計画を進めるためのミーティングを1年以上の時間をかけて積み重ねていく。そして、実際にヒマラヤに行ってから、解像度が上がった情報に対してその都度計画の修正を重ね、さらに天候悪化や体調不良だけでなく、予定通り進まないスケジュールとの心理的な戦いをしながら前に進んでいく。課題の設定から解決に対するプロセスを考え、そして実行する。このシンプルな、しかし本来の登山の魅力を、ヒマラヤ未踏峰というフィールドで体験することが大きな狙いだ。

単純にヒマラヤの頂上に立つという体験をしたいのであれば、何も未踏峰に行く必要はない。いまやエベレストをはじめとした、世界中にある14座の8000m峰の全てがガイド登山で登れる時代になっているだけでなく、6000mや7000mクラスの山々でも比較的登山者が多く、

登りやすいピークはたくさんある。しかし、ヒマラヤキャンプは挑戦するプロセスを重視したい。そして、まず実践してみることに意味がある。現地で感じる様々なプレッシャー、自分自身との向き合い、低酸素のストレスとの戦い。その全ての経験が尊いものだ。ヒマラヤキャンプに参加したメンバーが、これからもヒマラヤ登山を続けるかどうかは問題ではない。もちろんそうやってくれたら嬉しいが、そうなる人はほんのひと握りであることは最初から承知の上だ。しかし、未踏峰と向き合った唯一無二の経験は、きつと今後の人生に活かされるに違いない。

2024年、そして創立120周年に当たる25年に向けて、参加メンバーを中心とした準備が進んでいる。まずはこの2回のヒマラヤキャンプをしつかりと実行したい。創立120周年以降についてはまだ具体的な計画を描くことができていないが、日本山岳会に所属することで全国各地の若手とつながり、目標を立てて登山活動ができる環境を作っていきたいと考えている。

最後になりましたが、ヒマラヤキャンプには日本山岳会内外から多くのご寄付をいただき、活動を支えていただい

ています。また、多くの企業からもサポートをいただいております。皆さまからのサポートのお陰で2015年からこれまで活動を続けることができました。篤くお礼申し上げますとともに、これからも若手の活動をサポートしてくだ
さいますよう、よろしくお願ひ申し上げます。



ランダック東面を登山中(2015年)

ヒマラヤキャンプ



標高 6500 m 付近を登攀中の角田。頂上稜線直下(2016年)



パンカールヒマール頂上にて(2018年)



パンカールヒマールから下山中。目の前にそびえるサウラには、2022年にこのときのメンバーが登頂(2018年)



ブンギの全容(2022年)



ブンギへのサミットブッシュ中、標高約6100m地点にて(2022年)



タナブー直下の稜線(2023年)



タナブーの山頂にて記念撮影(2023年)



カナダ合宿 2023 のメンバー

カナダの岩、山、仲間たち



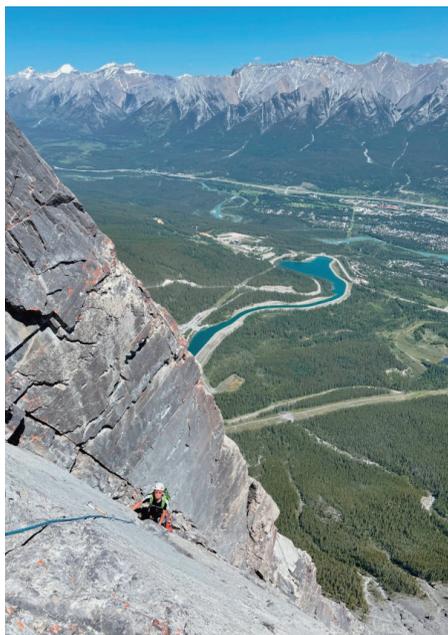
タカカウ滝を登る(カナダ合宿 2023)



アサバスカ峰 (3491 m) 山頂に立つ大野雅樹と草野駿希



スコームッシュのキャンプ場で。真ん中が小笠原毅会員



ハーリンピークのクライミング。眼下にはキャンモアの町が広がる



スコームッシュの美しいフィンガー・クラックを登る



美しいグラッシーレイクとハーリンピーク



カナディアン・ロッキー周辺でも一押しのレストランの岩場

カナダの岩、山、仲間たち

——カナダ・ユースPJ「カナダ合宿2023、2024」

松原尚之

2024年7月1日、カルガリー空港に着くと、谷剛士^{たけし}、山田利行、旧知の2人が笑顔で出迎えてくれた。私たちは9名で、荷物も多いから、レンタカー2台だけでは厳しいだろうと、谷には空港からキャンモアへの送迎をお願いしてあったのだが、山田（以下、山田トシまたはトシと略す）も来てくれたのはうれしかった。谷はキャンモア、トシはカルガリーに住んでいる。谷もトシもカナダで生活するようになったって10年以上になるのだが、2人とも日本山岳東海支部に所属しており、私や22年のカナダ合宿に参加したメンバーにとっては、きわめて近しい仲間である。右も左も分からない異国の地に、こうした友人がいるというのは本当に心強いし、ありがたいことである。

この日はカナダの祝日であるカナダ・デイだった。キャンモアに着いてからだとスーパーマーケットが閉まってしまふ心配があるからと、2人のアドバイスによつて、空港からほど近いT&Tというアジアの食材を中心にかけている大きなスーパーに案内してもらった。ここで食材を買い出しし、トシと別れて、谷の車とレンタカー2台でキャンモアへと向かった。カルガリーからキャンモアまでは1時間20分ほどのドライブである。15分も車を走らせると、後はひたすらまっすぐな一本道が続くようになった。これだけまっすぐに続く道は、日本では経験できない。しばらく走ると、両側に雄大なカナディアン・ロッキーの山並みが見えてきた。1人遅れて日本を発ち、この日バンクーバー

空港で合流した高橋湧太が、助手席でしきりに景観への感動を口にしていく。時刻は午後8時を回っているが、まだ空は明るく夕暮れの気配すらない。この時期のカナダはなにしろ午後11時まで明るいのである。やがてキャンモアの町に到着した。私は1年ぶりにこの土地に帰って来た……。

カナダ合宿2023

第1回カナダ合宿は、2023年6月23日～7月5日の日程で実施された。メンバーは以下の7名である。CL松原尚之（YOUTH CLUB委員長／58歳）*年齢はすべて23年時）、SL山田利行（東海支部／38歳）、大田由孝（広島支部／49歳）、井上紀江（広島支部／51歳）、涌島満（ユースクラブ／42歳）、大野雅樹（広島支部／25歳）、草野駿希（東海支部／24歳）。

23年のカナダ合宿は、メンバーたちの希望により、カナディアン・ロッキーでのクライミングを中心にすえ、マザーズデイ・バットレス、トンネルマウンテン、EEOR (East End of Rundle)、タカカウ滝などのマルチピッチ、およびグラッシーレイク、レイクルイーズなどのショートルートでのクライミングを行なった。カナディアン・ロッキーで



2023メンバー。レイクルイーズにて

日本の登山者に一番ポピュラーなのは、おそらくハイキングだろう。冬のアイス・クライミングも比較的よく知られており、実は私も15年以上前に一度だけカナダにアイス・クライミングに行ったことがあった。けれども、カナディアン・ロッキーでの本格登山やクライミングとなると、日本に情報はほとんど入っておらず、経験したことのある日本人はきわめて限られると思われる。

私がカナディアン・ロッキーのクライミングの情報を初めて得たのは、21年12月に実施された日本山岳会の晩餐会ウィークでの谷剛士、山田利行によるオンライン講演、題して「知られざるカナダの山、岩、生活」においてであった。私はこの講演のコーディネーター兼司会進行役を務めさせていただき、自分自身が興味を持っていた、ロッキーでの登山やクライミングのことを、このとき2人に話してもらったのであった。ちなみに、谷とは20年来の付き合いであるが、トシとはこの講演の準備のためにオンラインで話したのが最初の出会いとなった。

カナダ合宿2023はそうしてクライミング中心の合宿となったが、一番若いメンバーである草野の希望もあって、日程の最後に、アサバスカ峰（3491m）登山を計画に組み込んだ。アサバスカ峰はコロンビア・アイズフィール

ドに峭立する名峰で、カナディアン・ロッキーの雪山の中でも最もポピュラーな山の一つである。氷河上を歩いて取り付き、7月であってもアイゼン、ピッケルを使用する。アサバスカ峰には私とトシ、若い大野と草野の4名で登る予定であったが、私が体調不良でベース滞在を余儀なくされたため、トシ、大野、草野の3名が首尾よく登頂を果たした。クライミング中心の行程の中で、最後に氷河を抱く雪山であるアサバスカ峰に登れたことは、カナディアン・ロッキーというフィールドをより深く知るために、とても有意義なことだったと考えている。

谷剛士と山田利行

カナダで初めて国際ガイド資格を取得した日本人となった谷剛士は、2013年からカナダに住むようになったが、それまで日本では穂高の涸沢小屋で10年以上働いていた。そのため山岳ガイドを職業とする私は、彼が20歳のころより知っていたが、その後、山小屋に務めるかたわら谷は日本の山岳ガイド資格を取得したため、私が所属するJAGUというガイド組織に入会することになり、いっそう親しく付き合うようになった。そのころ、谷にはサブガイドとして何度か私のガイド仕事を手伝ってもらったりもしてい

る。そんな谷がカナダに渡り、ガイドとして生活するようになったので、谷がいる間に一度カナダに行きたいなあ、という気持ちを私は以前から抱いていた。

山田利行は谷から遅れること1年の2014年にカナダに渡った。一度就職したのち22歳で南山大学に入学したトシは、当時休部していた南山大学山岳部をアルパインクラブという名称で復活させて、そこで活動した。また、東海支部の高橋玲司・現支部長らの協力を得て、同じくそのころ休眠していた東海学生山岳連盟も自分を中心となって活動を再開させた。南山大学アルパインクラブと東海学生山岳連盟の現在の活動の隆盛を見れば、トシの果たした功績の大きさが分かるというものだ。トシと谷は必然のようにキャンモアで出会い、一緒にロープを組んで山や岩や氷に赴くようになり、切磋琢磨しながらカナディアン・ロッキーマウンテンの山で登山者としての実力を蓄えた。そんな2人の活動の結実が、2022年4月のネパール、カンチუნナツプ北西壁の初登攀であった。

日本山岳会ユースの交流

2022年5月下旬の週末、御在所山の日向小屋に、地元東海支部をはじめ広島支部、青年部（現ユースクラブ）

などから数十名の日本山岳会会員および非会員が集まった。坂部信一郎・佑美という、いずれも南山大学アルパインクラブ&東海学生山岳連盟出身の若者2人の結婚披露パーティが、若い新郎新婦が愛してやまない鈴鹿の山小屋で催されたのである。坂部信一郎と私は親子ほど年が離れているのだが、日本山岳会の活動を通じて知り合い、一緒に国内外のクライミングに出かけるなど親しい付き合いをしていた。このパーティにはカンチუნナツプ北西壁の登山を終えて、ちょうど日本に帰国していた山田トシも参加して、カンチუნナツプのホットな報告をしてくれた。坂部はトシにとって南山大アルパインクラブの後輩に当たる。高橋玲司支部長の号令一下、東海支部が全力でセッティングしてくれたこの山小屋結婚披露パーティは本当に楽しく、コロナ禍以降久しく味わっていなかったリアルな山の集まりの良さを実感するイベントとなった。このとき東海支部や広島支部のメンバーにトシも加わって話をする中で、翌年のカナダ行きの話で大いに盛り上がったのであった。

YOUTH CLUB委員長としてその活動に中心的に携わるようになって、私が力を注いでいることの1つが、全国の支部ユースメンバーとの交流である。私が支部ユース

スメンバーとの交流を積極的に進める理由の1つ目は、純粹にそれが楽しいからである。例えば広島三倉岳にクライミングに行き、そこで広島支部のメンバーと一緒に登ったり酒を飲んだりする。御在所山に行つて東海支部のメンバーと交流する。純粹な登山の楽しさとはまた異なるのだが、そこには言葉では説明できないような愉しさがある。馴染みのない地方の土地に登山やクライミングで出かけたとき、そこをホームゲレンデとする同じ山岳会の仲間がいて、温かく迎えてくれるということは、本当に素晴らしいことなのである。それは全国に支部を有する日本山岳会だからこそその長所とも言える。

私が支部交流を推進する2つ目の理由は、それがユース世代の活性化にもつながると考えるからである。東海支部や広島支部のように若い人がたくさんいる支部は、本会の中ではむしろ稀なケースであろう。30代以下の会員は、いても1人か2人という支部も少なくないのではなからうか？ けれども日本山岳会全体を見渡せば、若い会員は少数ながらも全国に存在しているのではないかと思われる。これまで互いにほとんど接点のなかつた全国の若い会員をつなぐことで、周りに同年代の仲間の少ない地方支部の若い会員たちが、日本山岳会の中で一緒に登れる仲間を見つ

ける一助になれば、わずかでも日本山岳会に所属する意義を見出ししてくれるかもしれない……。

そのような考えから実施したのが、2022年11月3日（6日）に広島県天応烏帽子岩山、三倉岳などで開催されたユース交流会である。この催しには広島支部、東海支部、関西支部、東九州支部、本部ユースなどから約30名ものユース年代（と言っても50代までOK）が集まった。残念ながらクライミング中のフォール事故で1人の参加者が足を骨折するという事故を起こしてしまい、大きな反省が残ったが、交流会自体は大盛況で、今後の可能性を感じさせられるイベントとなった。この広島での交流会の中で再び翌年のカナダ行きの話で盛り上がり、具体的な時期やメンバーなどもある程度見えてきた。

ユース交流会は2023年11月3日～5日に、岐阜県の高木山、伊木山の岩場で2回目を実施された。前年を上回る7支部+本部ユースから計38名もの参加者を迎え、その中にはちょうど日本に帰国していた谷剛士と山田利行も含まれる。1回目以上に盛り上がり、日本山岳会の底力を感じさせてくれる、素晴らしい催しとなった。

カナダ合宿2024 ―メンバーと計画―

私たちのカナダ合宿は、「カナダ・ユースPJ」という名称で本会の創立120周年記念事業の一つとなり、2025年まで3ヶ年にわたって継続的に実施されることが決まった。カナダ合宿2024は、6月26日～7月11日という日程で、昨年より長い16日間で計画し、最終的に以下のメンバーが決まった。

松原尚之（YOUTH CLUB委員長／59歳）、黄海燕（ユースクラブ／47歳）、涌島満（ユースクラブ／43歳）、竹中雅幸（関西支部／34歳）、高橋湧太（信濃支部／32歳）、加々見太地（ヒマラヤキャンプ／30歳）、山上耀一郎（ユースクラブ／27歳）、大野雅樹（広島支部／26歳）、田島圭悟（ユースクラブ／24歳）。もう1名、千葉支部の平野直子がメンバーに入っていたが、お母さんの病気により、直前に不参加となった。メンバーは総勢9名。大型連休などではない6月下旬～7月上旬という時期の16日間という計画に、なんらかの仕事を持っている若い人たちがこれだけ集まってくれたのはありがたい。山上と高橋の2名だけは全日程会社を休むのは難しいということ、山上は前半の10日間、高橋は後半の11日間で参加することになった。

昨年、23年のカナダ合宿の際は、出発までに何度かのオ

ンライン・ミーティングを実施しただけで、全員で直接顔を合わせる機会は持てなかった。大半のメンバーは面識があったが、東海支部の草野駿希だけは成田空港で初めて会うこととなった。今年も同じくオンライン・ミーティングで準備を進め、コミュニケーション・ツールには昨年同様LINEグループを利用した。参加者の中には奈良県在住の竹中や立山室堂山荘で働く大野などがいたため、全員がリアルで集まるのは難しかったが、一度だけ小川山で事前合宿を実施することができた。

23年のカナダ合宿がカナディアン・ロッキーでのクライミングが中心だったのに対し、24年の合宿はスコシミッシュとバガブーというカナダを代表する二大岩場でのクライミングをメインに計画を立てた。スコシミッシュもバガブーも、カナダの粹にとどまらない世界的に有名なクライミング・エリアであり、クライマーなら一度は訪れるべき岩場ではないかと思われる。昨年、カナディアン・ロッキーで登った岩と山は、私よりもむしろほかのメンバーの希望が反映された結果だが、今年は私自身が行きたい場所を選ぶことにした。来年、25年のカナダ合宿では、アルバータ峰など雪山登山が中心の計画になるだろうから、今年はクライミング・メインにしたというのもある。今は登山をや

りながらもクライミングを好む人は少なくない。スコアミッシェとバガブーという目的地は、結果的に若い参加者を集めることにつながったかもしれない。

スコアミッシェのキャンプと小笠原毅さん

スコアミッシェは、バンクーバーの北80kmほどの所にある、世界的に有名な花崗岩の一大クライミング・エリアである。バンクーバー国際空港から1時間20分ほどのドライブで行くことができる。空港を発って30分ほどは慣れない左ハンドルの運転と、バンクーバーの町中の交通量の多さに緊張を強いられたが、町部を抜けると一転して走りやすい海沿いの道路となった。スコアミッシェまでは景色の素晴らしい道と聞いていたが、単に海が望めるだけでなく、リアス式海岸のように山が海まで迫り、しかもその海が内海のため、なんとも独特の景観美を創り出している。もともと、この日は雨模様のおいにくの天候だったのだが、私たちはバンクーバー空港に戻る帰りに、改めて車窓からその風景の美しさを味わうことができた。

スコアミッシェの滞在はキャンプである。スコアミッシェにはいくつかのキャンプ場があり、少人数なら予約なしで行って泊まれる所もあるようだが、私たちは人数も多

いので「Mamquam River Campground」という、岩場に近い比較的最近でできたキャンプ場を日本で事前に予約して出かけた。バンクーバー空港からこのキャンプ場に到着した初日は本降りの雨で、「この雨の中、テントを張るのかよー」と憂鬱な気持ちで向かったのだが、ありがたいことに大きな東屋があつて、屋根の下で食事を作ったり食べたりすることができた。また、半数のテントはうっそうとした樹の下に立てることができたので、雨の影響はそれほど受けずに済んだ。水道がないため、水はミネラルウォーターを買うか、近くの公園に汲みに行く必要があるのは不便だったが、総じて良いキャンプ場であり、「次に来るときもこのキャンプ場で良い」と、最後にはメンバーたちも一様に感想を述べていた。

スコアミッシェの参加者は高橋湧太を除く8名だが、実は9人目のメンバーがいた。現地在住の小笠原毅さんという日本山岳会員の方だ。バンクーバー空港までご自分のピックアップトラックで迎えに来てくれた小笠原さんは、私たちの大きなザックの大半を自分の車の荷台に積み、1人のメンバーを助手席に乗せて、スコアミッシェへ同行してくれた。そして、スコアミッシェ滞在中、キャンプ場で私たちと一緒に生活をともした。現地在住と言っても、

小笠原さんが住んでいるのはバンクーバーから200kmほど北に位置するクアドラ島という島である。カナダにはかれこれ50年近く住まわれている。日本山岳会員である小笠原さんは会報で私たちのカナダの計画を知り、何か手伝えることがあればと、日本山岳会の事務局に親切にも連絡をくださったのである。

メール有り難うございました。

私はB.C.州のヴァンクーバーから200kmばかり北にあるクワアドラ島に住んでいます。

カナダには50年近く住んでいます。

今ではあまり出かけませんが前はロッキー、バガブーにはよく行きました。

今は岩登りはあまりしませんが年に一度はゴールデンの近くの山スキーには出かけます。

カナダにはロッキーだけでなくユーコン、ローガン峰(5900m)、B.C.コースト山脈にあるワーデングトン峰(4200m)等氷河に囲まれた素晴らしい山々があります。もしお会いできたからお話をしましょう。クライミングキャンプの行動予定がわかったらお知らせください。装備の運搬等お手使いできる事またその

他の事についてヘルプできる事があればお知らせください。

それでは又メールを下さい。

小笠原毅

これは小笠原さんから最初にいただいたメールである。カナダに50年近く住んでいると書いてあるので、ある程度年配の方であることは推察できたが、正確な年齢までは分からない。実際にお会いして、昭和19年生まれて今年の10月に80歳になる方だと知ったのだが、驚かされたのはその元氣さだった。聞けば40代で胃を全摘したということ、瘦身ではあるのだが、ピックアップ・トラックの後ろに積んだマウンテン・バイクでキャンプ場の周りを走り回り、私たちがクライミングに行っている間は、スコームリッシュのハイキング道を何時間も歩いてきたりと、その体力、行動力はとて80歳になろうという人とは思えない。バルンツェをはじめとするヒマラヤ登山にも数回出かけているが、その最初の山であるメラ・ピークに登頂したのが67歳のとき。そして、今もスキーやカヤック、サイクリングなどで体力維持に努め、まだ行ったことのないアンデスや、再びのヒマラヤ登山を胸に宿しておられる。カナダにも、

このような日本山岳会員の方がいらっしやるのである。

スコームィッシュのクライミング

スコームィッシュに到着した日と翌日は雨だった。例年ならもう少し天気が良いはずなんだけど……ということである。その後もすかっと晴れる日はなかったが、それでも3日目からは登りに行くことができた。クライミング初日はスモークブラフというショートルートのエリアで登り、2日目はスコームィッシュ・チーフのマルチピッチ組とスモークブラフのショートルート組に分かれて登った。スコームィッシュを訪れるのは私も含めて全員が初めてだった。スコームィッシュは花崗岩の大きな岩壁だし、漠然とヨセミテのカナダ版といった先入観を抱いていたのだが、実際に訪れてみて、ヨセミテとはまたまったく異なる個性と、異なる良さを有する岩場であることを知るところとなった。スコームィッシュはヨセミテと違い、なにしろ町から近い。岩場から50mくらいの距離に人家が建っていたりする。そんな至近なアプローチながら、ルートはほればれするような極上の美しいクラックがいくらかでも並んでいる。実にコンビニエントかつハイクオリティな岩場なのである。夏のハイシエラ（シエラネバダ山脈）ほど晴天率が高くないのは

短所かもしれないが、クラック・クライミングを練習する環境としてはヨセミテより優れている点がいくつもあるし、あるいは世界でも最良のクラック練習場と言ってもいいかもしれない。

スコームィッシュ・クライミングの最終日は、Murrin Parkというエリアの駐車場から近いごちんまりとした岩場でショートルートを登った。規模は大きくなく、ちよつと日本の岩場に近い雰囲気を感じたりもしたが、登つてみるとどのルートも質が高かった。日本ではまずお目にかかれない5・4というグレードのついた5つ星ルートなどもあって、何人かはその5・4というグレードを初体験した。しかも、この日は日曜日であつたにもかかわらず岩場は貸し切りで、実に快適に登ることができた。スコームィッシュでもそれほどポピュラーではないと思われる岩場で、このクオリティである。最終日もスコームィッシュのポテンシャルの高さを思い知らされて、その短い滞在を終えることになった。天候のため結局、スコームィッシュでは3日間登っただけだった。私に至っては前半風邪でダウンしていたため、1日半しか登れなかった。皆の一致した感想は、また必ずここに戻って来たい。今度はもっとじっくりと長くスコームィッシュで登りたい、というものであつた。

バガブー行きを断念、キャンモアへ

7月1日、小笠原さんとスコームッシュのキャンプ場で別れ、バンクーバー空港へと向かった。空港の待合ゲートで日本から来た高橋湧太と合流し、これで9人全員がそろった。バンクーバー空港からカルガリー空港へのフライトはわずか1時間ほどだが、時差が1時間ある。カルガリー空港で谷とトシの出迎えを受け、谷とともにキャンモアへと向かった。そして、キャンモアの町の中心部に近い場所に位置するコンドミニウムに旅装を解いたのち、谷から最新のバガブーの残雪の状況を、写真を見せてもらいながら教えてもらった。それによれば、バガブーの今年の残雪の多さは、この10年でも見たことのないものであり、例年ならこの時期、完全に岩盤が露出しているキャンプ地も雪の上、そのため水もまだ出ていない。それだけならまだ頑張ればなんとかなるが、岩壁群のテラスやルンゼ、そして稜線上に雪が残り、ミックス・クライミングになるだろうという話だった。その雪の残り方は異常と言えるレベルのようで、喩えて言うなら、夏に剣岳の八ツ峰に行ったらまだ雪稜だった……くらいの感じであろうか。バガブーへの未練はあったが、この話を聞けば明らかに難しいだろうと思えたし、どうせ行くならクライミングに専念できる通

常の状態のときに行きたいとも思った。皆で話し合った結果、今回はバガブー行きをあきらめ、カナディアン・ロッキー周辺で登ることに決まった。

バガブーに行くはずだった7月4日～8日は、バガブーのキャンプサイト(予約の必要なし)でテント泊の予定だったので、その間の泊まりをどうするか考えなければならぬ。ゴーストというクライミング・エリアなら河原で自由にキャンプができるという谷からの情報で、ゴースト行きも考えたが、結局 Airbnb のサイトからキャンモアのコンドミニウムを予約し、バガブーに行くはずだった期間もキャンモアに滞在することとなった。

キャンモアでのクライミング その1

カルガリーから車で1時間と少し、標高1300mのキャンモアは、カナディアン・ロッキーの玄関口と言える町だ。キャンモアから西にさらに30分ほど走れば、国際マウンテン・フィルム・フェスティバルなどでも有名なバンフの町がある。どちらもロッキーマウンテンの山懐に抱かれた美しい町だが、バンフがいかに観光地然とした町であるのに対し、キャンモアには生活する町という雰囲気がある。カナダ山岳会の本部や宿泊できるクラブハウスがあるのも、こ

のキャンモアである。

カナディアン・ロッキーズという世界有数の山岳フィールドのベースとなる町、キャンモアに似た場所をほかの国に探すなら、真っ先に浮かぶのが、アルプス登山のベースであるフランスのシャモニであろう。シャモニもキャンモアもハイキングからアルパイン・クライミングまでオールラウンドな登山ができるのは共通だが、キャンモアがシャモニに勝っている点は、ショートルートのクライミング・ゲレンデが充実していることではないだろうか。カナダではショートルートのクライミングのことをクラッキング(cragging)と言う。昨年のカナダ合宿でもキャンモア郊外のグラッシーレイクの岩場や、レイクルイーズの岩場でクラッキングしたが、わざわざ日本からクラッキングのためだけに訪れてもよいと思えるくらい、質の高い岩場であった。

7月2日、キャンモアでのクライミング初日は、グロツトキャニオンというゴルジュの中にある変わった景観の岩場に谷の案内で出かけた。この季節、ガイドである谷は本来忙しく仕事をしている時期なのだが、3月に雪崩事故で左膝を負傷してリハビリ中のため、まだ仕事はできず、逆に私たちに付き合ってくれる時間があつたのは、私たちに



雨の日でも登れるグラッシーレイクの岩場

とって幸いであった。谷の左足にはまだ装具が付けられており、クライミングは基本トップロープである。翌3日は先に帰国する山上耀一郎のクライミング最終日。自他ともに認める雨男である山上のさすがと思わされるパワーで、この日も雨模様の日となったが、雨でも登れる壁のあるグラッシーレイクの岩場で1日遊ぶことができた。

4日、午前3時に起きて山上を送るためカルガリー空港へと車を走らせた。行きも帰りも雨でワイバーを使っていたが、彼を乗せた飛行機がカルガリー空港から飛び立つころ、キャンモアの町を覆っていた厚い雲が切れてきた。翌日からがらりと天気が変わり、カナダに夏の晴天が訪れた。

キャンモアの友人たち

7月3日の夜、谷のほか淀川裕司、永山虎之介、Cody Shinizuというキャンモア在住の若いクライマーたちが私たちの泊まっているコンドミニアムを訪ねてくれて、一緒に夕食を囲んだ。東京農大山岳部OBの淀川のこととは学生時代から知っているのだが、彼は今年、カナダに移り住んだばかりである。淀川の奥さんアヤさんには、私は昨年、このキャンモアで会っている。アヤさんが先にカナダに住んで頑張って定住権を取得したため、ワーキング・ホリデー

制度はすでに利用できない年齢になっていた夫の裕司も、ワークビザを出してもらえてカナダに住めるようになったのだという。クライミング大好きな淀川は、岩場に近いキャンモアの生活に心から満足している様子だった。

まだ25歳と若い永山は信州大学山岳会OBで、昨年もキャンモアで会っている。この6月にアラスカのデナリのカシン・リッジを末端から登るという大きな登山を、3人の日本人パーティで成功させた。今回の私たちのメンバーでは加々見が、日本で虎之介と一緒にクライミングしたところがあると話す。加々見が頼み、虎之介には夕食後にそのデナリのプチ報告会をやってもらった。虎之介が連れてきたCodyは日系カナダ人の感じの良い若者で、虎之介と年齢も近く、よく一緒に登っているようだ。写真を仕事にしており、私たちが来年予定しているアルバータ峰登山にも大いに興味を示してくれた。

また別の日、7月6日の夜には、谷、トシ、安食昌義あじしやうぎの3名が私たちの根城を訪ねてくれて、再び楽しい一夜を過ごした。トシはカルガリーからわざわざ来てくれた。NHKを退職してキャンモアでガイド修行中の安食とは、私は昨春秋に谷と一緒に日本で会っている。キャンモアに暮らす友人の輪が、こうしてどんどん広がっていくのはうれし

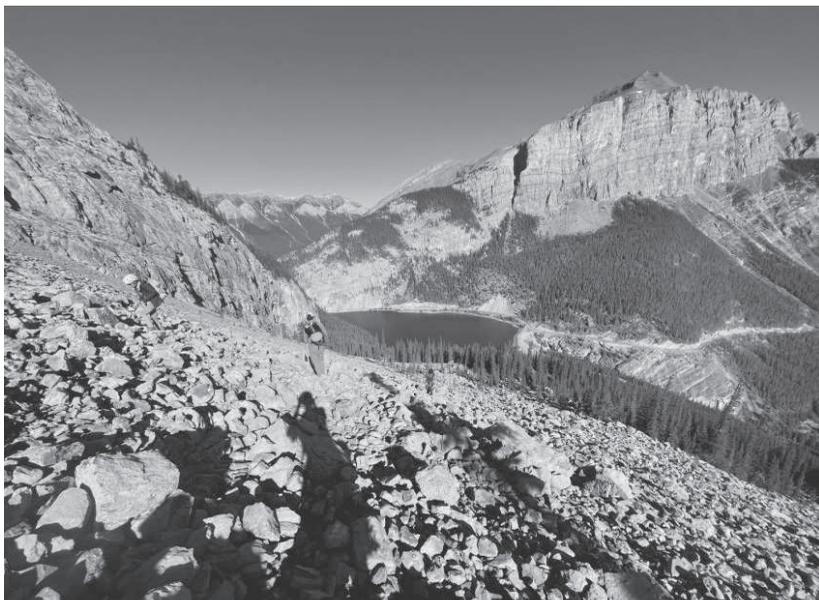


キャンモアに暮らす日本人クライマーたちと

い限りである。谷ヤトシをはじめとする現地に住む日本の友人たちの存在が、どれだけ私たちのカナダの旅に豊かさを与えてくれていることだろう。去年、今年と2年続けてこの地を訪れたことで、キャンモアは私にとって、いっそう親密さを感じさせる町となった。

キャンモアでのクライミング その2

7月5日に登ったハーリン(Ha Ling)ピークのクライミングは、多くのメンバーにとって今回の合宿の中でもとりわけ印象深いものとなったと思われる。ハーリンはキャンモアのランドマークとも呼べるような、町からよく目立つ岩塔である。この日、私と高橋、黄と竹中の4人はノーマルルートであるノースイースト・フェース(5・6/11ピッチ)に、涌島と大野、加々見、田島の4名は5・10b、9ピッチのルートへと分かれて取り付いた。ロッキーのマルチピッチは岩がもろいルートが多いが、ハーリンもご多分にもれず、私が登ったルート上でも少し浮き石に気を遣わされたが、とはいえ人気の高いノーマルルートゆえ、問題になるほどではなかった。眼下にはキャンモアの町が眺められ、登攀中に眺める景色はこれぞロッキーのクライミングと言えるほど極上のものだった。4時間ほどのクライミ



ハーリンピークへのアプローチ



バンフ郊外、ガイズロックからの美しい景観

ングで山頂に飛び出すと、たくさんの登山者がひっきりなしに登って来ていたので驚いた。ハイキングの山としてもかなりポピュラーであったのだが、山頂の素晴らしい雰囲気と眺望を知れば、それも納得であった。私と高橋は午後1時半ごろには山頂に着いたのだが、黄と竹中はそれから2時間半遅れの午後4時過ぎにトツプアウト。

さて、問題は10bのルートに向かった4人である。登攀中は間に尾根を挟むためトランシーバー交信がまったくできなかったが、下山中の午後5時ようやく涌島と交信できた。「いま8ピッチ目を田島がリード中」とのこと、9ピッチのルートだからもう少しである。やれやれと安心して、よく整備された登山道を下山したが、駐車場に着いて再び涌島と交信すると、「8ピッチ目でルートが分かんなくなり、まだルートを探し中」とのこと。時刻は午後6時である。これで私は心配でたまらなくなってしまう。駐車場から離れたくなかったが、先に夕食の買い出しや支度をして待った方がいたので、私たち4名は町に戻ることにする。幸いだったのは壁の中でも電波が通じるため、トランシーバーがなくてもスマホで連絡が取れることだ。宿に戻って胃が締め付けられるような思いで待つ私(たち)の所に、「ようやくトツプアウト!」のLINEが

入ったのは午後9時を回ってからだった。登攀に12時間かかったことになる。午後11時まで明るいこの時期のカナダだったからこそ、無事に抜けることができたと言える。

帰って来た4人から聞いた話では、彼らの登った10bのルートは、岩がとにかくほろく、むちゃくちゃ悪かったそうだ。それでも7ピッチ目まではなんとか問題なく登ったのだが、8ピッチのラインがちよっとすぐには思いつかないくらい長いトラバースをしてから登るので、そのラインを大野が見つけるまでかなりの時間を要してしまったとのこと。何はともあれ、無事で良かった……。そのような危ないルートを選んでしまったことは、むしろ大いに反省しなければいけないわけだが、谷に言わせれば「もつともカナディアン・ロッキーらしい」そんなルートをとにかくも無事に登れたことは、彼らにとつてめったにない、特別な体験だったのではないかと想像する。

1日空けて、7日に再びマルチピッチに行くに際しては、今度は谷やトシに徹底的にリサーチして行き先を決めたのは言うまでもない。そうして選んだガイズロックという岩場は、日本でもなかなかないくらい岩が硬く、ポルトも安全な間隔でしっかり打っており、カナディアン・ロッキーにもこんなに岩質の良いマルチがあったんだ……と思える



ガイズロックの美しく硬い岩を登る

ようなルートであった。早めに町に戻れた私たちは、キャンモアで偶然にも私が25年ぶり！の再会を果たしたアメリカ人のクライミングガイド・セリーナらと、キャンモアのブルワリーでおいしいビールを飲みながら楽しい午後を過ごした。

8日はグラッシーレイクの岩場、そして最終日の7月10日は、このあたりでも最も素晴らしいと思えるレイクルーズの岩場で最後のクラッキングを楽しみ、カナダでのクライミングは幕を閉じた。

今回の合宿メンバーは、成田で初めて顔を合わせた者同士もいたように、いわゆる寄せ集めのチームだった。8、9名の大所帯でキャンプ場やコンドミニアムで共同生活を送り、毎日一緒に食事を作り、クライミングをし、酒を飲んだ。若いメンバー同士がなんだか古くからの友人同士のようにじゃれ合っている様子を眺めるのは、私にとって心地良いものだった。

このカナダ・ユースPJは、次代を担う日本山岳会の若い会員を育てることを目的として掲げているが、この1回のカナダ合宿で、それがかなうと考えるほど私は楽観的ではない。けれども、この16日間はまぎれもなく濃密な時間だった。カナダで私たちに力を貸してくれた小笠原さんや



レイクルイーズにて。2024メンバー(山上を除く)

谷、トシ、その他の友人たちが、私たちの素敵な旅をいっ
そう充実したものにしてくれた。参加したメンバーたちに
とって今回の旅が、いつもの山行よりわずかでも印象深い
ものであればうれしい。そして、私たちメンバーのつなが
りが、これからも永く続いてくれること。それが私のささ
やかな願いである。

—
調
査
・
研
究
—

乗鞍岳大量遭難と高頭仁兵衛

明治38年8月に遭難死した4名を慰霊登山

木下喜代男

はじめに

乗鞍岳は近代に入っても御嶽山同様信仰の山で、昭和の初めごろまで毎夏、多くの人が登拝していた。明治期には、平湯温泉から500人ないし600人が登山したという記録が見られ、あと旗鉾側や信州側からの登拝者を加えると、相当な数にのぼっていたと思われる。

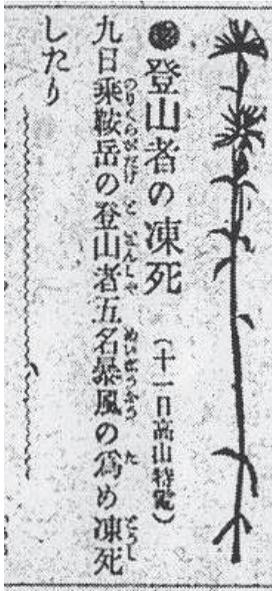
明治になって西洋から近代登山がもたらされ、当初はお雇い外国人のガウランドや宣教師ウエズトンなどが登った。明治33（1900）年10月、日本山岳会を創立した小島烏水が登って紀行文を世に出したことから、登りやすい人気のある山になった。白装束の信者に混じって、日本人が趣味で登るようになっていたのである。

これには当時、ベストセラーになっていた志賀重昂著『日本風景論』の影響も大きかった。「登山の気風興作すべし」の一文が、明治の青年たちの登山熱を煽ったからだ。

そんななか、明治38（1905）年の盛夏、乗鞍岳で13人が遭難し、そのうち4人が凍死するという惨事が起きた。これは近代登山が行なわれるようになってから初めての大量遭難であった。

死者の1人小牧厚彦氏が、東京府麻布区貴族院議員・小牧昌業氏の三男だったこともあって、新聞で大々的に全国へ報道された。当時の人々は、この事故によって初めて「山のこわさ」を認識することになったのである。

当時の新聞を調べると、「岐阜日日新聞」、「読売新聞」、



岐阜日日新聞 8月12日

「東京朝日新聞」、「報知新聞」の各紙に載っていた。

このうち「報知新聞」は、小牧厚彦氏のことを中心に4回にわたって報じている。3回目の8月17日付には、生存者(氏名不明)から小牧家へ送られた書簡を基に詳細が掲載してあり、この遭難事故の全容が分かる唯一のものであった。

ただ、各紙をよく見ると、登山者の氏名、人数、登山ルート、現地での行動、死者の数などに食い違いが見られた。これは通信手段が未発達であった当時としては当然のことであった。

登山経験があり、かつ乗鞍岳を知っている者としてこれらの記事突き合わせ、できるだけこの遭難の真相に迫り、



岐阜日日新聞 8月15日



川崎義令氏撮影

乗鞍山嶺の祠

『山岳』第1年第1号の川崎義令と案内人(『山岳』第1年第1号)

その上で事故原因などを考察してみた(以下、敬称を略す)。この遭難の2ヶ月後、日本山岳会創立に加わった高頭仁兵衛(式、義明/1877-1958)が、乗鞍に登って碑を立て、慰霊を行なっている。高頭はこの様子を『山岳』創刊号(明治39年4月発刊、第1年第1号)に載せている。また同号には、遭難事故の10日後に乗鞍へ登った、会員で植物学者の川崎義令が手記を載せており、その中に遭難事故の話が出てくるので併せて紹介したい。

遭難者の1人、小牧厚彦の登山までの足取り

東京府立第一中学校5年生の小牧厚彦は、夏休みを利用して植物や鉱物の採取をするため、7月20日、独りで上野駅を出発。甲州や信州を回って8月4日、白骨温泉に到着し、2泊した。

6日には、安房峠を越えて平湯温泉の村山清十郎方に泊まる。翌7日は、高山の町を見物すべく平湯峠を越えた。40歳くらいの農民と、14〜15歳くらいの少年が道連れになる。道中、旗鉾という集落からも乗鞍へ登る道があること、8日から例祭があることを知った。6時ころ高山へ着いて投宿。

この夜、東京の学友へハガキを書いて翌日投函している



大正期の乗鞍登拝の様子(飛騨側)

が、これが絶筆になった。その内容は、

「平湯から八里の道を歩いて高山にきた。途中旗鉾というところの奥には平金という鉱山がある。ここからも乗鞍への道があり、乗鞍神社例祭登山のため大勢の人がいた。高山の町は思ったより大きかったが、屋根が瓦でないので汚い。人はここを小京都などと褒めるが、若松や甲府のほうが景気がいい。山が迫り過ぎて平地がないので物足りない。明日はここに留まるか平湯へ戻るか決めかねている」

などというもの。

結果、乗鞍神社例祭のことが気になって、8日には平湯へ戻り、村山館に投宿。この例祭は8月8日から15日まで行なわれ、毎年、避暑を兼ねて登山する人が多かった。

同宿者に明日、乗鞍神社例祭に行くという柳原亀吉(岐阜県稲葉郡南長森村大字細畑)、御嶽講先達・山田大太郎(船津町朝浦)がいたので同行を依頼し、承諾を得た。

8月9日(Ⅱ遭難の日)の3パーティ、13人の行動

早朝宿を出発。3人ともいでたちは白装束に脚絆、草鞋、

雨具は着莫塵^{もくじん}であった。厚彦は荷物と数十円の金を宿に預けている。

平湯大滝の横を通り、平湯鉱山へさしかかるころはまだ曇りであったが、途中から雨になり、稜線へ出るころには強風も加わって、一歩も進めないほどひどくなった。

このため一行は岩窟を見つけて避難した。この場所は、現在バスターミナルがある豊平周辺である。

ここにはすでに高山町の呉服商・上野源右衛門（46歳）、同町の奥原吉右衛門（61歳）、斐太中学5年生の長谷川民造（19歳）、同5年生の古橋賢蔵（20歳）、同4年生の山崎憲三（18歳）、平湯鉱山支配人の息子（17歳）の6名が避難していた。このうち高山町の上野は今までに乗鞍へ4回登っており、奥原は御嶽へ数回登った経験があった。

先行の高山パーティ5名は、昨日（8日）小雨のなかを平湯から向かったが途中から雨が激しくなり、平湯鉱山支配人・上田惣二郎の好意で飯場に泊めてもらった。そして翌日、支配人の息子の同行を頼まれて6名で登って来たのだった。

この一行も稜線へ出るころには激しい風雨に見舞われ、下山して来る人から中止を勧められたが、無理をして岩窟まで来ていた。皆ずぶぬれになっていた。

ここへはさらに4名が入ってきた。船津町の大先達・上田与兵衛（38歳）、平金鉱山の煉瓦請負人で撃剣師（剣道教師）の山田惣太郎、船津の吉田東三郎である。このメンバーは、平金鉱山からの登拝路Ⅱ蛇出道を登って来たと思われる。

なんとこの狭い岩窟に13名が集まってしまった。辛うじて雨を凌ぐことはできたが、風が吹き込み、標高が高いため寒気がひどくなった。全員唇や体に細かいしわができ、歯茎が変色して体の震えが始まった。

このままでは凍死を待つほかないということで協議をした結果、船津町の先達上田の「ここから一里半登れば籠堂がある。下るとすると二里下らないと休む場所がないので、籠堂まで行くほかない」という意見に7人が同意し、8名は風雨について出発した。

岩窟には、もはや動く体力がない奥原吉右衛門、上野源左衛門、そして朝、平湯の旅館を出た小牧厚彦、柳原亀吉、山田太郎の5名が残った。

結果、このときの決断が生死を分けることになった。

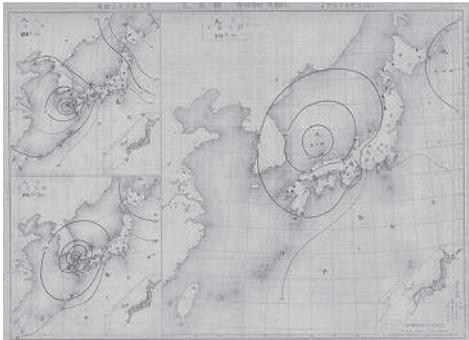
不動岳の西側を巻いて五ノ池の縁を通り、室堂の籠堂へ向かった8名には滝のような雨が襲い、足元は川のようになった。途中から雨に大豆大の雹^{ひょう}が混じるようになり、視



報知新聞 8月17日



報知新聞 8月17日



明治 38 年 8 月 8 日・9 日の地上天気図 (気象庁)

ていたが脈はあった。ここから7、8間を隔て、山田先達も凍死していた。

一行8名は、我が身が危ないので遺体はそのままにし、瀕死の柳原を介抱し、交代で背負って下山した。

雨は午前中早くにやんだ。

うち3名は午後4時ごろ平金鉾山へ下山。あとの6名は午後8時半に平湯鉾山へ到着した。柳原を下すため時間が

かかったと思われる。鉢山から連絡を受けた平湯では大騒ぎになった。

8月17日付「報知新聞」では、その夜のうちに凍死者を担ぎ下したとあるが、これは不可能であり、後述のように遺体が平湯へ下ろされたのは12日であった。

生存者のうち誰かが高山町の上野源右衛門宅へ知らせたため、上野家では高山警察署へ届け、中村署長と巡查2名

○量平残留 ○室堂へ移動 ▲死亡 △蘇生

〔村山館パーティ〕

○▲山田大太郎（?・船津・御嶽先達）

○△柳原亀吉（?・岐阜長森村細畑）

○▲小牧厚彦（20歳・東京府立一中生徒）

〔高山パーティ〕

○▲上野源右衛門（46歳・高山の商人）

○▲奥原吉右衛門（61歳・高山）

○▲長谷川民造（19歳・斐太中学生徒）

○▲山橋賢蔵（20歳・斐太中学生徒）

○▲古橋憲蔵（18歳・斐太中学生徒）

○▲若い崎男（平湯鉢山支配人息子）

〔蛇出道パーティ〕

○▲上田与兵衛（38歳・船津・御嶽先達）

○▲男性（?・平金鉢山煉瓦職人）

○▲山田惣太郎（?・撃剣師）

○▲吉田東三郎（?・船津）

が現地へ赴いた。

その後、柳原は幸いにも快復し、高山の日赤病院へ入院して9月に退院している。

なお、このときの高山地方の天気を岐阜氣象台で調べてもらうと、8月8日〓雨、8月9日〓雨のち曇り、8月10日〓曇りであったが（添付天気図参照）、9日の乗鞍は終日雨であった。



報知新聞 8月19日

遺体の収容

平湯からの電報で、厚彦の父・小牧昌業は子息の遺体を引き取りに平湯まで行って、18日朝帰京した。さっそく報知新聞の取材に答え、同紙の19日付はその内容を大きく報じている。以下記事の内容を要約。

昌業は、親戚の濱砂宗義と共に13日正午高山へ到着し、高山警察署へ出頭したあと平湯へ向かった。

村山館で話を聞くと、現地では10日の夕方、下山者から遭難の話聞き大騒ぎになった。翌11日山へ登り、夕刻4人の遺体を発見して仮の棺に納めた。翌12日警察官、村役場職員付き添いで平湯へ下したが、大変な作業なので、人夫には1里につき1円の日当が支払われたという。

村山館には宿泊客がいるので遺体安置を断られ、村の共同墓地へ運び、かがり火を焚いて村民交代で張り番をした。

13日高山警察署の検死があった。夕方、昌業が到着して子との対面を済ませると、さっそく大工を集めて堅牢な棺を作らせた。遺体の様子はどこにも傷がなく、歯を食いしばっていた。着衣は、網シャツの上に夏シャツ、白衣、下は白のズボン下に脚絆、草鞋。吹き飛ばされた菅笠の輪だけが頭に残っていて痛々しかった。父は笠の輪と草鞋を取り除いて新しい棺に納めた。



高頭が立てた慰霊碑(『山岳』第1年第1号)

翌14日、人足3人に担がせ、平湯街道を高山へ。昌業らは杉野という旅館に泊まったが、遺体同宿は断られて大王寺（大雄寺）へ安置。

高山からは警察署の助言で普通の荷物として装い、人力車で33里の道を岐阜駅まで運んだ。昌業はあとを濱砂と東京から来る男性1人に任せ、ひと足先に帰京した。

なお、近代になっての山岳遭難死者は、営林署から木材の払い下げを受けて現地だびで茶毘だびに付すことが多かったが、この遺体搬送の理由はよく分からない。それにしても暑いさなか、よく東京まで運んだものだ。

高頭仁兵衛の慰霊登山

日本山岳会創立者の1人である高頭仁兵衛は、『山岳』明治39年、第1年第1号に「飛信界の乗鞍嶽」と題して、乗鞍岳の概要と登山の紀行を載せており、中に慰霊碑建立のことが出てくる。

高頭はこの慰霊登山を行なった理由を書いていないが、同じ貴族院議員の小牧昌業と親しかったからだと思われる。

高頭は、明治38（1905）年10月13日、富山駅から船津經由平湯へ向かうべく、人力車で神通川を遡る。

途中、東茂住で1泊する。「4時50分東茂住の第一旅館木下に投宿す、地は鉾山あるを以て衣食頗る可なり」と書いている。当時、筆者の先祖は、この地で旅館のほか銀鉾山、薬屋を経営していた。

翌日、船津で人力車を替え、高原川沿いに平湯温泉の村山旅館に入る。

平湯で案内人と慰霊の木柱建立のため人夫2人を雇っている。人夫は17日、鉾山の上の森林限界あたりで木を切って木柱を作り、遭難地点へ運んだ。

雨で平湯に2日間滞在し、17日には室堂ヶ原の石室で1泊。8月に遭難者8名が避難して助かった室堂の様子を次のように書いている。

「室堂は大き凡二間三間巨岩を周圍に積みて暴風を防ぐ、完全なる小舎といふにはあらざれども雨露を凌ぐには充分なり、前面は乗鞍の最高点にして焼石礮角後方は不動岩ある山に続きたる無名の山足にして偃松蔚然緑氈を敷けるが如く薪木の憂なく、左の小径大野川、白骨に通ずるものの傍に行くこと二三十歩にして清水あり飲料に充つべし、若し水涵ることありとも右の来路を下り五ノ池より汲むを得、盛夏登攀者多きとき

は室堂の前面なる平坦地に焼火して三々五々野宿するといふ」

翌18日に剣ヶ峰に登頂したあと畳平へ下り、人夫に準備させた木の柱に墨書した慰霊碑を立て、慰霊を行なった。その様子を次のように書いている。

「十二時三十五分小牧君の一行にして高山に住せる二人者の凍死せる所に到る、櫛、煙管、風呂敷、盃、菅笠の臺頭の遺物狼藉して竦然久しく駐まる能はず、少しく上がれば巨石あり這松一株右に繁茂す是小牧君、御嶽行者、美濃の煉瓦屋（後ち蘇生し高山病院に入り九月退院せりといふ）の凍死せる處なり、思ふに御嶽行者は間道より室堂に至らんと企画して此所に斃れたるものか。

乃ち木標を建て之に書して曰く「凍死者小牧厚彦君外三名追悼之標」（前）「明治三十八年十月十八日」（左）「日本山嶽志編纂者高頭仁兵衛建之」（後）合掌黙禱すれば萬感綿々潜然涕下る、嗚呼余今来りて君を吊ふ知らず何れの日何れの處にか余が骨を朽ちしむるものぞ」

（日本山岳会機関誌『山岳』明治39年、第1年第1号）

余談ながら、日本山岳会の創立日は、高頭を含む7名が集まって設立の発起人会が開かれた明治38（1905）年10月14日（『日本山岳会百年史』本篇）になっている。しかし、この日高頭は乗鞍登山のため平湯温泉へ向かっている最中であつた。設立の日には武田らの博物学同志会の例会があり、その後、発起人会が開かれたようだが、その場に高頭がいなかったことが新事実となつた。

川崎義令と小島烏水の記述

遭難から約10日後の8月19日、植物学者で日本山岳会会員であつた川崎義令が、友人と植物採集のため乗鞍岳に登っている。川崎はその紀行を「乗鞍嶽採集記」として『山岳』に投稿しているが、その中にこの遭難事故のことが出てくる。

18日、信州側から野麦峠に登る。峠の茶店で休んでから野麦集落へ下り、奥原藤太郎宅に投宿。

夕食後、案内人を求めたが、10日前の遭難のことはすでにこの集落へ伝わっており、あの事故以来、皆怖がつて山に入る者はいない、来年に延ばした方がいいと繰り返し言

われた。それでも粘り強く説得した結果、元コマクサ採りで山に精通している64歳の爺さんを雇うことができ、その爺さんの条件として、2人の荷物持ちも同行することになった。

翌日から大日岳の下にあったコマクサ採り用の粗末な小屋を拠点に、五ノ池まで足を延ばして植物採集を行なっている。案内人たちは終始山を恐れ、早期の下山を促すばかりだった、と書いている（日本山岳会機関誌『山岳』明治39年、第1年第1号）。

なお、小島烏水もこの遭難のことを『山岳』に「報知新聞」を引いて次のように書いている。

小牧氏の息惨死の現況―恐ろしき飛驒の寒気
 「貴族院議員小牧昌業の三男厚彦氏（二十）が飛驒の乗鞍山に登山中暴風雨に遭遇して凍死するに至れる惨事は既に記す如くなるが其當時厚彦氏と共にありたるも幸い生還せし者並に同氏と同行したるものの小牧家に送りたる書信により稍や當時の状況を審にするを得たれば多少の重複を厭わず更に之を詳記せん」
 以下に報知新聞の記事を紹介している。

事故の原因と対策など

この事故は明らかに低温・濡^{ぬれ}・風の3条件下で起きた「低体温症」によるものである。

この用語が世間に広く知られるようになったのは、平成21（2009）年7月16日、北海道・大雪山系のトムラウシ山で8名が死亡するという、夏山登山史上最悪の遭難事故からであった。

それまで山における遭難死は、医学用語でない「疲労死」という言葉が使われていたが、これは事故調査が医学的にしつかり行なわれていなくなったからだと言う。

周知のとおり「低体温症」とは、人間の中心温度（直腸温など）が35℃以下になった状態を言う。恒温動物である人間は常に36℃台を保っているが、急に気温が下がってくると、手足の抹消神経が収縮して体温を逃さないようにしようとし、手足の皮膚温は冷たくなる。

しかし、脳や肺、心臓などコアの部位は、抹消を犠牲にしても一定の温度を保とうとし、寒さで手足が冷たくなってもコアの部位は常に36℃台になっている。このコア部分の温度がなんらかの原因で下がり始めると、人間の生命を脅かす事態になる。

登山中に低体温症を引き起こす原因は、前述のように低

温・濡・風で、雨または雪で気温10℃以下、風速毎秒10mと言われている。冬山だけでなく、夏山でもこれらの条件下で体温が下がり始めると防御が間に合わず、短時間で死に至る。

特に乗鞍やトムラウシのような広い地形の山では風を遮る場所がない。筆者は平成30(2018)年7月、トムラウシ山の大量遭難パーティと同じコースを歩いたが、そのときも風雨に遭い、まったく広い地形で危険を感じた。現代のようにゴアテックスなどという優れた素材の雨具や、保温性がある服を着用していても前記の条件下では低体温症になることがあるので、明治期の宗教登山の木綿製白衣と着莫塵では、ひとたまりもなかったであろう。

したがって、最初の症状「寒さを感じたとき」「震えが始まったとき」にこの条件を排除しないと、症状は一気に進行する。この限界温度は34℃とされる。

34℃では「歩行が遅く、よろめき始める」「震えが激しくなる」「会話が口ごもり、意味不明の言葉を発する」「表情が無関心になり、眠そう」「軽度の錯乱状態」の症状が出るので、ここで即、左記の回復処置をとらなければ死に至るのは言うまでもない。

(1) ツェルトをかぶる。(2) 風のない所へ移動する。(3) 乾い

たものに着替える。(4) 温かい飲み物を摂り、湯が入ったペットボトルなどで首、脇の下、股間などを温める。(5) カロリーがある食べ物摂る。なお、アルコールの摂取は体の表面を流れる血液量が増え、体温が放散するので逆効果。

ガイドの天候判断の誤りが引き起こしたトムラウシ山の遭難も、根本的には低体温症の知識がなかった、強風下で長時間滞在、カロリー不足が指摘されている。

現代の登山者でも低体温症の知識が希薄なのだから、当時、暑い夏の山で凍死するなど思いもつかず、さぞかし無念であつたらう。

大正期に入ると冬山登山、スキー登山も盛んになり、夏だけでなく冬の遭難も起きるようになった。このため飛騨山岳会は、昭和2(1927)年、室堂ヶ原に収容人員100人の小屋を建設した。工事費1300円は、県の補助と飛騨地域各町村の寄付であった。

戦後、飛騨人の記憶に残っているのは、昭和38(1963)年正月の遭難事故だろう。

越年登山者を迎えるため、年末に豊平の山小屋「銀嶺荘」へ向かった同山荘の経営者、アルバイトが桔梗ヶ原で猛吹雪に遭い、1名はかろうじて下山できたものの2名が遺体で見つかり、1名が行方不明になった。死者の中には筆者

の中学の同級生もいた。

改めて、この山で亡くなられた方々のご冥福をお祈りしたい。

〈掲載の新聞〉

「報知新聞」は国立図書館から、「岐阜日日新聞」「読売新聞」「東京朝日新聞」は岐阜県立図書館から入手した。

（参考文献）

『山岳遭難記』春日俊吉 朋文堂

『丹生川村史』

『山岳』日本山岳会

『山岳文化』日本山岳文化学会

七ツ森（七疑峰）より九疑山へ

——漢字文化圏の2つの山を巡って——

柴崎 徹

七ツ森の山々

よく似た山々が、ほどよい間隔で立ち並んでいる風景は、たとえそれらが小さな山々であったとしても、興味をひかれる。しかも、こんな山々は日本各地にたくさん見られるに違いない。そして、山登りの好きな人ならば、何かの機会にいつかは登ろうとするに違いない。

仙台の北、20 kmほどの所に、七ツ森という山がある。この山もそうだ。文字通り7つの峰を連ねた山で、その風景を見ただけで登りたくなる山だ。仙台を県都とする宮城県は、東北地方中部の太平洋岸にあって、西側を奥羽山脈で仕切られ、南北に細長い形だが、真ん中が少しくびれて狭くなっている（図1）。そこでの東西幅は、わずか35 kmしか

ない。このくびれの部分には、西から順に船形山、三峰山、泉ヶ岳、蘭山、あつみやま長倉山と連なり、さらに富谷丘陵、松島丘陵と続いていく分水嶺の高みがある。船形・松島分水嶺と呼ばれるこのラインは、県土を北の仙北地方と南の仙南地方に分けるラインでもある。

七ツ森は、その中の富谷丘陵上に犬牙状の突起を連ねてそびえている（写真1）。周囲に広がる丘陵は、せいぜい150 mの標高しかないので、突き出た山々は遠くからでもよく目立ち、方向や位置を知る大切な指標となっている。

七ツ森は、ひと際高い笹倉山（大森山とも言う）と6つの小峰群とから構成されている。笹倉山と小峰群とは南西対北東の位置関係で、そこには約4 kmの隔りがある。

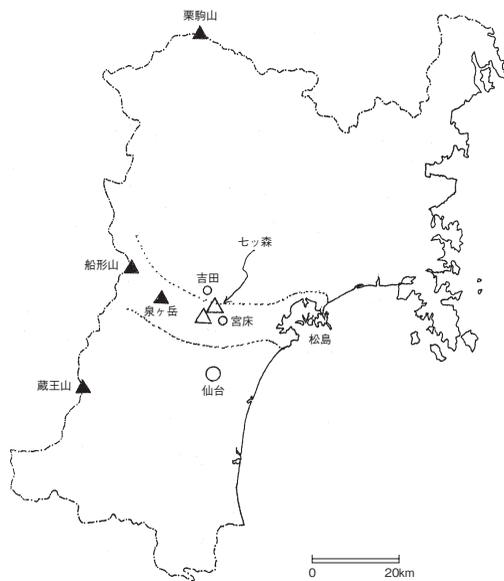


図1 宮城県土と七ツ森

笹倉山は、標高506・1m、小峰群より200mほど高く、別格の高さである。とともに、図の標高200m等高線で示した山彙（山の大きさ）も、小峰群と比べると桁違いの大きさで、小峰群のすべてを合わせてもこの大きさに及ばない。つまり、笹倉山は標高と山彙の大きさ故に、離れた位置にあっても、小峰群と景観上の関わりを持つことができる山なのである。笹倉山はその形にも風格がある



写真1 七ツ森全景(大和町吉岡より)。左から笹倉山、松倉山、撫倉山、大倉山、鎌倉山、遂倉山、鉢倉山は大倉山の背後にある

(写真2)。基本的には円錐形だが、何本かの美しい稜を持つ。その稜の途切れた所に付属峰や岩壁が造られたりしている。

小峰群は南東から北西に向かって、松倉山(290・7m)、撫倉山(359m)、大倉山(326・6m)、鉢倉山(289m)、鎌倉山(313m)、遂倉山(307・3m)の順で並んでいる。小峰群でいちばん高い撫倉山といちばん低い鉢倉山とは、標高差がわずか70mでしかない。高さの違わない似た山が6つ並んでいるのである。その並び方に特色がある。南東から北西の方向、N41度Wの線に沿って帯状範囲に収まって分布し、南東端の松倉山から北西の遂倉山の先、さらに小峰のたがら森を加えて、3・5kmの長さで連なっている(図2)。

七ツ森は第四紀の新しい火山ではなく、ひとつ前の第三紀の火山に由来するものとされている。小峰群の山々がほぼ一列に近い状態で並んでいる姿は、地下のマグマがひとつの割れ目に沿って各所に上昇し、火道を満たしたのち冷えて固まり、その後の浸食作用にも耐えてそれぞれの場所に残されたもの、すなわち火山岩頸の典型的地形だと考えられている。また、七ツ森の立ち並ぶ線は、東北の基盤構造線のひとつ、本荘——仙台構造線とも合致している。こ

の線上には、葉來山や宝森などの古い火山や火山岩頸が認められる。

主峰笹倉山と立ち並ぶ小峰群の位置関係は、周辺から眺める七ツ森の景観に多様な変化をもたらす。真南の仙台から眺めると、左手に笹倉山が大きくそびえ、少し間隔を置いて小峰群がほぼ等間隔に眺められ、撫倉山と大倉山が少し重なるぐらいで、笹倉山と6つの小峰群とが良くバランスのとれた景観が得られている。図3-1は、仙台の青葉城・天守台からの七ツ森である。面白いことに天守台の三角点と七ツ森の東端になる松倉山山頂の二等三角点とは、ほぼ同一の子午線上にある。青葉城の天守台は、広瀬川を隔てて城下の街や仙台平野を広く俯瞰できる位置と高さを持つが、船形山から松島までのラインの地形物を余す所なく眺めることができることでも出色である。その中で圧観なのは北西の輪郭線をなす船形連峰だが、そこから東へと延びた山地の末端に行儀良く立ち並んだ七ツ森も見逃せない風景である。代々の仙台藩主の中には、この風景を眺めるのを楽しみに天守に上った殿様もいたであろう。そして、仙台を馬蹄形に囲む丘陵地から眺める七ツ森は、この青葉城からの姿形を基本にして少しずつずれるだけであり、視点の位置が仙台を離れて北東に移動していくと、小



写真2 笹倉山(宮床より)

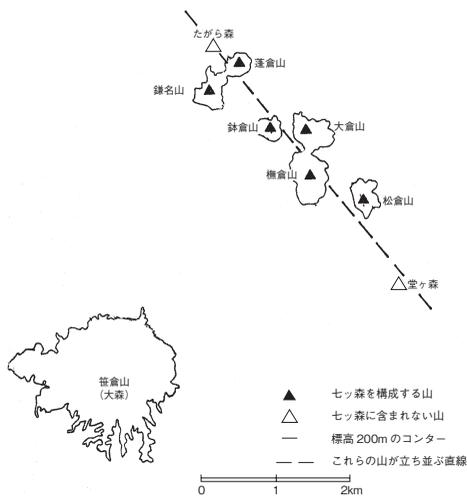


図2 セツ森の笹倉山と小峰群の配置

峰群は重なり^{おあひら}の度合いを大きくしていく。たとえば、松倉山から南東10kmの位置にある大亀山（122m）から眺めると、小峰群の軸と方向がほぼ同じなために、それぞれの山が重なって団子状となり、不可視となる山も出てくる。この視点とは逆に、北東の達居森（262・1m）から七ツ森を南東に眺めたときも同じである。

一方、図3-3は視点を北側に16km離れた大衡村^{おあひら}の、焼切に置いて眺めた姿で、なだらかな王城寺原の丘陵斜面の

上に、小峰群の頭の部分だけが、間隔を広げて立ち並ぶ姿となる。ここでは撫倉山と大倉山とが完全に重なってひとつの山のごとく眺められることと、ひとつだけ離れてあるはずの笹倉山が、手前の小峰群と同列にある山のように眺められ、仙台から眺めた姿とは、異った印象である。

七ツ森やその周囲を歩いているときなどは、なおのこと笹倉山と小峰群とによって折り成す風景の変化に驚かされる。一段高い笹倉山が小峰群の予期せぬ位置に顔を見せるからである。50年ほど前になるが、私にちょっとした発見があった。小峰群の中心に位置するいちばん小さな鉢倉山が背後の主峰笹倉山の中にすっぽりと収まり、しかも2つの山の輪郭線が同心円を描いたように二重の線に縁取られ、そこが明るく輝いて眺められたのであった(写真3)。それはまるで皆既日食のような光景であった。私はこれを「七ツ森金環食」と名付けて報告したことがあった。七ツ森金環食が見られるのは、笹倉山と鉢倉山とを結ぶ方位N33度Eの線上で、両者のタンジェントが一致する地点より少し北の地点に限定される。手前の山と奥の山が重なり合っている、面白い形を見せることはよくある。しかし、七ツ森のように2つの円錐状の山のシルエットがお互い少しも損うことなく、見事に重なって二重の環をつくり出し、それが

明瞭に眺められる例は極めて稀である。

いずれにしても、七ツ森のたたずまいは並のものではない。眺める人に詩情を誘うたたずまいなのである。古歌に、

人ならば 同胞なれや 並び立てる

七ツ森てふ 山の姿は 保田 光則

と歌われている。

私もまた、七ツ森の山々や自然を案内するときには、笹倉山をお母さんの山、小峰群を子供、の山群と呼んで、次のように紹介してきた。

ガキ大将の長男 撫倉

イガグリ頭の次男 大倉

ちよつと太つた三男 鎌倉

痩せてはいるが、元氣者の四男 遂倉

東はし、バッチコ(末っ子)の五男 松倉

これらは皆んな男の子

たつたひとりの女の子

それが真ん中 オカッパ頭の鉢倉山

お母さん(笹倉山) 似の器量よし

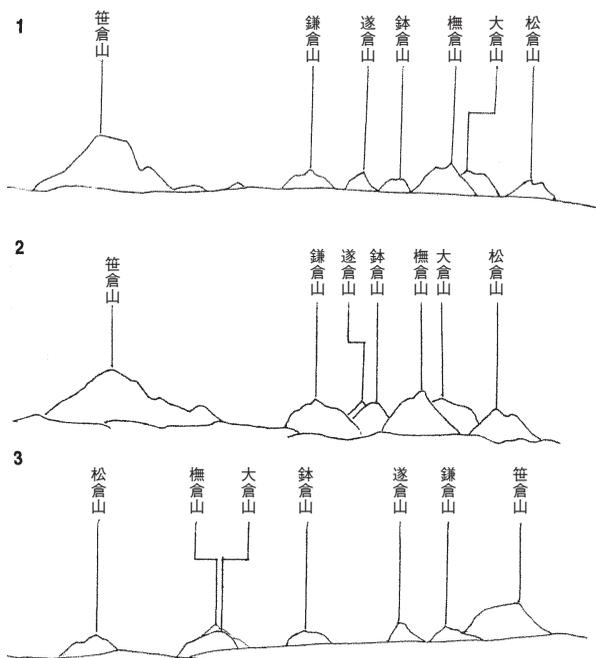


図3 各地からの七ツ森
 1 仙台青葉城よりの七ツ森(南から)
 2 仙台高松山よりの七ツ森(南々東から)
 3 大衡村焼切よりの七ツ森(北から)



写真3 七ツ森金環食(奥の山は笹倉山、手前の山は鉢倉山)

となる。鉢倉山は笹倉山とともに「金環食」をつくり、お母さんに瓜二つであることから唯一の女の子としたのである。いかがなものであろうか。

七ツ森と薬師浄土

火山岩頸の岩山であり、それが犬牙状に立ち並ぶ七ツ森は、当然ながら山岳修験道の道場として栄えた。子供の山群の一番東、松倉山の南東麓にあった信楽寺しんきやうじは、中世以降、近世までその七ツ森山岳信仰の中心的役割を担ってきた大寺院であったが明治元年の火災で焼失、廃寺となり、今は礎石などの遺構から昔のよすがを偲ぶだけになっている。また、信楽寺の南東400mの小丘、堂ヶ森（標高91・5m）には熊野権現神社が建てられていたことが古い記録にあって、この神社の別当寺が信楽寺だったのではないかと考えられている。現在まで伝わってきている七薬師掛けのお山掛けの行事は、おそらく七ツ森に栄えて来た修験道の影響を色濃く受け継いだものに違いないだろう。

七ツ森に数えられる山々には、いづれも山頂に石の薬師如来が祀られている。しかも薬師如来の向きはどの山でも主峰笹倉山（大森）を正確に向いている。笹倉山の山頂には大森薬師堂が建てられており、昔は木造の薬師如来座像

が祀られていたが失われて、現在は石仏になっていると言う。このことは信仰の中心があくまで大森薬師堂にあることを示している。

山頂の石の薬師如来は、どれも皆、同じ人物によって、ほぼ同一の時期に建立されているのだから驚く。建立者は宮床伊達家の家臣であった八巻平太夫景任とその長男である小平太景長のふたり。各石仏にはふたりの名が刻まれている。建立した日はすべて宝暦12（1762）年4月8日となっている。4月8日はお釈迦さまの誕生日・灌仏会の日である、と同時に薬師信仰の縁日（毎月8日）。また、成人儀礼として間もなく15歳を迎える若者が、七薬師掛けを行なうのも4月8日である（写真4）。

主峰笹倉山の大森薬師堂は真東を向いている。それは陽の昇る方向であると同時に、宮床伊達家の城館のあった御殿山を向いている（図4）。御殿山の周囲には宮床の集落が広がる。つまりここには、小峰群のひとつひとつに祀つてある小薬師の力を主峰の笹倉山に集約して大薬師の力とし、その力で宮床の安寧を願うという薬師浄土の世界がつけられているのだと思う。宮床から正面に眺める笹倉山は実に秀麗だ。山が高く気品があり美しいのである。それは、昔から宮床の主であり、守護神でもあったのだろう。



松倉山の薬師如来



大倉山の薬師如来



鉢倉山の薬師如来



たがら森の文殊菩薩

写真4 山頂に祀られた石仏

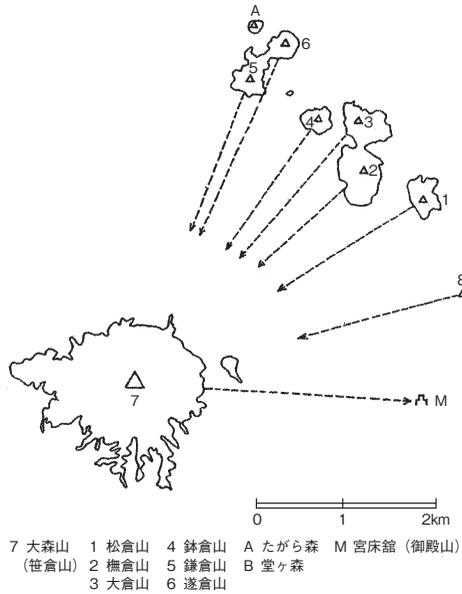


図4 笹倉とほかの薬師を祀る峰との関係

宮床の歌人・原阿佐緒は、大正6年1月「初冬」の中の第一句に、

笹倉の

秀嶺たまゆら 明らみて

時雨来たれば 空に虹見ゆ

と詠んでいる。苦境の日々を過ごしていた歌人にとって、笹倉山だけは別格の存在だったようだ。

ところで、七ツ森には数えられていないが、遂倉山の西にもうひとつ、たがら森という標高238mの小さな山がある。たがら森は尖った円錐形の山で、北の吉田一帯や西の鎌房あたりから結構大きく見える山である。たがら森の山頂には、八巻親子の手によって日付も同じ宝暦12年4月8日と刻まれた文殊菩薩の石仏が祀られている。文殊菩薩は右手に剣、左手に経典をかざした仏で、守護神的役割を持っている。西麓鎌房の玉ヶ池の畔には、かつてたがら森を文殊菩薩と見立てて文殊堂が建ててあった。文殊菩薩は薬師浄土の西方を守る護法神・波夷羅^{はいら}の本地仏であり、七ツ森の西端にあつて、低いながらも七ツ森の薬師浄土を支える役割を負ってきたのだらう。

さらに、たがら森が七ツ森に加えられなかったもうひとつ

つの大切な理由は、七ツ森に加わっている小峰群の山頂からは、どの山でも主峰の笹倉山がしつかりと眺められ、遙拝することができるのに対して、たがら森ではそれができない。南側にある鎌倉山が衝立となって不可視となり、遙拝できないことである。背がわずかに低いため小葉師の列に加わることができなかったのである。しかし、修験道も、その流れを汲む八巻親子も当然ながらこの小さな山を粗末に扱うことはなかった。むしろ、その位置的特徴を活かして文殊菩薩を祀り、このたがら森にしか果たせない役割を負わせたのであった。

薬師如来石仏の建立日がすべて宝暦12年になっているのにも理由がある。宝暦と言えは元年、仙台藩五代藩主の伊達吉村が亡くなっている。吉村は地元宮床伊達の出で、四代藩主綱村の後を継いで藩主になった中興の祖とたたえられた藩主である。また、宝暦6年には吉村の後を継いだ六代藩主宗村も亡くなっている。さらに宝暦年間には、過去帳などからよく知られている通り、仙台藩内でもひどい飢饉のあったときでもある。特に宝暦6、7年は餓死者が多数出た。七ツ森のひとつひとつの山に石仏を安置し、小さな堂宇を築いて、宮床の地に薬師浄土の世界をつくろうとした背景には、このような時代の状況が重なっているの

ではないだろうか。

七疑峰と伊達綱村

七ツ森には、もうひとつ忘れてはならない山名、七疑峰しちぎほうがある。七ツ森を七疑峰とあえて名付けたのは、仙台の四代藩主・伊達綱村である。

綱村は幼名を亀千代と言った。亀千代は万治2（1665）年、政宗、忠宗に続く三代の藩主綱宗と三沢初子の長男として江戸に生まれた。父が自分の不行状を咎められて隠居を余儀なくされた後を受けて、まだ2歳にも届かないのに四代の藩主になった。藩のお家騒動・寛文事件（1669）にも遭遇したが、幼い藩主への咎めはなく所領も安堵された。延宝元（1673）年、幕府の後見人であった稲葉家の姫と婚約、延宝3（1675）年、初めて仙台に入った。綱村はまだ15歳であった。

若い綱村は將軍家綱に倣って、儒教を範とする藩政を押し進めようとした。江戸より多くの儒学者を仙台に招聘し、その祠堂さえ造り、儒学の振興に努めた。仙台藩の歴史書、地理書の編纂に総力を挙げて取り組んだのもこのころであった。

七疑峰のことは、仙台藩の最初の地理書とも言うべき『奥

『聞老志』の中に出てくる。『聞老志』は、綱村の命により佐久間洞巖が著わした。途中で火災に遇い資料を消失、さらに9年の歳月を要して享保4（1719）年7月、ようやく刊行の運びとなったが、綱村はすでにこの年の6月に61歳で没して、この本の供覧はできなかつた。『聞老志』は全20巻からなるもので、巻の四から一〇までが名跡類で仙台藩の各郡別に名所旧跡がまとめられ、巻の一から一三までが伊達郡から羽州雄勝郡までの奥州一円に及ぶ名跡類がまとめられている。

佐久間洞巖は仙台藩のお抱え絵師で、狩野派に学び、中国の故事に因む格調高い絵をさかんに描き、綱村にも気に入られた絵師のひとりでもあったが、後半生は学者としても活躍し注目された。『聞老志』はその洞巖の生涯の労作であり、その後の地理書の編纂の基本になるとともに、各名跡に記された記事内容が参考資料として、今もなお様々な形で取り上げられることが多い。

七疑峰のことは、まず巻の六、宮城郡の上に記された「仙臺城」の項の中で、

「東奥高嶽、一國に甲たり、西北の圍む所は、すなわち和泉峻嶺なり、西南の蟠な所は、不忘大華なり。」

七疑峰その北に連なる。太白嶺その南に聳える。東北に榴岡が横たわり、東南に茂山が臥す。」

とある。仙台城を囲む各方向の主要な山や丘を述べたもので、そこに北の山として七疑峰を、南の山として太白山を代表させている。地元の呼び名でルビを付しているが、七疑峰も太白山も中国の山を借りている。

次に巻の八、黒川郡の項に「七疑峰」があり、7つの山を列記したのち、

「三山は宮床村に在り、四山は吉田村に在る。その山犬牙相列し、人は何山を指し示すのか疑う。故に郷人は七疑峰と称している。あるとき、先君（四代藩主綱村のこと）がこの事に及んで言うには、かつて中華に九疑の称あり、この七ツ森もまた七疑峰と称すべし、と云々。」

綱村は、七ツ森を七疑峰にせよと言うのである。綱村は仙台に来たときから天守台に登つてこの山をずっと眺めてきた。なんとも癒される風景である。それは母親と子供たちのようでもあるし、藩主である自分と領民のようでも



写真5 仙台・青葉城天守台より眺めた現代の仙台市街と七ツ森

あった(写真5)。綱村は傍にいた者に、あの山はそれぞれなんという名前のか尋ねた。しかし、誰も分かる者がいない。里の人たちもただ七ツ森と呼んでいるだけです、と言う。綱村はふと、自分がかつて学んだ九疑山の逸話を想い出した。「九疑山のある山で舜帝が亡くなったとき、ひとりの若者がそのことを知らせに村に走った。賢い若者はその前に舜帝の横たわる山に目印を付けておくことを忘れなかった。若者はやがてたくさんの村人を連れて戻ったが、同じような山が9つ並んでいて印を付けた山が見当たらないで迷った。それ以来、この山を九疑山と呼ぶのだ。」というものである。

つまり、『聞老志』からは七ツ森とは分かりやすい名だが味気がない。折角だからあの九疑山に倣って七疑山としようではないか、となったと想像できる。九疑山は、舜帝の葬られた聖なる場所である。舜帝は中国古代の伝説上の人物だが、中国の土台を創り上げた賢人とみなされて人々の尊敬を集めてきた、中国きっての模範的為政者であった。藩主である綱村は、いつも眺めてきた七ツ森にも聖なる山としての儒教的山名を付したかったと思われるのである。そして以後、七ツ森の表示には、代わって七疑峰が用いられるようになるのである。例えば、寛保元(1741)年

に刊行された佐藤信要の『封内名跡志』では、綱村を示す「先君」のところが「青山君」という綱村の法名になっている。ぐらいの相違で、七疑峰のことが述べられている。

明治が変わっても、七疑峰は用いられ続けた。明治15(1882)年、宮城県師範学校が発刊した最初の地理書『宮城縣地誌提要』は、まだ和綴の本だが、ここでも黒川郡の中に一項を設けて「七疑峰」とし、『聞老志』に似た文章を載せている。面白いのは付図で、七疑峰の主峰笹倉山を四重丸で小峰群を丸印で示しているが、小峰群で一番高い撫倉山には三重丸を与えて、細かい配慮がなされている。明治39(1906)年発行の高頭式の『日本山嶽志』は、先の『地誌提要』をそのまま引用して、七疑峰(別稱七峰、シチギホウ七森)と記す。一方、地図では、明治21(1888)年の20万分の1地形図「仙臺」を見ると、宮床と吉田の間に七疑峰の3文字が出ている。さらに戦前の陸地測量部による5万分の1地形図「吉岡」には、主峰の笹倉山のすぐ上に、七疑峰笹倉山(大森)と記され、小峰群のすぐ上の位置に、七疑峰(七ツ森)と記されている。このように、江戸時代から明治、大正、昭和と公の地誌や地形図では、七ツ森を七疑峰あるいは七疑峰と表記しシチギホウと呼び、七峰や七森に優先させる山名として用いられてきた。疑と疑は

音は同じでも、意味が相当に異なる。疑はうたがうことだが、疑は高いことを意味する。疑に代って巍の字が用いられていることも稀にある。こちらも山が高いことを意味している。いずれにしても、綱村によって提唱された七疑峰の山名は、300年経ったごく最近まで生き続けてきたのは確かである。特に公の刊行物の中では、文字の画数の多さからくる存在感によって私などは強い印象を受けてきたのである。

馬王堆漢墓帛画地形図の九疑山

中国・南嶺山脈の九疑山がいかなる山か興味を持ち始めていたころ、私の九疑山に対するその興味を一層かき立てる1枚の地図に出会うことになる。仕事の合間に何気なく開いた『湖南省博物館』という大冊の図録の中に、1973年、長沙の馬王堆漢墓三号墓から出土した帛画、『長沙国南部地形図』の中に、九疑山とおぼしき山々が象徴的にも思える姿で描かれているのを見つけたのである(図5)。帛画の大きさは、一辺の長さが96cmのほぼ真四角で、4つに畳んで棺の上に乗せてあったというから、埋葬者はこの地形図にある地方を治めた人物であったと考えられている。この地形図は私たちが普通用いている地形図とは逆

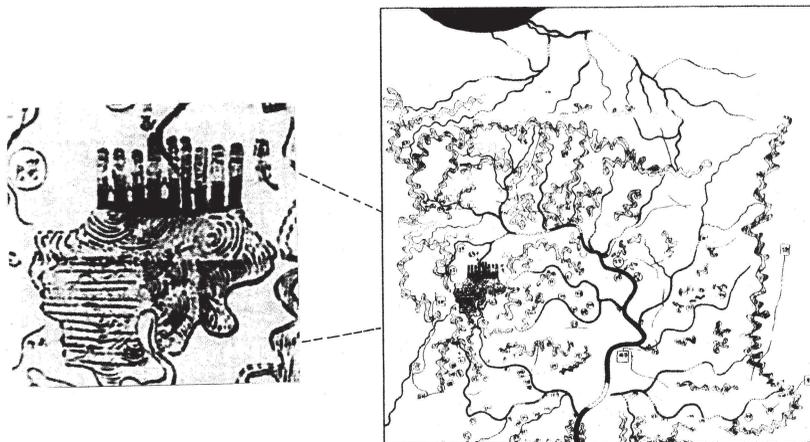


図5 1973年馬王堆3号漢墓出土帛画「地形図」復元図（『湖南省博物館』講談社、1981、中国の博物館2／講談社、文物出版社編）より
右：地形図 左：九疑山部分の拡大図

に、上が南、下が北になって描いてある。これは、この地形図が描かれたのが今から約2000年以前の前漢代で、当時の都が長安だったために、その長安を中心にして地形図が描かれているためである。地形図は、現在の湖南省南部一帯から広東省、そして広西チワン族自治区に跨がり、縮尺は中央部が15万分の1、周辺が20万分の1ぐらいに縮めて描いてある。地形図の内容は、主に山脈と河川で、それらが驚くほど正確に描かれている。おそらく何枚もの地域図を作り、1枚の大図に集約したものではないかと思われる。この中には四角で示した城邑、丸印で示した居住地、それに道路などが加えられている。上部の黒い部分は南海で、南海に注いでいるのは東江・北江・西江（珠江）である。その下に見られる東西に延びた山脈は南嶺、その左の部分が萌渚嶺で、図面の右側に南嶺とは直角に描かれている長い山脈は都龐嶺である。そして、これらの山嶺を源頭として図面の下の方に太さを増して流れる大河水は瀟水で、図面よりも少し南の位置で湘江に合流する。

注目されるのは、この図面の中央より少し左下の方向にずれた位置に描かれている塊となった山岳である（図6の左）。この上端には9本の棒状の山が並んでそびえている。よく見ると、この塊の左側にも同じような棒状の山が7本

そびえている。つまりこの図は、北から南を眺めると9つの山々が、西から東を眺めると7つの山々が並んで眺められることを示したもので、描かれている山々は疑いもなく九疑山である。

さらに注意して見ると、棒状の山々には部位によって色分けがしてあったようだ。復元された図でも頭部や脚部は濃く彩色され、その下の部分は縦縞の模様で、常緑広葉樹と岩壁を表現しているようだ。また、9つの並立した山々のうち、中央の3つの山だけが少し高く描かれていることも見逃せない。両側に並ぶ6つの山々と違って特別の意味が込められていると思われるからだ。一方、片方の7つの山にも高く描かれた3つの山があった。上(南)から2、3、4番目の3つの山で、残りの4つの山は一段低く描かれていた。ただし、ここにはそれぞれ部位の色分けは省略されていた。ともかくもここには、九疑山が北側から見ても西側から見ても、立ち並ぶ背の高い山々で埋め尽くされている状況が象徴的に描かれている。このような山は、おそらく石灰岩の「峰林」であろう。湖南省の地図を参照すると、予想通り石灰岩地帯に区分されている。峰林ならば、高さも形もよく似た柱状の山々ばかりが多数並んで、どの山がどの山か判別が難しくなり、迷うことになるのは

必定である。

この帛画地形図を飽かず眺めていて、九疑山が特別の存在であること、どうやら峰林であることを私なりに読み取って、近いうち、その九疑山を自分の眼で確かめてみたいと思った。

九疑山へ

私の九疑山行は、何人かの国内外の友人の手を煩わせて2001年3月、実現することになった。湖南省永州市政府が受け入れてくれると言う。永州市は昔の冷陵に当たり、九疑山のある寧遠はこの市の最南部にある(図6)。

私は単身、北京から永州市の皆さんが待つ長沙に飛んだ。湖南省の省都である。翌日は早速、目的のひとつ湖南省博物館を訪れた。勿論、馬王堆漢墓からの出土品を眺めるためである。

その出土品は、館の後方に新しく建て増した箱型の展示館に納っていた。展示は、発掘の様子を示したパネルのあと出土品、帛画、棺、埋葬者の順で、棺は地下1階、埋葬者(丞相夫人とされる)は地下2階に下され、上から覗けるようになっていた。副葬品は土製であったり木製であったり、絹や紙などであったが、そこに描かれている紋

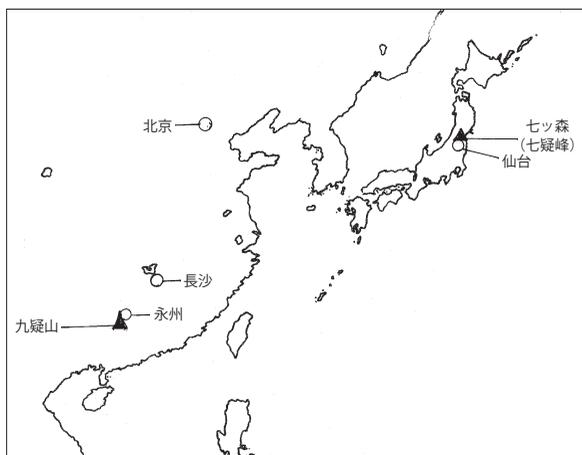


図6 七ツ森(七疑峰)と九疑山の位置

様は極めて精緻を尽くした独特のものになっていく。漆もふんだんに使われていて、保存状態がすこぶる良好なものが多い。

私の目的とする帛画の「長沙南部地形図」は、1階の内覧室の奥の部屋に展示されていた。あまり大きなものでは

なく、一辺1m弱の四角い布に描かれた地図だが、そこにはあの九疑山が中央より少し左下に堂々と目立つ姿で描かれていた。感無量であった。馬王堆漢墓の出土品はどれも興味深かったが、この地形図だけは特別の意味がある。数日後には、私自身が九疑山の現場に立ち、地形図との比較をすることができるのだ。

一方、馬王堆漢墓一号墓彩色帛画、すなわち崑崙昇仙図の描かれた帛画は、奥の正面にあったが、これは複製品であった。しかし、彩色が鮮やかなのでいっそうはつきり地下界、地上界、天上界を構成している人物や乗り物となったりしている動物が際立っていて分かりやすい。これが棺の上を覆っていたのである。その棺は地下1階に並べて展示してあるが、大、中、小とあるのは棺が三重の作りになっていたことを示し、それぞれの棺には長沙国の特徴ある裝飾文様が付されている。それらが重ねられて、さらに大きな外棺に納められていた。その外棺は、展示館のさらに南側の建物の中にあつた。周りに副葬品を入れる副棺を備えた巨大なもので樟材を用いて作られ、その大きさは縦7m、横5mぐらいだろうか、小さな家ぐらいいはある堂々たる構造物である。

その後、私たちは馬王堆漢墓の発掘現場に行ってみるこ

とにした。長沙の東郊外の五里牌村にあるが、行き着くまでに少々迷った。馬王堆漢墓は、100m四方の大きい規模で、約20mほどの土を山型に積んで作った堅穴式墳墓である。おそらく小丘の上から穴を掘り、あの巨大な木棺を埋めて、その上に厚く土を盛って固めたのであろう。ここには間隔を置いて一号から三号までの墓がある。いちばん西側の二号墓が長沙国丞相、利蒼の墓、東に並ぶ2つの墓のうち、北側にある一号墓が丞相の妻の墓、そして、その南にある三号墓が2人の息子の墓で、年齢は約30歳。前漢時代の紀元前168年に埋葬されたことが分かっている。地形図の帛画はこの息子の棺に駐軍図とともに折り畳んで載せてあった。これらの地形図や駐軍図は、息子たる青年の愛用品だったのだろう。

古代中国では、天帝の住む天上界に達する唯一の通路が崑崙山こんろんの頂に登ることと信じられていた。崑崙山は三層になった山で、その一段一段を完璧な方策を講じて昇り詰めなければならぬ。その方策を示していたのが三重の棺や、その外側の外棺に描かれた彩画であり、棺の上に被せられた帛画であったのである。

二号墓と一号墓は発掘後埋戻されたが、三号墓だけが掘り出した状態で保存されている。それを見ると、非常に

深い位置に棺が置かれていたことがよく分かる。墳墓の上には樟木が密生し、下草の羊歯植物の春の芽生えがさわやかであった。

長沙を出て、永州まで500kmほど走った。途中、衡陽から折れて衡山に立ち寄ってくれた。衡山は五岳のうちの南岳で道教の山である。永州の皆さんは、私が山好きなのを承知している。

永州では、涪溪碑林や唐代の詩人で永州に左遷された柳宗元の廟、冷陵師範学校、豊富な竹を素材としてプラスチックに代わる製品を開発している工場などを案内してくれた。永州から午前陽明山地を越して、双牌・道県を通り、寧遠に入ったのは5日目のことであった。ここから九疑山は20kmの距離である。が、夕暗が迫って見えない。

翌日は幸い良く晴れた。この日は九疑山一帯に暮してきた瑶族の皆さんが歓迎の踊りを披露してくれると言う。そして午後には、主峰の舜源峰に登ることになっている。

九疑山は、永州市寧遠県の南嶺山脈の一角にある。南嶺は長江の支流湘江と南の珠江を分ける一大山地で、このあたりは五嶺と言われる海洋山、都龐嶺、萌渚嶺、九疑山、瑤山などの小山脈や山塊により構成されている。九疑山は、これらの五嶺のほぼ中央部に位置しており、九疑山の



写真6 九疑山の主峰・舜源峰

最奥の分水嶺付近には、畚箕窩（1958m）や三分石（1928m）、そして、香炉石（1781m）などの高い山がそびえている。『湖南省地図集』の寧遠県のページには、九疑山として三角点（中国の山を表す三角印は正三角形でなく、尖った三角形である）を付し、標高638mと記している。この九疑山は、北側前面に張り出した本来の九疑山地域の主峰とされる舜源峰のことである（写真6、図7）。

私たちの車が山に近づくにつれて、文字通り柱状の山々が密集した「峰林」の九疑山が眼前に広がってきた。大小の無数とも言える山々が重なったり、視界に飛び出してきたりして風景が目まぐるしく変化していく。峰林の予想は当たったが、そこに示された山々の姿は、高く限りなく広く、私の予想を遙かに超えた見事なものであった。

山々の中央とおぼしき場所には舜帝廟が祀られてあった。長い参道の両脇に動物が並べられ、奥に一連の建物が並んで立っていた。そして、その奥には大きな高い山、舜源峰が仰がんなばかりの高さでそびえ、その脚下に、帝舜有虞氏之陵と刻まれた墓碑が置かれていた。

虞舜は、貧しい家庭の出ながら品行方正でよく働き、堯帝に認められて永く帝を補佐したが、のちに堯の後を継いで皇帝になり、度量均衡・曆・管弦楽法ほか、古代中国の

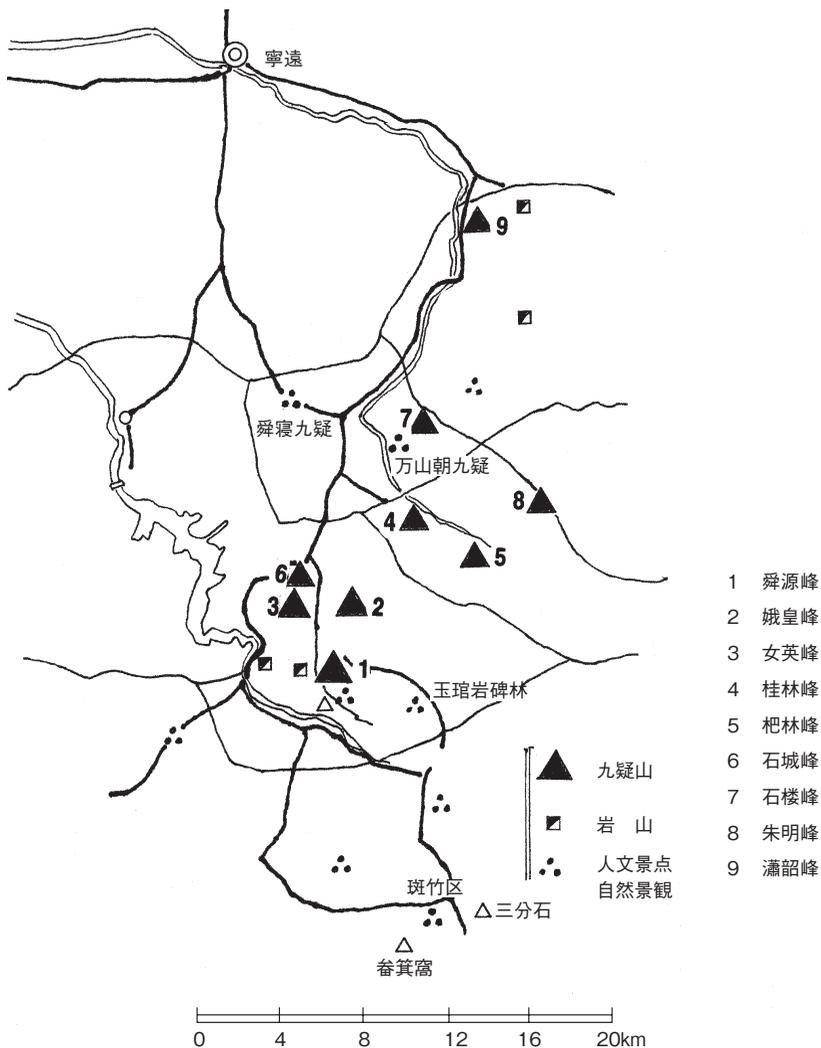


図7 九疑山景区主要景点图(『九疑山』寧遠県人民政府編印(2000年)の景点图を筆者が簡略化したもの)

礎を築いた中国きつての聖人として知られている。その事績は「四書五経」など多くの古書に出ているが、『史記』の「五帝本紀」には、舜帝の最期の状況を次のように記している。

「帝位を踐むこと三十九年、南に巡狩し、蒼梧の野に崩す。江南の九疑に葬る。是を零陵と為す。」

蒼梧の野とは、現在の広西壮族自治区の東端にある梧州のこと、かつては蒼梧と言った。『史記』の書かれた前漢時代、桂洲（現在の桂林）あたりも長沙国零陵（現在の永州）の勢力下にあったが、さらにそれがたびたび、その先の梧州まで及んだ。前漢時代の馬王堆漢墓の帛画「地形図」には、南嶺を越して南海に達するまでの範囲が描かれているが、これらのことを証明する資料と言えよう。舜帝の場合も、南に巡狩しとあるのは、南嶺を越して南海側の平原である蒼梧に出たことを意味しているように思われる。梧州と九疑山とは直線でも約200kmの距離がある。舜帝が崩じたとき、都まで運ぶことは不可能としても、少なくとも華南の地、すなわち南嶺を北に越した、自分たちの国である地には運ぼうとしたはずで、そのときの衆目の

合点のいく場所が九疑山であったのである。

廟の中庭に戻ると、美しく着飾った瑤族の娘さんたちが待ち構えていて、独特の振り付けの踊りを披露して私たち一行を歓迎してくれた。その後、車で半周して舜源峰の背後にある玉瑄岩碑林と呼ばれている磨崖刻字を見に行った。ここには大書された「九疑山」の文字が彫ってあった。疑の字には山冠を欠いている。その説明があった。「九疑山の山々は、どれもこれも皆よく似ていて、どれがどれだか疑ってしまう。だから九疑というのだ」と。これと同じ意味合いの説明は、「四書五経」をはじめ『史記』など、九疑山の記載のある書物にはほとんど出ている。仙台の四代藩主綱村は、儒学をよく学び身に付けてきた藩主であったから、九疑山の文字のいわれはよく承知していたであろう。そのことが毎日眺めている七ツ森に転化して、七疑峰という中国名に因む山が生まれることになったのであろう。

私たちはその後、舜源峰の登山口に立った。舜源峰だけは山が太って大きく、岩場を避けながら九十九折の山道をとどって山頂に登れる。山は全体が常緑樹で覆われていて険しい山に登っているという感じは全くなく、約1時間半で少し広い山頂に着いた。樹木が矮生化していて低く、そこからの眺めはすばらしかった。たくさんの岩峰がそちこ

ちに林立しているが、確かにどの峰もこちらにかしずいて
いるように見える。七ツ森が、母なる主峰笹倉山に向かっ
て小峰群の子供たちが並んでいる風景と似ている。しか
し、どれも細く尖った山容で岩壁で囲まれているため、お
いそれとは登れそうになかった。すぐ北に舜帝の2人の妃
である娥皇峰と女英峰が並んでそびえている。どちらも細
く形の良いすっきりとした山である。

娥皇と女英は姉妹で、共に堯帝の娘である。舜の器量
を見込んだ堯は、舜にこの2人を嫁がせた。舜が亡くなった
のを知ったのは、瀟水と湘江の水の混じる洞庭湖のほとり
であった。遠くに9つの山が並んで見えるが、どれが舜帝
を葬った山だか分からない。悲しいことだと泣き続けた。
その涙が九疑山の竹林に降り注いで斑竹という斑点のある
竹が生えてきた、と伝えている。斑竹の筆は九疑山の産物
となっている。『詩経』の「湘君」や「湘夫人」の詩は舜帝
の夫人であった娥皇や女英を謳ったもので、切なさに溢れ
た詩だ。この詩は、のちに唐の詩人、李白の『遠別離』に
も影響を与える。

舜源峰、娥皇峰、女英峰の奥には、ほぼ北に向かつて九
疑の山々が続いている。帛画「地形図」の九疑山はこれら
を北の方向から透視して並べて描いたものであろう。中央

の高い3つの峰は、左の太った柱の峰が舜源峰、その右に
並ぶ細い柱の峰が舜帝の2人の妃、娥皇峰と女英峰になる。
両側に並ぶ低い峰は桂林峰、杞林峰以下、石城峰、石楼峰、
そして朱明峰と溝韶峰であらう。一方、側に透視して並べ
たと思える7峰は、上から2、3、4番目の峰が一段高く、
2番目の峰が太く描かれているので、これが舜源峰、3と
4がそれぞれ娥皇峰と女英峰なのであろう。ところで、舜
源峰の南の1番目の低い山はどの山であるのだろうか。そ
れは「主要景点図」に載っている半邊峰であるように思う。
さらに高い山の下に描かれている3つの山は、おそらく桂
林峰、杞林峰、そして石城峰で、もつと離れた石楼峰と朱
明峰と蕭韶峰とは、この西から眺められる7峰には加えら
れなかったと思われる。

このように、帛画「地形図」を実際の地形と比較して眺
めてみると、「地形図」に描かれた山岳や河川はじめ、城邑、
居住地、道路などが2000年以上前に描かれたとは思え
ぬ高い精度で示されていることと同時に、この図の中心に
なっている九疑山についても、これ以上ない正確さで示さ
れていることが分かる。そして、九疑山はすでにこの時代、
舜帝を祀る聖地としてあがめられ、この地域の最も大事な
指標山になっていたことが分かる。



写真7 舜寝九疑



写真8 万山朝九疑



写真9 九疑山南嶺上にある三分石 1828 mの岩峰（中国郵政の絵ハガキ、2000年、寧遠県発行の1枚より）

舜源峰を下って寧遠に戻る前に、九疑山の展望地2ヶ所を案内してくれた。「舜寝九疑」と「万山朝九疑」（写真7、8）である。両方とも10 km前後離れた丘だが、そこからの眺めは一段とすばらしかった。数え切れないほどの突起した岩峰が密集してそびえ立つ、圧倒的な峰林の景観であった。「万山朝九疑」はすべての山々が舜源峰に向かってお辞儀をしているように眺められる所、「舜寝九疑」は九疑山の山全体が舜帝の寝姿となって眺められる所である。たくさんの峰々を連ねた九疑山のような山は、眺める位置を少しずらただけで背後の山が見えたり見えなくなったりして、山の姿がどんどん変化し、趣きの違った山になる。仙台の七ツ森（七疑峰）にも笹倉山と鉢倉山との間にできる七ツ森金環食のように、そのような場面がある。

このように、九疑山と呼ぶのは、舜源峰や娥皇峰、女英峰を中心とした一群の山々であるが、そのひとつ奥まった南嶺の脊梁部には、この地域の主峰と目される非常に高い山がある。それが畚箕窩で1959 mある。また、その山の近くに三分石（または三峰石）と呼ばれる1828 mの岩峰がある。不勉強にも私は、事前に三分石の在ることを知らなかった。知っていれば今度の計画に加えて、少々遠くとも行って眺めたと思う。三分石は寄贈された冊子の中

にも写真が出ていた。雲の中に顔を出した写真である。帰国後、資料を整理していたら、寧遠で求めた絵葉書の中に三分石の全容を捉えた1枚があるのを見付けた（写真9）。三分石は、3本の柱状の岩峰が組み合わさったもので、左の1本は太く、中は細く尖り、右は中に寄り添う形に見えるが、どれも岩峰の高さは基部から500m以上はあると思われる、見事な岩峰である。

翌日は月岩を訪ねた。陥没によって大きな空洞のできた石灰岩の岩山である。その午後は桂林まで車を走らせた。桂林は南嶺を挟んで九疑山から200kmの所にある。桂林もまた、カルスト地形の峰林が随所に眺められる場所としてよく知られている。しかし、同じ石灰岩のカルスト地形と言っても、九疑山と桂林ではかなり異なる。まず、九疑山は南嶺の北側にあるが、桂林は南側にある。降水量は南側が多く、北側はそれに比べると少ない。次に、九疑山は瀟水の源頭付近、標高が高い位置にあり、水系は細く浸食力はそれほど大きくない。一方、桂林は漓江の中流域の標高の高い位置にあって、ずっと多量の水流による浸食を受ける。この浸食力の違いは、山の姿に反映されている。九疑山は石灰岩の厚い台地の上に形成されている峰林の山で、その峰林がこれからさらに発達していくと考えられる

山、そして、桂林は山地や丘陵と沖積地との間に、強い浸食を受けて形成されながらも、その形をとどめている、いわば浸食の進んだ段階の峰林として捉えられる。永州市と桂林市は、九疑山と桂林によって姉妹都市となっている。西の桂林、東の九疑山^①と言うところだろうが、どちらもすばらしい景観地である。

私はこの2日後、永州の皆さんに見送られ桂林空港から北京に戻り、次の日、仙台に帰った。

七ツ森七薬師掛け九山登山

九疑山行は、わずか10日の短い旅行で、日程の詰まった毎日を過ごすことになったが、ついに九疑山に出会い、舜源峰にも登れたという喜びは格別であった。私は報告を兼ねて近々、七ツ森を訪ねようと思った。おそらく七ツ森の「七疑峰」から、その出自とも言うべき九疑山に出掛けた最初の人間であろうから……。

私は、小中学生のころに山野を歩き回る楽しさを覚え、高校時代に山岳部に入って本格的な登山を教わったが、そのころは眺めているばかりで七ツ森には登っていない。七ツ森は大して大きくない山であり、近くを通っていた軽便鉄道がなくなっただけからは、仙台からは結構遠く、不便な山

であった。

私が七ツ森に大きく関わりを持ったのは、県立自然公園に指定されていた七ツ森に、学術調査の一員として調査に入った30代のときで、このときは七ツ森の山々を四季を通してくまなく歩くことになった。そして、これを機に七ツ森に人を案内することが多くなった。また、全部の山に登りたいという人々も多くなった。40代になったころ、毎曜日曜日、4回かけて1ヶ月で全山に登る七ツ森を八ツ楽しく登る会を結成して、三十数名の方々と共に歩いた。七ツ森より1つ多いのは、文殊菩薩を頂くながら森をそこに加えたためである。この一連の登山は、並び立つひとつひとつの七ツ森の山々をしつかりと味わって登った、楽しい登山であった。

日本山岳会の東北地区ブロック集会（1994）年の記念山行がこの七ツ森で行なわれたときも、主峰コース、三山掛けコース、遊歩道コースに分かれて、それぞれの自然と登山を楽しみ親睦を深めたが、その後、このとき登れなかったほかの山に案内してほしいという参加者からの申し込みが続いて、宮城支部ではその対応に追われたこともあった。

一方で面白い登山に、どの山にも登らないで歩く「縫っ

て歩こう七ツ森」と名付けた登山もあった。これは入り組んだ山々の間の道を上手に繋いで入り口や出口まで歩き通すもので、自然観察や高齢者に適した七ツ森ならではの登山になる。また、これと同じように山頂に登らないものに「笹倉一周」がある。主峰の笹倉山は山彙が大きい分山裾も広く、一周すると相当の距離になる。歩くにつれて主峰笹倉山の姿が変化し、周辺の風景も変わって飽きない。これも歩く登山のひとつなのである。

このように、たくさんの山が並ぶ七ツ森では、様々な発想での、様々な形態の登山が可能で、それぞれの体力や年齢に応じた自分なりの山登りが楽しめるのである。

しかし、なんとと言っても七ツ森の究極の登山は、昔から行なわれてきた旧4月8日の成人儀礼に当たる、1日のうちに全山を登り切る「七ツ森七薬師掛け」であろう。

九疑山から帰った私は、数ヶ月後には還暦を迎える。積尊の誕生日旧4月8日に近い日である。還暦は新たな人生が再び始まる記念の年でもある。私は折角だから、九疑山の報告を兼ねて還暦記念に「七薬師掛け」を試みることにした。そして、それにたがら森と堂ヶ森の2つの山を加えて九山に登ることにした。たがら森は小峰群の中でいちばん背が低く、そこからは鎌倉山が邪魔をして主峰の笹倉山

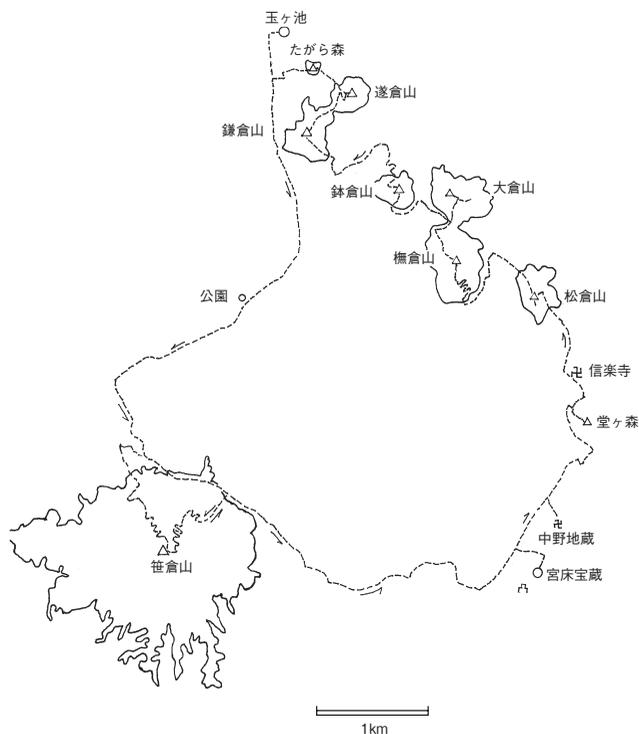
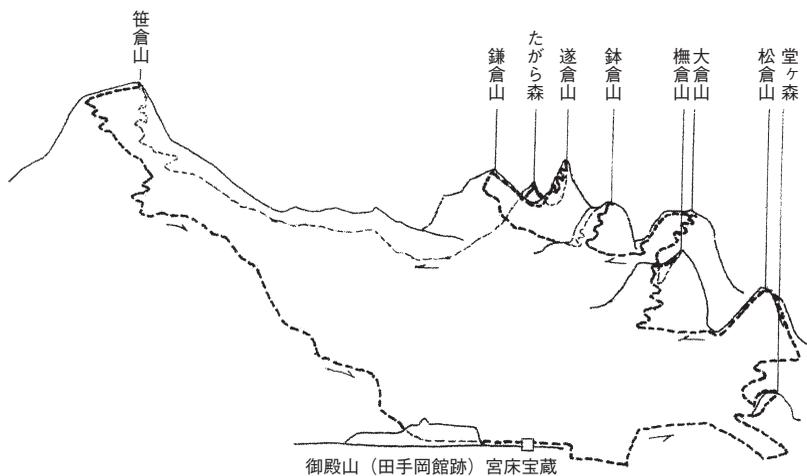


図8 「七ツ森七薬師掛け九山登山」の順路。平面図（下）と立面図（上）

が眺められないために、七ツ森から除かれてきた。しかし、山頂に祀られている文殊菩薩は、ほかの山の薬師如来と同じ日付で八巻親子が安置したもので、この山が大切な山であったことは疑いない。一方、堂ヶ森にはその10年後に当たる明和9年の日付が刻された薬師如来の石仏が祀ってある。多分そのことは、この堂ヶ森からも主峰笹倉山が仰がれることに気付いたからである。堂ヶ森は低く小さな山だが、特に真北に位置していて宮床にとって大事な山であった。こうして、私の七ツ森の登山は、「七ツ森七薬師掛け九山登山」となるのである。

8つの小峰群を順に巡り、最後に4km離れた主峰笹倉山に詣でて、大きく一周するこの「七ツ森七薬師掛け九山登山」は、登る高さの総和は1567・5m、同じく降りる高さの総和は1567・5m、地図上で測定した平面距離21・1km、実際に歩く距離はほぼ30kmになると思われる。どの数字も1日の行動としては相当に厳しい数字になっている。還暦を迎える私には、なおのこと数字以上に厳しい山になるに違いない。しかし、それだからこそ、七疑峰とも呼ばれてきた七ツ森の山々に、九疑山を訪れたことの報告をするのにふさわしい山登りにもなる。

私の還暦儀礼とも言える「七ツ森七薬師掛け九山登山」

は旧暦の4月8日に当たる2001年4月30日に行なわれた。ここには事前にこのことを知った日本山岳会宮城支部の4名のベテラン会員（うち2人は女性）と現地吉田から山好きの若者1人が参加してくれた。平均年齢51歳のパーティであった。

私たちは宮床の宝蔵に集合し、まだ暗い午前4時15分そこを出発し、小峰群の8山登山に向かった。「曇りのち雨」の予報が出ていたが、堂ヶ森に詣でて信楽寺を通り、松倉山に登るころにはすっかり晴れて、新緑のまぶしい気持ちの良い朝を迎えた（写真10-1）。

松倉山の一等三角点の東峰に立ったのち、西峰上の薬師如来の前にかがんで、九疑山行の一応の報告をし、次に反転して笹倉山を押し、本日夕方そちらに何うことを告げた。ここからなら優に笹倉山の薬師如来堂に届くはずである。松倉の北西尾根を木にすがって三叉路に降り、そこから次の撫倉山の山脚を横断して登山道に入り、急坂を一気に登って萱ノ森との鞍部に上がり、北に進んで小峰群、つまり子供の山群の餓鬼大将である撫倉山の山頂に出た（写真10-1、10-2）。その山頂はゴツゴツした岩山で、灌木木の樹々で覆われ、とても359mしかない山とは思えない。薬師如来は笹倉山がよく見える位置に置かれている。しか



写真10-1 宮床からの撫倉山(左)と松倉山(右)



写真10-2 笹倉山の銚子の口から見た小峰群(左より鉢倉山、大倉山、撫倉山、松倉山)

し、日射と強い風によって一段と風化が進んでいるように見える。そこから北西に少し入った道の脇に縣標がある。この縣標は、明治政府が国の三角点を整備し始める明治中期以前に宮城県が地図を作るために設置したもので、県土の極めて重要な位置の山に立てられている。どれも井内石（石巻市井内産）で県名と番号が記してある。七ツ森には、この撫倉山のほかに大倉山と鎌倉山の山頂にある。それらは七ツ森が県土の測量にいかん大事な位置にあったかを示す文化財でもあろう。そこから北西尾根の岩稜が始まる。小峰群の中でいちばん面白い箇所、梯子が懸かり鎖場がある。私たちの伝う尾根の先には、これからたどる鉢倉山や鎌倉山、遂倉山が立ち並んで、その先の遠くの位置には達居森（262・1m）が立っている。撫倉山を下ると三叉路に出る。このあたりは春にお花畑となり、ヤマブキノウやミヤマダケブキの黄色の花が咲く。

ここからは北側の大倉山を直登る。ブナイヌブナの多い国有林で、美しい林である。大倉山の山頂部は東西に長い。北の吉田付近から眺めると、名前の通り実に大きく見える。その山頂の一角に薬師如来が建つ。ここからは撫倉山と鉢倉山との空間を通して薬師堂の建つ笹倉山が見える。大倉山から西側にまっすぐ下ると、杉の並んだ植林地

の平に出る。私たちはここを杉平と呼んで、小休止する場所に決めている。ここは、小峰群の登山のちょうど半分にあたる場所である。

鉢倉山は南斜面を登って山頂に出て、北斜面を下って湯名沢に出る。この山はほぼまんまるで小峰群の中でもいちばん低い山だが、これが北々西の一定の場所から眺めると、主峰のお母さんの山、笹倉山と見事に重なって「七ツ森金環食」をつくるのだから楽しい。鉢倉山の薬師如来は、山の形に似てお顔がまんまるである。

湯名沢の道を詰めて峠に上り、そこから鎌倉山の東尾根に取り付き、登り切ると鎌倉山の山頂に出る。山頂はちよつとした広場で、ほぼ中央に撫で肩で全体が細身の薬師如来が祀られており、ほかに縣標がある。もう1つこの北尾根の脇には、自然石に彫られた南無妙法蓮華経の巨大な石碑がある（写真10-13）。

下るとブナ峠に出る。鎌倉山と遂倉山の鞍部の峠で、ブナ林が残されている。ここから九十九折の道を登って、七ツ森でいちばん尖った山の遂倉山に登る。山頂は広場になり、やはり中央に薬師如来が祀られている。眼を閉じているが童顔の仏様である。周囲の樹木が高く茂っているのが、梯子を伝って登る展望塔が建っていて、そこから樹冠



写真10-3 北西の八志田から眺めた遂倉山(左)と鎌倉山(右) その間の小さな山は鉢倉山



写真10-4 西側の鎌房より眺めたたがら森

越しに遠くの風景を眺めた。遂倉山の東斜面の下の岩砕地には、見事なケヤキの自然林がある。

もう一度ブナ峠に出て、さらに下った所から今度は北の急斜面を登ると、山頂に文殊菩薩を祀ったながら森に出る(写真10-4)。文殊菩薩の石仏は、このところ続いた大地震で倒壊したが、なんとか繋いで立ててある。痛々しいお姿だが、しっかりとした彫りにはどこか気品がある。九山登山に加えさせていただいたが、毎回この石仏にはお会いしたいと思っている。ここも急斜面の下りで、どうにか玉ノ池に着いた。ここまで登り降りの5分の3、距離の5分の2をこなしたことになる。そして、ここからは主峰笹倉山への長い道が私たちを待っている。登山口の御門杉まで8kmの道を歩かなければならない。しかし、どのメンバーも元気だ。これはいけるかも知れない、まだ12時半である。朝早く出発したのが幸いしているようだ。しかも天気も悪くない。私たちはしばらく歩き、湖畔の公園で大休をとった。

そしてまた、笹倉山に向かって歩いた。御門杉の笹倉登山口から山頂までの300mの最後の登りは、メンバーの誰にも辛かったに違いないが、遅いながらもしっかりと登っていた。とにかく全員が笹倉山山頂の薬師堂前にたど

り着いたとき、私にも得体の知れない大きな喜びが込み上げてきた。それは、自分の人生に欠かせない、面倒な作業と時間のかかる大事なことを、なんとかひとつ成し遂げたというような喜びであった。私は薬師堂に御神酒を上げて、九疑山のことを報告し、今日の「七ツ森七薬師掛け九山登山」のことに感謝した。そして、新たにここまで登って来てくれた会員も加わって全員で乾杯した。私の手には、この日のためにメンバーが用意してくれた金杯があった。全員が出発点の宝蔵に戻ったのは午後5時35分。所要時間は13時間20分であった。

振り返ると、この数ヶ月は九疑山と七ツ森(七疑峰)とに正面から向き合って過ごした毎日であった。それは、多忙で気の抜けない日々であるとともに、いくつもの見聞や体験のできた貴重な日々でもあり、そして何より、中国の方々をはじめ多くの人々にお世話になった日々でもあった。

それから10年、2011年5月8日、「七ツ森七薬師掛け九山登山」は、私が古稀を迎えたときにも行なわれた。参加者は13名になった。このときは前回とは逆の吉田口から時計回りに歩いた。松倉山の山頂で雷鳴を聞き、急いで下山して信楽寺でしばらく待機したが、所要時間は13時間26

分で、前回とほとんど変わらなかった。

さらに10年、2021年5月19日、私が80歳の傘寿のときにも行なわれた。参加者は1人、元日本山岳会会員で古くからの山の友人Sさん（74歳）である。このときは1回目と同じ反時計回りで、所要時間は15時間5分と少し多くかかった。これは、予めのんびり歩くことを申し合わせ、石仏の写真を撮ったり、刻まれた文字を記録したりして歩いたためである。このときのSさんの感想は、「七薬師掛け九山登山がこんなに大変だとは思わなかった。特に前半の子供の山群の登ったり下ったりの繰り返しには参ってしまった。それが後半の長丁場の歩行に効いたようだ」そして、「ですが、また来年も登りましょう」と付け足した。おそらく、このような登山は七ツ森でしかできない登山である。それは、誰にとっても大変だが、誰にも魅力ある登山なのであろう。

私たちがたどって来た「七ツ森七薬師掛け九山登山」の道を、平面図とそれを基に立体的に描いてみると図8のようになる。この行程をたった1日で歩くということは、なんと大胆な所業であり試行であろうか。人間の飽くなき歩行への志向にただ驚くばかりである。

私もここを3回歩かせていただいたが、毎回精一杯、気

持ち良く歩くことができた。その記録は図9に示した。できることなら、これからも人生の節目の年には、臆せず歩きたいと思っている。遙か彼方には卒寿が控えているが、その前に何か良い機会が訪れてくれそうな気がする。

あとがきに代えて

私は、仙台の四代藩主綱村が、青葉城から真北に眺められる七ツ森を、中国の九疑山に倣って敢えて七疑峰に変えさせたことに興味を持ち、また、漢代の墓から発掘された帛画に描かれた九疑山への興味も手伝って、その九疑山を湖南省永州市の現地に訪ねる機会を与えられた。そこで私が出会えた九疑山は、予想通りのカルスト山地地形の典型で、たくさんの柱状の山々から成る見事な「峰林」の山であった。そしてまた、古代中国の礎を築いた1人、舜帝の葬られた墓標とされる山でもあった。これまで見てきたように、漢墓の帛画地形図の九疑山は、そのことを的確に示している。

舜帝を理想の範とする綱村は、藩主として七ツ森を九疑山に因む七疑峰にしたのであろう。綱村は幼年時代も含めて44年間、藩主の座にあった。しかし、後継者に恵まれず、叔父に当たる宮床伊達家の宗房の嫡子で、自分の

綱村の一字を与えた村房を養子に迎えて五代藩主を継がせた。このときこれまでの例に倣って、時の將軍綱吉からさらに一字をもらって吉村としたのである。この綱村から吉村への藩主の禪譲は、堯帝が舜に、舜帝が禹に帝位を譲ったことに似ている。

五代藩主吉村は、綱村と同様にこれまで学んだ儒学を基調として、藩政改革や総検地などの財政再建の諸政策を進めるとともに、茶道や能、和歌や大和絵をたしなんだ文人藩主としても知られ、その治政は40年間に及んだ。綱村と吉村の時代は、仙台藩が最も安定した時期で、吉村を中興の祖とする人も多い。

吉村は綱村と同様に、七疑山と改められた七ツ森を、政務の間を縫って青葉城から眺めたであろう。そこは、自分が生まれ育った故郷であり、懐かしい山々に囲まれた美しい土地であった。吉村は、七ツ森（七疑峰）のことを、

ふり見れば

五二か四三か

七ツ森

をりはをりはの

峯のもみち葉

と詠んでいる。この歌碑は、宮床宝蔵の裏山に登る道筋にある。

このころ気付いたことに、国の基本地形図から、かつて記載のあった七疑峰の山名が消えてしまったことがある。理由は何かあるのだろうか、中国と日本の間に、「疑」という文字を介した文化が生じていたことを忘れてはならないだろう。九疑山も七ツ森（七疑峰）も地球の自然がつくり出した傑作の地形物なのだから。

参考文献

七ツ森の山々

- ・加藤多喜雄・加藤陸奥雄監修『みやぎの自然』宝文堂、1977年
- ・加藤多喜雄・加藤陸奥雄監修『ふるさと宮城の自然』宝文堂、1987年
- ・船形連峰学術調査委員会編『県立自然公園船形連峰学術調査報告』宮城県、1976年
- ・柴崎徹『宮城の名山』河北新報社、1992年
- ・小野勝美編『原阿佐緒全歌集』至芸出版社、1977年
- ・庄司直人・鈴木勲『雪んばと雪たる―七ツ森のできたわけ―』明窓社、1974年

七ツ森と薬師浄土

- ・黒崎若斗『緑の故里七ツ森を語る』宝文堂、1971年
- ・只野信男編『新・みちのく古代史紀行―七ツ森は語る―』宝文堂、

1991年

・大宮司慎一『黒川の薬師信仰』當來山龍華院、2013年

七疑峰と伊達綱村

・佐久間洞巖『奥羽觀蹟聞老志』、享保4年

・宮城県師範学校『宮城県地誌提要』全II、明治14年

・高頭式編纂『日本山嶽志』博文館、明治39年

・『藩史大事典』第1集 北海道・東北編、雄山閣、1988年

・菊地勇夫『仙台藩と飢饉』仙台・江戸学叢書一六、大崎八幡宮

・菅野正道『伊達の国の物語』プレスアート、2021年

・吉田賢抗『新釈漢文大系 史記』明治書院ほか大系諸版、1973年

・アン・ピレル 丸山和江訳『中国の神話』丸善、2003年

・山口直樹・益満義裕『図説「史記」の世界』河出書房新社、2007年

・松丸道雄・永田英正『中国文明の成立』講談社、1985年

・香坂順『現代中国語辞典』光生館、1982年

馬王堆漢墓帛画地形図の九疑山

・湖南省博物館編『湖南省博物館』講談社、1981年（中国の博物館2／講談社、文物出版社編）

・好親善協会、田辺昭三監修『中国湖南省出土文物』（財）滋賀県国際友好

・上海市紡績科学研究院・上海市糸洲綢工業公司

・馬王堆一号漢墓出土紡績品的研究』文物出版社、1980年

・湖南省博物館編『長沙馬王堆漢墓文物導覧』

・曾布川實『崑崙山への昇仙』中央公論社、1981年

九疑山へ

・『中華人民共和国地図集』地図出版社、1984年

・『湖南省地図集』湖南省地図編集委員会、2000年

・『湖南省域鎮地図冊』湖南地図出版社

・明德『芙蓉国之旅—湖南—』湖南地図出版社、2001年

・『中華人民共和国気候図集』中央氣象台・地図出版社、1979年

・任美鏗編著 阿部治平・駒井正一訳『中国の自然地理』東京大学出版会、1986年

・『中国自然地理図集』地図出版社、1984年

・中国科学院編 朝日稔・三浦慎悟・森美保子・権藤眞禎訳『中国の動物地理』日中出版、1981年

・郭沫若主編『中国史稿地図集』地図出版社、1979年

・張澤槐『永州史話』漓江出版社、1997年

・林田慎之助『柳宗元』集英社、1983年

・A・ウエイリ著 小川環樹・栗山稔訳『李白』岩波新書、1973年

・小川環樹・本田濟監修 算久美子著『鑑賞 中国の古典 李白』角川書店、1988年

・中共寧遠県委、寧遠県人民政府編印『九疑山』湖南画報社、2000年

・鄭国茂主編『九疑山覽勝』湖南文艺出版社、2000年

・寧遠県政協文史資料委員会・湖南省寧遠県中国旅行社編『九疑山』湖南美術出版社、1987年

・戴勇設計 黄振林・李永安ら撮影 永洲市委宣傳部・永洲市郵政局發行絵葉書『九疑山攪勝』の中の「三分石」

（その他、陸地測量部、国土地理院発行の地形図多種）

図 書 紹 介

角幡唯介 著

『裸の大地第二部 犬橇事始』



2023年7月

集英社

四六判

360ページ

2300円＋税

本書の読後感を端的に表現すれば、犬たちの喧騒と著者・角幡唯介の怒号が作り出す異様な迫力だろうか。書を置いてしばらく、そのエネルギーの桎梏しづてから解かれるには少々の時間が必要である。犬橇チームを作り上げ、犬たちを操る凄まじさを本書は余すことなく描いている。

「犬は可愛い」と思わせる要素は、狼が家畜化され、犬になる過程で獲得したDNAだそうだが、少なくとも橇犬は可愛くないと著者は最初に語っている。その可愛くない犬たちとの訓練過程での葛藤から次第に信頼が生まれ、「この犬たちと旅をし

たら面白いだろうなあ」となるのである。その間に、著者と犬との、また犬同士の会話、犬社会の序列、先導犬育成、犬の新陳代謝の方法、犬橇の暴走、と窺い知れぬ犬橇世界が綿密に描かれている。

南極点に最初に到達したアムンゼン隊は、犬橇を駆使し、しかも帰路には不要となった犬をほかの犬の餌にして無事帰還した。この成功に英国人の批判もあったが、その背景が本書で初めて理解できたように思える。私は北西航路1万5000kmを犬橇で踏破した植村直己の犬橇旅に感動したが、旅の主役は植村で、「橇犬」に思いを寄せた記憶はない。いずれの旅行も「犬橇」が探検成功の主要な要件であるが、探検記の読者たちは「橇犬」たちの苦労や不満に関心を寄せるといふことはなかったのではない。しかし、犬がもし人に語る術を持っていたら、彼らは苦労を語り、犬橇を操った人間の品性や技術を批評するかもしれない。本書では、犬たちのそうした思いが著者を介して語られているのである。

著者はカナダ極北域、グリーンランドで人引き橇により厳寒期旅行を経験し、グリーンランド北西部を人引き橇（1匹の犬に引かせて）で過酷な旅を経験している。グリーンランドでの滞在中、イヌイットの人たちの犬橇による狩猟旅行などを経験し、次第に犬橇の魅力とその地の旅にとっての重要性を認識し、自らの手で犬橇製作を企て、その製作過程が本書第二章で綿密

に描かれている。犬橇本体のほかに必要な装備があり、その製作も大仕事のようなものである。犬と橇を結び付ける胴バンド、引き綱、犬を操る鞭、鞭の柄、ブレイキなどがあり、それらは売っているわけではなく、著者はこれらをすべて手作りするつもりであったが、イヌイットたちの協力なしには叶わないことを悟っていく。こうした課題にも、著者は独特の哲学を語っている。「装備を自作することは、生き方を問われることにひとしい。これは、旅という行為に対し、どのような態度でのぞむかという問題だ」と。

著者の探検哲学から橇作りのすべてを自前だと目論むが、ヌカッピアングア（イヌイットの友人）のお節介でその目論見が崩れていく。友人は橇作りを仕切ると宣言し、悉く介入するのである。最初は迷惑がった著者だが、次第にその意味、犬橇作りの真髓を理解していく。彼らと橇作りを始めて、著者は犬橇の何たるかを全く知らなかったことを悟らされるのである。彼らの橇は見かけは汚く、出来映えは良くなく、いい加減に作つてあるように見えるが、その実、極めて実用的で、考え抜かれたものであることに気づく。こうした背景には、「限られた資源で狩をしながら極北の世界を生き抜いてきたイヌイット民族はおそろしく合理主義者で、(中略)彼らは理にかなっていないこと、無駄なことは一切やらない思考態度」が橇作りに反映しているのである。穴の開け方、穴位置、穴の直径などすべてに

その人（イヌイット猟師）の経験に基づいて考え抜いた意味がある、というのだ。こうした話を読み進めると本書は単なる経験譚ではなく、イヌイット文化の真髓を語る書でもある。

イヌイット技術の真髓と云うべき例を1つあげておこう。犬橇が活躍する場合は乱氷帯、プレッシャーリッジのある海水上、サスツルギ、クレバスがある氷河上などで、その表面は平坦面と1〜2mの落差の凹凸が混在している。そこで滑走する犬橇は上下左右に傾きが生じる運動体である。橇本体には常に不定な力がかかり、本体破壊の可能性に直面する。しかも橇上には数百kgの荷物が搭載され、さらに最大時速数十kmに達する運動体でもある。橇には究極の柔軟性が求められるのである。大小の破損は日常的に発生する。こうした過酷な状態に常に置かれる橇は、いかにして柔軟性を確保しているのであろうか。

グリーンランド橇の基本的な構造は、2枚のランナー材（縦桁）に数十枚の横桁を渡す構造となっている。横桁の上が搭載面になる。そのふたつの桁の接続には釘や木螺子類は一切使われず、幅3mmほどのナイロン製の撚り紐で縛っていく。この独特の縛り方（ノット）で橇に必要な強度をもたらすという。このノットが免震構造のような衝撃吸収力を発生させる、と著者は表現している。橇に関して素人の読者は、この表現で取りあえず納得するしかない。

橇の大きさをどう決めるかも大きな課題で、その根本は第一

に旅の目的をしつかりイメージすること。それによって旅に必要な食料（犬の餌が大きな比重を占める）が決まり、引き犬の数を増やせば大量の物資の輸送が可能だが、同時に犬の餌も増えてしまう。南極点を目指したアムンゼン隊はその点を厳密に計算し、犬自体を犬の餌として計算に加え、探検行を成功させているが、こうした方式を現代の探検に適用するのはさすがに難しい。北極の海水上の旅ではアザラシを狩猟し、犬の餌にできるが、1頭取れたとしても15頭の犬の食料としては2日分にしかならないようで、しかも毎日アザラシが獲れるわけではない。

著者は橇の大きさを長さ4 m（荷台部分…3・2 m）、横幅1・1 mとし、犬橇「ムカデ号」を完成させ、グリーンランド北西部の無人地帯の探検に乗り出していく。その旅でもいくつかのドラマが展開し、犬橇行の何たるかが描かれている。

犬橇の形はそれを使う地域の気候、雪氷状態によって異なるようで、日本の犬橇研究の嚆矢とされる論文は、昭和18（1943）年に『探検』（朋文堂）に掲載された梅棹忠夫著「犬橇の研究、主として樺太の犬橇の形態と機能について」であろう。この論文は、京都探検地理学会がその会員6名を樺太踏査隊として送り出すに当たっての厳寒期探検技術研究の一環である。ここで示された犬橇は長さ237 cm、荷台部は147 cm、幅46 cmとグリーンランドのものに比べ小振りである。主として樺太

ギリヤーク、樺太のアイヌ民族が使ったもので、自然環境も積雪地帯からツンドラ地帯で用いたものと思われる。犬橇の構造もイヌイットの橇のようにランナーが縦型でその上に荷台が載るものに対して、スキーのようなランナーに荷台を支える桁があり、イヌイット型に対して華奢なイメージである。

日本の南極観測隊が使う犬橇を作成した北大極地研究グループは、犬橇研究の報告を『北大山岳部報』第8号（1959年）に「犬ソリの研究」として報告している。内容はほぼ梅棹研究と同趣旨であるが、新たな犬橇材として「籐」を多用した柔軟性の高い橇が示されている。その大きさは全長414 cm、幅65 cmとムカデ号に比べて幅が狭く、細長の形であるが、これは南極の雪面状況やクレバス対策から決められたようである。

この書を読み進めるにはアハ（ついてこい）、デイマ（行け）、アッチョ（右）、ハゴー（左）、アイー（止まれ）、アウリッチ（動くな）、アゴイッチ（伏せ）など犬橇操作の号令は覚えておくことをお勧めする。この本の全体を通して著者の操作号令が怒号のように響いてくるので、慣れておくと心静かに本書を読み進めることができるだろう。

（渡辺興亜）

阿部幹雄 著

『証言 雪崩遭難』



2023年12月

山と溪谷社

四六判 288ページ

1700円＋税

毎年冬になると雪崩遭難事故のニュースがテレビやネットで報じられる。そのたびに天候や状況を甘く見た冬山の登山者やスキーヤーの身勝手な行動が問題だと世間の非難に晒される。しかし、一般の人はもとより登山者でも雪崩事故がなぜ起こり、どうすれば防げたのか、遭難事故のリアルな実態に迫る情報に接する機会は意外と少ない。本書はそうした雪崩事故を起こした人、捜索救助に当たった人々の「証言集」である。

著者の阿部幹雄氏は雪崩事故防止研究会（ASSH）代表で映像ジャーナリスト。ミニヤ・コング遭難事故から生還し南極観測隊に参加した経験も持つ。尾関俊浩氏は北海道教育大学教授で氷雪物理学が専門。北大基礎スキー部OB。

著者らの主宰するASSHは北海道大学山スキー部、山岳部、

ワンダーフォーゲル部のOBによって1991年に設立され、北海道の研究者、スキーヤー、登山家、医師らが加わり、これまでに雪崩事故の最先端の実践的捜索救助法の啓蒙・普及活動を精力的に行なってきた。毎年秋には全国で公開講座を催行して、都内でもここ数年、青山学院大学などで無料で講演会が実施されている。また、本書以外にも『山岳雪崩大全（2015年）』、『雪崩教本』（2017年、増補版2022年）の刊行があり、このほかメール配信のニュースも発行している。

そうしたなかで、本書は2007年～21年に発生した7つの雪崩遭難事故の事例分析を中心に構成される。また、要所で尾関氏による雪崩事故の科学的な検証に基づく「発生のメカニズム」の補足がある。

本書を読むに当たっては、雪崩についての基本的な科学的知識として前述の『雪崩教本』なども併読して参考にすれば理解が一層深まるだろう。雪崩の発生に関しては、冬山の気象や雪質・弱層についての知識、雪崩が発生する条件や力学的なメカニズム、雪崩トランシーバー（ビーコン）などの装備や雪崩のリスクマネジメント、事故が発生した場合の捜索と救助（サーチ&レスキュー）、および要救助者の救護処置と搬送の方法までの一連の系統的な知識と経験を深めることが重要である。

では、実際に遭難事故の事例を見てみよう。本書の特長は事故の映像情報が付加されていることで、実際の捜索時の映像や

被災難者の生の証言など、迫真的で貴重な映像がQRコードから参照できるので、読者はぜひそれを見ながら本書の内容を読み進めてほしい。

十勝連峰・上ホロカ化物岩の雪崩事故（2007年11月23日）

当時の北海道の山岳界に衝撃を与え、日本山岳会北海道支部の会員が4名死亡するという悲惨な結果となった事故である。上ホロカメットク山周辺は毎年、初冬には冬山訓練の登山者で賑わうエリアだ。前日まで北海道は冬型の気圧配置が続き、10日間での積雪深が1mを超えていた。この日は曇りであったが3連休の初日で、多数の山岳会パーティが入山して登山や訓練を行っていた。現場は雪崩は来ないと言われている場所だが、この日はデブリの発生が多く目撃されていた。

12時13分ころ、上部を登っていた北大ワンゲル部OB2名のいた標高1630mの北向き斜面で雪崩発生。彼らを含め下部にいた多数の登山者が雪崩に巻き込まれることになる。北海道支部のパーティ11名はこのとき化物岩の岩壁直下を登高中で、先頭のリーダーらは真新しいデブリに気づき判断に迷ったが、次の瞬間上部で爆音が発生し、あつという間に11名全員が雪崩に埋没した。このときビーコンを持っていたのはわずか4人であり、それがその後の救出活動に大きく影響した。付近にいた中央労山のパーティなどにより直ちにコンパニオン・レスキューが開始されたが埋没者が多く、捜索に際してビーコンの

自動復帰機能などで混乱して救出は困難を極めた。このときの救助の様子はビデオ映像の記録にあり、雪崩捜索の現場がどれだけ緊迫した状況なのか、貴重な教訓として目にする事ができる。

この雪崩の要因は弱層となった「しもざらめ雪」であり、尾関氏の分析による詳しい解説がされている。また、北海道支部の事故調査報告書（08年4月）では「装備の不備」とともにメンバの雪崩に対する危機認識やデブリ発見時の行動などパーティや訓練のあり方などの課題を指摘している。ビーコン携行の有無をはじめ多くの課題と教訓を残した事例と言える。

北ア・白馬乗鞍岳裏天狗の雪崩事故（2020年2月28日）

この事故は雪崩に遭遇し、完全に埋没しながら3時間1分後に救出された奇跡的な事例だ。

事故当日、2日前に南岸低気圧が太平洋岸を通過し、その後の2日で5・60cmの積雪があり、弱層となる降雪結晶が降ったという。大町市在住のプロスノーボーダーN氏ら2人は、久々のパウダーが期待できるとスプリットボードで裏天狗の斜面を目指した。N氏はビーコンを携行していたが、あるうことが、駐車場で入れた電源を電池がもつたないからと途中で切ってしまった。

裏天狗東の稜線の急斜面に滑り込んだN氏。しかし、パリパリとエッジに氷が着くような音がしてスピードが出ないあつ

思いつつヒールサイドを当ててふつと後方を見ると雪煙が見えて、あれっと思った瞬間、足元からドーンと持っていかれた。埋没したときに顔の辺りにわずかな空間ができたのが幸いだったが、後日の検証では手足を動かそうとすると途端に心拍数が急上昇してしまい、なす術がなかったなど、まさに九死に一生を得た生還の証言がなされる。

幸運なことに雪崩発生現場付近には同伴者のS氏のほかに、外国人パーティーを含む多数の登山者がいた。そのなかにはプロのガイドや雪崩講習(AVSSAR)を受講した者もいた。早速ピーコンの捜索が行なわれるが、当然電波は得られない。生存率の高いとされるクリティカルな18分間が過ぎ、スラローム・プロービングによる探索が行なわれた。ときどきプローブに何か当たるが大抵はダケカンバなどの木であり、ヒットは偽りだった。現場には諦め感が漂い、二次遭難を避けるための捜索終了時刻に設定した14時45分が迫るなか、「カッソ、カッソ」とスノーボード板にヒットする音があり「そこだ、掘れ」。14時43

山崎トメコ
上ホロカメットク山
化物岩雪崩事故



白馬乗鞍岳裏天狗
雪崩事故生存救出



白馬乗鞍岳裏天狗
雪崩事故埋没者の証言



分、N氏は救出され奇跡的に生存が確認された。日本語と英語が飛び交う騒然とした救出現場に長野県警ヘリが到着するまでの映像や、終了時刻が迫るなか想定域を捜索仕切れていない捜索者側の葛藤と問題意識もインタビューでは取り上げられる。貴重な証言と言えるだろう。

このほかに大山・別山沢の事故(油断から雪崩を誘発、自力脱出した事例)、北アルプス・立山浄土山の事故(大学WV部の学生が雪崩を誘発、遭難した事例)、尾瀬・燧ヶ岳の雪崩事故(コホリ)を持った単独スキーヤーが雪崩に埋没、死亡した事例)、大雪山・上川岳の雪崩事故(低体温症への保護と加温)など合計7件の雪崩事故が事例分析されている。

雪崩事故が減らない現状を鑑みて、著者の阿部氏は「人間が変わるためには教育が重要」と言う。本書の事例を見ても初歩的なミスや知識や装備の欠如が雪崩遭難事故に大きく影響している場合が多い。現代の雪山の装備や知識は進歩しても、それを実際に活かせるように学生や一般の登山者の認識レベルや実力を向上させることが必要であり、雪崩事故防止研究会の地道な活動はこの役割を担っている。雪崩事故によって失われた貴重な命をムダにしないためにも、登山者はこうした経験や活動への認識を深めたい。

(森田栄二)

尾崎喜八 記

『尾崎喜八選集 私の心の山』



2024年3月

山と溪谷社

文庫版

589ページ
2100円＋税

山の詩人、尾崎喜八さんの山の詩文を集めたアンソロジーが上梓された。私たち登山愛好家からすると、尾崎さんの山に関する作品でまず思い浮かぶのは、おそらく1935年に出版された散文集『山の絵本』に違いない。しかし、尾崎さんはその後も、晩年まで多くの山を題材にした散文や詩を創作し、山で出会った自然、山を想起させる芸術、そして、山が私たちを惹き付け、魅了する森羅万象を詠い続けた。このアンソロジーにはもちろん『山の絵本』所収の作品も多く入っているが、後半はその後に創作された山に関わる詩文が多く収められていて、山をこよなく愛した尾崎さんの晩年までの作品に触れることができる、うれしい一冊である。

本書を通読してまず気がつくのは、山の地質、地形、植物、

鳥、雲、星など、私たちが何気なく気づかず通り過ぎてしまっている自然の森羅万象を、科学愛好家の目で愛情を持って観察している尾崎さんの変わらない姿勢である。尾崎さんはそれを平明な詩や、情緒あふれた散文詩と言ってもいいような散文で表現し、それを鑑賞することで、私たちは尾崎ワールドとも言っているような美しい山の世界に引きずり込まれていく。特に老境になってから創作された詩文には思案が深まったものが多く、心にどうしても残ってしまうような余韻が感じられる。

昨今、山は多くの登山者であふれ、どちらかというところスポーツ的なクライミングやトレイル・ランニングのような登り方が広がってきている。また、日本百名山など、山を楽しむというより数をこなすことに夢中になっている登山者も多いように思う。しかし、山ってそんなものなのだろうか。

山を登ることで何を得的のだろうかと振り返ってみたときに、私たちは誰もが山の森羅万象に触れることで身も心も洗われた経験思い出すのではないだろうか。空を心地よさげに形を変えながら浮かび流れて行く雲、はかなげでありながら小さな花を一生懸命に咲かせている高山植物、日の光を受け淡くまぶしい広葉樹林の緑、夜空に宝石をちりばめたように瞬く星の数々、誰か大きな意思が創り上げたとか思えない地形の造形。その一つ一つが目や耳を通して私たちの心に入り込んでくると、浮世の辛かったこと、悲しかったことは脳裏から消え去り、

心を揺さぶるような感動が体の奥深くから湧き上がってくるのを感じたことはないだろうか。尾崎さんはそういった物事を深く観察し、心に書き留め、普遍的な比喻で表現することで、私たちがともすれば忘れがちになる山のそういった力を改めて明らかにしてくれている。そうした意味で尾崎喜八没後50年の今年、このようなアンソロジーが世に出たことには大きな意味があると思う。

尾崎喜八さんは1892年生まれ、登山や山を題材に描いた数多くの詩や散文を通じて、特に山を歩く人たちが愛されてきた詩人である。日本山岳会では1949年から1952年まで第2代信濃支部長を務めていたが、その後も上高地のウエストン祭で毎年、自作の詩を披露していたのは、今も古い会員からよく聞く話である。本書に収められている「上高地紀行」には、その様子が詩情豊かに描き出されている。

尾崎さんは一生を通じて自然科学と音楽を愛し、それが尾崎作品を特徴づける主要な色合いとなっている。本書所収で『山の絵本』の冒頭を飾る「たてしなの歌」。その書き出しの一節、「君の土地。それは無数の輻射谷に刻まれて八方に足を伸ばした、やはり火山そのものの肢体の上の耕地であろうか。あるいはもつと古く、埋積し、隆起した太古の湖底の開析平野と、その水田に、今、晩夏の風が青々と吹き渡る河岸段丘のきざしはしであるるか」。まさに詩とは全く別世界のもののようにも思え

る自然地理学の用語で紡ぎ出される独特の散文詩。そこに現われるのは、まさに尾崎喜八さんでなければ創り出すことのできない尾崎ワールドである。

そういった尾崎さんの自然科学の素養がどこから来たものか、本書の「山にゆかりの先輩」にそのことが述べられている。文中で尾崎さんは自然科学の知識は日本山岳会草創期のレジエントたちから薫陶を受けて培われたことを明かしている。特に武田久吉博士とは親しく、植物の知識や写真に関するスキルの指導を受けるとともに、博士の山の紀行から多くの影響を受けて、それが尾崎さんの山の詩や散文を書くための動機づけになったと述べている。ほかにも辻村太郎博士からは地理学の手ほどきを受けた。「尾崎さん。地理をやる者は夜行列車へのっではいけませんよ。それに初めてのコースの汽車の中では必ず二十万分と五万分の一の地図をひろげて、いつでも自分の車の現在位置を確認できるようになさい」と言われたエピソードは、辻村博士の教え方が目に見えるようで面白い。

音楽も尾崎さんを語る上で避けては通れない。本書の「山と音楽」という一文には尾崎さんの音楽に対する愛と、山で見たり聞いたりするものと音楽がどれだけ親和するのかが描かれている。「登山の味、山や高原の真の良さを知っている者は、如実にそれを描写したり叙述したりする文章や写真や絵画よりも最も微妙なものを音楽からこそ受け取るもののように思える」と

いう尾崎さんは、「音楽を聴きながら急に山への郷愁に襲われて身震いを感じ」、山で聞く鳥のさえずりから音楽を連想したり、夏の森林にベートーベンの交響曲を見たりする。山に笛を持って行つて吹くことも、歌を歌うことも尾崎さんにとつてはごく自然のことだったようだ。尾崎さんの家庭はいつも音楽にあふれていたとも聞かすが、孫の美砂子さんのご主人が日本を代表するバツハ学者の樋口隆一さんだというのも、ごく自然の成り行きのように思えてしまう。

尾崎さんを山の世界に引きずり込んだのは、『一日二日山の旅』と『静かなる山の旅』の著者、河田楨さんであり、その紹介で入った霧の旅会のメンバーである。そのころ、まだ人があまり見向きもしなかった低山を彷徨していた霧の旅会。そこには前出の武田博士や木暮理太郎さん、松井幹雄さんといったレジェンドがいて、その人たちと山に行くことでどんどん山にのめり込んでいった。そんな尾崎さんが山に惹き付けられた理由が、このアンソロジーの表題となった一文、「私の心の山」を読むと分かるような気がする。

「ときどき一人で考えることだが、私は自分の本心を山にこそ預けてあるような気がする。それも孤立した山ではなくて峰から峰へと続いている連山、そこに自由と真実とが高峻を生き、そこで私の精神が鍛えられ心が清められ養われるところ。そういう処にこそ自分の夏の故郷はあるのではないかという気がする

る。だから地平線に浮かんでいる遠い雲を見ると懐かしく、夕日に映える西の空が恋しいのである。なぜならばそのはるかな雲の下、その美しい夕映えの底には必ず私の心の山があるはずだから」

なぜ山に登り、なぜ街で山を想うのか。その答えが詩人が紡ぎ出す言葉を通じて、私たちの胸の奥にすんと落ちてくるような気がしないだろうか。これは尾崎さんだけでなく、多くの山を愛する人に通じる普遍的な言葉ではないだろうか。ほかの多くの人がどんなに言おうとしても言えないことを、詩人の言葉は明らかにしてくれる。

多くの登山愛好者が、山の名著やそれを著わした登山家や文人のことに興味を持たなくなってしまった昨今、ご多分にもれず尾崎喜八という一人の山の詩人の作品にも触れることが少なくなってしまうように思う。尾崎さんの作品の多くが男声合唱曲となつていろいろな所で歌われていることもあって、合唱の関係者の間ではよく知られていると聞かすが、山をこれだけ愛した詩人を山の人が知らないのは寂しい。やはり山に登る人こそ尾崎さんの作品を知ってもらいたいと切に思う。

蛇足だが、尾崎さんの著作は今、ネットで読むことができるようになってきている。尾崎さんの孫の石黒敦彦さんたちの「尾崎喜八を広く皆に知って欲しい」という想いから、ほぼ全作品が掲載されているサイトだが、この文の最後にURLを記載して

おくので、皆さんもぜひそこをのぞいてみて、尾崎さんの作品に触れてみて欲しい。

サイト「詩人尾崎喜八」<http://www.ozaki.mann1952.com/>

(近藤雅幸)

近藤幸夫 著

『ライチョウ、翔んだ。』



2024年4月

集英社インターナショナル

四六判 288ページ

2000円＋税

2018年7月、木曾駒ヶ岳で一登山者がライチョウを撮影して信濃毎日新聞に持ち込んだ。当時、ライチョウが生息していたのは、頸城山塊、北アルプス、乗鞍岳、御嶽山、および南アルプスに限られ、中央アルプスでは1969年の目撃を最後に、半世紀以上の間生息が確認されていなかった。これがきっかけとなってライチョウ復活作戦が始まった。作戦を主導したのはライチョウ研究の第一人者である中村浩志・信州大学名誉

教授である。本書はその復活作戦と熱血鳥類学者中村への密着取材記録である。

第一部「絶滅の危機」では、捕食者の高山帯への侵入や生息環境の変化で我が国のライチョウが絶滅の危機に瀕していること。このため行政、動物園、研究者などが協力して保護増殖活動を行なっていること。活動の科学的裏付けとなっているのが中村の研究室であることなど、ライチョウの危機的な状況と、復活作戦に活かされることになる従来のライチョウ保護活動や研究について紹介している。

第二部「復活作戦」は、予期せぬ事態と人間模様で終始劇的である。ことあるごとに著者は中村の大胆な発想と提案に驚くが、長年、フィールドワークでライチョウを見てきた中村にしてみれば、経験と知識に裏付けされた当然のアイデアだったのだろう。

半世紀ぶりの目撃があった直後、中村は教息子でもある環境省信越自然環境事務所の担当官と現地を調査して、放棄された巣と卵を見つけた。羽も見つかり、飛来したライチョウはDNA解析で北アルプス系統と判明、「飛来メス」と呼ばれて復活作戦の立役者となる。ライチョウのメスは相手がいなくても無精卵を産み抱卵することから、中村は北アルプス系統の乗鞍岳から有精卵を持って来て、飛来メスに抱かせることを環境省に提言した。カッコウの托卵研究の実績がある中村ならではの発想

である。環境省は中村の提言を受けてライチヨウの野生復帰計画を策定し、復帰作戦が動き出した。

2019年初夏、はたして飛来メスは8個の無精卵を産んだ。発見されるまでも毎年卵を産んでいたのだろう、習性とはいえ健気さに心が打たれる。メスが巣を離れたすきに、乗鞍で採取した6卵と入れ替えたところ、5卵が孵化した。中央アルプスでは半世紀ぶりのヒナの誕生である。翌日には飛来メスがヒナを連れ歩く姿が見られたが、10日後にはヒナが全滅していた。雨による低体温があるいは天敵か。2020年は前年の轍を踏まぬよう現地にヒナを守るケージを設け、4つの動物園から8卵を移送して飛来メスの無精卵と入れ替えた。孵化予定日に現地に駆け付けて巣を見たところ、5卵が孵化していたがヒナが見当たらず、飛来メスが巣の周りをうろうろしていた。再度探したところ、ヒナの死骸とヒビが入った卵が見つかった。腑に落ちない中村は、巣の前に設置した監視カメラの映像を見て仰天し、ケージに収容するのが一瞬遅れたことを悔やむ。サルが写っていたのだ。昨年引き続き全滅である。その年は、入れ替え作戦に加え、新しい試みとして、夏に乗鞍の野生3家族19羽をヘリコプターで木曾駒ヶ岳に移送し、ケージで保護したのち放鳥した。ヒナは順調に成長し、翌2021年6月には飛来メスを含めた18羽が確認された。ケージで保護したとはいえ、驚異的な生存率である。飛来メスは伴侶を見つけて初めて自分の子

どもを産み、全体で20羽のヒナが誕生した。宝剣岳方面にも生息域が広がり、中央アルプス全体で成鳥18羽、ヒナ46羽が確認され、展望が開けた。

2021年、復活作戦は、動物園と協力して個体数を増やす新たな段階に入る。(公社)日本動物園水族館協会所属の6動物園が協力した。ここでも、中村の大胆で臨機に応じた発想で、個体の交換や卵の入れ替えが行なわれた。その具体的な詳細は著者も頭が混乱するくらい込み入っているが、要は、中央アルプスの個体の一部を動物園に下ろし、繁殖させて中央アルプスに放つというものである。中村と動物園の関係が険悪になることもあったが、動物園はできる限りの手を打った。野生復帰に備えて現地産の高山植物を与える必要があり、環境省は餌の確保に奔走した。飼育下で問題になる腸内細菌については牛田一成・中部大学教授の助言が功を奏し、必要な数の個体が確保された。2022年7月、ふたつの動物園から計22羽が車とヘリで木曾駒ヶ岳に運ばれた。ケージ保護でヒナは順調に成長し、10月には木曾駒ヶ岳でライチヨウ観察会が開催されるまでになった。飛来メスは2023年も6羽のヒナを孵し、本書が出版された2024年春には推定120羽、縄張りの空白もかなり埋まってきているという。

ライチヨウ復活作戦を牽引したのは中村であるが、環境省の検討会メンバーには、中村以外に9人の専門家が参画している。

各専門分野の叡智の結果といえよう。

ライチョウの危機を世間に知らしめた著者の存在も大きい。著者とライチョウとの付き合いは、2015年8月、朝日新聞長野総局の記者として取材した「北アルプスのライチョウ調査の報告会」に始まる。記者会見に臨んだ中村は、東天井岳でサルがライチョウのヒナを襲う写真を示し、切迫したライチョウの危機を訴えた。以後、著者は取材を重ねるうちに「鳥の気持ち分かる」中村に惚れ込んだ。中村はそんな著者を信頼して調査に同行を許すようになり、著者の筆は世論を喚起して行政の施策を後押しした。復活作戦が佳境にあった2021年秋、著者は異動の内示を受けたが、退職まで2年半を残して退職し、フリーランスで取材を続けてこの本を上梓した。環境省信越自然環境事務所の担当官も途中で異動になったが、環境省は前任者と同じく中村の薫陶を受けた研究者を途中採用して後任に当てる。行政経験のない担当官は苦労も多かったと思うが、中村の高度な要求を咀嚼して動物園など関係者に伝え、ときに板挟みになりながらコーディネーターとしても重要な役割を果たした。かねてから絶滅の危機に備えてライチョウの飼育に取り組んできた動物園は、希少種の生息域外保全の拠点として今後も重要なメンバーである。本書を読めば、ライチョウは関係者のネットワークで守られていることが分かる。

かくして目指す野生復帰に一步近づいた中央アルプスのライチョウであるが、半世紀前に絶滅した要因がなくなったわけではない。1967年にロープウェイが開業し、3年後にライチョウが姿を消した。捕食者の高山帯への進出、シカの食害や温暖化による植生変化、登山者・観光客の急増も影響しているだろう。ライチョウのためにはこれらの要因を取り除かねばならないが、生態系の一員であるサルやテン、シカなどを駆除して良いものか。温暖化に至っては問題が大き過ぎる。猛暑が電力需要増に拍車をかけている現実には絶望せざるを得ないが、希望を持たせてくれる例もある。絶滅寸前だったタンチョウは100年間で2桁増の1800羽まで回復し、生息域も拡大している。いったん野生絶滅したモウコノウマの場合は、ヨーロッパの動物園にいた個体を繁殖させてかつての生息地に戻し、今はモンゴル高原を走り回っている。ライチョウは今より暖かかった縄文時代を生き延びたのだから、ほかの要因次第で温暖化に耐えられるかもしれない。中央アルプスの経験を活かせば、白山にもライチョウを復活させることができるだろう。人を恐れぬライチョウだが、たまには人のいない高原でのんびりしたいのではないだろうか。「山の日」くらいは山に登らない、そんな企画があっても良いと思う。

(綴治哲郎)

追悼

山口 節子さん



やまぐち せつこ
(1934~2024)
会員番号 4475
永年会員

緑爽会名簿の筆頭にあった山口節子さんが、3月16日11時1分、お住まいの近くの稲毛駅前で交通事故のため亡くなりました。駅前の横断歩道を渡ると、地元の農水産物をそろえた格安スーパーへは少し後戻りするので、横断歩道の少し手前を渡るうとしたのです。以前の節ちゃんなら、なんでもなかつたでしょう。でも最近では、杖を使うようになっていたので、渡り切

れずに轍に蹂躪されてしまいました。

節ちゃんとは長い長いお付き合いでした。戦後間もなく疎開先から東京へ戻った節ちゃんと私は、下町で焼け残った都立小松川高校で知り合いました。高校時代の節ちゃんは、バレーボール部のキャプテンでした。小さな体で高くジャンプして、ネットを越えてくる相手側のボールを弾き返していました。私はいえ、当時は重い肺結核を患い、体育の授業はいつも見学。でも、論文を提出すれば2の評価は貰えましたから、無事に卒業はできました。入院や手術で出席日数が足りないと感じたときから、学校を休学して図書館や映画、演劇を見て歩いたりして1年落第したので、卒業年度は節ちゃんの方が先輩です。

今でも、そのころの女子の体育着だった、ちようちんブルマー、ひだをたたんだブルマーをはいた節ちゃんが目に浮かびます。あの節ちゃんが先に死ぬなんて……。信じられないし、認めたくない気持ちです。

3月18日、早々と節ちゃんの「徳ぶ会」が稲毛の葬祭場「セレモ」で行なわれ、日本山岳会の橋本しをり会長も出席されて弔辞を読んでもうございました。お棺の中の節ちゃんは、美しくお化粧されて、お人形のように優雅でしたが、「こんなの節ちゃんじゃない」と、私の心は「起きてよ、節ちゃん」と激しく反発しました。

稲毛の「セレモ」からお棺と私たち友人を乗せたバスと、それに続くマイカーの列が、東京のはずれの都留の焼場まで1時間半かけて到着。最後のお別れをした後、焼き上がるまでの時間は昼食をいただきながら、こもごも思い出を語り合いました。私の知らない方も多く、節ちゃんの交際範囲の広いことを実感しました。

お骨上げした遺骨を持って、平和公園の中にある都営墓地へ。そこに、かねて用意のお墓があつて、納骨した後、またバスで参列者を交通の便の良い場所まで送りました。私たちが都内在住者は阿佐ヶ谷まで送ってもらいました。1日で葬儀から納骨までやってしまうというシナリオは、ひとり身の節ちゃんが、生前に用意しておいたに相違なく、葬主である弟の博之さん、葬儀委員長の姪の老川千津子さんによく言い含めてあつたに違いありません。

本来なら、このような席で節ちゃんについて話をするのは、節ちゃんの一歩の親友だった宮澤美渚子さんだったはずですが、宮澤美渚子さん、登山者ならよくご存じと思います。

1998年10月8日、解禁されたばかりのヒマラヤ、クラウン峰に初登頂して、山岳史上に輝かしい記録を残した、あの宮澤さんです。節ちゃんと宮澤さんは、親友であると同時によきライバルでもありました。初登頂した宮澤さん、片や節ちゃんは、マルテ・ブルン女子登山隊の隊長でした。隊長は実力と

もに、皆の信頼がなくては務まりません。そして、ふたりとも猫が大好きでした。

栄光の宮澤さんも、ご主人の憲さんに先立たれた後、転倒して腰骨にヒビが入り、足を引きずるようになりました。その上、同居していた一人息子さんは、自動車のセールスマンとしての実績を買われて東北支社の支社長となり、夫婦ともに任地に行ってしまいました。勝気な宮澤さんはグチひとつ言わずふたりを送り出しましたが、自分ひとりのために料理する気にならず、すぐ近くの店で深大寺そばを食べるのが日課になっていました。栄養の偏りを心配した節ちゃんは、稲毛の干物や日持ちのするクッキーなどを宅急便で送っていました。

「要介護者同士の訪問は、万一のときは警察沙汰になります」と、ケアマネさんから言われている私は、ひとりで訪問することができません。せめて手近で買えるワインや生活必需品を送ることぐらいです。そんな私たちに「宮澤さんちでお昼を一緒に食べましょうよ」と呼びかけてくれるのは、いつも節ちゃんでした。そして、その日の料理はすべて節ちゃんが用意してくれました。稲毛の節ちゃんの畑で採れたトマトやキュウリ、レタスはサラダに。お寿司は日ごろ宮澤さんが鼠屐にしていた店のバック詰めを人数分。かなり重いのをリュックやカートで運んでくれました。

節ちゃんが善福寺川沿いの道を歩くと、どこからともなく野

良猫・野良犬が出てきます。彼女はいつもトレーナーのポケットにエサを入れていて、野良ちゃんたちに振りまくので、ふだんは通行人のいない狭い道に人の気配がすると、飛び出してくるのです。私を通っても同じように出てきますが、節ちゃんでないとは分かると、不満そうにまた茂みの中に消えていきます。その様子を見ても、節ちゃんがいかたたび、宮澤さんを訪ねていたかが分かります。

今回の節ちゃんの事故を、私は宮澤さんに伝える勇気がありませんでした。伝えても、私が彼女を支えて偲ぶ会に行くことはできないからです。私自身シルバーカーを離せない状態で、稲毛まで行くには、息子に仕事を休ませて、付き添ってもらったくらいでしたから。今ごろは、宮澤さんにも節ちゃんの死が伝わって、彼女は涙にくれていることでしょう。節ちゃんが死ぬ間際に思ったことも、「美渚子さん、先に逝くけど、ご免ね」のひと言だったと思います。

婦人懇談会の生き残りの羽賀育子さんは、今から6年前、2018年に亡くなった環境庁の役人、羽賀克己さんの未亡人。夫の克己さんは、役人らしからぬお役人で、過疎地帯の行政が進める地域振興のための開発に住民が踊らされないように、反対運動のやり方を教え、署名用紙から陳情書の書き方まで指導してくださって、当時、日本山岳会自然保護委員会のメンバーだった私は、大変勉強になりました。山岳会きっての美女の早

川瑠璃子さんや私もファンで、年下の克己さんをわんぱく坊主の弟のように思って、官舎兼事務所になっていた勤務先を訪ねました。私は目立つタイプではありませんが、早川さんは茶道の先生でしたから、いつも美しい和服姿で訪ねるので、かなり人目についたと思います。

早川さんは自分の体の異変に気が付くと、好きで集めた山岳図書のすべてを箱に詰め、読書家の吉田理一さん（魚沼市在住）宛に送りました。地元の高校の校長先生だった吉田さんは、早川記念文庫を建ててそれに応えます。そして宝酒造に就職した教え子を通して手に入れた「八海山」や「越乃寒梅」を、我が家宛に送ってくださいます。下戸の私なら預けても安心。緑爽会の集会に、なかなか手に入らないお酒が出るのは、吉田さんのお陰。元はと言えば早川さんが後輩のために遺したおくりものなのです。

宮澤さんは、ご主人の憲さんとふたりしてヒマラヤ登山に熱中した後、ご主人の工務店が倒産して暮らしに困っていました。そのため、日本山岳会の事務局に囑託として勤めていたことがあります。おそらく憲さんの東京農大の先輩、織内信彦さんの口ききだったと思います。彼女が事務局にいと、新しくヒマラヤを目指す後輩たちに装備のこと、食糧のこと、ヒマラヤ登山全般のことが相談できて、随分役に立ったと思います。でも、60歳で解雇されてしまいます。

私は、その理由が夫の憲さんが(旧)大町中学校出身者で組織された徒歩溪流会の幹部だったからと推測しています。日本山岳会としては、自らの内部事情がほかの山岳団体に筒抜けになることを嫌ったのでしょう。宮澤憲さんの著書『ヒマラヤ・一つの峰の物語』を改めて読み直してみても分かったのは、夫婦ともにそのルーツは長野県小谷村であって、血縁関係が濃かったことを知りました。だから子どもさんは一人息子だけだったのでしょうか。

また、この憲さんについては、昨年度『山岳』に掲載された山本良三さんの『小島鳥水 山の風流使者伝』を再読して」を讀むと、1987年の皇冠峰遠征は徒歩溪流会との合同登山で、遠征隊長は山本良三さんだったので、近藤信行も誘われて同行させてもらいました。この遠征では、徒歩溪流会がこれまでの実績を買われて登頂するはずだったのに、当日の天候急変の兆しを見て「遭難者を出してはならない」と早々に撤退してしまいます。

良三さんは「ヒマラヤにロマンを求めて、はるばる中央アジアの奥深くまで来ながら、外部参加の隊員と意見が合わず。さりとて、議論するのめばかばかしと感じていた私の身の引き方を間近に見ていた近藤さんは、さぞかし歯がゆい思いをされたことだろうが、私の気持ちを感じて何一つ恨みがましい言葉を口にしなかった」とあります。

そして、石と砂のベースキャンプで、ふたりは2ヶ月間過ごすのですが、この経験で信行はますます良三さんの人柄を愛し、終生変わることなく、実の弟と思うようになったのです。

日本山岳会きつてのモテモテ男だった良三さん、貴方が節ちゃんを知らなかった訳ないでしょう？ 貴方がアタックしても、やっぱり難攻不落でしたか？

晩年になって、体力の落ちた節ちゃんが同行してもらったのは弟の博之さんだったと聞くと、よくよく男との関わりを避けていたのが分かります。節ちゃんのツヤっぽい話、どなたか知っていたら教えてください。

節ちゃんを偲ぶ目的で書きながら、裾野は多方面に広がってしまいました。でも、これら全般にわたって、節ちゃんの知恵と行動は関わっていたのです。

節ちゃんが精魂込めた婦人懇談会の志は、今も変わってはいません。かつての「婦懇」を知る人は、わずかにひとり、羽賀克己夫人の羽賀育子さんあるのみ。現在は中央本線大月下車、駅から徒歩小1時間かけた猿橋の傾斜地で無農薬野菜作りに励む育子さんですが、彼女に会って、節ちゃんの思い出を語るのが私の大きな楽しみです。

敗戦後の日本山岳会で、多くの女性たちに生きる希望と勇氣を与えてくださった山口節子さん、どうもありがとうございませう。貴女のごことは生命ある限り忘れません。

(近藤 緑)

〈略歴〉

昭和41（1966）年12月～42（67）年1月

ニュージブランド合同登山隊

奥原 教永さん



おくはら きょうえい
(1930～2023)
会員番号 4711
永年会員

初めて奥原さんにお目にかかったのは昭和40年、高校2年の夏だった、と記憶している。当時、母校・松本深志高校の山岳部では、夏の間、上高地・小梨平にベースキャンプ（以下BC）を設営していて、山岳部員をはじめ、在校生や卒業生の登山のための躰^{ねぐら}を提供していた。その年、テントは30人は収容できる鉄骨の家型テントに新調されたが、それまでは、とんがり帽子の六角テントだった。鍋、釜、コンロなどの備品は西糸屋、重いスノコ板は、小梨平の入り口にあった営林署の物置に預かってもらっていた。西糸屋は、主の奥原さんが深志の先輩だから

その誼よしみで、と聞いていた。

初夏、まだ梅雨も明けやらぬころ、夏山合宿の前に徳本峠越えて上高地に入り、まずはBCの設営をした。このとき西糸屋に預かってもらっていた備品を取りに行くのだが、その際、ご挨拶に伺ったのが最初の出会いだった。3年生の後ろで、ただ突っ立っていただけだったが、怖そうな人だな……というのが最初の印象だった。3年生のときは、私が先頭に立つ番だったが、奥原さんはお留守でお目にかかることはなかった。

それから10年ほどして、たまたまOBとしてBCに滞在していたとき、奥原さんの次男・達さんが山岳部に入部するのとことで、奥原さんが同行して、わざわざBCに挨拶に来られた。山岳部関係者ではいちばん年長だったので、私が応対した。奥原さんは余計なことは言わず、「宜しく頼む……」とだけ言われて帰られた。

それからさらに10年ほど経ってからのことだ。私は地元就職し、仕事も家庭生活も充実した日々を過ごし、山は夏の黒部源流と、正月に他人のラッセルをアテにして登る常念詣でだけで、あとは専ら山スキーだった。そんなころ、取引先で高校の先輩だったS氏から、徳本峠へ行きたい、と案内を依頼された。穏やかだが一本芯が通っているような人柄で、深志の後輩ということで、特に懇意にもらっていた。断る理由はなかった。

秋口だったかと思う。十数年ぶりの徳本越えだった。S氏は山は素人だったが確かな足取りで峠を越え、上高地へと向かっていったことだ。

「教永のところへ寄っていく……」

そう言ったのだ。

「えっ、西糸ですか？」

高校の同級生とのことだ。彼らは戦時中、旧制松本中学に入學、戦後の学制改革で新制高校となった最初の卒業生だった。

順調な足取りだったので、時間的には問題なかった。教永のところへ……、私はその言葉に、ふと、BCを巡る奥原さんの二コリともしない毅然とした風貌を思い起こしていた。そして、西糸へ。

S氏と奥原さんは、懐かしそうにしばし歓談していたが、奥原さんが突然、私に向かって言った。

「おめえは、何やってるだ」

急に水向けられ、私は多少どぎまぎしながら現況を報告すると、なんの前触れもなく奥原さんは言った。

「山岳会に入ってウェストン祭をやれ！」

それは命令だった。いや、少なくともそう聞こえた。そして、そのまま奥の方へ行って、1枚の紙を持って来た。それは、日本山岳会の入会申込書だった。

実は……、私は学生時代から、日本山岳会には抵抗というは

どでもないが、なんとなく反りの合わないものを感じていた。だから入会するなんて、さらさら考えたこともなかった。だが、まさか日本山岳会とは反りが合わなくて……とも言えなかった。それに、学校の大先輩で上高地の主だ。うんもすんもなく入会させられることになった。入会に当たつてのもう1人の紹介者は、当時の信濃支部長・蒲生明登氏である。

だが、仕事はますます忙しく、支部の行事にはほとんど参加できなかった。それでもウエストン祭にだけは顔を出して、夏黒部源流と正月の常念詣でに、6月の徳本越えが加わった。

月日は巡り、仕事も窓際に移り余裕もできてきたので、山岳会の方もいくらかお手伝いができるようになった。事務局として、ウエストン祭も実行委員長と二人三脚で進めるような立場となり、とうとう支部長まで仰せつかることになった。支部長就任がどうにも断れなくなつたとき、前任の塚原さんと浅間温泉の奥原さんのお宅にお邪魔した。

「ウエストン祭だけやつてりゃいいでな」

奥原さんはそう言われた。無論、10年も支部長を務められ、それだけじゃないことは百も承知の上での言葉だ。「山岳会に入つてウエストン祭をやれ！」私はふと、あのときのことを思い出していた。ウエストン祭だけやつてりゃいいでな……、そ

れはウエストン祭を頼むぞ、ということなのだ。

あえて語る必要もないだろうが、昭和22年6月、戦時中撤去されていたウエストン碑を復旧させる式典が、松方三郎氏、楨有恒氏らの呼びかけで開催され、それがウエストン祭の起源となり、信濃支部のスタートともなった。つまり信濃支部の歴史とウエストン祭は表裏一体なのだ。さらに昭和48(1973)年5月、信濃支部のヒマラヤ・アンナプルナI峰遠征で、4人もの仲間を雪崩で失う事故が発生。しかし、その混乱と悲しみのなかでも、ウエストン祭は催行され続けた。それほど信濃支部にとつては重要な催事なのである。

だから、コロナ禍にあつて、上高地入山すら危ぶまれたときでも、私には支部長として微塵の迷いもなかった。たとえどんな形であっても必ずウエストン祭はやる。そこには、山岳会に入つてウエストン祭をやれ……その言葉の後押しがあつた。

奥原さんは、表情からして気骨が感じられる人で、近寄りたいたいところもあつたが、気配りの人でもあつた。総会や新年会などの出欠ハガキには、必ず事務方をねぎらう添え書きがされていたし、私が支部報に拙文を載せると、感想のお便りを頂戴したりした。奥原さんは、前述のアンナプルナ遠征では、前年の偵察隊長を務められていた。そのときのことか定かではないが、私がアンナプルナ山群一周の報告を寄稿して、ジヨムソン

の「ムーライトゲストハウス」のことに触れたのを、オレも同じところに泊まった……と懐かしそうな感想をいただいたのが嬉しかった。奥原さんは何度もネパールを訪れられ、山ばかりでなく、チベット仏教などにも強い関心を示され、「関わったリンポチエ活仏」という文章を纏められている。

さらにネパールばかりでなく、生まれ故郷の安曇村の山への思いも強く、旧安曇村地籍の多くの山や谷を歩かれている。その地の歴史も紐解かれていて、松本藩の山廻り役・堀川有忠の足跡にまで触れられている。「旧安曇村を巡る」として纏められたものをちようだいたしたが、そこには、趣味としてではなく、血縁者がそのルーツを探るような視線が感じられ、それは故郷の山への限らない愛情そのものだった。

老駿伏歴志在千里（老駿^{りやく}歴^しに伏すとも、志^{こころ}千里に在り）。名馬は老いて既に横たわっていても、思いは千里を駆ける、という意味の中国・曹操の漢詩の一節である。奥原さんから最後にいただいたハガキは、厳冬の北海道・利尻山のテレビ画面を印刷したものだった。厳冬の利尻山、それは奥原さんの青春の山だった。そして、名馬はまさに利尻の空を駆けたのだ。

ところで、元支部員で神戸の大塚宏園さん（故人）も高校の同級生だった。ウェストン祭の本部が上高地の各旅館持ち回りになってからも、大塚さんは、「オレは教永のここに泊まる」と

仰せられていた。Sさんや大塚さんのほかにも何人か、あの歴史的な深志第1回の卒業生にお会いすることがあったが、皆さん一様に「教永、教永」と何か憧れの存在のように語っておられた。

今ころは、そんな同級生や山の仲間と、彼岸の炉端で酒でも酌み交わしているに違いない。そんななかで、不意に「おめえは何やってるだ……」と、あの声が飛んできそうな気がしてならない。

奥原さん、心よりご冥福をお祈りします。合掌。

（米倉逸生）

〈略歴〉

昭和5（1930）年5月30日 長野県安曇村（現・松本市）島々に生まれる

昭和24（1949）年 長野県松本深志高校卒業

昭和25（1950）年 同級生らと戸隠山に登る
家業の上高地西糸屋山荘の経営に従事

3月 高松宮の乗鞍岳コロナ観測所訪問に同行

昭和27（1952）年10月 小山義治氏（北穂高小屋）らと新雪の劔岳

昭和30（1955）年3月 小山義治氏らの利尻山南稜積雪

期初登攀に参加

昭和35(1960)年1月 厳冬期南アルプス南部縦走

昭和41(1966)年1月 知床・羅臼岳(朝日新聞取材班)

昭和47(1972)年 日本山岳会信濃支部アンナプル

ナ1峰偵察隊長

昭和49(1974)年～昭和60(1985)年 日本山岳会信濃支

部第5代支部長

昭和54(1979)年12月 日本山岳会信濃支部ネパール・

パルチャモ峰

昭和60(1985)年3月 利尻山東稜

長男宰氏、岡田昇氏と知床岳

平成4(1992)年3月 長男宰氏と知床・遠音別岳

令和5(2023)年5月11日 逝去 享年92

櫻井 昭吉さん



さくらい・しょうきち

(1934～2024)

会員番号 5021

永年会員

越後の山、特に魚沼や尾瀬に大きな足跡を残された櫻井昭吉さんが、あと17日で90歳になろうという2月26日に亡くなられた。日本山岳会在籍は65年間の長きに及んだ。

櫻井さんは地元の小出町役場(現・魚沼市役所)に勤務されていた。以来、町の発展のため行政一筋に尽力されてこられた方だった。特に土木・建設・土地区画整理関係の分野で実力を発揮して活躍され、退職時の役職は小出町役場区画整理課長であった。とりわけ昭和40年代からは町史始まって以来の大事業の陣頭指揮を執られた。信濃川の大支流、一級河川魚野川は、

度重なる氾濫で住宅が浸水し、早急の対策が求められていた。その解決策として魚野川の川幅を2倍に広げて、氾濫を防止する計画が策定された。この計画を実施するためには、町の繁華街を中心に約400戸近くの集団移転が必要である。そのため

の移転先確保、宅地造成、補償交渉など、困難を乗り越えて事業を完成させた。この事業と並行して関越高速自動車道が小出町を通ることになり、100m幅で数kmにわたる用地買収交渉にも当たられた。新潟と聞くと雪国を連想される方が多いと思われるが、豪雪に悩まされるのは脊梁山脈沿いの中山間地であり、海岸沿いの地域の降雪量は少ない。特に新潟市は大陸からの季節風が佐渡島に遮られて、大雪でも10cm程度の積雪である。新潟県庁の役人は、豪雪地帯の実態をほとんど理解できない人が大部分である。「県道に消雪パイプと流雪溝の両方は要らない」などと言われながらも、魚沼地方の豪雪地に生まれ育った櫻井さんは粘り強く交渉し、無雪道路の拡充に邁進された。

櫻井さんのご自宅はJＲ上越線小出駅近くの高台にある。眼下には河川改修や土地区画整理事業で整備された市街地が望まれる。とりわけ小出橋の袂に立つ「流雪溝発祥の地」の記念碑は、「克雷都市小出町」を実現させた象徴でもある。流雪溝や消雪パイプの整備に尽力された櫻井さんの功績は、あまりにも大きいものであった。令和2（2020）年6月、私家版『戦後小出町の土木史年表』を刊行された。豪雪や水害、養蚕業の盛

んだったころ、土木建築の現場などご自分で撮りためていた写真を基に編集された貴重な記録である。近年は地元の小学校からの依頼で出前授業を引き受けられて、小出町の歴史について講師を務められていた。

櫻井さんの日本山岳会入会は昭和35年である。当時、小出町で「伊倉書林」という書店を経営されていて、首都圏移住後に日本山岳会理事を務められた伊倉剛三さんの紹介である。入会当初は、先輩の伊倉さんに誘われた山行が多かったようである。私は櫻井さんと同じ町に住み、ご自宅も近くにあって、山岳会の行事にはご一緒する機会が多くあった。お聞きした話の中には、櫻井さんしか知り得ないエピソードもたくさんあった。

昭和34（1959）年3月、高松宮様ご一行の浅草岳スキー登山の際は、準備とコース設定のため数日前から現地に入り、嘉平与ボッチ付近に雪洞を掘って避難小屋の準備などの設営に当たった。

登山当日は快晴で、殿下のほかに大学生の三笠宮甯子様、弟宮で高校生の寛仁殿下（髭の殿下として親しまれ、昭和62年に当時の浩宮様とともに日本山岳会に入会、会員番号10002番）を、ラッセルしてムジナ沢にご案内した。

平ヶ岳は今こそ旅行社主催のツアー登山客で賑わっている

が、当時は登山道もなく昭和55年「知られざる山 平ヶ岳」というタイトルの調査研究書が地元研究会から刊行されたほどである。昭和37(1962)年9月15日～19日、深田久彌パーティをガイドして沢を詰め、途中ピバークをしながら藪漕ぎの末山頂に達し、群馬県側に下山している。

同年11月11日～14日、深田が日本百名山を執筆するために魚沼駒ヶ岳(現在、呼称は越後駒ヶ岳に統一)から八海山へ縦走するときに、ガイドとして参加した。櫻井さんは当時28歳の若さで、深田パーティを越後三山縦走にガイドされた実力にも驚かされる。深田は平ヶ岳の文中で櫻井さんを「小出山岳会のS君」と紹介している。

深田の未丈ヶ岳登山でもガイドし、3回目の挑戦で初めて未丈ヶ岳に登頂している。桜井さんは第1回と第3回にガイドをしている。

第1回、あまりに遠く断念(昭和39年3月28日)。

第2回、道に迷って断念(昭和42年11月19日)。

第3回、登頂(昭和43年10月20日)。

特に今の奥只見丸山スキー場から未丈ヶ岳を目指した第1回のスキー登山は、50年を経てもなお苦しい思い出として私に何回も話してくださった。越後支部機関誌『越後山岳』第12号(2012年12月刊)には、このときの状況を次のように投稿している。奥只見山の家をベースにヒマラヤ研修会が開催され、

錚々たる岳人たちが参加していた。「40センチメートル位の新雪をラッセルで進むが、ヒマラヤ遠征の人達は全く前に出て来ない。丸山の山頂から約4キロメートルを自分一人のラッセルで交代が最後までなかった」

第3回の登頂の際は、山頂で櫻井さんが持参した深田久弥著『日本百名山』(昭和39年、新潮社刊)に深田が署名する写真が残されている。

田中澄江著『新花の百名山』(2002年、JTB刊)には櫻井さんが案内した山が2山載っている。浅草岳と平ヶ岳である。

浅草岳は雨にたたられ前岳までと記しているが、平ヶ岳は疲労困憊し4時間かかって玉子石に到着、「今は頂上が大事と足をひきずりひきずり木道の上を歩き……」と記述されている。平ヶ岳は時間切れで山頂までたどり着けなかった、と櫻井さんからお聞きした。

田中の平ヶ岳登山については、いくつかのエピソードをお聞きした。この日の田中パーティは20人であったが、下山に時間がかかった田中を櫻井さんが付き添って中ノ岐林道登山口に着いたときには、あたりはすでに薄暗くなっていた。ほかの仲間はずでに宿泊場所の六日町の温泉旅館に向かっていたので、六日町まで送って行った。なお、ここで誤解のないように解説し

ておくが、ほかの仲間は田中を見捨てて帰った訳ではない。

中ノ岐登山口は奥深い山中であり、現在でも携帯電話は電波が届かない。ツアー添乗員の中には衛星携帯電話を用意しているケースもある。まして当時は、携帯電話などいまだない時代であった。

20人の登山者が予定時間になっても宿泊予定の旅館に到着しないとなれば、捜索隊が出勤する騒ぎになる恐れがある。田中は登山口まで車で行っていた櫻井さんに託して、20人は宿泊場所に向かったのである。

この平ヶ岳登山が何年に行なわれたのかは分からなかったが、文中に「小出町の櫻井宗町長のおかげで登山口まで車を入れ」とある。櫻井宗町長は昭和57年から4年間、小出町町長を務めているので、この4年間のうちであることが分かった。

平ヶ岳の中ノ岐登山口は、中ノ岐林道の終点にある。国道353号の林道入り口は、危険防止のため一般車は乗入禁止で施錠されている。ここから登山口まで歩くと3時間を要する。櫻井宗町長は日本山岳会越後支部会員、会員番号104335番である。なんと日本山岳会への入会紹介者は櫻井昭吉さんである。会員歴は櫻井昭吉さんの方が約30年先輩である。櫻井昭吉さんと櫻井宗町長の計らいで林道を通してもらったことは想像に難くない。

櫻井さんは早くから尾瀬の紹介に努めていて、後輩のガイドの養成やレベル向上に尽力された。平成20年「尾瀬認定ガイド協議会」が設立され、初代副会長に就任された、平成7年に設立された尾瀬保護財団の評議員も歴任された。長年にわたるこれらの功績により、平成26年、環境大臣から表彰された。

櫻井さんは道路行政のプロで道路状況を細かく把握されており、県内はもとより近県の山岳会の行事にはほとんどご自分で車を運転して参加されていた。自然保護の全国集会で立山や尾瀬へ、越後支部の総会や親睦登山、高頭祭など近くに在住している私を乗せて行って下さった。「奥様に運転免許証を取り上げられたら、今度は私が恩返しにお迎えに行きます」と話していたが、高齢者運転免許更新講習会の認知症検査で「70点以上合格のところ前回の検査は85点だった」と嬉しそうに話され、最後までハンドルの握り続けた。私が恩返しに運転する機会はいかに一度もなかった。

戒名には尾瀬・燧ヶ岳の「燧」と「岳」の2文字が付けられていて、生涯を山とともに生きた櫻井さんに相応しい位牌が祭壇に置かれている。

〈略歴〉

(吉田理一)

昭和9(1934)年3月

新潟県小出町生まれ

高等学校卒業後小出町役場に入

序

昭和34(1959)年3月

高松宮様ご一行を浅草岳スキー登山にご案内

昭和35(1960)年

日本山岳会入会(紹介者は伊倉剛三、藤島玄)

昭和37(1962)年

深田久弥を平ヶ岳・魚沼駒ヶ岳に案内

昭和41(1966)年

新田次郎を湯之谷村鷹ノ巣に案内

昭和41(1966)年

越後支部創立20周年記念事業として実施された新潟県境全縦走踏査において第4区・第3班踏査隊員として活躍

昭和41(1966)年5月

越後駒ヶ岳く大水上山く平ヶ岳く尾瀬ヶ原を雪洞2泊で踏査

平成4(1992)年3月

小出町役場退職、区画整理課長岩崎元郎氏を未丈ヶ岳に案内

平成26(2014)年

環境大臣表彰
私家版『戦後小出町の土木史年表』を刊行

令和2(2020)年6月

逝去 享年89

令和6(2024)年2月26日

大石 惇さん



おおし あつし
(1938~2024)
会員番号 5834
永年会員

第5代静岡支部長を12年間務めた、私の親友大石 惇君(静岡大学名誉教授)は、令和6(2024)年1月17日に胸部大動脈瘤破裂でこの世を去った。85歳であった。ピンピンコロリとはいかなかったが、病気で苦しみながら逝ったのではなかったのが、せめてもの慰めであった。3年前の5月、右足変形性膝関節症手術で人工骨を入れ、自在な歩行を期待したが、リハビリがうまくいかずに、歩行不能のまま新年を迎えた矢先のことであった。

彼は静岡市足久保の名刹、南叟寺に葬られたが、あらゆる東

縛やこの世のしがらみから解き放たれて自由になれたはずだ。おそらく彼はそこに眠っていないくて、千の風になって、中国・

新疆ウイグル自治区伊寧の野生りんご新源圃の広大な空を吹き抜ける風になって、新源圃を天空から見回り続けているのだろうと思う。これは関係者誰もがそう願う情念だろう。

大石君は晩年を伊寧の野生りんごの研究施設の建設と、野生りんご原生林の保全に命を懸ける情熱と覚悟で取り組んでいた。その情熱が多くの人を巻き込み、日中共同による1500haの広大な野生りんご原生林の保全事業を起こしたのである。

外国人立ち入り禁止地区にもかかわらず、毎年訪れては現地研究者との交流や支援事業企画を立案するなどの活動を30年にわたり行なってきた。その間に、静岡市にNPO法人・西域生態系保全フォーラムを立ち上げ、新疆を訪れた仲間には優に150人を超え、全員が彼の事業に協力を惜しまなかった。中国共産党の政策にもかかわらず、伊寧地方政府は大石君の情熱に押され、野生りんご原生林23haの現研究面積を将来は100haに拡大する合意書も交換した。彼は育種学を専攻し、地球上の遺伝子の保存に熱心に取り組んでいた。

大阪市街で育ったが、山形生まれの東北人らしい粘り強い性格は終生変わらず、穏和な性格は人を引きつけた。大学山岳部時代は、協調型リーダーシップを発揮し、南アルプスでの和やかな山登りを目指した。元来、静岡勢の山登りの伝統は、戦前

から、自主的に行動するスタイルであり、大石君の性格に合致していたと思われる。

現地の研究者を静岡大学へ招聘し、学位を取らせて現地へ戻すことにも力を注ぎ、後継者作りに意を注いだ。中国の将来について、大石君がどのように見ていたのか話したことはないが、私は主として台湾系識者の見解として、中国は今崩壊しつつある」という予測が的中するのではないかと見ている。

そして、崩壊後は、中国合衆国(ユナイテッド・ステイト・オブ・チャイナ)となるのではないかと思う。中国共産党の消滅である。そうなれば、伊寧の野生りんご新源圃研究施設は誰でも自由に行けるし、大石君が望んだ理想の研究施設になるのではないかと期待している。その日が1日も早く実現するのを、彼は天空から眺めて微笑んでいることだろう。

学部生時代の太石君については、彼と一番長く時間を共有した相棒として過ごした私は、下宿も同宿、山岳部も同期、通学も1台の自転車を通い、トレーニングも一緒に生活であった。思い出話には尽きないほどあるが、いくつかのエピソードを取り上げる。東北大学出身の両親に、幼くして養子として大阪で育てられ、大阪追手門学院高等部を出て、静岡大学に入学した彼は、音楽好きの両親の影響でクラシック音楽が好きで、たくさんレコードを持参していた。彼の下宿にはいつも数人の山岳部員がクラシック音楽を聴きに集まっては、音楽そっちのけ

登山論を闘わせていた。多少の酒が入ると、その様はまさに梁山泊の感があつた。

その雰囲気は時代を反映して、お互いの気心が分かり団結を強め、強い山岳部を産む素地になっていた。当時、山岳部員は1学年10人ほどだったが、真剣に山登りに取り組んでいたのは数人で、その溜まり場が大石君の下宿であつた。長じて、その雰囲気がヒマラヤ遠征の機運に繋がつたのではないかと思う。勿論、その引き金になつたのは酒戸弥二郎教授（三高時代、積雪期前穂高岳初登頂者）のノシャック初登頂である。1960年、京都大学学士山岳会が派遣したパミール遠征隊の隊長を引き受けた酒戸教授の存在は、われわれに衝撃を与えた。われわれもヒマラヤへ行こうが合言葉になつた。身近にヒマラヤ経験者がいるといないとは、雲泥の差がある。この刺激がわれわれを奮い立たせた。

1962年、卒業と同時にヒマラヤ研究会を立ち上げて、ヒマラヤ情報の収集に取り掛かつた。私は就職して東京へ、大石君は大学院進学で大阪へと別れた。直後、私は『山岳省察』（今西錦司著）と出会い、初登頂主義に感動し、その後のわれわれの目指すべき指針を確定した。この書物との巡り会いは決定的であつた。

20歳代でのヒマラヤ7000m級の初登頂は博士号に匹敵する価値がある。と今西は述べている。もともといつかは博士号

の取得を考えていた私は、いたく感動し、20歳代でのヒマラヤ7000m級未踏峰の初登頂を当面の人生目標に定めた。以後われわれのすべての活動は、この目標達成のために動いた。大石君は大阪府立大学大学院修士過程を経て、大阪の塩野義製薬植物薬品部に就職していた。私は東京の中外製薬開発部にいた。

1964年、深田久弥氏が只見銀山平で開催された全国海外登山技術研修会の席上、「静岡大学のヒマラヤ計画」を公表した。だが、計画は諸般の事情でなかなか進展しなかつた。大石君はひとりで悶々としていた。私は情報を求めて多くのヒマラヤ関係者に面会して歩いた。このとき酒戸教授のひと言「泰安と相談せよ」。加藤泰安さんの紹介は威力があつた。誰もが会つてくれた。お陰で必要な情報はたちまち集まつた。有志に「ヒマラヤ情報」として流した。ネパール・ヒマラヤの登山禁止令、カラコルムへの渡航不可（印パ紛争）などの間、私は1967年、コロンビア・アンデス遠征で多くの経験を積んだ。

1969年、ネパール・ヒマラヤ登山解禁間近とのニュースが流れ、世界の目がヒマラヤに注がれ、翌年解禁が実現した。われわれはチューレン・ヒマール計画のファイルを取り出して、実現に踏み出した。諸般の事情を考慮して、1970年ポスト・モンスーン期（秋期）の申請をネパール政府に行なつた。だが、許可はなかなか下りなかつた。8月になつても音沙汰は

なかった。8月15日までに許可がなければ、今年の遠征は中止と決めて、ダメ押し電報をネパール政府と日本大使館に打った。8月13日、大使館の登山担当の松沢憲夫氏から「ネパール政府の内諾を得た、先発隊員を派遣せよ」との電報が届いた。期限ギリギリの許可であった。ダウラギリ1峰をねらう同志社大学隊はすでにBCを設置した、と新聞は報じていた。

われわれは隊長、登攀隊長、隊員4人の小さなパーティで全員理系出身者。隊長は旧制山岳部の中興の祖と言われた芹沢喬、一流企業で現役の工作部長の47歳、並の判断ではまず参加しない立場の人である。大石君は塩野義製薬を退職して参加し、常に私の相棒を務めてくれた32歳。一級下の福井正義君は粘着気質の無口なタイプで、高校の数学の教諭。大学で化学科だったという長谷川宏蔵君は出かける直前に参加を申し出てきた。先発隊員は農学部学生の堂馬英二君。天候に恵まれ、シエルバの協力があつて同年10月28日、主峰の初登頂に成功したが、紙一重で失敗したかもしれないヒマラヤ初陣登山だった。

帰路、カルカッタ（現・コルカタ）で帰国する隊員たちと別れ、大石君と私はインド・アッサム州に向かった。アッサム・ヒマラヤの最高峰カントー峰（7090m）を南面から日印合同登山隊で登頂の可能性を探る旅であった。45日間現地で粘り交渉したが、インド山岳財団の許可は得られなかった。このとき大石君が「静岡大学に職を見つけない」という希望があるこ

とを知ったので、農学部長の酒戸教授に大石君の希望を伝え、「どこかの教室の助手の口を按配してほしい」と手紙を出した。正月に帰国すると、大石君の助手の話は順調に進んでいるらしいことが分かり、酒戸教授の政治力に敬服した。こうして大石君は大学に職を得て、助手、助教授、教授の道を歩むことになった。彼自身は酒戸先生の按配についてはよく理解していないような節があつたが、この件については、私も酒戸教授も口を閉ざしてきた。

次は1975年、カラコルムのテラム・カンリ1峰（7464m）遠征、初登頂である。片山教授の突然の不参加の意向が伝えられ、急遽、太田欣也氏を隊長代行に、大石君を副隊長に考えたが、彼と同期の山下潔君をすでにマネージャーに任命していたので、言い出せなかった。幸い1人の負傷者もなく初登頂に成功した。だが、帰国途中で口にした水が因で、激しい黄疸症状が出て入院した隊員が数名いたことは、開発途上国の旅では飲料水に注意を怠らないことが肝要であることを示した。

そして、1987年、静岡大学西域学術登山隊が結成され、私が登山隊長に、大石君が学術隊の実質のリーダーとなった。結果はすでにご承知の通り、初登頂はならず、学術隊は成果を挙げた。後にその成果の一部から新疆伊寧郊外の野生のりんご原生林の保全事業に取り組み特定非営利活動法人・西域生態系

保全フォーラム（前述）が、大石君の努力で静岡市に2005年に誕生した。

1988年から彼は毎年新疆を訪れているが、現地研究者との交流や天山山脈の未踏峰の偵察、新源地区の野生りんご原生林保全計画など、当地での目覚ましい活躍の始まりであった。中国西域は古くからシルクロードと呼ばれ、世界文明の十字路口であったことから多くの観光資源があり、日本人なら誰しもが一度は訪れてみたいと思う地域である。この魅力的な地に大石君は、研究拠点と登山基地を持つと考えたのだ。われわれの海外登山活動が、どこかで鹵車が一つでも狂っていれば、西域ではなく雲南やチベットになっていた可能性もあったのだが、天はわれわれに西域を選ばせ、大石君は西域のパイオニアとなる運命にあった。

そして、我々の海外登山が、比較的短いアプローチでヒマラヤ並みの登山技術を求められる天山山脈に焦点が絞られたのである。

1995年、第1次天山山脈グルグル・ムズターグ（5250m）偵察隊派遣（8人）。その手強さが証明された。

1996年、第2次偵察隊派遣（5人）。頂上は落とせなかった。

1997年、第3次隊派遣（8人）。学生4人を含む隊で初登頂。

2004年、第4次偵察隊（6人）。63332m峰北面偵察、困難。

2007年、第5次偵察隊（5人）。ムザルト氷河を探るも悪

天候で敗退。

シルクロード・トレッキング隊も含めると、延べ50人余の会員が参加したプロジェクトであった。ヒマラヤで活躍した会員たちが老境に入り、若い世代の参加が求められる時代になったが、若者にははや海外の未踏峰登山に興味も関心も示さなくなっていた。大石君はこれらの偵察隊や登山隊に毎年現地参加していた。

彼が大学で長年山岳部の顧問教官を務めたことは承知しているが、残念ながら在任中に彼が中心になって海外登山を企画、実施した計画はなかった。私は密かに期待していたのだが、彼は動かなかった。動けなかったのか。大学山岳部が現役学生から敬遠され、部員が激減もしくは新入部員ゼロの年もあったりと、山岳部が冬の時代を迎えていた、その期間が比較的長く続いた影響もあったのだろう。大石君は研究に打ち込んでいたのだと思う。

最近数年間、ここ静岡では、静岡大学の分割と浜松医大との合併問題が脚光を浴びていて、静岡大学の分離に絶対反対のわれわれ2人は、学内の同志や元学長らと常に連絡を取り合い、分離阻止のために新学長選出に関しても裏で動いてきた。その甲斐があつて、新学長は静岡大学の分離絶対反対（合併論者）の学者を選出することができ、今後、静岡大学は合併によりさらに大きな大学に発展する可能性が見えてきた。

最後に、彼が残した文章について触れる。2004年3月、彼は静岡大学を定年退官した。その際に、以前から静岡新聞のコラム「時評」欄に不定期に書き続けていた社会時評を、90ページの小冊子『折々の想い』にまとめて関係者に配った。その内容を確認すると、大石君が社会をどのように見ていたのか、興味ある内容が見て取れる。

第1号は「力を合わせて環境浄化」―美しい地球を守るために―(1998年3月)、以後第43号「栽培の苦勞相応の罰を」―相次ぐ農作物の盗難―(2003年10月)にわたり書き続けた。ほかに「自給自足の道開け」―歪んだ日本社会―、「刃物制限は人間劣化の恐れ」―果物の消費とナイフ―、「精神的な厳しい修行」―山登りの意義―、「まず専用道路を増やす」―真の自転車王国を築け―、「やめたい…学問一辺倒」―21世紀に向けた人づくり―、「教育に競争は必要ない」―どうする中学生の勉強嫌い―、「子供を個室に入れるな」―優しい社会を作るために―、「政令都市百年の計に向け」―新静岡市に動植物自然公園を―、「日本の食文化壊す愚行」―なぜ食卓に骨なし魚か―、「生き物学の再教育必要」―生命軽視する現在の風潮―、「自分自身の心の名山」を―静岡百名山は必要か―等々。

大きなテーマが特徴といえるが、それを1300字以内で表現するのは難しい課題だ。視点の取り方が重要になるが、彼の自然観、価値観、人生観、世界観は定まっていたと見る。

大石君の人生を振り返ってみると、山の人生においては2つの著名なヒマラヤの未踏峰登山に足跡を残したので、自分の持ち味を活かした「海外登山の人間の側面」を描いた著書を著わしてほしかった。

学問研究の人生では、専門分野が世界に誇る業績の挙がる分野ではなかった。地味な業績の積み重ねの日々であったと思われ、学生指導に重点を置いていたのではないか。未知を探究する学問の世界は、終着のない永遠の挑戦の旅路であるが、定年退官や人間の寿命が、一つの区切りを明示することになる。

大石君の一生は、『野生りんごと歩んだ30年』と題する著書を発行できなかつた以外は、ほぼ満足すべき人生であったと、周りも本人も認める堂々たる生き方であったと思われる。

(山本良三)

〈略歴〉

昭和13(1938)年 山形県東置賜郡生まれ
昭和29(1954)年 大阪追手門学院高等部入学
昭和33(1958)年 静岡大学農学部入学、山岳部入部
昭和37(1962)年 大阪府立大学大学院入学
昭和45(1970)年 チューレン・ヒマール遠征隊参加
昭和46(1971)年 静岡大学農学部助手
昭和50(1975)年 テラム・カンリ遠征隊参加
昭和58(1983)年 静岡大学助教授

昭和62(1987)年 西域学術登山隊、学術隊参加

平成2(1990)年 静岡大学教授

平成7(1995)年 第1次天山(グルグル・ムズターグ…5

250m) 偵察隊参加

平成8(1996)年 第2次天山偵察隊参加

平成9(1997)年 第3次天山登山隊(グルグル・ムズター

グ) 初登頂隊長

平成12(2000)年 静岡支部台湾登山参加

平成14(2002)年 静岡支部天山(5192m) 偵察隊長

平成16(2004)年 静岡支部モンゴル、アスラルトハイル

ハーン登山隊長

第4次天山(6332m) 北面偵察隊参加

静岡大学を定年退官

平成17(2005)年 NPO法人・西域生態系保全フォーラム

設立

平成19(2007)年 第5次天山(6332m) ムザルト氷河

偵察隊参加

平成20(2008)年から令和元(2019)年まで 11年間毎年

新疆を訪問

令和元(2019)年9月 新疆最後の旅

令和6(2024)年1月17日 逝去 享年85

浦 一美さん



うら かずみ
(1947～2023)
会員番号 9506
通常会員

昨年(2023年) 11月3日、浦一美・福岡支部長が突然亡くなった。腎盂ガンがリンパから肺にも転移していたことだった。そのひと月前の10月2日には、浦支部長とは翌週からの支部企画山行「耶馬溪から英彦山へのロングトレイル」について打ち合わせを行なったが、腎結石なのか横腹が痛いので山行には参加できそうにないと相談された。浦さんがリーダーで企画したものであったので、直前ではあったが延期を言言した。私はその後、秋の穂高山行に出かけたが帰着してから気になり、10月14日に浦さんの携帯に電話したところ、福岡中央病院に検

査入院中であつた。そこで浦さんが「今結果が出たばかりでまだ誰にも言っていないが、ひと月もたないようだ」と淡々と話されたことに驚いてしまい、返す言葉も出なかつた。そして、この検査入院後、わずか2週間で帰らぬ人となつてしまつた。直前までお元気であつたので、信じ難いことであつた。

昨年7月、浦さんとはヨーロッパ・アルプスでハイキングを楽しんでいた。コロナ禍での制限が明け、浦さんの登山教室受講者の方々との以前からの約束で企画されたもので、私も同行した。現地ではシャモニ在住のフランス国際山岳ガイド・白野民樹氏も合流し、それぞれがかつて登つた山々を眺めながら登山史にも触れて歩くと、受講生の方たちも聞き入つていた。マッターホルンを背景に山小屋のテラスでビールを飲み、饒舌になつた浦さんの笑顔が忘れられない。

この登山教室受講者の方々との海外トレッキングは毎年のように出かけられていたが、私は2011年夏に東チベット、カム地方のミニヤ・コンカ山群に案内したことがあつた。ブルーポピーなどの高山植物咲く高原でハイキング後、山麓のユーロシシ村の民家に泊まつた。そこで村人たちと宴会となり、浦さんはチベット衣装を身に着けチベット民謡に合わせてご機嫌に踊り出したのである。意外な姿であつたので印象に残っている。

浦さんが登山を始めたきっかけは実兄、重藤秀世氏の影響だ。「大学1年までは野球をしていたが、突然、登山をしたいと言出し、近場の岩場でクライミングの手ほどきをした。これが性に合つていたようで山岳部に鞍替えした」。これは最近、重藤氏からお聞きし知つたことだ。八幡大学山岳部の合宿で、冬季鹿島槍ヶ岳にて遭難したことがあると聞いたことがあつた。偶然近くに居合わせた小倉山岳会の三村幸男氏らに救助されたことだつた。私は後に偶然、三村氏とチベット山行で知り合いになつたので、四十数年ぶりに再会の仲を取つたことがあつた。あの救助がなかつたら今の自分はなかつたと、「山とスキーの店・ラリーグラス」のスタッフ全員を集めて三村さんを紹介し、感謝の言葉を述べておられた。

1971年、しんつくし山岳会の海外登山研究会から分離独立した福岡GCC(グレイシャー・クライマーズ・クラブ)の結成メンバーの1人でもあり、代表の太田五雄氏、倉智清司氏らとともに屋久島の未踏ルートの開拓から始まり、ネパール、パキスタン、チベットの山々に挑戦していった。1973年にラントアン・ヒマールへ入り、これがきっかけでサラリーマン生活を終え、1976年、福岡に「ラリーグラス」を創業された。「ラリーグラス」では初心者から海外遠征隊まで地域の登山者のサポート、登山文化の普及に尽力されてきた。私も大学時代から店にはお世話になり、いろいろなアドバイスを受けていた。

長年カルチャー・スクールなどで登山教室を担当されたこともあり、卒業生の山の会の監修などもされていた。

若いころある病気で倒れ、それ以来、医者から低酸素環境は絶対にダメときつく止められていたことを、1998年日本山岳会福岡支部ナムナニ遠征隊の報告書に書いておられる。それでも、1983年チョー・オユー登山隊長、1994年アイランド・ピーク登山、1996年テント・ピーク登山を自ら組織し、ヒマラヤ行きを続けていたのだから相当の努力があつたに違いない。

1991年に福岡県山岳連盟福岡支部を改め、福岡市山岳協会が設立された。浦さんは、過去の古い体質を改め、若い会員たちの夢と希望をかなえさせたいという思いからの設立だったと語っていた。福岡の岳人は昭和初期からその活躍ぶりは世に知られていた。先輩方の流れを受け若い会員たちも育っていたが、単一の山岳会では難しい大きな海外遠征登山の流れを作り出そうとされた。設立から3年間の準備を経て1996年福岡市山岳協会・チョモランマ峰登山隊が組織され、池邊勝利隊長以下15名の編成で4名の隊員が登頂に成功したのは、その功績といえよう。

また、福岡県の山岳団体を束ねて、共同して取り組む地道な活動についても浦さんの功績は大きい。2002年の「福岡クライミング・ボード設置要請運動」と「世界山岳年企画・登山

者フォーラム in福岡」は、福岡県山岳連盟、福岡県勤労者山岳連盟、福岡市山岳協会、県岳連北九州支部、九州フリークライミング協会、日本山岳会福岡支部の山岳団体が共同して取り組んだ画期的な活動であったが、これは後に「夏山フェスタ in福岡」など山岳団体の枠を超えた企画などの礎となった。これらは常に浦さんを中心とした活躍によるものであった。

社会人山岳団体会員の減少が始まると登山事故も増え、衰退した山岳団体では登山者育成に対応しきれなくなると考え、九州でもガイド業の必要性が生じた。浦さんは公益社団法人・日本山岳ガイド協会所属の全九州アルパインガイドクラブを結成し、長年代表を務められた。

日本山岳会では創立100周年記念事業の中央分水嶺踏査、創立120周年記念事業の全国山岳古道調査の福岡支部担当山行を実施リーダーとして担当され、2021年から福岡支部長に就任されていた。

まさに福岡・九州の登山界を牽引してきた人生であった。家業の「ラリーグラス」も数年前から次世代へのバトンタッチが完遂して裏方に回られたこともあり、これから支部長として福岡支部の活性化に尽力いただけると皆が期待していただけに哀惜の念に堪えない。

(渡部秀樹)

〈略歴〉

- 昭和22(1947)年1月 福岡県生まれ
- 昭和44(1969)年 八幡大学山岳部の合宿で冬季鹿島槍ヶ岳にて遭難・生還
- 昭和45(1970)年 しんつくし山岳会入会
- 昭和46(1971)年 福岡GCC設立
- 昭和47(1972)年 屋久島・七五岳北壁ダイレクトル
ト初登攀
- 昭和48(1973)年 屋久島・宮之浦川遡行
- ランタン・ヒマール遠征ドラグマル
ボ・リ登頂
- 昭和50(1975)年 屋久島・七五岳東稜福岡GCCル
ト初登攀
- 昭和51(1976)年 「山とスキーの店・ラリーグラス」
を創業
- 昭和55(1980)年 アンナプルナ・ヒマール遠征
- 昭和58(1983)年 チョー・オユー登山隊長
- 平成6(1994)年 アイランド・ピーク登山
- 平成8(1996)年 テント・ピーク登山
- 平成3(1991)年 福岡市山岳協会が設立
- 平成10(1998)年 JAC福岡支部ナムナニ遠征
- 福岡市山岳協会会長

全九州アルパインガイドクラブ会長

2021年から日本山岳会福岡支部長

会 務 報 告

2023年(令和5年4月)～2024年(令和6年3月)

(◎総会 □理事会 ◇人事 ☆事業)

◇2023年度役員・評議員・支部長

会 長 橋本しをり

副 会 長 永田弘太郎、桐生恒治、飯田 肇

常務理事 長島泰博、南久松宏光、平川陽一郎

理 事 松田宏也、久保田賢次、川瀬恵一、池田 功、望月賢司、

原田智紀、猿渡良太郎

監 事 石川一樹、佐野忠則

委員会の担当理事

【総務】 長島、久保田

【デジタルメディア】 永田、川瀬

【財務】 南久松、猿渡

【公益法人運営委員会】 長島、望月

【改革事業推進】 橋本、平川

【国際】 橋本、松田

【記念事業】 橋本、原田、猿渡

【支部事業】 桐生、松田

【資料映像】 飯田、望月

【自然保護】 桐生、池田

【科学】 飯田、川瀬

【会報編集】 永田、久保田

【山岳編集】 永田、久保田

【図書】 飯田、松田

【「山の日」事業】 平川、望月

【山行】 長島、原田

【遭難対策】 平川、川瀬

【YOUTH CLUB】 平川、池田、原田

【子どもと登山】 永田、望月

【医療】 橋本、原田

【山岳研究所運営】 平川、原田

【国土地理院WG】 長島、松田

支 部 長 (北海道) 黒川伸一・(青森) 須々田秀美・(岩手) 阿部陽

子・(宮城) 千石信夫・(秋田) 佐藤和志・(山形) 鈴木理

夫・(福島) 渡部展雄・(茨城) 浅野勝己・(栃木) 渡邊雄

二・(群馬) 根井康雄・(埼玉) 大山光一・(千葉) 松田宏

也・(東京多摩) 野口いづみ・(神奈川) 込田伸夫・(越後)

後藤正弘・(富山) 鍛冶哲郎・(石川) 樽矢導章・(福井)

森田信人・(山梨) 北原孝浩・(信濃) 東 英樹・(岐阜)
東明 裕・(静岡) 中村博和・(東海) 高橋玲司・(京都)
滋賀) 笠谷 茂・(関西) 水谷 透・(山陰) 白根 一・
(広島) 森戸隆男・(四国) 尾野益大・(福岡) 浦 一美・
(北九州) 竹本正幸・(熊本) 土井 理・(東九州) 安東桂
三・(宮崎) 日高研二

令和5年度第1回(4月度)理事会議事録

日時 令和5年4月12日(水) 19時〜21時30分

場所 Zoom(オンライン) ルーム

出席者 古野会長、坂井・山本・橋本各副会長、柏・南久松各常務理事、松原・松田・清水・平川・川瀬・久保田・長島各理事、佐野・黒川監事

欠席者 萩原常務理事、飯田理事

オブザーバー 節田会報編集人

【審議事項】

- 1・京王電鉄よりの高額寄附の受け入れについて承認した。(南久松)
(賛成13反対0)
- 2・山岳祭の補助金申請4件(福井、越後、北九州、宮崎)について承認した。(坂井) (賛成13反対0)
- 3・京都・滋賀支部支部長交代について承認した。(柏) (賛成13反対0)

- 4・宮崎支部支部長交代について承認した。(柏) (賛成13反対0)
- 5・事務局員給与の令和5年度昇給額について承認した(柏) (賛成13反対0)
- 6・財務改善部会(仮称)の設置について財務委員長、監事から提案があり承認した。(古野) (賛成13反対0)

【協議事項】

- 1・次期理事会の体制について協議した。(古野、柏)

【報告事項】

- 1・正会員18名、準会員12名の入会承認報告があった。(古野)
- 2・寄附金7件の受入れ報告があった。(南久松)
- 3・会費納入方法の変更(クレジットカードでの支払いの中止)について説明があった。(南久松)
- 4・田村典子職員の退職金の提示について説明があった。(柏)
- 5・新事務局員の入局について報告があった。(柏)
- 6・内閣府への事業計画・予算の提出について報告があった。(柏、南久松)
- 7・11支部から申請のあった支部特別事業補助金の審査結果について報告があった。(松田)
- 8・創立120周年記念事業募金者報告、募金の協力依頼について説明があった。(柏)
- 9・東京都写真美術館の資料等の寄託期間変更について報告があった。(清水)

10・上高地山岳研究所利用要領の改正（施設維持協力金5000円の負担）について報告があった。（川瀬）

【その他】

1・「山」4月号の発行について（節田）

令和5年度第2回（5月度）理事会議事録

日時 令和5年5月17日（水） 19時00分～

場所 zoom（オンライン） ルーム

出席者 古野会長、坂井・橋本各副会長、柏・南久松・萩原各常務理事、松原・松田・清水・平川・川瀬・久保田・長島各理事、佐野・黒川監事

欠席者 山本副会長、飯田理事

オブザーバー 節田会報編集人

【審議事項】

- 1・令和5年度総会開催について承認した。（柏）（賛成13反対0）
- 2・令和5年度総会第1号議案（令和4年度事業報告案）について承認した。（柏）（賛成13反対0）
- 3・令和5年度総会第2号議案（令和4年度決算報告案）について承認した。（南久松）（賛成13反対0）
- 4・令和5年度総会第3号議案（令和5・6年度役員案選任）について承認した。（柏）（賛成13反対0）
- 5・ウエストン祭および田部祭、木暮祭の助成金申請について承認し

た。（坂井）（賛成13反対0）

6・北海道支部支部長交代について承認した。（柏）（賛成13反対0）

7・岐阜支部支部長交代について承認した。（柏）（賛成13反対0）

8・関西支部支部長交代について承認した。（柏）（賛成13反対0）

9・北九州支部支部長交代について承認した。（柏）（賛成13反対0）

【報告事項】

1・正会員10名、準会員4名の入会承認報告があった。（古野）

2・GW雪山天気予報報告があった。（柏）

3・カナデアアン・ロッキーにおけるユースキャンプ2023飯計画書の説明があった。（松原）

【その他】

1・「山」5月号発行について報告があった。（節田）

令和5年度第3回（6月度）理事会議事録

日時 令和5年6月14日（水） 19時00分～21時30分

場所 zoom（オンライン） ルーム

出席者 古野会長、山本・坂井・橋本各副会長、柏・南久松・萩原各常務理事、松原・松田・清水・飯田・平川・川瀬・久保田・長島各理事、佐野・黒川監事

欠席者 なし

オブザーバー 節田会報編集人

【審議事項】

1・2024年全国支部懇談会の開催について神奈川支部へ依頼したことを承認した。(坂井)(賛成15反対0)

2・支部山岳祭補助金申請(藤木祭)について承認した(坂井)(賛成15反対0)

3・越後支部支部長交代について承認した。(柏)(賛成15反対0)

4・子どもと登山委員会の委員長交代について承認した。(飯田)(賛成15反対0)

【協議事項】

1・東京新支部構想について、今後の進め方について協議した。(坂井)

【報告事項】

1・正会員16名、準会員6名の入会承認報告があった。(古野)

2・寄附金および助成金15件の受入れの報告があった。(南久松)

3・104号室のMEIJIを導入決定について報告があった。(柏)

4・6月8日、リモートにて支部連絡会議を実施したことについて報告があった。(柏)

5・事務局員交代に当たり職務内容の報告があった。(柏)

6・田村職員の退職金について報告があった。(南久松)

7・退職した田村元職員の図書室整理作業の協力について報告があった。(柏)

8・ルーム利用要領の改訂について報告があった。(柏)

9・創立120周年記念事業募金の現状報告があった。(柏)

10・内閣府への令和4年度報告について報告があった。(柏)

【その他】

1・「山」6月号発行について報告があった。(節田)

2・総会スケジュールについて確認した。(柏)

◎令和5年度通常総会

6月24日(土) 14時00分～

東京都千代田区六番町 主婦会館「プラザエフ」

出席者97名、委任状530名(会員数4221名)

議案 1、令和4年度事業報告・決算報告

2、令和5年度事業計画・予算案

3、令和5、6年度役員(案)選任の件

議案審議はいずれも原案どおりに可決承認された。

令和2年度から続いた新型コロナウイルス感染症拡大による行動制限が、令和4年半ばから徐々に解かれ、本会の活動も活発化してきた。

冒頭、古野会長より、「久しぶりに大勢の会員が一堂に会して総会を開くことができたのは、何より喜ばしく思う。コロナ禍の中、創立当時のパイオニア精神や活発に活動してきた先人たちの知恵や行為こそ今後の日本山岳会のあり方に大きな影響を与え続けるだろう。創立120周年記念事業、支部中心に活動する各地の山岳祭などは貴重な歴史や山岳文化を継承するものであること、登山の自然に親しみたいとい本来の想いは、人生百年時代における価値としてとても大き

い」と話した。そして、この総会を境に新理事会に代替わりするが、今後も会員のさらなる協力をお願いしたいと結んだ。

□令和5年6月24日 臨時理事会議事録

日時 令和5年6月24日(土) 16時15分～16時45分

場所 主婦会館「プラザエフ」

総会後、新役員の互選により会長、副会長、常務理事が選出され、各役員の担当についても決議された。

令和5年度第4回（7月度）理事会議事録

日時 令和5年7月12日(水) 19時00分～21時00分

場所 集会室およびオンライン（Zoom）

出席者 橋本会長、永田・桐生・飯田副会長、長島・南久松・平川各
常務理事、松田・池田・望月・原田・川瀬・久保田各理事、佐野・石
川各監事

欠席者 猿渡理事

オブザーバー 節田会報編集人

【審議事項】

- 会 務 報 告
- 1・支部助成金の送金について（南久松）（賛成13、反対0）
 - 2・監査法人との業務契約について（南久松）（賛成13、反対0）
 - 3・総務委員会委員長の交代について（長島）（賛成13、反対0）
 - 4・科学委員会委員長の交代について（川瀬）（賛成13、反対0）

- 5・財務委員会委員長の交代について（南久松）（賛成13、反対0）
- 6・令和5年前期海外登山助成金の申請について（桐生）（賛成13、反対0）
- 7・支部の会員増と退会者減対策について（松田）（賛成13、反対0）

【協議事項】

- 1・理事会など年間スケジュールおよび取り組みが必要な施策について協議した（長島）
- 2・首都圏会員活性化対策について協議した（松田、平川、長島）

【報告事項】

- 1・正会員12名、準会員4名の入会を承認した旨、報告があった。（橋本）
- 2・寄附金および助成金4件、20万円の受入れ報告があった。（南久松）
- 3・コピー機の入れ替え（リース期間終了に伴う）について報告があった。（長島）
- 4・総会資料の郵送費（銀座郵便局からの指摘）について報告があった。（長島）
- 5・グーグルワークスペースの活用手順について報告があった。（永田）
- 6・『日本山岳会百年史』の理事への配布について報告があった。（永田）
- 7・事務職員（パート）の募集について報告があった。（長島）

8・委員会担務の新旧の引継ぎについて報告があった。(長島)

9・山岳安全対策ネットワーク協議会(COMPASS)のバナーをJACホームページに設置する報告があった。(川瀬)

【その他】

1・「山」7月号発行について報告があった(節田)

■8月の理事会は夏休みのため休会

令和5年度第5回(9月度)理事会議事録

日時 令和5年9月14日(木) 19時00分～21時00分

場所 集会所およびオンライン(zoom)

出席者 橋本会長、永田・桐生・飯田副会長、長島・南久松・平川各
常務理事、松田・池田・望月・原田・川瀬・猿渡・久保田各理事、佐
野・石川各監事

【審議事項】

1・海外登山助成に関し1隊の中止と追加について(桐生)(賛成14、
反対0)

2・評議委員会の開催について(長島)(賛成14、反対0)

3・支部連絡会の議題と進め方(アンケート結果、活性化の手法、入
会金、準会員制度)(松田、長島)(賛成14、反対0)

4・会報の電子配信の試行について(長島)(賛成14、反対0)

5・晩餐会参加費の値上げについて(長島)(賛成14、反対0)

6・晩餐会の講演、若者向けの立食会について(長島)(賛成14、反対0)

7・ヒマラヤキャンプの連絡体制について(長島)(賛成14、反対0)

8・立教大学山岳部100周年パーティについて(長島)(賛成14、反
対0)

【協議事項】

1・管理人室(居住スペース)の借り受けについて協議した(長島)

【報告事項】

1・入会承認報告(橋本)

2・寄附金および助成金受入報告(南久松)

3・秩父宮記念山岳賞の進捗状況(飯田)

4・ルーム内の展示およびリニューアル、整理(飯田)

5・首都圏活性化検討会の状況報告(松田、平川、長島)

6・「山岳」の納本(11月号と同封予定)(長島)

7・事務職の体制について(2名体制)(長島)

8・藤川職員の退職金について(長島)

9・2024年全国支部懇談会(神奈川支部)について(桐生)

10・創立120周年記念式典の方向性について(久保田)

11・アルバータ登頂100周年(永田、平川)

12・新入会員オリエンテーション(久保田)

13・東九州支部事故報告(川瀬)

14・9月13日開催の財務委員会からの財務改善提案について(南久松)

令和5年度第6回（10月度）理事会議事録

日時 令和5年10月12日(木) 19時00分～21時15分

場所 集会所およびオンライン（Zoom）

出席者 橋本会長、永田・桐生・飯田副会長、長島・南久松・平川各
常務理事、松田・池田・望月・原田・川瀬・猿渡・久保田各理事、佐
野・石川各監事

オブザーバー 節田会報編集人

【審議事項】

- 1・坂井広志会員からの高額寄付金の受入について（南久松）（賛成14、
反対0）
 - 2・評議員懇談会の開催および説明内容について（長島）（賛成14、反
対0）
 - 3・支部連絡会の結果を受けて実施することを確認した（会報の電子
配信、入金見直し）（長島）（賛成14、反対0）
 - 4・首都圏活性化に向けて東京支部設立を検討する方向を確認した
（長島）（賛成14、反対0）
 - 5・晩餐会のJTBへの外注について承認した（長島）（賛成14、反対
0）
- 【協議事項】**
- 1・次年度の事業計画と予算について協議した（長島）
 - 2・Google Workspace の利用について協議した（永田）
- 【報告事項】**

1・海外登山助成について（桐生）

2・寄附金および助成金受入について（南久松）

3・JAPAN TRAIL FORUMへの出席について（久保田）

4・秩父宮記念山岳賞の進捗状況について（飯田）

5・各支部から要請される会合・イベントへの理事の参加について
（桐生）

6・管理人室（居住居）の借り受けについて（長島）

7・首都圏活性化検討会の状況報告（松田、平川、長島）

8・晩餐会準備状況、秩父宮記念山岳賞について（永田、飯田、長島）

9・晩餐会の講演および、若者向けの立食会について（永田、長島）

10・入会承認報告（橋本）

11・YOUTH CLUBの備品の取り扱いについて（永田、平川）

令和5年度第7回（11月度）理事会議事録

日時 令和5年11月9日(木) 19時00分～21時00分

場所 集会所およびオンライン（Zoom）

出席者 橋本会長、永田・桐生・飯田副会長、長島・南久松・平川各
常務理事、松田・池田・望月・原田・川瀬・猿渡・久保田各理事、佐
野・石川各監事

オブザーバー 節田会報編集人

【審議事項】

- 1・支部行事への理事派遣依頼書について（桐生）（賛成14、反対0）

- 2・パートタイム職員規程の改定について（長島）（賛成14、反対0）
- 3・評議員懇談会の準備（進め方、資料などの確認）について（長島）（賛成14、反対0）
- 4・秩父宮記念山岳賞の審査結果の承認について（飯田）（賛成14、反対0）

【協議事項】

- 1・年次晩餐会の外注化について協議した（長島）
- 2・支部連絡会の議題（会報「山」の電子配信を試みた結果の反応と今後の方向性、入会金の減額など）について協議した（長島）
- 3・管理人室（居住スペース）の借り受けについて協議した（長島）
- 4・ルーム利用料金の徴収について協議した（長島）

【報告事項】

- 1・入会承認報告（橋本）
- 2・寄附金および助成金受入報告（南久松）
- 3・海外登山助成隊の現在までの成否結果（桐生）
- 4・首都圏活性化検討に向けての進捗状況（松田）
- 5・年次晩餐会の準備状況（長島）
- 6・JMSCAからのアジア山岳連盟集会への協力依頼について（長島）
- 7・若者向けの講演会および立食会について（永田）
- 8・YOUTH CLUBの備品の取り扱いについて（平川）
- 9・自然保護全国集会報告（池田）

【その他】

- 1・会報「山」11月号の進行について（節田）

☆令和5年度年次晩餐会

12月2日、東京・新宿の京王プラザホテルで開催された。335名の会員およびその同伴者が参加。冒頭、橋本会長は挨拶で「当会は、国内外での登山活動、登山の振興、山岳文化継承、自然環境の保全など、多岐にわたる活動を行なってきたが、高齢者登山の問題点解決、若い世代への、SNSを通じた情報発信、SDGSに代表される環境問題など課題は多い。また、多様化の観点から女性会員や女性指導者の育成も急務だ」と語った。また山岳会をさらに発展させるために、『会員の高齢化・減少の克服』、『登山者の多様化への対応』、『山岳環境の保全の推進』、『日本山岳会の役割の再定義』の4つの目標を掲げた。会は昨年度実施を見送った展示会や図書交換会も例年どおり開催され、盛況であった。記念講演ではティリチ・ミール北壁初登攀報告などがなされた。

令和5年度第8回（12月度）理事会議事録

日時 令和5年12月14日（木） 19時00分～21時10分
場所 集会所およびオンライン（zoom）

【出席者】橋本会長、永田・桐生・飯田副会長、長島・南久松・平川各常務理事、松田・池田・望月・原田・猿渡・久保田各理事、佐野・

石川各監事

欠席 川瀬理事

オブザーバー 節田会報編集人

【審議事項】

- 1・退職金規定の制定について（南久松）（賛成13、反対0）
- 2・高額寄附（森武昭会員、斎藤惇生会員）の受け入れについて（南久松）（賛成13、反対0）
- 3・JMSSCAからのUIAA記念事業への協力依頼について（長島）（賛成13、反対0）
- 4・「改革事業推進委員会」と「再生事業推進WG」の廃止について（平川）（賛成13、反対0）

【協議事項】

- 1・支部連絡会の結果について協議した（長島）
- 2・「みんなの日本山岳会」構想に関連して協議した（永田）
- 3・入会金の見直しについて協議した（長島）
- 4・入会手続きの見直しについて協議した（永田）
- 5・今後の予定（予算、事業計画、ヒアリングその他）について協議した（長島）

【報告事項】

- 1・入会承認報告（橋本）
- 2・寄附金および助成金受入報告（南久松）
- 3・団体登山保険の更新について（南久松）

4・商標権の更新について（長島）

5・晩餐会の結果について（長島）

6・安藤財団への全国山岳古道調査に関する助成依頼について（永田）

【その他】

1・会報「山」12月号の進行について（節田）

令和5年度第9回（1月度）理事会議事録

日時 令和6年1月18日(木) 19時10分～21時10分

場所 集会所およびオンライン（Zoom）

出席者 橋本会長、永田・桐生・飯田副会長、長島・南久松・平川各

常務理事、松田・池田・望月・原田・猿渡・久保田各理事、石川監事

欠席者 佐野監事

オブザーバー 節田会報編集人

【審議事項】

1・高額寄附の受入れ（上原氏から）について（南久松）（賛成13、反対0）

【協議事項】

- 1・令和6年度の懸案事項（入会金、準会員、会報の電子配信、入会手続き）の整理について協議した（長島）
- 2・当会の理念「みんなの日本山岳会」構想に関連して協議した（長島）
- 3・入会の手続きの方法の追加（ネットからの申込み）について協議

した(永田)

- 4・会内の情報提供に活用するための会員のメールアドレスの収集について協議した。今後収集する方向で準備する(長島)
- 5・寄附募集についての案内・告知について協議した(永田)
- 6・事業計画のヒアリングについて協議した。支部を中心に委員会と併せて2月に実施する(長島)
- 7・財務改善部会からの質問事項への対応について協議した(長島)
- 8・マンション管理人室の借り入れおよび建替えに関する勉強会への参加について協議した。借り入れは当面見送ることにした(長島)

【報告事項】

- 1・入会承認報告(橋本)
 - 2・寄附金および助成金受入報告(南久松)
 - 3・2023後期海外登山助成の応募について(桐生)
 - 4・山研利用料の値上げについて(平川・原田)
 - 5・東京支部の設立に向けての進捗状況について(松田)
 - 6・年次晩餐会収支報告について(長島)
 - 7・海外登山報告会(ユース交流会)の開催について(永田)
 - 8・U A A 30周年記念行事の進捗状況について(桐生)
 - 9・支部役員のJ A C アカウントの設定状況について(長島)
 - 10・信濃支部の事務局長の変更について(長島)
- 【その他】
- 1・会報「山」1月号の進行について(節田)

令和5年度第10回(2月度)理事会議事録

日時 令和6年2月8日(木) 19時00分～20時30分

場所 集会所およびオンライン(zoom)

出席者 橋本会長、永田・飯田副会長、長島・南久松・平川各常務理事、松田・望月・原田・猿渡・川瀬・久保田各理事、佐野・石川各監事

欠席者 桐生副会長、池田理事

オブザーバー 節田会報編集人

【審議事項】

- 1・高額寄附金の受入れについて(南久松)(賛成12、反対0)
- 2・令和5年度後期・海外登山助成金申請について(桐生・池田)(賛成12、反対0)
- 3・「山の安心を広げるプロジェクト」への協賛について(川瀬)(賛成12、反対0)
- 4・会員からのメールアドレスの取得について(長島)(賛成12、反対0)

【協議事項】

- 1・日本ブータン友好協会総会の参加について協議した(長島)
- 2・日本山岳会の新しいステージと理念づくりについて協議した(永田)
- 3・会員増のための直近のアイデアについて協議した(永田)
- 4・初級・初心者向け登山講習会の開催について協議した(平川)

【報告事項】

- 1・入会承認報告（橋本）
- 2・除籍予定者報告（長島）
- 3・寄附金および助成金受入報告（南久松）
- 4・ヒマラヤキャンプ講演会（栃木）の開催について（猿渡）
- 5・海外登山報告会（ユース交流会）について（永田）
- 6・創立120周年記念事業への寄附依頼について（原田）
- 7・正会員移行準会員について（長島）
- 8・国土地理院との廃道情報についての打ち合わせについて（長島）
- 9・会員からの山荘の寄贈について（長島）

【その他】

- 1・会報「山」2月号の進行について（節田）

令和5年度第11回（3月度）理事会議事録

日時 令和6年3月14日（木） 19時00分～21時10分

場所 集会所およびオンライン（zoom）

出席者 橋本会長、永田・桐生・飯田副会長、長島・南久松・平川各
常務理事、松田・望月・原田・猿渡・川瀬・池田・久保田各理事、石
川監事

欠席者 佐野監事

オブザーバー 節田会報編集人

【審議事項】

1・令和6年度事業計画および予算について（久保田、永田、南久松）
（賛成14、反対0）

2・財務改善部会の終了について（長島）（賛成14、反対0）

3・個人からの山荘の寄贈を見送ることについて（長島）（賛成14、反
対0）

4・山岳研究所利用料金および雇用通知書の改訂について（原田）（賛
成14、反対0）

【協議事項】

1・支部連絡会、評議員懇談会開催について協議した（長島）

2・入会届け・退会届けの定型フォーマットの提示について協議した
（永田）

3・メールアドレスの収集方法について協議した（長島）

4・ウエストン祭への英国大使の招待について協議した（桐生）

【報告事項】

1・入会承認報告（橋本）

2・事務局員給与の昇給について（長島）

3・国土地理院の外郭図公開について（松田）

4・東京支部設立進捗報告（松田）

5・環境省からのウエストン碑の肖像権についての問合せ（長島）

6・山岳関係組織の優待施設の状況について（久保田）

7・海外登山報告会（YOUTH交流会）について（永田）

8・資料映像委員会講座の報告（飯田）

9・令和6年度年次晩餐会について（長島）

10・AVSAR上級コース報告について（川瀬）

【その他】

1・会報「山」3月号の進行について（節田）

◇人事

▽名誉会員

該当なし

▽新永年会員

小林	力	7	5	8	8	
大場	貞吉	7	5	9	1	山形
内田	昌子	7	6	1	2	京都・滋賀
千石	信夫	7	6	1	8	宮城
高橋	信博	7	6	2	9	
山本	康文	7	6	3	3	東九州
松本	龍雄	7	6	3	5	
大滝憲司郎		7	6	3	6	
池田	常道	7	6	4	1	
高橋	和之	7	6	4	5	
高橋	通子	7	6	4	6	
安藤	利亮	7	6	5	0	越後
小林	清勝	7	6	5	5	
田中	清子	7	6	5	9	
田和	芳郎	7	6	6	6	
桐生	恒治	7	6	7	5	越後

小森恵己子 (4762)	梶谷 文裕 (15947)	檀林 寛 (15732)	歳弘 逸郎 (15416)	川北 有 (14630)	松原 立雄 (14366)	鈴木 順二 (12888)	吉田 修 (11431)	松井 米蔵 (9425)	山本 稔 (7517)	岩崎 忠昭 (5732)	渡辺 幸栄 (5414)	小泉 義彦 (14540)	今井 秀正 (13787)	小柳 清人 (13414)	高村 勝久 (12448)	渡邊 重 (9093)	勝田 房治 (5029)	▽物故会員 (2023年4月) 2024年4月届出	山口 武夫 7712	藤條 好夫 7686	富山
22・12・20	不明	22・12・28	23・5・26	23・3・5	22・12・6	22・10・3	23・3・23	23・4・26	23・4・28	22・不明	23・5・20	23・4・1	23・4・15	23・4・3	23・4・11	23・1・27	23・3・15				

塚本 珪一 (4482)	筒井 稔 (7163)	本田 文雄 (5057)	下沢 英二 (7825)	中馬 董人 (6222)	今西 芳子 (12451)	大谷セツ子 (9666)	鬼頭万太郎 (4215)	利部 輝雄 (11923)	中島 隆 (6779)	本田 誠也 (5421)	鎗木 昇 (5103)	中村 義 (4974)	今成 幸夫 (4495)	人見 茂子 (16731)	渡辺 隆 (15718)	稲原 明 (14072)	高橋 満男 (13460)	吉川 隆士 (10930)	小林 隆志 (10356)	田中 清 (9699)	松田 順次 (5484)
23・6・27	23・9・25	23・9・17	22・8・28	23・9・2	23・8・2	23・8・23	23・7・26	23・6・10	23・5・不明	23・7・13	23・7・5	23・7・19	23・6・18	23・6・3	23・5・17	23・3・18	23・5・24	23・3・12	23・5・26	23・1・7	22・6・1

奥原	教永	(4711)	23	5	11
塚本	幸子	(4957)	23	8	12
池谷	有爾	(6242)	22	10	31
浦	一美	(9506)	23	11	3
曲田	均	(9536)	23	11	3
中島	達哉	(10134)	23	7	9
前田	栄三	(11766)	23	11	14
志賀	傳	(13273)	23	8	31
松島	岳生	(14260)	23	10	30
近藤	哲也	(5044)	23	11	21
高橋	英彦	(5193)	23	11	12
小野	貴司	(5700)	23	12	11
山崎	郁郎	(6201)	23	11	5
杉野	目浩	(4113)	23	12	4
大石	惇	(5834)	24	1	17
太田	義一	(6756)	24	1	5
岩田	惇	(10520)	24	1	20
下野	武志	(11166)	23	12	31
斎藤	トモ子	(11448)	24	1	9
半田	由美子	(13356)	23	3	20
原澤	勇	(14287)	23	12	6
古原	和美	(4050)	21	2	17

金光	義朗	(4584)	24	2	14
桜井	昭吉	(5021)	24	2	26
荒木	正弘	(5035)	24	1	27
山口	節子	(4475)	24	3	16
渡辺	照人	(5348)	24	2	11
森下	雅幸	(9775)	24	3	8
甲斐	一郎	(10793)	24	3	2
B i n a y a G U R U I A C H A R Y A (13013)			24	3	11
寛	邦男	(13052)	24	3	15
小林	省三	(13449)	24	3	11
金	邦夫	(14160)	24	3	23
富田	雄一郎	(14828)	24	3	14

▽新入会員・新入準会員(2023年4月〜2024年3月)

氏名(年齢)	会員番号	紹介者	支部名
新入会員(2023年4月)			
杉山 明子(86)	17043	元川 里美・古野 淳	淳
黒沼 英美(64)	17044	北原 孝浩・古野 淳	淳
桐下 昌幸(62)	17045	有元 利通・古野 淳	淳
茅野 修一(55)	17046	山本 憲一・古野 淳	淳
木下 恵子(65)	17047	飯田 勝之・古野 淳	淳
川島ひろ子(68)	17048	山本 憲一・古野 淳	淳
			東叟摩
			東九州
			東叟摩

奥迫	拓也(36)	17049	齋 陽・古野	淳	広島	加々見太地(29)	17071	安松	崇・古野	淳	
上原	加津維(60)	17050	永田弘太郎・古野	淳	東冨多摩	浅井 基樹(45)	17072	貫田	宗男・古野	淳	
新川	正治(71)	17051	渡辺 博厚・古野	淳	岩手	小林 弘美(53)	17073	松本	敏夫・古野	淳	埼玉
松田	慎一郎(75)	17052	山本 憲一・古野	淳	東冨多摩	石川 貴大(33)	17074	安松	崇・古野	淳	
岡野	武司(65)	17053	平松久美夫・古野	淳	関西	川崎 彰子(48)	17075	貫田	宗男・古野	淳	
山田	和也(69)	17054	貫田 宗男・古野	淳		池ノ内直樹(49)	17076	松下	征文・笠谷	茂	幕・滋賀
寺田	紗規(33)	17055	小原 姫子・古野	淳		高橋みゆき(58)	17077	小宮山千彰・古野	古野	淳	山梨
吉田	博子(62)	17056	山本 憲一・古野	淳	東冨多摩	平井 孝(60)	17078	松本	敏夫・古野	淳	埼玉
嶋田	恵美子(61)	17057	山本 憲一・古野	淳	東冨多摩	小岩佐千子(54)	17079	永田弘太郎・古野	古野	淳	
佐伯	享子(74)	17058	山本 憲一・古野	淳	東冨多摩	齊藤 大乘(37)	17080	安松	崇・古野	淳	北海道
上田	謙治(72)	17059	古屋 寿隆・古野	淳	山梨	金子 貴裕(34)	17081	安松	崇・古野	淳	
井川	浩彰(65)	17060	茂木 完治・辻 和雄	淳	関西	佐々木朋代(49)	17082	藤木	俊三・橋本 香里	淳	北海道
星野	弘美(51)	17061	北原 秀介・古野	淳	群馬	早川 誠次(62)	17083	重廣	恒夫・金井 健二	淳	栃木
棗	優太(33)	17062	永田弘太郎・古野	淳		三浦 一恵(65)	17084	藤木	俊三・山内 忠	淳	北海道
加瀬	尚(60)	17063	山本 憲一・古野	淳	東冨多摩	市川 純造(51)	17085	神長	幹雄・近藤 雅幸	淳	
小石	真澄(40)	17064	永田弘太郎・古野	淳		佐藤 精久(66)	17086	松田	宏也・京極 紘一	淳	北海道
吉田	望(30)	17065	安松 崇・古野	淳	広島	木下 史朗(62)	17087	茂木	完治・中村 久住	淳	関西
石川	千嘉(51)	17066	永田弘太郎・古野	淳	神奈川	山本 邦夫(63)	17088	東	英樹・宮崎 清之	淳	信濃
福山	茂光(77)	17067	茂木 完治・古野	淳	関西	東海林広尚(47)	17089	渡部	展雄・佐久間隆夫	淳	福島
後藤	希介(33)	17068	安松 崇・古野	淳	東海	北川麻利子(72)	17090	長谷川雄助・藤木 俊三	古野	淳	北海道
高山	佳代子(67)	17069	土居 義信・古野	淳	広島	毛利 玲子(61)	17091	今津英一朗・高橋 玲司	古野	淳	東海
今中	尚哉(56)	17070	山本 憲一・古野	淳	東冨多摩	大塚 秀典(65)	17092	中村 博和・諏訪部 豊	古野	淳	静岡

種村 融(62) 17093 森戸 隆男・清中 智子 広島
 竹本 美香(57) 17094 金谷 正起・尾上 昇 東海
 原田 智紀(50) 17095 古野 淳・橋本しをり 東海
 小池 徳男(55) 17096 東 英樹・松本 潔 信濃
 中村 治男(61) 17097 茂木 完治・藤本三樹雄 関西
 加藤 裕子(64) 17098 森戸 隆男・吉村 千春 広島
 望月 啓治(62) 17099 北原 孝浩・古屋 寿隆 山梨
 前田 光教(52) 17100 永田弘太郎・古野 淳 山梨
 片野 健太(25) 17101 永田弘太郎・近藤 雅幸 山梨
 吉野 裕介(35) 17102 今津英一朗・高橋 玲司 東海
 吉岡 直樹(41) 17103 東 英樹・松本 潔 信濃
 加藤 大智(37) 17104 荒木 岳・高橋 玲司 東海
 久野 輝美(74) 17105 尾上 昇・服田 康宏 東海
 山上耀一郎(26) 17106 松原 尚之・棚橋 靖 東海
 長尾 潤子(57) 17107 梅田 直美・高木 基揚 岐阜
 田島 圭悟(23) 17108 松原 尚之・猪熊 隆之 岐阜
 菅野さゆり(46) 17109 鈴木 理夫・粕谷 俊矩 山形
 遠藤 辰也(58) 17110 北原 孝浩・平松 清子 山梨
 青木日登美(58) 17111 梅田 直美・高木 基揚 岐阜
 石ヶ谷侑季(29) 17112 東 英樹・松本 潔 信濃

新入会員(2023年5月)

吉田 尚史(57) 17113

梅田 直美・高木 基揚

岐阜

新入会員(2023年6月)

吉田たけ美(58) 17114 梅田 直美・高木 基揚 岐阜
 足立原 章(81) 17115 大山 光一・横山 真一 埼玉
 猿渡良太郎(60) 17116 古野 淳・吉川 正幸 埼玉
 吉田 一貴(30) 17117 松原 尚之・猪熊 隆之 信濃
 福田 良一(72) 17118 山田 和人・松本 潔 信濃
 新井 寿欧(54) 17119 近藤 道明・古野 淳 広島
 須藤 孝明(73) 17120 東 英樹・松本 潔 信濃
 國宗 文(62) 17121 松田 宏也・三田 博 千葉
 吉住 琢二(61) 17122 齋藤 幸一・黒川 伸一 北海道
 加藤 美智(51) 17123 粕谷 俊矩・河口 昭俊 山形
 成田 知彦(50) 17124 松田 宏也・三田 博 千葉
 丹野 浩之(55) 17125 鈴木 理夫・粕谷 俊矩 山形
 大山 時彦(68) 17126 榊 俊一・竹本 正幸 北九州
 鈴木 秀臣(57) 17127 永田弘太郎・鈴木 孝幸 岐阜
 松原 英彦(57) 17128 梅田 直美・東明 裕 岐阜
 大場由実子(55) 17129 阿部 陽子・中屋 重直 岩手
 菅野 明彦(45) 17130 永田弘太郎・長島 泰博 信濃
 土屋 俊貴(41) 17131 東 英樹・宮崎 清之 信濃
 石田 良恵(81) 17132 橋本しをり・粕 澄子 信濃
 西田 直人(24) 17133 新城 愛優・東明 裕 岐阜
 戸田早映子(53) 17134 東明 裕・今峰 正利 岐阜

新入会員(2023年7月)

栗野	雅巳(63)	17154	笠谷	茂・駒井	治雄	京都・滋賀
蒲谷	和幸(55)	17153	金谷	正起・尾上	昇	東海
岡村	隆徳(63)	17152	前田	隆久・尾上	昇	東海
石井	孔久(72)	17151	大山	光一・古川	史典	埼玉
新入会員(2023年8月)						
竹島	翼(21)	17150	水谷	透・豊田	哲也	関西
渡部	昌輝(26)	17149	鈴木	裕子・鎌田	倫夫	秋田
齊藤	和紀(70)	17148	松田	宏也・三田	博	千葉
宮本	尚登(65)	17147	野口	いづみ・宮崎	絃一	東京多摩
中尾	光利(45)	17146	笠谷	茂・土井	文雄	京都・滋賀
三浦	裕子(65)	17145	橋本	しをり・柏	澄子	
河田	道子(63)	17144	東明	裕・近藤	幸夫	岐阜
中村	拓巳(20)	17143	根井	康雄・小池	千秋	群馬
久郷	一郎(68)	17142	高橋	玲司・前田	隆久	東海
阿部	博行(59)	17141	根井	康雄・小池	千秋	群馬
小菅	一弘(75)	17140	松田	宏也・小川	和敏	千葉
杉本	好江(56)	17139	東明	裕・近藤	幸夫	岐阜
園部	徹(65)	17138	東明	裕・梅田	直美	岐阜

新入会員(2023年9月)

藏地	聡(52)	17174	後藤	正弘・玉木大二朗		越後
新入会員(2023年10月)						
吉村	寛(25)	17173	重廣	恒夫・吉村	千春	信濃
磯部	貢一(57)	17172	浅野	勝巳・吉井	英生	茨城
田淵	貴久(71)	17171	白根	一・福嶋	佑二	山陰
保科	雅則(62)	17170	佐藤	知恵子・橋本しをり		
岡嶋	芽(25)	17169	平川	陽一郎・花谷	泰広	信濃
竹西	晴香(28)	17168	東	英樹・竹西佳代子		
神戸	佳子(56)	17167	粕谷	俊矩・河口	昭俊	山形
西村	章(73)	17166	坂本	正智・中村	敦子	東京多摩
安藤	弘直(68)	17165	尾上	昇・前田	隆久	東海
松元	秀平(24)	17164	永田	弘太郎・平川陽一郎		
長井	久美(58)	17163	樽矢	尊章・出水	正幸	石川
高橋	自(24)	17162	永田	弘太郎・平川陽一郎		
堀	智子(60)	17161	東明	裕・梅田	直美	岐阜
松本	賀都子(67)	17160	野口	いづみ・岡田	陽子	東京多摩
中澤	温子(64)	17159	橋本	しをり・長島	泰博	群馬
吉田	文江(67)	17158	根井	康雄・小池	千秋	
米田	智一(47)	17155	永田	弘太郎・橋本しをり		
横田	典之(54)	17156	永田	弘太郎・岩井真理子		
安齋	好太郎(46)	17157	佐久間	隆夫・渡部	展雄	福島

矢ヶ崎郁雄(48)	17175	永田弘太郎・近藤 雅幸	京都・澁	曾我 隆史(35)	17196	東明 裕・梅田 直美	岐阜
松田 雄二(63)	17176	笠谷 茂・真名子栄一	京都・澁	森山 京平(36)	17197	永田弘太郎・有岡 純子	東京多摩
柳沢 伸子(73)	17177	根井 康雄・小池 千秋	群馬	齋藤 哲也(60)	17198	大山 光一・林 信行	埼玉
徳山圭一郎(24)	17178	森戸 隆男・岩切 大善	広島	市村 裕子(54)	17199	坂井 広志・平川陽一郎	
波田優美子(45)	17179	橋本しをり・飯田 肇	信濃	新入会員(2023年12月)			
茂木 朗(21)	17180	根井 康雄・小池 千秋	群馬	上原 充(43)	17200	永田弘太郎・橋本しをり	
竹原 相光(71)	17181	吉川 正幸・宮崎 紘一		鈴田 則文(58)	17201	富塚 和衛・富塚真味子	宮城
小栗山大介(36)	17182	松田 宏也・三田 博	千葉	北村 静香(56)	17202	東 英樹・飯村 富彦	信濃
城田 京子(62)	17183	野口いづみ・近藤 雅幸	東京多摩	菅 武雄(58)	17203	永田弘太郎・長島 泰博	
片山佳津子(58)	17184	園部 徹・東明 裕	岐阜	東条真百合(68)	17204	北原 孝浩・古屋 寿隆	山梨
福里 清信(68)	17185	松田 宏也・上村 紀子	千葉	西田 智子(62)	17205	茂木 完治・水谷 透	関西
柳坪 宏美(40)	17186	森戸 隆男・大田 由孝	広島	伊藤 由美(60)	17206	東 英樹・松本 潔	信濃
日比野容子(67)	17187	東明 裕・梅田 直美	岐阜	鈴田 泰子(57)	17207	富塚 和衛・富塚真味子	宮城
萩原 大輔(43)	17188	尾上 昇・高橋 玲司	東海	阿佐 昭子(70)	17208	橋本しをり・飯田 肇	
萩原 侑紀(13)	17189	尾上 昇・高橋 玲司	東海	田中 明美(65)	17209	橋本しをり・飯田 肇	
新入会員(2023年11月)				新入会員(2024年1月)			
須田 康仁(53)	17190	黒川 伸一・藤木 俊三	北海道	末次 美鈴(64)	17210	近藤 幸夫・東明 裕	岐阜
佐々木朗子(53)	17191	野口いづみ・近藤 雅幸	東京多摩	比嘉 正岳(22)	17211	平川陽一郎・花谷 泰広	
高尾 美緒(60)	17192	黒川 伸一・藤木 俊三	北海道	猿渡 裕子(58)	17212	橋本しをり・南久松宏光	
井上 隆仁(45)	17193	池田 功・田口 憲司		松本 歩美(33)	17213	平川陽一郎・花谷 泰広	
茂野 伸行(59)	17194	後藤 正弘・玉木大二朗	越後	新入会員(2024年2月)			
小川真理子(57)	17195	橋本しをり・平川陽一郎		椎名 弘祐(20)	17214	椎名キクエ・高橋 聰	

岩田 明夫(64) 17215 近藤 幸夫・東明 裕 岐阜
 川口 俊樹(72) 17216 永田弘太郎・近藤 雅幸 岐阜
 大田 倫丈(24) 17217 梅田 直美・東明 裕 岐阜
 新入会員(2024年3月)

鈴木 晴雄(75) 17218 大山 光一・林 信行 埼玉
 藤原 千恵(66) 17219 黒川 伸一・清水 義浩 北海道
 田村 智子(69) 17220 茂木 完治・中村 久住 関西
 吉田 郁子(59) 17221 黒川 伸一・清水 義浩 北海道
 小部 正治(70) 17222 近藤 裕・長島 泰博 四国
 田所 秀紀(60) 17223 若狭 和雄・尾野 益大 四国
 酒井 史明(54) 17224 黒川 伸一・藤木 俊三 北海道
 平松 昌子(43) 17225 黒川 伸一・清水 義浩 北海道
 伊藤祐太郎(22) 17226 東明 裕・梅田 直美 岐阜
 横山 諒平(35) 17227 黒川 伸一・藤木 俊三 北海道
 金田 剛仁(47) 17228 平川陽一郎・永田弘太郎 北海道

新入準会員(2023年4月)

近藤美奈子(47) A0528 古屋 寿隆 山梨
 斉藤 吉江(63) A0529 藤木 俊三 北海道
 中川 京子(47) A0530 諏訪部 豊 静岡
 小嶋 直樹(54) A0531 永田弘太郎 静岡
 岩本 征士(63) A0532 野口いづみ 東京多摩

新入準会員(2023年5月)

鎌田 泰史(55) A0533 吉村 千春 広島
 加藤智加子(58) A0534 野口いづみ 東京多摩
 中島 直子(53) A0535 野口いづみ 東京多摩
 北村 格一(46) A0536 吉村 千春 広島
 西尾 敏江(59) A0537 野口いづみ 東京多摩
 宮田麻由美(58) A0538 野口いづみ 東京多摩
 中山 撰(57) A0539 野口いづみ 東京多摩
 真鍋由美子(68) A0540 野口いづみ 東京多摩
 大井あゆみ(55) A0541 野口いづみ 東京多摩
 有川 浩平(51) A0542 永田弘太郎 東京多摩
 高木 理佳(57) A0543 野口いづみ 東京多摩
 城森 園子(60) A0544 野口いづみ 東京多摩
 村上 真弓(57) A0545 野口いづみ 東京多摩
 中村 智子(59) A0546 野口いづみ 東京多摩
 八尾 聡(40) A0547 根井 康雄 群馬
 宮内 有加(57) A0548 山田 和人 山梨
 渡辺 和美(61) A0549 北原 孝浩 山梨
 今野 理恵(51) A0550 富塚 和衛 宮城
 土井 俊和(50) A0551 豊田 哲也 関西
 河野めぐみ(41) A0552 諏訪部 豊 静岡
 法野 晶則(61) A0553 山田 和人 山梨

新入準会員(2023年6月)

石橋 隆平(42) A05554 永田弘太郎

若林 順子(73) A05555 須々田秀美

石藤奈保子(71) A05556 須々田秀美

岡部 勇人(31) A05557 大山 光一

高須 房子(73) A05558 須々田秀美

新入準会員(2023年7月)

石川 弘子(58) A05559 富塚 和衛

土居 将人(28) A05600 田中 明良

森尾 奈美(63) A05601 山本 直

渡邊 典男(68) A05602 千石 信夫

平林 節子(75) A05603 有元 利通

大沼 毅(62) A05604 山田 和人

後藤 祐子(44) A05605 笠谷 茂

新入準会員(2023年9月)

坂井 浩子(48) A05606 野口いづみ

藤川奈那央(34) A05607 笠谷 茂

柴田 浩(62) A05608 水谷 透

柴田 桂子(60) A05609 水谷 透

佐々木晶子(64) A05700 長島 秀行

児玉 壮汰(32) A05701 花谷 泰広

小川 清次(70) A05702 堀 雅裕

金田 基裕(49) A05703 豊田 哲也

畠山 愛以(31) A05704 花谷 泰広

長谷川陽央(28) A05705 花谷 泰広

甲斐 善江(62) A05706 安東 桂三

新入準会員(2023年10月)

新田 千鶴(50) A05707 山本 光男

石田 美和(59) A05708 斧田 一陽

安藤 匡(57) A05709 竹本 正幸

新入準会員(2023年11月)

李 曼葛(32) A05800 永田弘太郎

芦沢絵美子(56) A05801 大山 光一

中田 雅弘(66) A05802 古屋 寿隆

新入準会員(2023年12月)

国崎 智(67) A05803 大山 光一

水野 千秋(65) A05804 大山 光一

新入準会員(2024年1月)

北條 健市(65) A05805 大山 光一

天池 稚力(61) A05806 大山 光一

三好 信博(64) A05807 水谷 透

長谷川公樹(46) A05808 水谷 透

平塚 雄大(27) A05809 花谷 泰広

金成綱太郎(44) A05900 水谷 透

関西

東九州

広島

関西

北九州

北海道

埼玉

埼玉

山梨

埼玉

埼玉

埼玉

埼玉

埼玉

埼玉

関西

関西

関西

関西

支部の活動報告

北海道支部

2023年度は、新型コロナウイルス禍明けによる弊害が少なくなり、可能な限り、支部の会員・会友が楽しく、メリットを感じる事ができるような運営を目指して、多種多様な山行・ハイク企画、研修、懇親会などを企画・実施を心掛けた。

白石ルームを使ったバーベキュー懇親会を6月、群馬支部の来道に合わせて恒例の「夏季交流集会」を8月、夏山納め・冬山始め懇親会を11月に実施し、会員同士、他支部との交流・懇親の機会作りにも力を入れた。

支部独自の交流事業として、国際登山医学会副会長の大城和恵氏・札幌孝仁会記念病院医師を講師にした「一次救命処置講習会」(109人受講)、を11月に開催、北海道でトレイニングを積んでヒンドウ・ラジ山脈の未踏峰、ガンバルズムV峰(6400m)に初登頂した鈴木雄大氏ら若手クライマー3人による「登頂報告会」(93人参加)を12月に開き、外部の皆さんにも参加していただいた。

また、登山に関する技術向上を目指して、6月に赤岩で岩登

り研修、7月に札幌・コビキ沢で沢登り研修、12月に上ホロカメットク山域で氷雪技術研修、カミフエリアで山スキー合宿の4つの研修山行を実施した。ほかにスキー技術向上を目的に12月に2回、札幌国際スキー場でスキー練習の機会も作った。

支部山行としては、5月に暑寒別岳・狩場山・余市岳・当麻岳スキー山行や白雲岳「幻の湖」探訪、6月に忠別岳スキー山行、7月にイドンナップ岳山行やボンクワウンナイ川・小化雲岳山行、8月に旭岳で群馬支部との交流登山や猿留山道山行、9月にガマ沢・札幌岳や様似山道山行、10月に昆布川水系でキノコ採り山行や汐首山・毛無山山行、北限ヒバの「特別天然記念物」指定林山行、1月に喜茂別岳・ワイスホルン・羊蹄山&チセスプリスキー山行や恵庭溪谷アイス・クライミング山行、2月にチトカニウシ山&天塩岳・無意根山スキー山行、3月に昆布岳&長万部岳スキー・海別岳&斜里岳スキー山行などを実施した。

支部に所属している皆さんがうまくこの山岳会を活かして、山や自然に関わる楽しく、有意義な時間を過ごしていただきたいと願っている。そのためのかきつけ作りができれば良いのだ

ろうと考えている。試行錯誤しながらではあるが、支部役員の皆様とより良い運営を目指したい。

(黒川伸一)

青森支部

2023年度は、青森支部の創立30年を迎える年であった。7月には、東北・北海道地区集会和支部創立30周年記念行事を同時開催し、全国から100名を超える会員の皆様にご参加いただいた。この場をお借りして、遠方から参加してくださった皆様、並びに開催準備に勤しんでくださった支部会員の皆様に感謝申し上げる。支部の事業は、自然災害の影響により中止した行事を除き、開催することができた。

【活動報告】

《実施した山行・行事》

- * 青森支部春スキー山行（5月3～5日）
- * 青森支部総会（5月13日）
- * 東北・北海道地区集会后見山行（種差海岸、階上岳）6月1日、18日）
- * 北八甲田登山道維持ボランティア活動（6月24～25日）
- * 第36回東北・北海道地区集会和創立30周年記念式典（7月1～2日）

* 「八甲田山の日」記念山開き登山大会（7月9日）

* 八甲田山縦走（7月27日）

* 北八甲田登山道維持ボランティア活動（9月3日）

* 岩手山荷揚げ山行（9月9～10日）／岩手山八合目避難小屋・岩手支部主催事業

* 大倉岳山行（9月24日）（8月20日より変更）

* 釜臥山山行、忘年会（10月8日）／むつ山岳会との合同開催

* 八甲田晩秋山行（11月25～26日）／八甲田仙人岱ヒュッテ泊

* 山岳スキー研修（1月13～14日）／竹越会員宅泊

* 冬山遭難救助訓練（2月11日）

* 八甲田山スキー遭難防止対策ポール立て事業（2月27～28日、3月27～28日）

《中止した山行・行事》

* 青森ウェストン祭

* 白神山地ブナ林再生事業（春・秋）

【令和6年度に向けて】

2024年度には、「ヒマラヤキャンプ2023」の参加者を招聘した全国に向けたハイブリッド形式講演会や青森支部創立30周年記念事業として台湾玉山への海外遠征、他支部・同好会との合同事業、そして、2022年度に引き続き支部会員の提案を取り入れた事業を予定している。また、現体制では最後の年となるので、青森県内の山行計画だけに留まらず青森支部会

員が県外国外に活動の幅を広めていける体制作りの1年とする。

そしていつか、全国の会員の皆様が楽しんでいただける、青森支部主催の山行計画や登山文化継承に繋がる講演会や講習会にご参加いただけるような支部事業を行なっていきたいと考えている。

ここで全国の支部の皆様にお願ひがあります。今後、青森県にお越しの際にはお声掛けいただきたい。魅力溢れる青森の自然を満喫できるコラボレーション企画ができれば、うれしい限りです。今後ともよろしくお願ひいたします。

(中村仁)

岩手支部

岩手支部は令和5年度に1名が入会し、これで9年連続での新会員獲得である。さらに準会員1名が正会員に移行したが、もう1名は期限満了で去った。病氣高齢による退会もあったので総数の変動は少ない。ただし、女性が優に2割を超したのは特徴であろう。月例山行には10人以上の会員が参加するし、次に入会するかもしれないお試し参加が幾人か加わることもある。公益事業は、一般に未開拓の山域での登山道探査、自然観察ならびに登山振興を目的の山岳古道調査と岩手山避難小屋の

管理などに携っている。また、基本的な技術研修や指導者の養成のため、岩手県山岳スポーツライミング協会が行なう講習会を活用している。支部ではこれだけの活動をしているのだが、会計事務・広報などを担当する人材が不足しているのが悩みで、年1500円の支部費徴収は「面倒なので令和4年度から0円に減免する」を決定して今年も継続している。

《会議》

4月2日(日) 委員会(盛岡市) 出席10名

4月2日(日) 総会(盛岡市) 令和4年度事業報告・決算報告、

令和5年度事業計画・予算案の審議 出席17名、委任状31通

4月5日(水) 全国山岳古道踏査会議(zoom)・支部役員会議

出席4名

4月19日(水) 役員会(盛岡市) 出席4名

5月1日(月) 古道プロジェクトzoom会議(盛岡市) 出席3名

5月16日(火) 古道プロジェクトzoom会議(盛岡市) 出席5名

7月5日(水) 古道プロジェクト会議・支部三役会議(盛岡市)

出席4名

9月21日(木) zoom会議・支部三役会議(盛岡市) 出席4名

10月4日(水) 古道プロジェクトzoom会議(盛岡市) 出席1名

12月2日(土) 全国連絡会議(新宿京王プラザ) 出席2名

2月5日(月) 本部とのzoom会議(盛岡市) 出席4名

3月4日(月) 古道プロジェクト会議・支部三役会議(盛岡市)

出席3名

3月26日(火) 支部役員会議(盛岡市) 出席3名

3月28日(木) 会計監査(盛岡市) 出席5名、支部連絡会議 z o

o m (盛岡市) 出席2名

《山行・野外活動》

4月29日(土) 4月例会(公益Ⅲ)「五堂城森(山田町) 参加13名

5月3日(水) 5月例会「峠ノ神山・亀ヶ森」(岩泉町・宮古市)

参加12名

5月20～21日(土・日) 県山協主催残雪期講習「駒ヶ岳」(雫石

町) 参加4名

6月17日(土) 岩手山8合目避難小屋への荷上げ 参加8名

6月25日(日) 6月例会(公益Ⅲ)「穴目ヶ岳」(岩泉町・宮古市)

参加8名

7月2日(日) 北海道・東北ブロック地区集会「階上岳」(青森県

階上町・岩手県種市町) 参加5名

7月17日(月) 7月例会「岩倉山」(釜石市・遠野市) 参加12名

8月6日(日) 県山協主催岩登り講習 参加1名

8月11日(金) 8月例会(公益Ⅰ)「岩手山上坊口」(八幡平市)

山の日記念「古道踏査」参加10名

8月27日(日) 県山協主催沢登り講習(花巻市) 参加2名

8月31～9月3日(日) 県山協「木曾駒・御嶽山」参加1名

9月2日(土) 9月例会「ねね子森」(宮古市) 参加11名

9月9～10日(土・日) (公益Ⅲ) 岩手山8合目避難小屋管理

参加8名

10月9日(月) 10月例会「高清水山」(釜石市・住田町) 参加10名

10月14～15日(土・日) 岩手山避難小屋仕舞い 参加2名

11月11日(土) 11月例会「オイネガ森・赤仁田森」(釜石市) 参加

13名

12月6日(水) 雪山入門編(春子谷地) 参加3名

12月9～10日(土・日) 県山協主催初冬期講習「三ツ石山」(八

幡平市) 参加2名

12月28日(木) 12月例会「網張スキー場」(雫石町) 参加10名

1月14日(日) 1月例会「堀合ヶ岳」(山田町) 参加8名

2月3～4日(土・日) 県山協厳冬期講習 焼石岳(奥州市)

参加1名

2月23日(金) 2月例会「霞露ヶ岳」(山田町) 参加6名

3月9日(土) 3月例会「折爪岳」(二戸市・九戸村) 参加6名

《広報》

3月31日(日) 支部通信第56号発行

(阿部陽子)

宮城支部

宮城支部は1958年に設立され今年で66年目となり、6回

目のゾロ目の年となる。会員数は漸減が続いてきたが、4月1日現在、会員34名、準会員6名の40名で、これに2014年に発足した支部友会会員9名を加えると合計49名となり、ここ1年で会員3名、準会員3名が加わり、会員減少に一応の歯止めが掛かった。これが一過性でないことを願いたい。しかし、高齢化は避けて通れず、今後とも会員数減少の懸念材料は続くものと思われる。例年、宮城支部では主な活動として、コロナ禍で活動を自粛した時期もあったが、公益事業として登山教室や親子登山教室を共益事業として、主に宮城の里山を中心に月例山行などを実施してきた。

令和5年度は、新型コロナウイルス感染症が5月に感染症法上の位置づけが第2類から第5類へと移行したこともあり、コロナ禍前の活動を実施することとした。その結果は、定例役員会、月例山行については、ほぼ計画どおりの実施となったが、公募型登山については1回の実施（4回計画）に留まった。また、支部親睦事業であるビールパーティ、支部晩餐会については、計画どおり実施し、会員等の親睦を図った。さらに、全国自然保護集会への参加・発表、宮城・山形支部交流会の開催、そして、本部の支援による「山の天気ライブ授業」を開催し、支部活動の充実を図った。なお、本部主催の行事にも積極的に参加し、情報収集・交換に努めた。

また、日本山岳会創立120周年記念事業のひとつである「全

国山岳古道120選」事業に関しても現地調査をするなどして進捗を図った。4年振りに開催された全国支部懇談会、東北北海道地区集会にも参加し、全国の会員との親睦、情報交換を図った。実施した事業の概要は以下のとおり。

《公益事業》

1・親子登山教室事業 登山に関心のある親子を対象に、第12回（5月6日）、第13回（10月15日）に計画した親子登山教室は、いずれも中止とした。

2・登山教室事業 登山に関心のある一般県民を対象に、第11回（7月9日）、第12回（11月11日）に計画した登山教室は第12回の実施となった。参加者は12名。

3・泉ヶ岳登山支援事業 仙台市内の小学校が実施する5年生を対象とした「泉ヶ岳登山」事業を実施するに際し、要請に応じて教育委員会、学校側と連携を図り、12校に登山支援ボランティアを務めた。

《共益事業》

1・月例山行事業 月例山行事業は、ほぼ計画どおり実施することができた。夏山登山は、海外トレッキング（オーストラリア）に変えて実施した。参加者の延べ人数は前年より増加し、70人であった。

2・定例役員会 原則、月1回開催し、支部事業の円滑な推進を図るとともに、支部が抱える会員減少、高齢化などの課題・

問題などについて話し合いを重ね、解決の方向性を探った。
参加者は9～10名／1回であった。

3・宮城支部報発行事業 宮城支部の情報誌として「宮城山岳通信」(第29号～第31号)、「宮城山岳」(第27号)を発行した。

4・親睦事業 親睦事業として実施してビールパーティおよび支部晚餐会&オークションを開催し、支部会員等の親睦融和を図った。

5・全国山岳古道調査事業 日本山岳会創立120周年記念事業である「全国山岳古道調査」については、5古道の現地調査を実施すると共に、特別委員会を必要に応じ開催し、3古道について本部に公開用の原稿を提出した。

6・山の天気ライブ授業 創立120周年記念事業の一環として、本部の支援を得て、ヤマテン代表の猪熊隆之氏を講師に迎えて蔵王山をフィールドに「山の天気ライブ授業」を実施した。参加者は座学が35名、実地が31名と好評裏に終了した。

7・山形・宮城支部交流会 第7回となる山形・宮城支部交流会を蔵王町遠刈田で実施し交流を深めた。参加者は15名。

8・自然保護活動事業 全国自然保護集会に参加し、「宮城県の山地および丘陵地における風力発電事業計画に対する公益社団法人日本山岳会宮城支部の見解」を発表し、話題提起した。また、宮城県から委嘱されている「山岳環境指導員」として

の職務を通じ、自然環境の保護に寄与した。

《会議》

4月29日(土) 総会 事業報告・計画、決算・予算の審議 出席者(委任状含む) 25名

定例役員会 5月17日(水)、6月15日(水)、7月28日(金)、9月20日(水)、11月15日(水)、1月17日(水)、3月20日(水)、出席者延べ70名

《山行・野外活動》

5月27日(土) 春山山行(七ツ森・七薬師掛け) 参加7名

6月25日(日) 露払い山行(水引入道) 参加7名

7月14～24日 海外トレッキング(オーストリア) 参加8名

9月23日(土) 初秋山行(月山) 参加9名

11月11日(土) 第12回登山教室(泉ヶ岳) 参加12名

12月10日(日) 初冬山行(霊山) 参加12名

2月4日(日) 厳冬期山行(後烏帽子岳) 参加10名

3月24日(日) 早春山行(西吾妻山) 5名 延べ参加70名

《山岳古道調査》

5月22日(月) 全国山岳古道調査全国担当者会議 参加2名

6月11日(土)～12日(日) 出羽仙台街道現地調査 参加4名

6月29日(木) 第5回古道調査委員会 参加9名

8月31日(土) 第6回古道調査委員会 参加者8名

11月15日(水) 第7回古道調査委員会 参加者9名 延べ32名

《広報・出版活動》

支部会報「宮城山岳」・情報誌「宮城山岳通信」の発行。今年度は、宮城山岳第27号、宮城山岳通信（第29～31号）を発行して支部会員、準会員、支部友会会員、日本山岳会（本部および各支部）に送付した。

《その他の行事、懇親会》

8月3日(木) ビールパーティ

12月17日(土) 支部晚餐会

(富塚和衛)

秋 田 支 部

秋田支部は昭和34年に設立され、令和5年には創立64年を迎えた。会員数は、1名入会したものの退会者等が多く、結果的に43名となり減少傾向に歯止めが掛からなかった。

令和5年度の方針と年間計画は、秋田支部通常総会で佐藤和志支部長を筆頭に、「活動の活発化（山の日山行の計画や有志山行の随時計画）」、「山岳古道調査の推進」、「公益事業の推進」、「会員増加方策の推進」などを柱とすることとなった。特に会員の高齢化、活動会員の固定化などが顕在化しており、特効薬はないものの、走りながら考える「楽しい山行」を意識した1年であった。

《会議》

* 通常総会 4月15日(土) 協働大町ビル 4年度事業報告、決算の承認、5年度事業計画、予算案の審議。21名(当日21名、委任状24名)。

* 事務局会議 4月21日(金)、6月1日(木)、9月1日(金)、11月10日(金)、1月19日(金)、2月5日(月)、3月27日(月)、3月31日(日) 計8回、延べ40名

* 支部連絡会議 6月8日(木) 2名、オンライン

* 古道会議 4月5日(木)、5月22日(月)、7月5日(木)、8月2日(水)、9月6日(木)、10月4日(水)、11月1日(水)、12月6日(水)、2月5日(月)、3月4日(月)、計10回、延べ21名、オンライン

* 古道調査で関係自治体訪問 9月27日(水)横手市内地域局、岩手県西和賀町を訪問し古道調査に協力を依頼 3名

* 本会通常総会 6月24日(土) 2名 オンライン

* 支部連絡会議 9月21日(木) 2名、オンライン

* 支部連絡会議 12月2日(土) 1名、京王プラザ

* 財務会議 1月17日(水) 3名、オンライン

* 事業ヒアリング 2月5日(月) 3名、オンライン

* 役員会 2月8日(木) 8名

* 部連絡会議 3月28日(木) 2名、オンライン

* 会計監査 3月31日(金) 5名

《山行》

5月17日(木) 古道調査山行 白木峠・秋田～岩手4名

5月20日(土) 支部春山行 秋葉山など7名(会員外8名)

6月1日(木) 有志山行 秋田駒ヶ岳山開き・岩手と合同6名

7月9日(日) 市民登山 太平山 雨のため中止

8月11日(金) 山の日山行は諸事情によりできなかったが、秋

田魁新報に「日本山岳会秋田支部」名で広告を掲載

9月30日(土) 支部秋山行 高岳山9名(会員外5名)

10月8日(日) 古道調査山行 鳥海山5名(会員外1名)

12月6日(水) 有志山行 太平山・中岳2名(会員外2名)

12月10日(日) 有志山行 太平山・前岳3名(会員外2名)

1月20日(土) 有志山行 七座山2名(会員外1名)

2月17日(土) 有志山行 観音森(岩城) 3名(会員外6名)

2月29日(木) 有志山行 鳥海山・猿穴 3名(会員外5名)

3月24日(日) 有志山行 黒森山(大内) 3名

《報告など》

12月20日(水) 会報山へ「大平山におけるヤマヒル調査について」を投稿

2月3日(土)山岳古道「沢内街道・白木峠」調査結果を報告

《公益的事業》

9月9日(土) 登山道整備・太平山・宝蔵岳 雨で延期

9月27日(水) 雨で延期となっていた登山道整備、中岳から奥

岳へのコースを他団体と協力し整備 1名

10月28日(土) 登山道整備・太平山ザブーンコース 倒木処

理・コース周辺刈り払い 6名(会員外2名)

《広報・出版活動》

*支部会報「秋田山岳」第126号～第129号まで4回発行。

《その他の行事・懇親会》

*懇親会 4月15日(土) 協働大町ビル 20名

*東北・北海道地区集会 青森支部 7月1～2日 8名

*全国支部懇談会 群馬支部 9月23～24日 3名

*韓国山岳会慶南支部員来秋に伴う懇親 11月1日(水) 鶴の湯

温泉 4名(韓国から3名)

*晩餐会 12月2日(土) 京王プラザ 4名

《次年度に向けての反省と方向性》

*反省 有志山行を多く実施したことで、山行回数が増え活性化の兆候が見えてきたが、参加者の固定化傾向があった。広

報紙・報道などを活用したPRが少なかった。

*方向性 体力や体調により不参加となる会員もいることから、「ゆっくり山行」を2回以上企画し、参加者増を図りたい。

会員増加のため、「山の日」などの各種行事への参加、秋田支

部の活動を紹介するチラシを作成・配布することで知名度

アップを図りたい。さらに、興味を示す方を有志山行などへ

誘うことで、入会への機運醸成を図りたい。また、若者から

中高年までの多くは、フェイスブックなどのSNSで情報を

見ることから、これらを活用できないか模索したい。

山形支部

(小松秀美)

2023年度会員動向は、新入会員4名(ほか会友1名)、支部会員数49名で昨年度と同数となった。退会は5名(準会員1名含む)であった。新型コロナを考慮する必要がなくなり、ほぼ予定どおりの活動を実施した。東北・北海道地区集会、宮城支部との交流会、本部晩餐会などの行事にも参加でき、日本山岳会の利点である支部間交流が完全復活した年であった。

《会議》

*支部総会 4月8日(土) 出席15名で賛成または委任状により

可決。

*役員会 3回 6月10日、10月21日、2月24日いずれも土曜

日 ほぼ全役員出席。

*支部連絡会議 12月2日の支部連絡会議に支部長が出席。

《山行》

*支部山行(月山春スキー) 4月22日(土) 9名が集合。月山スキー場リフトを降り、姥ヶ岳から石跳沢沿いに滑り山スキーを楽しんだ。

*支部山行(蔵王山樹水原コース 害虫被害調査登山) 5月20日(土) 昨年度でできなかった被害調査を実施、GPSで位置を

特定し調査ラインを設定、樹木の種類や位置、樹高などを計測。今後2年ごとに調査を実施する予定。9名参加

*宮城支部との交流会(宮城蔵王・遠刈田温泉〜刈田岳) 6月17日(土)〜18日(日)。ヤマテン代表取締役・猪熊隆之氏による「山の天気ライブ授業」を拝聴、コロナ禍明け初の夜の交流会で懇親を深めた。翌日は刈田岳レストハウスに移動し、現地では気象に関する学習をすることができた。6名参加

*東北・北海道地区集会(階上岳 青森支部主催) 7月1日(土)〜2日(日) 10名参加。八戸プラザホテルに集合し、青森支部の創立30周年記念式典と講演を拝聴した。全国から多数の会員、橋本新会長など本部役員も参加いただき交流を深めた。

*支部山行(古道調査 道地道) 7月8日(土) 雨天のため、現地の方のお話を聞き終了。9月16日(土) 再度調査4名参加。

黒鴨〜茎の峯峠〜木川第2発電所。

*支部山行(それぞれの上高地 山研) 8月29日(火)〜31日(木) 10名参加。徳本峠、檜見台など。

*支部山行(鳥海山公益清掃登山) 9月30日(土)〜10月1日(日) 1泊2日で西浜キャンプ場ケビン宿泊。清掃登山は悪天候のため中止。15名参加。

*支部晩餐会・記念登山(あつみ温泉 瀧の屋) 11月3日(土) 日本国、4日(日) 摩耶山登山は悪天のため中止。14名参加。

*支部山行(蔵王山樹水原を滑る会) 1月23日(火)〜25日(木) 11名

参加。

* 支部山行（天元台を滑る会） 3月16日(土)～17日(日) 米沢山の

会の小屋宿泊12名参加 山スキー・ゲレンデスキーを実施。

《地域振興活動》

* 「学校から見える山」イラスト（大岡山から展望図）プレゼント 1月23日(火)山形市立楯山小学校6年生に贈呈。

《公益目的事業》

* 第27回アルパインフォトビデオクラブ写真展 中止。

《懇親会》

支部晩餐会 11月3日(土)～4日(日) あつみ温泉瀧の屋 18名参加。山用品・書籍などのバザー開催。記念登山は19名が参加した。

本部晩餐会 12月2日(土) 新入会員2名を含む3名が参加。

《広報・出版活動》

支部広報「やま」19号を3月31日発行。

《今後の課題》

会員の減少傾向が最大の課題であるが、減少に歯止めを掛けることができ、支部山行の参加メンバーも拡大した。今後勧誘やより多くの会員が支部活動に参加できる工夫をこらしたい。「学校から見える山」は各方面から高い評価を得たが、新たな資金調達の方法を模索している。支部報は活動の記録を毎年残し、支部活動を会員や外部に広報することを主眼に作成している。今後も積極的な広報活動に取り組み、会員増つなげたい。

（鈴木理夫）

福島支部

支部会員の高齢化が進む中、会員の自然減少は依然として続いており、支部山行などの活動においても参加者が一部会員に限られるなど活動の偏極化をいかにして全員参加の活動にしていくか試行錯誤の1年であった。一方、3年連続の新型コロナウィルス感染症も令和5年5月より5類移行となり、支部山行および公益事業計画もおおむね以前どおりの開催ができるようになるなど、復活の1年でもあった。

その中でも、今期は若手会員の入会申込みが4件あり、また、若手同士積極的にお互いのコミュニケーションも図ることができた。さらに支部事業、個人山行のブログアップなど山情報の共有や、参加履歴のない60歳未満の会員への声掛けを通じて、「行事参加呼び掛け」を継続実施しているところだ。

《会議》

1・4月9日(土) 第1回支部役員会および定期総会を開催 役員会12名、定期総会18名参加のもと事業報告、計画、決算、予算案などを審議、満場一致で可決した。

2・11月4日(土) 第2回役員会開催。支部会計の中間報告、今後の山行行事の確認、古道調査の文章立ち上げ、支部活動の活性化などについて話し合った。

3・事務局会議9回開催 事業報告と今後の山行、古道調査の

進捗確認、総会の事前打合わせ、フリークライミング講習会、東北・北海道地区集会などについて話し合う。

《支部山行》

- 1・4月23日(日) 東吾妻山く前大嶺く一切経山スノートレッキング開催5名参加
- 2・5月21日(日) フリークライミング講習会開催。本宮市岩根地内の黒岩岩壁で講師2名を含む総勢18名で実施
- 3・5月30日(火) 南蔵王縦走登山。雨で中止
- 4・6月24日(土) 月山登山。雨で中止
- 5・8月11日(金) 第5回山の日親子登山IN安達太良山を開催。好天の中、8家族24名の一般参加、スタッフ28名の合計52名で10kmを歩き通した。
- 6・22日(金)く25(月) 飯豊山山行を健脚者3名で行なった。古道調査・飯豊山参詣道の調査も兼ねた。
- 7・10月1日(日) 6月24日に計画して雨で中止となった月山のリベンジ。今回も雨で中止。
- 8・10月14日(土) 会津駒ヶ岳登山実施。絶好の紅葉の中、総勢8名で檜枝岐滝沢登山口から中門岳まで往復14km
- 9・10月15日(日) 斎藤山ふれあい登山。雨の中、三浦ご夫妻が福島支部を代表して参加。この登山は福島支部後援の公益事業。全国の斎藤さんが集まるユニークな催しで毎年大勢の方が参加する。

10・11月5日(日) 霊山登山開催 7名参加。本部の松田宏也理事を招きトレッキングを行なった。

11・11月18く20日(土く月) 北アルプス・燕岳登山 8名参加。

小屋締めの前、雪のアルプスの稜線を満喫。

12・1月7日(日) 五十人山登山3名参加。

13・1月28日(日) 西大嶺樹氷トレッキング 6名参加。

14・2月11日(日) 磐梯山イエローフォール探索 6名参加。

15・2月13日(火) 万世大路二ツ小屋隧道探索および上部尾根トレッキング。福島の有志5名で氷柱探索のあと隧道上部の大雪庇尾根をトレック。

16・2月18日(日) 安達太良連峰縦走登山 6名参加。箕輪山く

鉄山く安達太良山く薬師岳を歩き通した。

17・3月3日(日) 母成杉田林スノートレッキング 5名参加。

広大なブナの原生林を訪ねる癒しのトレッキング。

18・3月11日(月) 猫魔ヶ岳く八方台スノートレッキング。

《山岳古道調査》

古道実査4回(旧越後街道、太閤道、山王峠ほか)実施。その他順次執筆作業に取り掛かる。

《広報、出版》

・支部会報 4半期ごと年度内4回発行

《その他の行事、懇親会》

・11月4日(土) 青柳山荘で松田宏也理事を囲む会、2月3日(土)

新年会を開催。

(佐久間隆夫)

茨城支部

茨城支部の令和5年度の活動は以下のとおりである。

1・総会を6月10日(土)に開催した。

2・例会を4月8日(土)、9月9日(土)、11月11日(土)、1月13日(土)に開催した。

3・講演会を以下のとおり開催した。

*第77回 4月8日(土) 「宇宙の中の人類を俯瞰する」我々は何を希求するのか」筑波技術大学・客員研究員 藤森憲氏

*第78回 6月10日(土) 「モンゴル遠征の思い出と茨城県高体連山岳部について」城県学校高校教育課・櫻井良種氏

*第79回 9月9日(土) 「山は裏切らない」海外高所登山と

日本山岳会の行方」日本山岳会茨城支部会員 吉井英生氏

*第80回 11月11日(土) 「日本百高山の完全単独踏破」九州

大学名誉教授・真木太一氏

*第81回 令和6年1月13日(土) 「スペイン巡礼の踏破と魅力」茨城県山岳連盟・椎名正明氏

4・支部山行を以下のとおり実施した

*8月11日(金) 筑波山集中登山(仲の茶屋、7名参加)

*12月7日(木)～8日(金) 支部忘年山行(月居温泉・白木荘 月居山登山(5名参加))

5・その他

*9月23日(土)～24日(日)に谷川岳・水上館で開催された第36回全国支部懇談会(群馬支部担当)に茨城支部から4名が出席した

*茨城支部報15号を6月10日に発行した。

(星埜由尚)

栃木支部

2007年5月に設立した栃木支部は17年目を迎えた。この17年の間、特に2020年から23年5月にわたるコロナ禍の3年間は、世界中の人々にとって苦渋の期間であった。「緊急事態宣言」と「新しい生活様式」によって人間関係が希薄になり、本当の顔が見えにくい期間であったとも言える。

本年度(令和5年)は、本支部の活動もそのような苦渋の期間を耐え、3年間のブランクを乗り越えて、顔の見える Face to Face の活動が再開できた。その最大の理由は、役員をはじめとした会員諸氏の信頼関係であったと感謝したい。しかしながら、この期間に設立当時から会の運営にご尽力いただき、会の礎を築いていただいた4名の会員(坂口三郎、小島守夫、山本

武志、森元一氏）が鬼籍に入られてしまったことは、本会にとつて大きな悲しみであった。改めて4氏の功績に感謝するとともにご冥福をお祈りしたい。

本年度の活動を振り返ると、7月に「親子登山教室」を学習院山桜会の協力の下に光徳小屋で宿泊にて再開できたことは、コロナ禍の終焉の象徴的な事業であった。さらに、11月には本支部が主催した関東4支部合同懇談会も、各支部からの参加者25名が集い、塩谷町の後援の下「山の日」の設立貢献者である船村徹氏の故郷・高原山で開催できたのも日常の復活と言える。

支部山行は、春夏秋冬の四季に充実した山行が実施できた。春山は会津の斉藤山、小野岳、夏山は会津の田代山、駒ヶ岳、秋山は安達太良山、東吾妻山、冬山は日光白根山で、それぞれ懇親会と宿泊を伴い実施した。マスターズクラブは県内の山々で6回実施した。ユースクラブも夏山は白馬岳・唐松岳の縦走、冬山は那須・朝日岳での岩稜登攀、春山は会津駒ヶ岳での雪山登山と活発に活動できた。

支部会員の個人山行も、それぞれの所属の会などで活発に行なわれており、機会あるごとに大変楽しく意義ある報告を提供していただいている、ありがたい。

公益事業の、「ヒマラヤの集い」は猪熊隆之気象予報士による「気象予報士のマナスル登山」、「山の講演会」は山本正嘉氏による「登山のためのトレーニング」と題した講演会を実施し、そ

の道の日本を代表する先生方の講演をいただき、多くの岳人に刺激的な学びを与えていただいた。

「日光清掃登山」は、7月2日に日光湯元温泉周辺で県山岳スポーツクライミング連盟と共催で実施した。また、「那須クリーンキャンペーン」を9月3日に那須岳周辺で県山岳スポーツクライミング連盟、県「山の日協議会」と共催で実施した。

他団体等との連携では「栃木県山岳遭難防止協議会」、「栃木県山の日協議会」の構成員として役員を務め、積極的に各事業に参画した。

創立120周年記念事業「全国山岳古道調査」への取り組みは、プロジェクトチームにより昨年中にはひととおり実施調査を終了することができた。現在は調査内容を整理し、不足部分の再調査や歴史的な考察も加えて報告する作業をしている。

2024年元旦には、能登半島を中心に大地震が発生し、不吉な年明けとなってしまった。いまだに水道をはじめとしたインフラが復旧せず、避難所生活をしている方々が大勢いる。心よりお見舞い申し上げます。このようなときに、登山愛好者としてどのようなことができるか、東日本大震災のときにも叫ばれたが、災害防災教育への大きな貢献として、登山の知恵やスキルを大いに役立てることのできる良い機会であると思っっている。「困難を乗り越える力」「回復する力」「立ち直る力」など心理学では「レジリエンス」というが、そのような力の養成に登

山は最も効果的で、教育的である。私たち登山愛好者は、自分たちの趣味を通して、結果として社会貢献できる良い活動をしていると自負してもよいと思っている。そのためには、まず、クラブライフを通して自然との共生を楽しみ、岳友との友情を深めることは大いに意義あることである。

2025年に向けては、世の中の状況と登山界の傾向を的確に判断して、よりいっそう工夫をこらしながら、会員同士の情報交換を推進し「栃木支部会員で良かった、楽しい！」という雰囲気醸成しながら、クラブライフを充実させていきたいと考えている。

(渡邊雄二)

群馬支部

《支部総会》予定どおり実施

群馬支部は支部通常総会を前橋市中央公民館にて実施しているが、2023年度も前年度同様、参集により実施された。組織の見直し、支部活動の活性化などを視野に長期目線での検討を始めている。また、初の群馬開催となった第36回全国支部懇談会の報告および、設立10周年記念事業の予定、支部各委員会事業報告および事業計画などについて協議された。

《会議》予定どおり実施

支部の会議には、例会、役員会、各種委員会、定期総会があ

り、例会は奇数月第3水曜日、役員会は偶数月第3水曜日に原則開催されている。その他各種委員会（山行委員会、自然保護委員会、安全研修委員会、事業委員会、総務委員会）は必要に応じて随時開催している。定期総会は5月開催の例会に充てている。これら各会議および各委員会の活動については、zoomなどのオンライン開催と現地開催を併用し、運営の効率化を図っている。

《教育活動》予定どおり実施

座学講座は、気象に関する研修会（登山者のための気象の知識）を計2回開講した。第1回は2023年7月8日（土）「国立赤城青年の家」にて、第2回は2024年1月8日（月）「前橋市中央公民館」にて、それぞれ、講義と実地研修を組み合わせて実施された。各回充実した内容となった。

《プロジェクト・地域貢献活動》予定どおり実施

*「ぐんま山フェスタ2023」

ぐんま山フェスタ実行委員会の主催により、群馬県山岳連盟、群馬県勤労者山岳連盟と共催で、10月21日（土）～22日（日）の両日にわたり、ピエント高崎にて開催された。ぐんま山フェスタは、群馬県を中心とした山岳資源やアウトドアの魅力発信、認知度向上を主な目的として開催。2023年度は、群馬の登山道整備に関わるパネル・ディスプレイも実施され、県内登山等整備の現状、課題、今後の方向性について、

パネラーから意見が出された。来場者も多く盛会に終わった。

＊「山の日イベントin谷川」

谷川岳エコツーリズム推進協議会と群馬県山岳団体連絡協議会が主催し、みなかみ町の協力を得て谷川岳周辺を会場に実施される「山の日」の定例行事となっている。2023年度は、①西黒尾根から谷川岳登山、②白毛門登頂コース（マチガ沢、一ノ倉沢、幽ノ沢を一気に眺めよう）、③清水峠弾丸ツアー（まぼろしの国道を行く）、④みなかみスイーツと谷川岳の自然を満喫（沢ごとにスイーツ！）の4コースに分かれて実施された。

＊「ぐんま県境稜線トレイル安全等調査」

2019年度からぐんま県境稜線トレイルの安全等を定期的に巡視し、チェックする調査活動を行なっている。群馬県からの受託事業で、日本山岳会群馬支部は群馬県山岳団体連絡協議会の担当する土合から馬蹄形・谷川連峰主稜線を経て三坂峠までの区間のうち、谷川岳トマの耳／平標山を担当している。2023年度も7月から10月まで毎月1回、全4回実施となり、各回の調査結果を報告している。

＊会員による地域貢献活動「上川淵公民館自主学習グループ」への講師派遣

前橋市上川淵公民館で開かれた同公民館での「0から始め

る山歩き」受講者による同グループに根井支部長が講師として協力している。毎月1回の座学をベースに3ヶ月に1回程度の実地山行を行なっている。

《広報・出版活動》予定どおり実施

支部報は年2回、21号（9月）、22号（5月）を発行した。

5年前に開設したWebページも適宜更新を続けたり、SNSにより適時情報発信をしたりと、支部山行や主催事業の告知などを中心に掲載し、広く情報発信をしている。

《その他》予定どおり実施

初の群馬開催かつコロナ禍後初の開催となった第36回全国支部懇談会が、2023年9月23日(土)～24日(日)の2日間に行われ谷川岳周辺を会場に開催された。橋本会長をはじめ、全国各支部会員および個人会員、総勢156名がみなかみ町に集い、親睦を図った。

初日の9月23日(土)は、みなかみ町にて講演会、親睦会が行われた。講演会は群馬県警察谷川警備隊長・伊藤武氏を講師に招き「今、谷川岳で考える安全登山」と題して実施された。また、親睦会では参加者が各々親睦を図るとともに、差し入れられた各地の地酒を満喫、楽しいひとときを過ごした。

2日目の24日(日)は、一ノ倉沢ハイキングが実施された。当日は今シーズン最高の好天に恵まれ、参加者は一ノ倉沢出合までの往復を通して、谷川岳の自然を堪能した。(小池千秋)

埼玉支部

2023年度は世界中を震撼させた新型コロナウイルスも5類へと移行し、支部の登山活動も各委員会が年間計画を掲げてのびのびと支部事業に当たることができた。山行委員会では、毎月1回の月例山行で多様な会員の要望に合わせた山行、四季の山として季節の特徴を活かした山行を実施した。7月には新入会員を中心に上高地の山研利用で焼岳に登山、入会后、少しでも会員同士の連帯感、所属意識が高まるとよい。登山教室の指導者養成および次世代を担うリーダー養成のために、日本山岳会主催の初級登山教室指導者養成講習会に参加して、最新の登山技術や装備に精通した登山ガイドの指導による雪山訓練を受講した。安全登山委員会では、セルフレスキュー・救急救命法や山岳救助隊による安全登山に関する講習会、講演会を実施した。自然保護委員会では、「大高取山自然観察会」、「森づくり」などを開催した。広報委員会では、年3回の支部報を発行。また、埼玉支部ホームページを活用して支部の予定、報告を掲載し共有を図り、併せて埼玉やま塾受講者の募集を呼び掛け、入会促進にも活用した。社会貢献委員会では、埼玉県障害者スポーツ協会と共催で、毎年恒例の「第13回大久保春美記念ふれあい登山」は小川町を起点とする官ノ倉山で実施した。また、清掃登山は、SMSCAの「埼玉県立自然公園クリーン登山の

月間」中に越生町の大高取山で実施した。自然保護委員会では、「大高取山自然観察会」、「森づくり」などを開催した。恒例の自立した登山者を目指す講座第5期「埼玉やま塾」を開催し、8名が新たに埼玉支部の会員となった。2月には埼玉県立嵐山史跡の博物館主任学芸員の関口真規子氏より「山岳古道調査関連講演会」演題「日本九峰修行日記で辿る近世関東の霊山」とある修験者のまなざし」を開催し、80名（JAC31名）の参加者があり大盛況であった。

【総会】

*4月8日(土) 2023年度通常総会（埼玉会館7階 7A会議室）では、会員数は122名、出席者35名、委任状は64名で開催された。大山支部長を議長に選出し、2022年度事業報告および収支決算報告、2023年度事業計画（案）および収支予算（案）、支部役員人事（案）が承認された。

【埼玉支部委員会】

*毎月開催 支部長・支部委員・会計・監査・事務局長が出席して、各委員会の事業報告や計画の立案・審議・承認などを実施した。

【行事・講演会・講習会・自然観察会・支部新年懇談会・ふれあい登山など】

*4月2日(日) 大久保春美記念第13回ふれあい登山 官ノ倉山 JAC31名、協会参加4名、障がい者+引率者23名計58名

- * 4月15日(土)～16日(日) 高尾の森・森づくり研修(春)参加12名
- * 4月23日(日) 月例山行 埼玉50山・棒の折山 参加11名
- * 4月29日(土) だれでも楽しめる読図山行、GPS利用で好評であった。参加者9名
- * 5月13日(土) 二子山の予定が天候不順で大野アルパイン道場に変更。参加7名
- * 5月20日(土)～24日(日) 日本ーラオス友好の森展示造成プロジェクト植樹会参加
- * 5月27日(土) 月例山行 埼玉50山・笠山、堂平 参加5名
- * 6月10日(土) 劔岳へのステップとして二子山 参加8名
- * 7月8日(土)～9日(日) 山研利用で焼岳 参加15名
- * 8月26日(土)～27日(日) 月例山行 針ノ木岳。参加8名
- * 9月16日(土)～17日(日) 飯豊山 水不足により2日で下山 参加5名
- * 9月30日(土)～10月1日(日) 月例山行 燕岳 参加9名
- * 10月21日(土) 月例山行 蔵山、金毘羅尾根 参加5名
- * 11月11日(土) 月例山行 埼玉50山・秩父御嶽山 参加13名
- * 12月2日(土) 令和5年度年次晚餐会 支部参加15名
- * 12月16日(土) 忘年山行 陣見山 山行35名、懇親参加26名
- * 1月13日(土) 新入会員ウエルカム山行 景信山 参加者26名のうち新入会員4名
- * 1月20日(土) 安全登山講演会「埼玉県警察山岳救助隊の話」

- 講師・高島望氏 参加32名(うち会員27名)
 - * 2月4日(日) 月例 埼玉50山・武川岳 参加14名
 - * 2月18日(日) 全国山岳古道調査関連講演会 埼玉県立嵐山史跡の博物館の主任学芸員・関口真規子氏 演題「日本九峰修行日記で辿る近世関東の霊山ーとある修験者のまなざしー」を開催 参加80名(JAC31名)
 - * 2月24日(土)～25日(日) 月例山行 北八ヶ岳・縞枯山と北横岳 参加5名
 - * 3月9日(土)～10日(日) 令和5年度・第13回登山教室指導者養成講習会 2名参加
 - * 3月26日(火) 安全登山講習会「山のファーストエイド」(初期救急)よもやま話 恵秀彦講師 参加10名
 - * 9月23日(土)～24日(日) 全国支部懇談会(群馬支部担当) 水上市館泊、翌日は谷川岳山麓ハイキングで他支部会員との懇親を深めた。4名参加
- 【埼玉支部報の発行、ホームページの活用】**
- * 埼玉支部報は39号を6月、40号を3月に発行。
- 支部山行の予定、報告などホームページにてアップし、支部会員間の共有を図った。また、ホームページを見て「埼玉やま塾」の申し込みをされるケースが目立った。
- 【今期の方針】**
- 大山支部長より、「埼玉支部の課題である指導者およびリ

ダー不足の解消に向けた対策として、従来の個々人の希望ではなく、組織運営と存続を重視し、支部活動に理解のある会員を本部の指導者養成講座や加盟団体主催の研修会や講習会への積極的な参加要請を支部委員会として推進し、指導者やリーダーの育成の一助にしたい。」との方針が打ち出されている。

(林信行)

千葉支部

新型コロナウイルスで2年の活動停滞があり、その間にも会員の高齢化は確実に進み、支部行事や支部山行に参加する人数も徐々に減った。そのような状況の中でも活発に活動したのはウォーキングや自然観察会などの同好会活動で、比較的運動量の少ないものに大勢が参加した。一方で、「雪山」「クライミング」「バリエーション」を目指す若い会員もわずかながら入会してきており、世代交代が少しずつ進んでいる。

支部の人員は、会員93名、準会員0名、会友42名、合計135名(2024年4月1日現在)。

《支部山行》(実施25回、延べ141人)

5月4日 房州アルプス(6人)、13日 自然学・三舟山(11人)、18～20日 立山(4人)、6月3～4日 日光・太郎山(8人)、17日 自然学・御岳山(10人)、23～24日 浅草岳(5

人)、7月9日 大多摩ウォーキングトレイル(4人)、22日 富士山昔道(8人)、29日スツカン沢・桜沢(5人)、9月8～9日 焼岳(6人)、16日大岳山(3人)、10月13日 自然学・一ノ倉沢(11人)、14日 金峰山(3人)、20～23日 信越トレイル(9人)、27～28日 ニッ箭山と背戸岨廊(3人)、11月10～11日 高原山(3人)、12日 檜洞丸(4人)、12月27～29日 北八ヶ岳(4人)、1月1日 三郡山と安房高山(2人)、6～7日 年始交流会(3人)、14日 石尊山(8人)、2月23～24日 裏磐梯スノーシュー(4人)、3月10日 柏木山(7人)、15～16日 浜石岳(6人)、30日 筑波山(4人)

《ウォーキング同好会》(実施10回、延べ112人)

4月2日 目黒川ウォーク(9人)、5月21日 浦安ウォーク(9人)、6月10日 市原ウォーク(13人)、9月23日 外房大原ウォーク(13人)、10月28日 都内下町ウォーク(9人)、12月16日 浜離宮と品川宿ウォーク(11人)、1月28日 川崎大師周辺ウォーク(14人)、2月18日 江東区周辺ウォーク(15人)、3月30日・31日 飛鳥山周辺ウォーク(19人)

《登山道整備》(8回、延べ31人参加)

4月2日 無実山・房州アルプス(6人)、11月23日 鎌倉古道(10人)、12月9日 大日山(4人)、10日 元清澄山(3人)、1月27日 無実山・房州アルプス(3人)、3月10日 トビ岩山(1人)、3月30日 トビ岩山(2人)、31日 トビ岩

山(2人)

《リーダー育成》

3月16～17日 指導者養成講習会(雪山)(3名)

《初級登山教室》(6回、延べ37人)

4月22日・23日 山登りの心構えと装備(2人、小鋸山3人)

5月20日・21日 歩き方とマナーと計画(3人、富山4人)

6月17日・18日 読図と地図アプリ(6人、高水三山7人)

7月22日・23日 山の天気(2人、川苔山2人)

9月2日・3日 山の病気と救急法(2人、大菩薩嶺4人)、

30日・10月1日 山で泊まる・赤岳鉱泉(2人)

《青少年育成野外活動支援》(児童養護施設「晴香園」山行)

6月24日 鶴原理想郷ハイク(5人)

8月22日 御岳山ロックガーデン(6人)

11月11日 鎌倉アルプス(8人)

《懇談会等》

8月5日～6日 九州5支部集会 1人参加

8月11日 千葉支部山の日ビールパーティ 25人参加

9月23日～24日 全国支部懇談会(水上温泉・群馬支部) 8

人参加

11月3日～4日 4支部懇談会(高原山・栃木支部) 7人参

加

12月2日 年次晚餐会(新宿) 14人参加

《総会・講演会等》

5月7日 支部総会 千葉市生涯学習センター(出席27名・

書面決議39通)

講演 坂庭博之さん(群馬県林業試験場長)「ヤマビル・マダ

ニ対策のすすめ」

《出版・広報活動》

①「千葉支部だより」を4回(4、7、10、1月)発行。②

ホームページの更新を随時行なった。

《会議(役員会議)》

毎月第3水曜日にリモートにて開催した。

《本部および合同会議等》

支部連絡会議(9月21日・リモート)、全国支部合同会議、支

部連絡会議(12月2日)、支部・委員会合同説明会(1月13日・

リモート)、事業計画・会長ヒヤリング(2月7日)、首都圏支

部情報サイト説明会(3月11日・リモート)、支部連絡会議(3

月28日・リモート)

《次年度の方針と計画》

①多彩な支部山行・イベントで支部の活性化を図る。

②初級登山教室を開催し、安全登山に努める。

③房総の山の登山道整備事業を引き続き行なう。

④児童養護施設の子どもたちとの登山(青少年野外活動支援

事業)を行なう。

- ⑤ 袖ヶ浦市内の5つの中学校が行なう学校登山を支援する。
- ⑥ 若手会員向けにユースクラブを設け、本部・他支部ユースと交流を図る。

⑦ 技術向上のため初級クライミング教室を開催する。また、各種講習会に参加する。
(三田博)

東京多摩支部

2023年度は、数年ぶりに新型コロナウイルス感染のことをあまり気にかけずに山に行けるようになった年だった。山は以前の活気を取り戻し、コロナ禍以降宿泊人数を制限するようになった山小屋は前にも増して予約が取れなくなったが、それも普通の山登りが帰ってきたということにはかならないと思う。その中で奥多摩や高尾山など東京の山々も賑わいを取り戻し、心置きなく山を楽しむことができるようになった。

東京多摩支部も、以前と同じように開催できるようになった山行や登山教室、講習、講演などを通じてよりいっそう、会員はもとよりそのほかの登山愛好家に山の楽しさを伝えていくことができたのではないかと思う。

I 東京多摩支部の現況

・会員数 2024年3月末現在 292名(前年度末比4名減) 正会員233名(前年比2名増) 準会員56名(前年比7

名減) 支部友3名(前年比1名増)

・入会者 正会員24名(準会員から正会員への移行7名を含む)、準会員7名支部友1名

・退会者 正会員20名 準会員14名(物故会員および準会員から正会員への移行者を含む)

・物故会員(2023年4月1日～2024年3月31日) 人見茂子、下野武志、笥邦男、金邦夫、阿部雅龍

II 2023年度活動

1・会議

・支部通常総会 5月18日(日) 国分寺 cocobuni プラザリオンホール。2022年度事業・決算報告、2023年度事業計画・予算案などを審議。出席41名、(委任状) 123名。

・幹事会 8月を除く毎月1回開催し、幹事・監事が延べ172名出席。予算・決算・事業計画・プロジェクト事業等の審議・活動報告。

・委員会等 総務、財務、会報広報、ICT、山行、自然保護、安全対策、奥多摩BC運営の8つの委員会と登山教室、野火止、山岳古道の3つのPTがほぼ毎月開催。

2・山行

・定例山行 13回実施、延べ159名参加。中止3回。4月8日(土)蕎麦粒山9名、5月20日(土)檜洞丸11名、6月18日(日)白毛門15名、白山7月16日(日)～17日(月)13名、五竜岳8月4日(金)～6日

(日) 8名、鬼怒沼山 9月23日(土) 24日(日) 16名、甲武信ヶ岳 10月14日(土) 15日(日) 9名、高座山・杓子山 10月21日(土) 15名、子持山 11月12日(日) 16名、市道山 12月16日(土) 15名、愛鷹山 1月13日(土) 10名、北横岳 2月10日(土) 13名、幕山 2月18日(日) 10名、硫黄岳 3月2日(土) 3日(日) 8名

・平日山行 11回実施、延べ103名参加。中止1回。独鉾山 4月18日(火) 6名、湯坂路 5月25日(木) 7名、今熊山 7月6日(木) 8名、金峰山 8月31日(木) 12名、明神ヶ岳 9月14日(木) 11名、牛奥ノ雁ヶ腹摺山 10月26日(木) 8名、九鬼山 11月16日(木) 9名、仏果山 12月6日(木) 13名、三ノ塔 1月25日(木) 12名、興因寺山 2月15日(木) 8名、大福山 3月14日(木) 9名

・育成山行 5回実施、延べ39名参加(山行委員対象)
日和田山 4月1日(土) 5名、烏帽子岩 4月22日(土) 6名、青梅丘陵 5月14日(日) 12名、加治丘陵 11月25日(土) 10名、天覧山岩トレ 2月3日(土) 6名

3・自然保護活動

・4月4日(水) 春の自然観察会 12名参加
・4月9日(日) 野火止保全地域の調査 6名参加
・5月14日(日) 野火止保全地域他での自然観察会 12名参加
・5月25日(木) チョウの観察会 木下沢林道・日蔭林道 8名参加

・6月18日(日) 19日(月) 三ツ峠アツモリソウ保護活動(除草作

業など) 9名参加

・8月23日(木) 御岳山レンゲシヨウマ観察会 5名参加
・11月11日(土) 12日(日) 三ツ峠アツモリソウ保護活動(種まき) 5名参加

・野火止水歴史環境保全地域の保全活動(地域調査、伐採等)
【定例作業および臨時作業28回、運営会議11階、延べ208名さん加)

4・登山教室

・第10期初級登山教室

講座7回実施、延べ238名参加。

登山実習12回実施、延べ359名参加。

・講座/立川市女性総合センター 4月5日(水) 37名、4月12日(水) 32名、5月10日(水) 35名、5月17日(水) 38名、6月7日(水) 36名、10月4日(水) 29名、12月16日(土) 31名

・登山実習/4月22日(土) 三頭山(32名)、5月27日(土) 御前山(39名)、6月17日(土) 大岳山(30名)、7月22日(土) 高水三山(30名)、8月19日(土) 大菩薩嶺(24名)、9月9日(土) 10(日) 上高地・岳沢(29名)、10月14日(土) 川苔山(24名)、11月18日(土) 六ツ石山(28名)、1月20日(土) 石割山(31名)、2月17日(土) 入笠山(26名)、3月16日(土) 17日(日) 三ツ峠山(27名)

・スタッフ研修

・新規スタッフ研修講座2回実施 延べ30名参加

8月30日(水) (15名)、10月25日(水) (15名)

・登山実習2回実施、延べ25名参加。

6月10日(土)二子山 (14名)、11月12日(土)麻生山 (11名)

・中級プレススクール 4回実施、延べ69名参加。

11月11日(土)モモンガ (21名)、12月17日(土)景信山 (17名)、2

月12日(土)赤城山黒檜山 (17名)、3月30日(土) 31日(日)上州武尊

山) (14名)

・登山教室テキストの作成 7名で執筆

5・広報活動

・「会報たま」52号～55号発行。5、8、11、2月の年4回。

「会報たま」のメール配信対象者は3月31日現在60名。

・ホームページの運営・管理および入会問合せ対応

・メールマガジン「たま便り」配信、配信対象者は3月31日現

在275名。

・8月10日(金)～12日(日)「山の日」PR活動を奥多摩駅前で実施、

併せて奥多摩BCに横断幕を出した。そのうち8月11日(土)に

は納涼会と花火鑑賞を行ない、24名が参加。

・5～11月、奥多摩BCを月2回(第2土曜日、第4土曜日(延

べ10回)オープンし、登山者に日本山岳会と東京多摩支部を

PR

6・講演会

・10月26日(木) 自然保護講演会「山と温暖化。私たちの山はど

うなっているか」講師 岡山泰史氏 (30名参加)

・2月29日(木) 安全登山講演会「安全に登山を楽しむために」

長野県警察山岳遭難救助隊 (参加者58名)

・12月9日(土) 山の天気ライブ授業(座学) 都立多摩図書館(会

員61名 外部9名)

・12月10日(日) 山の天気ライブ授業(実地) 日ノ出山(会員26

名)(講師ヤマテン代表 猪熊隆之氏)

7・安全登山講習会

・7月3日(土) セルフレスキュー講習会「テーピングを利用し

た応急処置技術講習」22名

・8月11日(金) 山の日と安全登山周知チラシ配布 奥多摩駅前

6名

・10月29日(土) 登山技術講習会「ロープ使用法講習」22名

・11月17日(土) セルフレスキュー講習会「冬山の医療講座」35名

・3月3日(土) セルフレスキュー講習会「東京消防庁による救命技能講習会」7名

・4月～3月 山行計画書受理件数 支部山行59件、同好会山

行1件、個人山行144件、合計204件

8・山岳古道調査

・4月20日(土)～10月1日(土) 古甲州道 檜原村浅間尾根踏査4

回15名

・7月16日(火) 古甲州道 檜原村数馬有識者調査 5名

- ・ 5月17日(金) 古甲州道 甲州市有識者調査 5名
- ・ 5月27日(金) 10月22日(土) 古甲州道 牛ノ寝・大菩薩峠踏査 3回14名
- ・ 7月5日(金) 3月23日(土) 武州御嶽山登拝道 御嶽神社有識者等調査 5回22名。
- ・ 11月3日(水) 2月2日(日) 武州御嶽山登拝道 御嶽神社有識者調査 3回23名
- ・ 10月1日(木) 2月1日(金) 鎌倉街道山の道(都内) 有識者調査 4回21名
- ・ 4月24日(土) 3月27日(水) 山岳古道調査PT12回
- 9・その他の行事・懇親会
 - ・ 4月2日(日) 新入会員歓迎ハイキング・懇親会(13名)
 - ・ 4月22日(土) 奥多摩B.C運営委員会による奥多摩湖周辺散策(5名)
 - ・ 6月28日(水) 新入会員オリエンテーション(対象者15名、スタッフ約18名)
 - ・ 10月28日(土) 「秋の芋煮会」(会員16名)
 - ・ 11月26日(日) 「蕎麦打ち」(会員14名)
 - ・ 1月13日(土) 初詣山行と奥多摩B.Cルーム開き(会員15名、南氷川自治会2名計17名)
 - ・ 3月20日(水) 春の集い 京王倶楽部(会員55名)
- 10・その他の活動

- ・ 奥多摩B.C(B.Cの運営(宿泊者17名)、寄贈の会報「山」の製本(4/22納本)、集会所フロアの張替作業(GW))
- ・ ナビゲーション講習 青梅丘陵、吹切尾根、小坂志川(沢)、湯場ノ沢(沢)、学科を2回
- 11・サテライト・サロン
 - ・ 吉祥寺、立川、多摩の3ヶ所で開催している
- 12・同好会
 - ・ スキー同好会、
 - ・ 山の唄を歌う会
 - 4月25日(火) 3月26日(火) 例会 12回 延べ134名
 - 3月20日(水) 「春の集い」で歌唱 7名
 - ・ スキー同好会、山の唄を歌う会 (近藤雅幸)

神奈川支部

《支部主催での活動》

*かながわ山岳誌プロジェクト

- 支部設立を記念して立上げた「かながわ山岳誌プロジェクト」は、5月に最終山行を終え、『かながわ山岳誌』の編集作業に入り、翌年2月に出版され、3月に出版記念講演会を開催した。
- ・ 踏査山行…5月3日(水) 鷹取山・湘南平 25名参加
 - ・ 『かながわ山岳誌』出版…日本山岳会神奈川支部著2月8

日。山と溪谷社から発行。304頁・A5判・2200円

(税込み)

・出版記念講演会を開催…3月23日、神奈川大学にて実施。

講演者は山と溪谷社・萩原氏、ヤマテン・猪熊氏。その他

山岳誌に関してのトークショーを設ける。来場者数は約1

40名。

*城跡ハイキング…今期から立ち上げた企画。

・9月9日(土) 津久井城 会員(11)・一般(7) 参加

・11月11日(土) 茅ヶ崎城・小机城 会員(8)・一般(10) 参加

・1月13日(土) 小田原城 会員(9)・一般(10) 参加

・3月9日(土) 八王子城 会員(7)・一般(9) 参加

*関東ふれあいの道ハイキング…今期から立ち上げた企画。

・4月22日(土) 三浦・岩礁のみち 会員(9) 参加

・10月14日(土) 油壺・入江のみち 会員(11) 参加

・12月9日(土) 荒崎・潮騒のみち 会員(7) 参加

・2月3日(土) 佐島・大楠山のみち 会員(9)・一般(2) 参加

*山行委員会山行…今期から立ち上げた企画。

・11月18日(土) 三浦アルプス 会員(9) 参加

・12月15日(金) 蓑毛越・下社 会員(9) 参加

・1月20日(土) 鎌倉大仏ハイキングコース 会員(10) 参加

*自然観察会

・4月29日(土) 秦野盆地湧水群・葛葉緑地 会員(10) 参加

・9月30日(土) 野草園・荻野川流域 会員(9) 参加

・2月17日(土) 相模原貯水池周辺 会員(8) 参加

*妙高赤倉イベント

・5月27日(土)・28日(日) 斑尾高原山菜取りハイキング 会員

(7) 参加

・8月2日(月)～4日(金) 八方尾根・笹ヶ峰ハイキング 会員

(7) 参加

*救急法講習(神奈川県山岳赤十字奉仕団との合同イベント)

・3月16・17・20日の3日間で講習・検定試験を実施。受講

者25人。そのうち会員6人

《本部プロジェクトほか》

*全国山岳古道調査PJ…今年度は最終山行を実施。

・4月8日(土) 箱根湯坂道 会員(7) 参加

*南関東3支部懇親会山行(埼玉支部、東京多摩支部)

・11月10日(金) 県北部の日連アルプス&芸術の道 29名参加

《神奈川県山岳連盟としての活動》

*8月11日(金)はだの山の日イベント

・親子レクリエーションにスタッフとして参加。会員(3) 参加

*6月4日(日)全国水環境一斉調査

・調査活動に参加。春岳沢と水無川にて取水した後、水質汚

濁等の検査を実施。会員（1）参加

《会議等》

*支部通常総会 5月20日(土) 県民センターにて実施。令和4

年度事業報告・会計報告、令和5年度事業計画・予算計画に

ついで議案が可決された。

*役員会 11回実施。県民センターにてリモートも含め、毎月

開催（8月を除く）。執行体制は役員17名、監事2名、顧問4名、オブザーバー1名（3月末現在）。

*神奈川県山岳連盟会議

・理事会 Zoom会議にて毎月開催。出席者（理事田島、永井）

・代議員会（5月21日）出席者 代議員砂田、込田、理事永井、田島

《支部報》

支部報（電子版）は年4回（5月、8月、12月、3月）発行。

（永井泰樹）

越 後 支 部

【総括】

令和5年度の支部会員動向は、新入会員8名に対し、物故者4名、退会者7名で、入る会員よりも出る会員の方が上回って

いる傾向が続いている。コロナ禍の影響で自粛を余儀なくされていた支部活動も従来どおり行ない、公益事業、共益事業とも活性化することができた。

【会議・支部晩餐会等の開催】

1・支部総会を5月27日に新潟市内において開催し、事業報告、事業計画、決算、予算計画等が承認された。

2・理事会を2回開催。5月27日、支部総会前に第1回理事会を開催し、総会における審議事項等を検討した。12月9日、新潟市内において第2回理事会を開催し、年間事業の中間報告を行なった。

3・専門委員会委員長会議を4回開催（7月8日、9月30日、11月23日、3月2日）し、専門委員会の事業経過および当面の予定について報告を行なった。

4・12月9日新潟市内において支部主催の年次晩餐会を開催し、会員40名が参加した。記念講演として本部から山岳古道プロジェクト・近藤雅幸リーダーを招き「山岳古道の魅力と楽しみ」の講演を行なった。

【第66回高頭祭】

7月25日、弥彦山大平園地において第66回高頭祭を開催し、会員外も含め約130名が参加した。日本山岳会第2代会長・高頭仁兵衛翁の遺徳を偲ぶとともに、本部から坂井広志前副会長を招き、「引き継がれる山岳祭プロジェクト」の講演を行なっ

た。

【山行、自然保護、山岳古道調査】

1・公益事業の公募登山を4回開催し、登山の普及と安全登山の啓発活動を行なった。

2・共益事業の支部山行・同好会山行など11回実施し、支部会員間の親睦交流を図った。

3・弥彦山周辺における外来植物除去および登山道清掃を2回実施し、自然保護活動を行なった。

4・山岳古道の調査活動を14回実施し、「山岳古道120選」越後支部担当9古道は調査を完了した。また、支部独自の古道

(峠)調査を11ヶ所行なった。

【学校登山・登山フェス等支援活動】

1・9月29日、第2代高頭会長の母校である長岡市立深沢小学校の弥彦山登山行事に会員6名を派遣し、児童等の安全登山のサポート活動を行なった。また、深沢小学校主催の講演会に講師を派遣して「郷土の偉人について」講演を行なった。

2・10月8日、民間テレビ放送会社主催の弥彦山登山フェスティバルに会員6名を派遣し、参加者約650名の安全登山のサポートおよび支部名の登頂証明書を発行した。

【広報活動】

1・支部報を年3回(6月、10月、2月)発行し、支部活動の状況および当面の活動予定などを掲載して会員間の情報共有

と情報発信を行なった。

2・支部ホームページを開設し、タイムリーな事業計画、事業への参加者の募集、事業結果を掲載して情報発信を行なった。

【今後の課題】

支部会員の高齢化により、健康上の理由や物故による退会者が増加している。半面、若者世代の入会が少なく会員の増加に至っていない。会員が気軽に参加しやすい行事、参加して楽しい山行の企画を立案、魅力ある山岳会作りを醸成して新しい会員を募るとともに、高齢者でも参加できる行事を推進し、会員離れの防止を図りたい。

(玉木大二朗)

富山支部

令和5年度も、新型コロナウイルス感染症防止対策は、2類から5類に移行し収束に向かっているということだったが、症状は軽くなったとしてもまだ継続しているという印象だった。マスクの着用義務もなくなり、安心感が増したとはいえ疑心暗鬼といったところである。コロナ禍の間に山岳地域の置かれている状況は大きく変化した。人の動きがなかなか回復しないも相まって、運営経費の増大を料金値上げに頼らざるを得ないという状況など関係者にとって厳しい運営が続いている。多く

の事業、行事が中止あるいは規模縮小は回復が困難な状態だ。

このような状況の中で、恒例の「第38回播隆祭」も参加者は27名で、播隆上人の生家跡に建立した「播隆上人顕頌碑」前において実施した。「生家の会」からは代表者を含めて10名の参加で、代表の大作氏からは播隆上人の古文書の解説を行なっている最中という、新たな発見の可能性も含めて興味深い報告があった。例年の播隆上人関連資料の展示などは中止としたが、旧大山町の富山市大山歴史民俗資料館に場所を移して資料の説明を聞くこととなった。例年、この後に実施している高頭山記念登山は10名の参加だった。今年は例年どおり播隆祭の1週間前の5月27日に行なった。高頭山登山道整備の参加者は8名だった。

昨年同様に、本部主催の全国支部懇談会は9月23～24日に群馬支部の主催で谷川岳周辺をフィールドとして多くの参加者の出席で開催された。富山支部からは7名の参加で、内5名は翌日に谷川岳山頂まで登ったとのことである。5支部合同懇親山行は11月4～5日に石川支部の主催で鹿島少年自然の家に宿泊し、国の史跡である石動山の周辺を巡り、また、会が進めている古道調査の対象となっている多根道の踏査を行なった。支部からの参加は9名だった。

日本山岳会創立120周年記念事業として全国山岳古道調査が各支部で始まっており、富山支部でも、立山登拝道や明治時

代の山岳有料道路として供用開始した「立山新道」、越中と飛騨をつないでいた「五箇山街道」の現地踏査を開始した。今年、現地調査から取りまとめの作業に重点が移るが、補足調査の可能性もある。

2月27日に富山支部の第13回山岳講演会として富山駅前の富山市民交流館で「ひと味違う立山の自然」と題して筆者・河合が講師をさせていただいた。これまで約39年間、立山でネイチャー・インタープリターとして活動してきた中で、山を愛する皆さんの参考になればと思い、聞いたことのない話もあるの「ひと味違う」という題名で講演会を開催した。参加者は一般の方たちも交えて25名だった。

中部山岳国立公園はコロナ禍の前後において著しい変化を示している。物価の高騰により立山黒部アルペンルートの料金および各山小屋や宿泊施設の料金値上げ、これまで懸案だった立山・黒部キャニオンルートの供用開始を令和6年7月4日、年度に開始するための施設整備の完成、インバウンドの増加に対する受け入れ態勢の強化、事故などの突発的事象に対する対処方針等問題は山積のほずだが、その対策についてはなかなか見えてこない。いろいろな面で日本を代表する国立公園であれば、それに即した運営体制を取っていることを内外に示さなければ評価は難しいのではないだろうか。関係機関の連携強化のためにも日本山岳会が関わる部分があるのではないかと考え

る。

《会議》

- ・ 4月19日(水) 支部総会 事業報告および収支決算報告、懇親会 参加21名

- ・ 役員会は7回開催（5月から3月まで2ヶ月に1回開催）
- ・ 12月2日(土) 全国支部連絡会議 事務局長参加

《山行・野外活動》

- ・ 5月16日(火) 小白川道 袴腰林道～小瀬峠 参加5名
- ・ 5月25日(木) 小白川道 小瀬～小瀬峠 参加6名
- ・ 6月17日(土) 小白川道 袴腰林道～小瀬 参加3名
- ・ 7月2日(日) 小白川道 萱沼橋～小白川 参加8名
- ・ 8月28～29日(水・木) 支部山行 薬師岳 太郎平小屋宿泊、参加者3名 *今年、薬師岳山頂の祠が改築されたため、このプロジェクトに関わった会員もいることから実施。
- ・ 9月23～25日(土～月) 第38回全国支部懇談会（群馬支部）
- ・ 水上温泉～一ノ倉沢出合、天神尾根～谷川岳 参加7名
- ・ 11月4～5日(土・日) 5支部合同懇親山行 石動山・多根道、鹿島少年自然の家宿泊 参加9名

《プロジェクト・地域振興活動》

- ・ 5月27日(土) 高頭山登山道整備（公益）参加8名
 - ・ 6月4日(日) 第38回播隆祭（公益）式典参加27名
- 《広報・出版活動》

- ・ 富山支部会報発行 10月17日第120号、3月19日第121号

- ・ 第13回山岳講演会 2月27日(火) 参加者25名「ひと味違う立山の自然」講師 河合義則（日本山岳会富山支部事務局長）

《その他の行事、懇親会》

- ・ 7月13日(木) 飯田肇副支部長の環境大臣表彰祝賀会 会場「高志会館」支部会員6名参加
- ・ 8月23日(水) 例会・暑気払い富山駅前「岡万」参加12名
- ・ 1月16日(火) 例会・新年会「和食ティファニー」参加15名
- ・ コロナ禍を経て感じた変化といえ、本部との打ち合わせなどにリモート会議が増えてきた。議題も多岐にわたってきており、支部の活動報告にどのように記載していけばよいのか戸惑ってしまう場合がある。何か大まかなガイドラインがあればいいと思うが、それでは各支部の特徴が表しにくくなるという場合もあり、何か良い方法があればと考えている。

(河合義則)

石川支部

令和5年度は未だ行動制限ある年明けであった。これまでと同様に支部での企画山行は自粛し、個人山行は制限せずを継続。令和5年5月8日から「5類感染症」となり行動制限は解除さ

れ、同時に支部でも制限は解除した。しかし、令和6年1月1日に能登半島地震が発生し、支部員に直接の被害はなかったが、実家や親戚などで大きな被害があり、対応が必要になったため、急遽、支部での山行は自粛、個人山行は制限せずとした。さらに1月5日、不慮の交通事故により永年会員でもある支部員の逝去と続き、支部として慌ただしい年明けとなった。

継続をしていた公益事業の「白山親子登山教室」は行動制限の影響もあり宿泊予定の山小屋での宿泊人数制限・インナーシート持参に加えて登山口アクセスバス料金と山小屋宿泊料金の値上げへの対応に苦慮し、やむを得ず本年も中止とした。

ふるさと登山道整備は支部員有志にて富士写ヶ岳・不惑新道を春に実施できた。会員構成は入・退会者で今年度会員数45名（会友5名含む）となった。総会、月例会は毎月第3水曜日に公共の会議室を借りて開催している。

創立120周年記念山岳古道調査について、石川支部推薦の2古道の踏査を実施し、写真や資料のまとめを行なっている。

《会議・月例会》（会場は金沢市総合体育館会議室）

- * 令和4年4月1日(土) 支部定期総会を開催、出席14名（議決権14名）、議決権行使書18名、計32名にて総会成立し事業報告、計画案、会計報告・予算案等を審議・可決した。
- * 5月17日(水) 月例会 不惑新道整備の計画と参加者の確認出席7名。

- * 6月21日(水) 月例会 夏山山行計画立案など、夏山シーズンは山行に出掛け、例会参加が難しいとの会員が多く7月、8月は例会を行わないこととした。出席6名

- * 9月20日(水) 月例会 支部員の夏山山行の写真などの上映と山行の報告会、出席8名。創立120周年記念講演、久弥祭と富士写ヶ岳登山、5支部懇親合同山行の写真上映報告会と年晩晚餐会への出席確認 出席6名

- * 12月24日(水) 月例会 年次晩晚餐会の写真上映報告会（ティリッチミールは石川支部が1971年に第5登）。出席6名
- * 1月17日(水) 令和6年能登半島地震について会員被害状況の確認。出席7名

- * 2月21日(水) 月例会 役員会兼ね4月の総会準備、出席4名
 - * 3月20日(水) 古道調査まとめについて進め方相談、出席5名
- 《公益事業・地域振興活動》

- * 5月27日(土) 富士写ヶ岳 春の登山道整備／火燈古道 小倉谷山へ最低鞍部を実施。他会との合同、参加18名

《山行・野外活動》

- * 7月18・19日(火・水) 月例山行 富士山 参加2名
 - * 8月11日(水) 月例山行 大笠山 参加2名
 - * 8月22・23日(火・水) 月例山行 瑞牆山 参加2名
 - * 2月17日(土) 月例山行 野伏ヶ岳 参加2名
- 《行事・懇親会・その他》

* 9月23・24日(土・日) 第36回 全国支部懇親会「近くて良
い山『谷川岳』につどう」 参加1名

* 9月20日(水) ココヘリ遭難事案出動 甲武信ヶ岳山梨県側
西沢溪谷 出動1名

* 10月21日(土) 第38回国民文化祭 いしかわ百万石文化祭 in 加
賀市 深田久弥生誕120周年記念 萩原浩司氏講演会「深
田久弥と日本百名山」と座談会「深田久弥とふるさとの山」
参加10名

* 10月22日(日) 第27回 久弥祭 富士写ヶ岳登山 参加12名

* 11月4・5日(土・日) 5支部懇親山行 石動山・多根道
参加37名

* 1月17日(水) ココヘリ遭難事案出動 八ヶ岳・赤岳 出動1
名 (堀正春)

福井支部

令和5年に入り、新型コロナウイルス感染の報道は相変わら
ずだったが、年末に向けて感染症法上の位置付けが5類に移行
することが決まると、徐々にではあるが元の生活に戻り始める。
穏やかな新年が明けたと思ったのに、能登半島地震に見舞われ
自然の恐ろしさを改めて感じた。一方、わが県では、3月に北
陸新幹線が敦賀まで開業すると明るいニュースもある。

令和5年度には国内での活動範囲を広げて、支部会員の満足
度の向上を目指したい。

《会議》

* 6月24日(土) 通常総会 越前糸生温泉「泰澄の杜」にて午後
1時開催。当日出席者16名・委任状19名。令和4年度支部活
動報告および決算報告と令和5年度支部活動計画・予算案が
提案承認された。

《支部山行》

* 4月1日(土) 鞍掛山6名参加、8日(土) 久須夜ヶ岳(天候不
順のため中止)

* 5月14日(日) 藤原岳(天候不順のため中止)、28日(日) 越知山
14名参加

* 6月3日(土) 平家岳(天候不順のため中止)、18日(日) 位川・
川上岳 9名参加

* 7月16～17日(日、祝) 白山・南竜(テント泊) 7名参加
* 8月11日(金・祝) 白山 4名参加

* 9月2日(日) 竜ヶ岳 5名参加、17日(日) 千石山 8名参加
* 10月7日(土) 金勝アルプス(鶏冠山・竜王山) 7名参加、22
日(日) 小原く大長山く赤兎山 7名参加

* 11月20日(土) 久須夜ヶ岳 7名参加

* 12月10日(日) 藤倉山・鍋倉山(忘年山行) 10名参加
* 1月7日(日) 日野山(天候不順のため中止)、21日(日) 富士

写ヶ岳（天候不順のため中止）

* 2月3日(土) 六所山 6名参加、18日(日) 蛇ヶ谷く奥鬼ヶ岳
周回 7名参加

* 3月2日(土) 護摩堂または取立山（天候不順のため中止）、17
日(日) 入道ヶ岳 8名参加

《その他の行事》

* 12月3日(土) 本部の年次晩餐会 福井支部からは3名参加

* 12月10日(日) 福井支部忘年会「亀の井ホテル福井」にて 16
名参加

《公益年間プロジェクト》

* 5月28日(日)、今年も感染症対策を徹底しながら、泰澄祭&泰
澄ウォークを開催した。室堂の越知神社にて神事が行なわ
れ、その後コンサートが開かれた。一般公募120余名の参
加、会員15名参加（本部から坂井副会長参加）

* 森づくり 小屋の周囲に足場や転落防止柵も取り付け、安全
を確保し屋根の作業に入る。垂木を打ち屋根の上に防水シー
ト、その上に波板を張り付けて屋根の完成。窓枠・玄関の枠
を取り付ける。外壁に防水シートを張りその上に杉板を打ち
付けると、正面玄関横の壁が完成した。また、草刈り、花壇
の整備をし花苗を植える。今年度の作業はここで終了。

（松田洋子）

山梨支部

国内で新型コロナウイルス感染症が発症した2020年以降、支部活動も諸制約を余儀なくされたが、令和5年5月8日に「5類感染症」に移行されたので、年度計画に掲げた諸計画などを全面的に推進・実施することに努めた。近年、入会歴の浅い支部員を中心に、登山についての志向がより多様化しつつあって、支部活動にも徐々に変化が出てきた一年であった。また、「日本山岳会創立120周年記念事業」の内、山岳古道調査については、降積雪の季節的要因などにより遺憾ながら一部進捗が遅延状況にある。

《年度方針》

年度計画の推進、安全登山の徹底実践、会員増加のため、支部一丸となって行動することを基本的な行動指針として、具体的には、会員相互の情報共有による支部活性化、第9回やまなし登山基礎講座の実施、JAC創立120周年記念事業・山岳古道調査の推進、第64回木暮祭（主管）の開催、第6回田部祭への協力支援に努めること。

《登山振興事業》

1・第9回やまなし登山基礎講座（予定どおり実施）

対象者は登山経験の浅い初級者、登山の基礎を学び直したい中級者とし、講座内容は安全登山、装備・服装、天気、地

図読み、救急医療、自然保護、山の文学、登山史の机上講座（5回）と、2回の実践登山（地図読み、ロープワーク、セルフレスキュー）とした。

2・山岳祭（予定どおり実施）

①第43回深田祭 4月16日（深田記念公園にて式典）例年どおり山梨支部が参加献花し、恒例の深田祭記念茅ヶ岳支部山行を実施した。（参加者10名）

②第6回田部祭 4月29日（土）に西沢溪谷・西沢山荘前広場の田部重治碑前での式典（参加者14名）。主催者の挨拶の後、碑前に各支部員が献花をし、その後、恒例の西沢溪谷周囲の支部山行（参加者10名）。

③第64回木暮祭 主催者は木暮碑委員会／増富ラジウム峡観光協会／山梨県山岳連盟と山梨支部（主管・事務局）。

10月15日（日）、増富ラジウム峡の奥、金山平の木暮理太郎記念碑の前で式典が行なわれた（参加者27名）。主催者挨拶、来賓代表挨拶（JAC前副会長長坂井広志氏）、献酒、献花、献杯の後、恒例のミニ講演は「木暮理太郎と尾崎喜八」をテーマに矢崎茂男会員が行なった。

3・支部主催山行・登山講習（一部変更して実施）

支部山行（会員外参加可）および会員山行の計画数23件。参加者延べ149名（会員109名、会員外40名）

4・雪山入門ステップアップ講習（計画3件、計画どおり実施）

北八ヶ岳で実施。参加者延べ29名（会員14名、外15名）

5・第4回家族登山（予定どおり実施）

8月11（金）日北杜市の清里〜吐竜の滝〜清泉寮周回コースで実施（山梨県山岳連盟と共催）。参加者6家族16名、スタッフ13名（支部8名、本部2名、県岳連3名）の合計29名

6・機関紙『甲斐山岳』第15号発行（予定どおり発行）

配布先・山梨支部員、山梨県内各図書館、日本山岳会本部・各支部、県岳連加盟団体、マスコミ各社など。

7・日本山岳会創立120周年記念事業

①山岳古道調査（進捗遅延済み）

対象古道（金峰山御嶽道と「南アルプス北部山岳古道」）の調査実施中であるが、積雪の季節的要因などで進捗状況は遅延済み。本部から別途要請の2古道（新倉〜転付峠〜二軒小屋、富士山吉田口登山道）は調査した。

②引き継がれる山岳祭（計画どおり実施）

5回（6月・9月・11月・1月・3月）の本部・全国関係支部とのオンライン会議を実施。リーフレット「引き継ごう山岳祭（2024年版）」が作成された。

③日本・エクアドル外交関係樹立100周年記念交流会（本部の要請どおり実施）

友好合同登山エクアドル隊の富士山登山に伴う前夜歓迎会が9月4日、富士吉田市内で開催され、本部要請で支部

から3名参加した。

《山岳環境保全事業》

- 1・支部年次総会（4月15日、計画どおり実施）
- 2・支部役員会（毎月第2水曜日、予定どおり実施）
- 3・山梨県山岳レインジャー委託事業（県から県山岳連盟への委託事業、予定どおり実施）

山梨県が条例で定めた特定希少高山植物および絶滅危惧種等の調査を県から毎年委託され、山梨支部では5月に日向山（探索）、6月に鳳凰三山（定経路）、三ツ峠（探索）、7月に北岳（定経路）、八ヶ岳・三ツ頭（定経路）で実査した。

- 4・第10回中部ブロック4支部交流会（予定どおり実施）

11月18日(土)～19日(日) 信濃支部幹事で安曇野市のビレッヅ安曇野で開催した（山梨支部7名参加）。

- 5・新入会員オリエンテーション（予定どおり実施）

5月23日（びゅあ総合、新入会員参加者13名）および5月25日（甲府市総合市民会館、同7名）において実施。支部の生い立ちや日本山岳会設立理念の説明、登山届の説明を行ない、新入会員との意見交換を通じて懇親を図った。

- 6・交流・懇親会

- ①若手支部員との懇親会（予定どおり実施）

7月14日(金)、甲府駅ビルで開催（参加者8名）

- ②新年会（予定どおり実施）

1月12日(金)、甲府駅ビルで開催（参加者33名）

- 7・支部報の発行（予定どおり実施）

支部通信（第3期第14号、第3期15号）を発行。

- 8・ホームページの更新（予定どおり適時実施）

支部の山行計画、登山講座等を適時掲載した。

- 9・会員異動・新入会員の状況

今年度末の支部員数78名、会員64名、準会員14名。昨今、入会者の大半は「やまなし登山基礎講座」受講者からである。今年度の入会者9名（会員3名、準会員から会員移行3名、準会員3名）。死亡会員…3名、退会会員…2名で純増は1名。準会員期限終了の1名は会員に移行した。

《令和6年度に向けて》

2024年度に改めて「日本山岳会の理念」としてスローガン「みんなの日本山岳会」が掲げられ、そのためのビジョンやミッション、そして、具体的な事業戦略が打ち出された。支部の事業計画実施に当たっては、これらを踏まえて支部員が情報を共有して円滑適切に対応することに尽きるが、特に次の点に留意したい。

創立120周年記念事業の山岳古道踏査は今年度の降雪前には完了し、速やかに所定様式で報告書作成に着手。入会歴の浅い支部員の全員ではないが、登山についての志向がより多様化してきている傾向が顕著に見受けられる。したがって、過去の

手法や規定にとらわれずに柔軟に対応していくことが必要であろう。一方、急激な変化を求めない会員層があることにも留意して支部全体の融和調和を図って対応したい。支部主催山行に限らず、個人山行の場も含めて、会員同士の信頼醸成と登山の技術知識の習得向上を目指し、もって人材育成と支部活性化を図っていく。加えて、女性会員がよりいっそう活躍、活動しやすい場に広げていく。

(北原孝浩)

信濃支部

令和5年度は、広報活動において支部報第74号、75号を発行し会員間の情報を共有。支部報とは別にインフォメーション30〜33号の発行で支部の活動および行事の情報伝達を行ない、加えてLineによる情報伝達、情報共有も行なった。また、「上高地を美しくする会、一斉清掃」には毎月、2週間ごと、延べ10日、延べ人数32名が参加。

会員の加入促進に関しては岳都・松本山岳フォーラムの山行イベントに参加し、入会案内、会員による呼び掛け、また、インスタグラムの広報活動で12名の新人会員を迎えることができた。

《会議、行事、山行等》

4月16日 令和5年度支部通常総会開催

4月23日 上高地山研開所、支部山行で十石山(12名、山岳フォーラムから6名参加)

4月27日 上高地開山祭

4月29・30日 支部山行 笈ヶ岳(3名)

5月5・6日 支部山行 岳沢(6名)

5月20日 支部山行 徳本峠(鳥々から古道調査も兼ね)(5名)

5月16日 ウェストン祭協賛団体打ち合わせ

6月3日 ウェストン祭記念山行 支部山行 徳本峠(明神か

ら)(9名)

6月4日 第77回ウェストン祭碑前祭

6月17日 支部山行 焼山(11名)

7月2日 支部山行 戸隠山(3名、山岳フォーラムから6名

参加)

7月22・23日 支部山行 白馬岳(6名)

8月4・5日 支部山行 白山(4名)

9月6〜9日 エクアドル友好登山隊と交流

9月23・24日 全国支部懇談会

9月16〜18日 支部山行 穂高岳(中止)

10月7・8日 支部山行 黒部川・下廊下(3名)

10月14日 支部古道調査 大綱〜鳥越峠(3名)

10月28日 支部山行 蓼科山(5名、山岳フォーラムから7名

参加)

11月4日 支部古道調査 北小谷～葛葉峠～平岩(2名)

11月5日 支部山行 子檀嶺岳(8名、松本山岳フォーラムから7名参加)

11月23・24日 上高地山研閉所

11月18・19日 第10回日本山岳会中部ブロック交流会

11月29日～12月10日 支部山行 ミルフォード・トラック(4名、ほか5名)

12月2日 年次晚餐会・7支部連絡会議

12月17日 支部山行 和熊山(6名、山岳フォーラムから7名参加)

1月15日 支部新年会・役員会

1月27日 支部山行 ハケ岳・にゆう(8名、山岳フォーラムから6名参加)

2月10・11日 支部山行・スキー山行 乗鞍(9名)

2月24日 支部山行 福地山(4名、山岳フォーラムから3名参加)

3月16・17日 支部山行・スキー山行 白馬(5名)

3月20日 監査会

令和6年度も広報活動として支部報の2回発行、インフォメーション4回発行。グループ Line による情報伝達、Instagram による情報活動を積極的にやっっていく。中部ブロック

ク4支部交流会で近隣の岳人と山登りを楽しむ。また、昨年同様「上高地を美しくする会」に参加し、環境の維持・管理の手伝いをし育成。支部員の高齢化の中で、ウェストン祭の継承や支部活動の活性化には、支部員の加入促進が最重要課題だ。岳都・松本山岳フォーラムのイベントでもに登り、On the climb Trainingを通して仲間を増やしていきたいと思う。新入会員の登山技術の向上をどう図るかも併せて検討していきたい。

(東英樹)

岐阜支部

今年の活動方針は「すべての会員が参加し楽しめる会とすること」とし、新たな企画を立ち上げ、多くの会員が楽しめるよう努めた。会員一人一人のニーズや体力に応じた活動を取り入れ、山行の楽しさを広げるとともに、会員同士の交流を深める機会を提供した。

例会山行・バリエーション山行・百名山山行は毎月開催され、季節に合った山行が行なわれた。今年度は新たに「ゆつくり山行」と「平日山行」を企画した。体力的に自信のない年配者向けに「ゆつくり山行」を企画し、無理なく山を楽しむことができるよう配慮し、年配者や新入会員に楽しんでもらえた。また、

平日休みのため例会山行などに参加できない会員向けには「平日山行」を企画した。スキルアップ企画として、新たに「沢登り」と「クライミング」を導入した。春から秋にかけては毎月沢登りを実施し、難易度を徐々に上げていき、自然の中での新たな挑戦としてスキルアップを目指した。岩登りが好きな会員向けには、クライミング研修や山行を設け、技術の向上を図った。

さらに、山に登る体力がなくなった会員や、会のメンバーと山の話や雑談を楽しみたい会員のために「トレッキンググループ」を設けた。月に一度、金曜日の午前中に喫茶店で開催され、山行計画や思い出話、情報交換などが行なわれ、会員同士の交流の場として大変好評であった。

また、シリーズ企画として「静岡の山シリーズ」を新たに設け、復活企画として「山城シリーズ」、リニューアル企画として長野県の「陀羅仏小屋シリーズ」は簡単な山とハードな山を企画した結果、参加者が格段に増え、幅広い年齢層が参加した。

毎年開催している山岳講演会では、今年は若い方にも楽しんでもらえるように、植村直己冒険賞を受賞した野村良太さんをお迎えし、北海道分水嶺縦走やヒマラヤ未踏峰チャレンジについて講演していただいた。一般参加者も多く、会場は大いに盛り上がった。

そのほか、権現の森づくりや自然保護委員会の活動も精力的

に行なった。年間を通じて計9回の権現の森づくり活動が実施され、延べ39名が参加した。自然保護委員会では、6月に山室湿原・三島池・醒ヶ井での花観察を行ない、自然の美しさと保護の重要性を再確認した。技術委員会による岩訓練や雪山訓練も予定どおり行なわれ、会員の技術向上と安全登山の知識を深める機会となった。

以上のように、今年の活動は多様な企画を通じて会員の皆さんに楽しんでいただくことができた。各会員のニーズに応える活動を提供し、山行の楽しさと会員同士の絆を深めることができた一年となった。次年度は会員一人一人のスキルアップを目標にしたいと考えている。連れて行ってもらっただけの山行ではなく、山行を企画すること、CL・SLとして山行を率いること、沢・クライミングおよび雪山の技術を向上させること、会の運営に携わることができる会員を増やしていきたい。

《令和5年度活動》(予定どおり実施分)

◎例会山行

4月16日 毘沙門岳(19名)、5月21日 己高山(12名)、6月4日 オハイブルー(14名)、7月2日 日野山(越前五山)
(9名)、8月27日 尾高山(26名)、9月9～10日 県民スポーツ大会・高澤観音・本城山(15名)、10月29日市民登山 雁又山(23名)、11月5日 田立の滝(11名)、1月14日 登りたくな山シリーズ 笹ヶ岳(9名)、2月11日 猿投山(17名)、

3月3日 今西錦司記念山行 雲母峰(27名)

◎バリエーション山行

4月9日 仏ヶ尾山(12名)、5月14日 高野山(14名)、6月3〜4日小同心クラク(4名)、7月9日 経ヶ岳(中央)(雨天中止)、10月15日 俱留尊山(21名)、12月10日六甲金山縦走(10名)、1月21日 雪山訓練・北横岳&縞枯山(11名)、2月1日 六谷山(雨天中止)、3月24日 御前岳(雨天中止)

◎百名山&ぎふ百名

4月2日 美濃俣丸(8名)、5月3〜4日 越後駒ヶ岳(9名)、6月3〜4日 赤岳・横岳・硫黄岳(9名)、6月25日 初糠山(25名)、7月15〜16日 甲斐駒・仙丈ヶ岳(12名)、8月11〜13日 槍・高穂縦走(12名)、9月16〜17日(土・日)日光白根山&男体山(9名)、9月30日 古道調査(上高地みち)(雨天中止)、10月14〜15日 笈ヶ岳(雨天中止)、10月7日 八経ヶ岳(11名)、11月11〜12日(土・日)大台ヶ原(12名)、11月12日大台ヶ原(15名)、12月24日 天狗岳(9名)、12月17日 夕森山(雨天中止)、1月7日 大日ヶ岳・雪山訓練(14名)、2月4日 湧谷山・雪山訓練(9名)、3月31日 日永岳(19名)

◎ゆっくり山行

8月6日 滝谷山(9名)、9月3日 祐向山(13名)、10月8日 南宮山(8名)、11月2日 天王山(雨天中止)、12月

10日 如来ヶ岳(8名)、1月7日 菩提山(9名)、2月4日 富士山(7名)、3月17日 滝谷山(中止)

◎沢登り

6月18日 片知溪谷(8名)、7月23日 乗鞍水系(8名)、9月3日 竹屋谷(8名)

◎平日山行

3月14日 藤原岳(3名)、3月25日 瓢ヶ岳(雨天中止)

◎その他

5月20日 静岡の山シリーズ・天城山(10名)、5月27〜28日 陀羅仏小屋シリーズ・飯縄山(11名)、8月19日 山岳古道調査・御嶽山(10名)、10月22〜23日 陀羅仏小屋シリーズ・四阿山と戸隠山(11名)、11月26日 静岡の山シリーズ・沼津アールプス(12名)、11月23日 山城シリーズ(18名)、12月16日 清掃登山・百々ヶ峰(中止)

◎権現の森づくり

4月8日・4月30日・5月13日・5月27日・6月10日・7月15日・9月9日・10月14日・11月19日 計9回実施(延べ39名)

◎自然保護委員会

6月10日 山室湿原・三島池・醒ヶ井(花観察)(14名)、9月28日 鳥の観察会(白樺峠にて鷹の渡りの観察)(雨天中止)

◎写真展委員会

12月18～24日 第1回写真展、2月17～29日 第2回写真展

◎今西錦司行事委員会

3月3日 雲母峰(26名)

◎トレッキングルーム

1月12日 ハートフルスクエアG(10名)、2月9日 同(12名)、3月8日 同(15名)

◎総務委員会

1月14日 新春懇談会(35名)

◎技術委員会

6月11日 岩訓練(18名)、1月7日 雪山訓練・大日ヶ岳(14名)、2月4日 雪山訓練・湧谷山(9名)

◎岐阜県山岳連盟

4月29～30日 東海ブロッククライミング大会(協力2名)、4月9・12月10日 理事会、6月18～19日 指導員研修 御在所山・前尾根(5名)、9月9～10日 県民スポーツ大会(15名)、2月23～24日 指導員研修・乗鞍(4名)

◎岐阜市山岳協会

10月29日 市民登山の協力(23名)

◎会員増強委員会

HPやInstagramで広報し、名山山行をPRして会員増強を図った。

◎事務局

例会は毎月第2木曜日、会議室にて実施 計12回。実施のうち12月は忘年会を兼ねて開催。

(梅田直美)

静岡支部

コロナ禍が過ぎ当支部の活動は状況を呈してきた。一般募集するトレッキング・セミナーは予定どおり年3回実施。また、会員山行も休日、平日、合宿のそれぞれが充実したものとなった。

《公益事業委員会》

1・トレッキング・セミナー

*5月28日(日) 第1回「焼津アルプス」セミナー生5名、会員10名 *10月28日(土) 第2回「三国山塊」セミナー生6名、会員14名 *3月10日(日) 第3回「富士山・御殿庭」セミナー生10名、会員14名

2・山の日記念親子登山

*8月11日(金・祝日)、「富士山周辺・幕岩～腰切塚」一般参加者18名、会員13名

3・南アルプス写真展(通算第6回目、県内山岳4団体との共催)

*10月31日(火)～11月5日(日)実施、於静岡市民ギャラリー、延

べ来場者872名、支部からの出展数は72点、他団体と合わせて181点。

4・自然保護活動

* 7月15日(土)～17日(月)「南ア・千枚岳周辺の高山植物観察」、1名参加(ほか会友1名、ほか2名参加) * 7月29日(土)～31日(月)、「同前」、2名参加(ほかに1名参加) * 11月4日(土)～5日(日) 大井川西俣柳島のリニア新幹線工事現場視察、5名参加 * 12月2日(土)～3日(日)「南ア・悪沢および蛇抜沢探索廻行」、3名参加 * 7月14日(金)、県内山岳4団体による「南アルプスの自然を守る会」発足、於「来て・こ」、2名参加 * 10月10日(火)、「南アルプスの自然を守る会」と県自然保護課との会合、2名参加 * 10月21日(土)～22日(日)、本部自然保護委員会全国大会、於八王子市、1名参加 * 11月28日(火)「南アルプスの自然を守る会」会合、於「来て・こ」、2名参加

5・森づくり事業

* NPO静岡山の文化交流センター主宰で、静岡市有度山および川合山の孟宗竹伐採および植樹作業に延べ16名が参加した。

6・山岳古道調査

* 山岳古道調査に関する本部PJとの会議(zoom開催)に随時参加した。 * 6月10日(土) 村山古道(下部)の踏査

山行を行なった。荒れていてルートが不鮮明。参加者13名。 * 10月26日(木)および11月16日(木) 村山古道(下部)の赤布付けを行なった。参加者延べ9名。 * 3月31日(日)、本部主管の旧下田街道(二本杉峠越え)に同行した。参加者7名(本部5名)

《山行委員会》

1・休日会員山行

* 6月24日(土)～25日(日) 神津島・天上山、民宿「菊屋」泊、9名参加 * 9月9日(土) 丹沢・葛葉川本谷(林道まで)、5名参加

2・平日会員山行

* 4月14日(金)夜～17日(月) 岡山県・日本原高原および那岐山、8名参加 * 9月27日(火)～28日(水)、日本平および日本平山、3名+会員外1名参加 * 2月13日(火)、富士宮市と南部町境・白鳥山、7名参加

3・合宿山行

* 5月2日(火)夜～7日(日) 九重連山・坊がツルBC、7名ほか会員外1名参加、三俣山、久住山、大船山、布岳などに登った。

* 7月20日(木)～24日(月) 北ア・穂高連峰、湊沢BC、7名参加、北穂・奥穂・前穂などに登った。 * 9月16日(土)～18日(月・祝)、北ア・後立山縦走、6名参加、梅池～白馬～不

帰ノ嶮ノ唐松ノ八方尾根、数年越しの計画が実現した。*

10月7日(土)ノ8日(日)、南ア深南部・中ノ尾根山、5名参加、久しぶりの深南部山行が実現した。* 10月14日(土)ノ15日(日)北信5岳と戸隠キャンプ場B C、12名参加、戸隠山および飯縄山に登った。* 1月27日(土)ノ28日(日) 雪山・スキー、菅平周辺、15名参加(内2名はゲレンデスキー)、初日は四阿山、2日目は根子岳に登った。* 2月10日(土)ノ12日(月・祝)、八ヶ岳雪山合宿、行者小屋B C、8名参加、赤岳、横岳(途中まで)、阿弥陀岳(途中まで)に登った。* 2月23日(金)ノ25日(日) 北ア・乗鞍岳、位ヶ原B C、8名参加、位ヶ原にスノーマウンツを設営し、乗鞍岳に登った。2日目は乗鞍温泉泊。帰途、市立大町山岳博物館を見物した。

4・懇親山行

* 11月11日(土)ノ12日(日) 伊豆・丹野平、祢宜の畑温泉「やまびこ荘」泊、15名参加(ほかに会員外2名参加)。

5・本部および他支部主催行事

* 9月23日(土)ノ24日(日) 全国支部懇談会(群馬支部主催)、水上温泉「坐山みなかみ」泊、11名参加、記念山行は一ノ倉沢出合往復だった。* (1月18日(土)ノ19日(日)、中部ブロック4支部交流会(信濃支部主催)、「ビレッジ安曇野」泊、7名参加、記念山行は光城山から長峰山への縦走だった。* 12月2日(土)、年次晩餐会、当支部からは10名が参加した。

《文珠山荘運営委員会》

1・山荘行事

* 4月1日(土)ノ2日(日) 花見の会、11名参加 * 6月17日(土)ノ18日(日) 登山講座の会、12名参加、古田徹司会員が講師となつて自身の登山経験を講演した。* 9月2日(土)ノ3日(日) キャンプファイアの会(納涼祭)、14名参加 * 12月9日(土)ノ10日(日) しぞうかおでんの会、17名+越後支部1名・山梨支部会員2名参加。翌日、文珠岳(数名はさらに薬師岳にも)に登った。* 3月2日(土)ノ3日(日) 山荘をベースに山に登る会(行翁山經由文珠岳)、13名(宿泊13名)

2・山荘行事外利用

* 山荘にて山荘運営委員会を日帰りて3回開催した。* 草刈りおよび水源地整備ほか2回、延べ4名で実施した。

《会報編集出版委員会》

1・会報「不盡」編集・発行

* 5月、第93号発行、カラー24頁、1600部、費用1万8620円 * 11月、第94号発行、カラー24頁、1500部、費用1万6380円

2・編集会議

* オンライン(zoom)で合計12回開催した。

《会計・集委員会》

* 1月14日(日) 新年会、於東静岡駅前「柚木の郷さんすい草

木、29名参加。前年同様にオークションも行なった。

50歳前後の準会員入会希望者が増えている。その一方、高齢会員の死去や退会が相次ぎ、支部会員数は微減している。今後、も会員増を図るが、新入会員を指導する次世代のリーダー養成が課題である。

〔諏訪部豊〕

東 海 支 部

2023年度は、コロナ禍からの完全復活の年となった。活動する支部員のモチベーションは高く、山行数も大幅に増えた。一方、支部員数は14名が入会し、30名の退会があったため16名の減員、5月末現在の支部員数は328名と大幅減となった。高齢化による退会と、登山ブームではあるものの、組織登山への敬遠が原因と分析している。

昨年から、活動費(予算)不足が顕在化した。経費の削減とデジタル化の推進で、活動費の捻出を進めている。

SNSを活用して東海支部の活動を広く知らしめ、個人活動する登山者を取り込み、活動スタイルの変更も検討したい。

《会議》

*支部通常総会 5月12日(日)開催。ルームにて現地開催とした。出席名(出席37+委任等143)

*常務委員会 毎月第4水曜日開催(支部長、副支部長、各委員長が参加―支部運営の基本事項について審議)。

*正副支部長会議 毎月第3木曜日開催(支部長、副支部長、総務委員長が参加―常務委員会に先立ち、主要事項の事前審議)

*各委員会(20委員会) 毎月1回開催(各委員会内の活動内容の審議) 2023年よりアルパインクラブを創設

《山行・野外活動》

*山行委員会 定例山行(計画61、実施39、参加者累計209名)

*アルパインクラブ(バリエーション・ルートを基本とする春、夏、冬の合宿のほか、SNSで情報発信、広島支部交流会、全国ユース交流会)

*支部友会定例山行(計画59、実施45回、参加者累計288名) 支部友山行(計画76回、実施63回)

*トレッキングクラブ 入会時59歳以下の男女で向上心のある者が原則ロープを使わない水平登山を行なう。毎月1回の定例山行と、安全登山のための勉強会なども実施している。

*亀の会定例山行 実施10回(参加者184人)。加え自主山行を5回実施(79人参加)。「歩こう会」は2回実施(延べ36名参加)。

*登山学校第7期―7月開校。未組織登山者への安全登山の啓

発、支部の人材の確保と育成、支部活動の活性化を目的として運営。経験および技量に合わせ初級、中級の2つのグループ分け、1年間の実践・学習を通して技術の習得を目指す。

*ボランティア活動

①視覚障がい者支援登山（視覚障がい者、支部員）

- *春のブラインド登山 5月13日(土)富幕山は雨天中止、秋のブラインド登山 11月5日(日)富幕山にて実施、参加35名
- *ひまわり登山1 7月2日(金)霧訪山にて実施、参加15名
- *ひまわり登山2 9月2日(土)高鳥屋山にて実施、参加15名
- *ひまわり登山3 10月7日(土)〜8日(日)城代山にて実施、参加16名
- *ひまわり登山4 3月3日(日)八曾山にて実施、参加22名

②幼稚園児支援登山（幼稚園児親子、幼稚園職員、支部員）

- *親とこのふれあい登山教室1 11月4日(土)尾高山にて実施、参加71名
- *親とこのふれあい登山教室2 11月11日(土)尾高山にて実施、参加52名

③知的障がい者支援登山（知的障がい者、SON愛知、支部員）

- *SON・山岳会と一緒に登山 5月27日(土)三ヶ根山にて実施、参加27名
- *SON・山岳会と一緒に登山 10月29日(日)座談山にて実施、参加23名
- ④身柄付き補導委託登山（試験観察中少年、名古屋家庭裁判

所、支部員）

*タンポポ登山 6月2日(金)猿投山は雨天中止 *タンポポ登山 10月20日(金)猿投山にて実施、参加16名

*森づくり活動

①愛知県有林「やまじの森」における保健保安林・土砂流出防護保安林の整備に加え、遊歩道の維持・水土保全・生物多様性などの環境機能の向上を目指した諸作業。

②東大演習林での間伐作業。

③JAC所有の山桜フィールドを活用した炭作り。

④幼稚園児を対象とした森の探検・「なご環境大学」・「せと環境塾」などの講座を受け持つ教育啓蒙活動。

⑤自然観察会 随時

⑥環境林保全活動を支える上で必要な資質を高める勉強・研修活動「わいがや講座」の実施。

*同好会の活動 同好の士と本支部の事業目的に沿った多様な活動を通じて有意義なクラブライフを享受している（現在8つの同好会が活動中）

《事故防止事業》

*指導者研修講習会 次期指導者育成のため各委員会にて実施。

*メール・HPによる登山計画書の提出促進（通年）、安全登山啓発のための情報発信

* 遭難予防講習会の開催 道迷い対策、登山前のリスクチェック、気象講座を開催。

《プロジェクト・地域振興活動》

* 第8回夏山フェスタは、6月8・9日に開催され、協力した。

《創立120周年記念事業 山岳古道調査》

* 2022年度に、塩の道伊勢神峠、杣路峠、八風街道、5月に尾鷲道の踏査をして調査記録を作成した。

* 5月18・19日開催のイベント熊野古道集中登山に参加。奥駈道（吉野）玉置神社、前鬼）熊野大社、玉置神社）熊野大社）のコースを踏査した。

《広報・出版活動》

* 支部報の発行（4月、7月、10月、1月の4回）

* ホームページを利用した支部活動の情報発信（通年）

* メールマガジン 不定期ペースで支部員・支部友会員・猿投の森づくりの会の希望者に支部活動および講演会などの情報を配信した。

《講演会》

* 7月 気象予報士・大矢康裕氏「夏山の気象の基本」と題して開催

* 12月 気象予報士・大矢康裕氏「冬山の気象」と題して開催

《「山の日」啓発活動》

* 各委員会にて啓発チラシの配布

《写真展の開催》

* 写真教室の開催 2023年、写真展実行委員会の開催日に合わせて、支部ルームにてプロジェクトによる写真勉強会を3回実施した。

* 写真山行の実施 西穂高岳独標、上高地、清滝山、頂山・大配で実施した。
(今津英一朗)

京都・滋賀支部

支部の通常の例会である「北山探訪」「写真サークル」「未知の山旅」「シャクナゲ山行」「テント泊登山」「スケッチ山行」「歴史と文化の山旅」「大文字納涼山行」「文学の山々」「今西錦司レリーフの集い」などが取り組まれ、「登山講習会」は人工壁・沢登り・岩登りが取り組まれた。日本山岳会の会員増強、また、安全登山活動の一つとして特別事業補助金対象事業の「健幸登山教室」は実技登山教室が12回予定され、8回の実施となった。山の日記念事業は2024年1月20日(土)に京都市職員会館「かもがわ」で40名の参加で実施された。講師は堀大輔・佛教大学教授で、演題は「泰澄和尚と白山信仰」だった。

5支部懇親登山は石川支部の担当で、石動山において実施された。5支部スキー山行は、雪不足と会員の高齢化などで中止となった。民俗学者でもある八木透監事と委員とで2022年

10月から24年3月まで、京都新聞の連載企画「信仰と伝承・京滋の里山を歩く」に取り組まれ、連載を終えた。この連載については、なんらかの形で書籍にして残すことが確認されている。日本山岳会創立120周年記念事業としての「山岳古道調査」活動は、村上正・支部古道調査委員長、岡田茂久会員らの尽力で支部担当分の「古道調査」を完成させることができた。

《会議》

・4月1日(土)、第38回総会を京都鴨沂会館において開催。全議案が承認された。

・支部役員会は毎月第1水曜日(祝日は第2水曜日)京都鴨沂会館で開催。各例会山行報告、各委員会報告、各部会報告、各課題を審議。

《講演会》

・総会記念講演Ⅱ講師・八木透監事、演題「京の河川と橋をめぐる歴史と伝承」

・山水会講演(山の日記念事業) 1月20日(水)講師・堀大輔・佛教大学教授、演題「泰澄和尚と白山信仰」

《会報》

6月15日、9月15日、12月15日、3月15日の年4回発行。(151号～154号)

《懇親会》

・1月17日(水)、支部新年会を例年どおり南禅寺「順正」におい

て開催。

《他支部との懇親山行》

京都滋賀・福井・岐阜・富山・石川5支部懇親山行・石動山
京都滋賀・福井・岐阜・富山・石川5支部スキー山行(中止)

《支部関連事業活動》

*京都「陀羅佛会」、長野県大田市で陀羅佛小屋という山小屋を管理運営。

*滋賀「藤尾の森づくりの会・里山クラブ」、滋賀県大津市の県有林「結の森」で森林整備事業と里山復元活動を実施。

《定例山行》

・4月7～10日：未知の山旅・四国・物部川源流の山 15日：歴史と文化の山旅・忍辱山円成寺から柳生街道を歩く(中止)

16日：写真サークル・大江山「芽吹きの季節を感じる」 16

日：健幸登山教室1・比良・堂満岳東稜 23日：健幸登山教室2・げんき村クライミング 29日：シャクナゲ山行・比良

山

・5月4～7日：健幸登山教室3・陀羅仏小屋泊唐松岳(中止)
13日：北山探訪・ハナノ木段山(中止) 15日：スケッチ山

行・宝ヶ池の近くから比叡山を描く 20～21日：テント泊登山の会・比婆山、吾妻山 27日：北山探訪・中山、白尾山

・6月6日：北山探訪・品谷山、廃村八丁、卒塔婆山 18日：健幸登山教室4・金毘羅山ロッククライミング・トレーニング

- ・ 7月6～8日：岩稜登攀・明神岳 22日：北山探訪・地藏杉(中止) 28～30日：健幸登山教室5・唐松岳(中止) 29日大文字山納涼山行(中止)
- ・ 8月19日：歴史と文化の山旅・元三条から千光寺 27日：健幸登山教室6・八池谷(八瀬ノ滝)
- ・ 9月2日：北山探訪・白倉岳 9～10日：健幸登山教室7・西穂高岳 14～18日：健幸登山教室8・瑞牆山クライミング(中止) 24日：今西錦司レリーフの集い 29日～10月2日：健幸登山教室9・陀羅仏小屋泊五竜岳(中止)
- ・ 10月7日：文学の山々へ・夜叉ヶ池 14～15日：テント泊登山の会・金剛堂山、白木峰(中止) 22日：ダングダ坊整備 25日：写真サークル・おにゅう峠「紅葉の峰を感じる」 28日：北山探訪・向山
- ・ 11月11日：健幸登山教室10・御在所山 11～12日：北山探訪・シンコボ 4～5日：5支部合同懇親山行・石動山 19～24日：未知の山旅・青ヶ島、八丈島、八丈小島 24日：秋のスケッチ・紅葉の嵐山から愛宕山を臨む
- ・ 12月3日：写真サークル・晩秋から初冬の京北町 9日：健幸登山教室11・リトル比良 14日：武奈ヶ岳の日 16日：北山探訪(忘年山行)・稲荷山 16日：歴史と文化の山旅・再訪飛鳥風土記の丘(中止)
- ・ 1月23日：北山探訪・灰屋山 27日：健幸登山教室12・赤坂

山

・ 2月17日：スキー山行・若狭駒ヶ岳 18～19日：山岳展望と秘湯の旅「剣岳・立山展望(中止)」 計画45回、実施34回、中止11回

・ 新たな企画として「山書会」を設け、支部だよりに山にまつわる図書を紹介し、貸し出しも行なっている。会員からの情報や利用も増えており、積極的な利用を勧めている。

(野村綾子)

関西支部

新型コロナウイルスの第5類への移行に伴い、ほぼ例年どおりの活動ができるようになった。その中でも、コロナ禍で見送られてきた「山の日講演会」は山岳気象予報士の猪熊隆之さんを迎えて開催し、海外登山はマレーシア・ボルネオ島のキナバル山に登頂できた。また、子どもが家族と一緒に楽しむ「わんぱく探検」も実施できた。

以前と変わらぬ活動ができるようになったものの、コロナ禍の期間中に技術や体力の衰えがあったのか、個人山行も含め事故が目立った一年でもあった。特に、支部山行では救助搬送を要する滑落事故が発生した。事故調査委員会を設置し、原因の究明と今後の対策を検討し、事故調査報告書を作成した。

日本山岳会創立120周年記念事業の一つである「全国山岳古道調査」は、「吉野道」「因幡交流鉄の道」「智頭往来」「上北山尾鷲古道」の調査を終え、残る「高野道」へと駒を進めた。

関西支部創立90周年記念事業では、「関西のアルプス踏査」と「ヒマラヤ登山塾」は3年を超えることとなった。一方、海外登山は台風の襲来により出国できず、翌年に延期となった。

今年度は入会者が多く、会員数が微増に転じた。特に現役世代の入会が目立つが、登山教室の効果が大きい。これら登山教室出身者や若年層の定着を図るべく、次年度より新たな企画を準備しているところである。

なお、活動が日常に戻るなか、物価高騰もあり支部財政が苦しくなり数々の対策を講じてきた。現在のところ大きな変化は見られないが、次年度以降に効果が現われてくるものと思われる。

《会議》

- * 通常総会 35名
- * 評議員会 1回
- * 役員会 12回
- * 常任理事会 4回
- 《山行》
- * 青春ハチマル山歩き 4回 延べ59名
- * 月例会 7回 延べ56名

* 六甲山を歩く 3回 延べ37名

* 沢登り例会 3回 延べ19名

* 六甲山全溪踏査 5回 延べ19名

* クライミング初級 7回 延べ32名

* 海外登山 1回 6名

* アルパインクライミング 1回 3名

* 雪山に泊まる 1回 13名

* 川の渡り方講習会 1回 5名

* 道迷い講習会 2回 延べ13名

* ファーストエイド講習会 1回 11名

* 救命講習会 1回 10名

* リーダー養成講習会 8回 延べ63名

* 山の天気ライブ授業 座学1回、ライブ授業1回 延べ41名

* 登山教室 入門・初級・中級・上級 延べ266名

* 山行ひろば 3回 延べ38名

* 雪稜シリーズ、スノートレッキングは中止

《日本山岳会創立120周年記念事業》全国山岳古道調査

* 吉野道、高野道など 9回 延べ89名

《関西支部創立90周年記念事業》

* 90周年機縁事業実行委員会 6回 延べ49名

* 韓国の沢登りは中止

* 関西のアルプス踏査 7回 延べ29名
 * ヒマラヤ登山塾 7回 延べ121名

《自然保護》

* 「日本山岳会関西支部本山寺山の森」森林保全活動 26日
 延べ242名

* 東おたふく山草原復元活動 6日 延べ19名

* 自然観察会 2回 延べ11名

《山の日》

* わんぱく探検 1回 50名

* 山の日講演会 1回 70名

《広報》

* 支部報 192号～195号を発行

* ホームページ 随時更新

《その他》

* スケッチ同好会 例会6回 延べ75名 第6回グループ展出

展者16名 来場者160名

* 第31回藤木祭 参加者70名

* 夏季懇親会 40名

* 新年会 39名

(水谷透)

山陰支部

令和5年度の主な活動は以下のとおり。

4月13日 支部運営委員会 陣屋 出席者6名

4月27日 令和5年度大山山岳環境保全協議会総会 米子コン

ベンションセンター 出席者1名

4月29日 山陰支部総会 米子市公会堂 出席者数11名 懇親

会 陣屋 参加9名

5月21日 山岳古道調査・笠原原く御机 参加2名

5月25日 大山国立公園協会総会 参加2名

5月26日 5月支部例会 米子市公会堂 出席5名

5月28日 山岳古道調査・横手道 参加2名

6月25日 3支部交流会登山下調べ 5名参加

6月30日 6月支部例会 米子市公会堂 出席5名

7月20日 浦富アルプス縦走 参加3名

7月28日 7月支部例会 米子市公会堂 出席8名

8月3日 用瀬アルプス縦走 参加4名

8月26・27日 8月支部例会 大山SOB山岳スキー山小屋

出席6名

9月2日 琴浦アルプス 船上山、甲ヶ山 参加2名

9月29日 支部例会開催 米子市公会堂 参加9名

10月20日 10月支部例会 米子市公会堂 参加9名

- 11月18日・19日 3支部交流会 三瓶山登山 参加11名
 12月2日3日 本部支部会議（東京） 1名出席
 12月9日 山陰支部晩餐会 米子ワシントンホテル 参加14名
 1月26日 支部例会 米子市公会堂 出席8名
 2月23日 2月支部例会 米子市公会堂 出席9名
 3月9日 大山冬山パトロール 参加2名
 3月10日 大山冬山パトロール 参加4名
 3月16日 大山雪崩遭難者の捜索（1名発見）
 3月29日 3月支部例会 米子市公会堂 出席8名

（谷野 彪）

広島支部

コロナ禍の世界的流行が2019年12月から始まり、4年の月日を経て23年5月8日に第2類から第5類に移行した。それに伴い広島支部でも活発な活動が再開された。例会山行、個人山行ともに盛り上がりを見せ、個人山行281件、クラブ例会山行57件、支部山行11件の計349件の計画書が23年度中に提出された。雨天などによる中止が68件あったものの、山行の計画はほぼ1日1件のペースで上げられたこととなった。また、ユースクラブは他支部のユースメンバーとの交流を積極的に行わない、技術や情報の交換を行なっている。

コロナ禍の中、広島支部では会員が徐々に減っていった。その状況下で、森戸支部長の号令の下「支部充実プロジェクト」を立ち上げ、24年度以降の広島支部の体制を大きく刷新しようと会議を重ねた。全会員へのアンケートを実施し、①本会の魅力 ②本会对して期待していたことと実際の状況が異なっていたこと ③会員を増やすためにした方がいいことの3点についてアンケートを実施。設問に対する回答件数は延べ500件に迫り、支部会員の広島支部への想いも伝わってきた。回答を集計し、24年度以降の支部の方向性を決めた。24年度も引き続き公益事業の継続、支部会員の満足度の向上、新規会員の獲得を目指していくこととなる。

【会議】各部、各委員会で広島支部の運営を方向付ける会議を重ねた。カッコ内は参加者数。

*支部総会 6月3日 出席55名、委任状提出43名にて全ての議案について承認が得られた。

*役員会 4月30日 新田合同役員会（23名）、7月13日 拡大役員会（20名）、10月12日 役員会（16名）、1月11日 拡大役員会（21名）、3月14日 役員会（17名）。各部からの報告と計画を発表、議案の採決。

*総務委員会 5月23日（10名）、8月3日（6名）、10月23日（3名）、12月29日（10名）。支部の事務的な案件の処理、所蔵図書の整理、支部内の諸問題の対策、総会の準備などを行なっ

た。

* 執行部会 9月27日(6名)、12月5日(5名)、12月29日(5名)、2月6日(6名)、3月2日(4名)。支部充実プロジェクトの推進、組織のスリム化、役員の変更を検討。

* 山行部会 9月30日(9名)、3月29日(6名)。半期ごとの山行の振り返りとヒヤリハットなどの報告。

* 指導部会 毎月第4水曜日に実施。山行計画や山行の在り方のミーティング、会員向け講習会の内容の打ち合わせ。

* I T委員会 6月29日(7名)。HPの運営についての打ち合わせと確認。

クラブごとに毎月1〜2回のミーティングを実施。

【公益事業】日本山岳会の柱の一つである公益事業の記録。公益事業部は2つの委員会から構成されている。湿原整備と登山道整備を行なう「自然環境委員会」、親子登山などを主催して登山の楽しさを一般に広める「登山振興委員会」があり、それぞれが活発に活動を行っている。

* 自然環境委員会 4月16日 霧ヶ谷湿原整備(33名)。霧ヶ谷湿原中間部の除伐(チェンソー)と除草(刈払い機)作業を行なった。6月4日 霧ヶ谷湿原整備(17名)。ひろしま山の日県民の集いに合わせて、除伐と除草および木道周辺の除草。10月7〜8日 中央分水嶺(高岳・聖別れ〜奥匹見)登山道整備(延べ33名)。中央分水嶺(奥匹見〜高岳・聖別れ)

の登山道整備。11月25日 霧ヶ谷湿原入り口部〜猿木峠縦走路整備(10名)。

* 登山振興委員会 5月14日 親子登山(中止)。8月11日 親子登山(中止)。11月3日 親子登山(10家族35名、うち子ども21名、スタッフ8名)。宗箇山紅葉登山を行なった。3月24日 親子登山(中止)。

* 3ルートの山岳古道調査を継続して行なった。

【支部行事】広島支部会員の満足度を上げ、退会者を減らすために各種行事を行なった。

5月22日 新人オリエンテーション(17名)。

6月22日〜7月9日 カナダ遠征(3名)。国際部主管でアルパインクラブユースのメンバーがカナダ遠征を行なった。

8月19日 アルパインクライミング・セミナー。本部より補助金を得て、重廣恒夫氏を招いての第1回の開催。日本山岳会会員以外の参加も可能なオープン・イベントとした。

8月21日 遭難対策模擬訓練(9名)。遭難のシナリオを作成し、対応のシミュレーション。

9月10日 ファーストエイド講習会(中止)。

9月30日 無雪期レスキュー講習会(6名)。けが人の搬送訓練の勉強会。

11月23日 初級ロープワーク講習会(20名)。フィックスロープの張り方、緩斜面ラッペルの実践ほか。

11月25・26日 25日登山道整備と忘年会(8名)、26日忘年登山(高岳・奥匹見峡4名)。

12月10日 座学の雪崩講習会(中止)。

12月23・29日 台湾 龍洞クライミング(1名)。

1月7日 新年互礼登山(24名) 新年互例会(26名)。新年互礼登山は宮島・弥山登山。登山後は宮島大聖院にて安全祈願を行ない、庫裡にて新年会を実施。

1月14日 実地の雪崩講習会(10名)。

1月27・28日 北九州支部との交流会(広島12名、北九州支部12名)。八幡高原、恐羅漢スノーパークにてスノーハイク、スキー、雪山登山に分かれての交流会。

2月9・13日 創立25周年記念・西中国山地分水嶺登山(2名)。積雪期の西中国山地分水嶺の縦走。

3月2日 読図講習会(5名)。

【山行】 日本山岳会の本来の楽しみである山行の記録。

*アルパインクラブシニア(在籍10名、平均年齢59・4歳)。毎月1回のミーティングを実施。例会山行12件(うち中止2件)、自主練8件。

*アルパインクラブユース(在籍33名、平均年齢43・5歳)。毎月2回のミーティングを実施。例会山行4件、合宿2件。クライミング・コンペを実施。

*山楽山学クラブ(在籍29名、中心メンバー60・70歳)。毎月1

回のミーティングを実施。例会山行25件。

*ゆうゆうクラブ(在籍38名、中心メンバー60・80歳)。ミーティングは不定期。クラブ山行20件。

*スキークラブ(在籍29名、平均年齢68・5歳)

12月23・24日 恐羅漢スノーパークで滑走後、忘年会を開催。

1月13・14日 会員向けスキー教室。

1月27・28日 北九州支部との交流会。スキー希望の北九州支部の会員3名を案内し、恐羅漢スノーパークで滑走をした。2月15・20日 東北遠征(5名)。山形蔵王温泉スキー場への遠征。青森支部、宮城支部との交流を行なった。

【次年度に向けて】冒頭に記したとおり2024年度も引き続き公益事業の継続、支部会員の満足度の向上、新規会員の獲得を目指していくこととなる。

公益事業については、八幡湿原の整備を地元の方々とともに進め、登山道の継続的な整備も行なっていく。登山振興については、親子登山を通じて登山人口のすそ野を広げるとともに、登山マナーの啓蒙も行なう。支部充実プロジェクトの施策により支部会員の満足度の向上を目指し、退会者の減少を目標とする。そのために各委員会が改革を行なうこととなる。活発な支部内の活動企画を会員に発信し、山岳会ならではの楽しみを見つけてもらいたい。

かつて実施していた支部友制度の復活により、会員数の増加

を指す。総会での承認を経て1ヶ月足らずの間に4名の支部会員の入会の申込みがあった。支部友での活動を通じて日本山岳会を理解してもらい、正会員への道筋をつけたい。さらに、24年度は11月に猪熊会員の「山のお天気ライブ授業」と東海支部より山田会員を招いての第2回アルパインクライミング・セミナーの開催を予定している。両イベントとともに支部外への動員をかけ、日本山岳会の会員への誘致を行なう。

山行に関しては各クラブが活発に活動をしており、広島支部の盛り上がりは継続するものと思われる。最後に支部充実プロジェクトのアンケート回答で、若い会員から以下の回答があったので記す。この回答が支部充実プロジェクトの指針となっている。

「当会に入って得られるものは3つ。一つは山の情報、もう一つは山の技術、三つ目は山の仲間である。一つ目について、会員からや会報などを通じて山の情報を入手できる。二つ目は講習会や各山行を通じて技術を教わることができる。三つ目が一番大切なこと。仲間と山に登る喜び、生涯の仲間との出会いが待っている。さらにはこの3つが揃うことで『安全登山』を達成できる。」

(岩切大善)

四 国 支 部

【活動方針】

四国支部では、日本近代登山の先駆者であり、日本山岳会初代会長を務めた小島烏水（本名・久太、1873〔明治6〕年〔1848〔昭和23〕年〕の功績を讃えるとともに、そのことを通じて山岳振興を図ることを、活動の根底に置いている。

【事業計画】

主要な事業計画は次のとおりである。

- ①第11回小島烏水祭 *時期 4月初旬 *場所 高松市峰山公園はにわっ子広場（予定どおり実施）
- ②山の日関連事業 徳島県やNPO法人との連携により、一般募集した親子で学ぶ安全登山教室の実施（中止）
- ③NPO法人との連携協力により、国定公園や自然公園などにおける登山道整備や標識看板の巡視パトロール等の実施（概ね実施）
- ④支部定例山行を概ね月1回実施し、会員相互の親睦と登山技術の向上を図る（規模縮小のうえ実施）

【事業実績】

◆通常総会 5月7日(日) 菅生ロッジ（三好市東祖谷菅生）参加者数58名（委任状提出者含む）議事事項は令和4年度事業報告・会計報告、令和5年度事業計画・予算であった。全て原

案どおり承認された。

◆第11回烏水祭

* 碑前祭 4月8日(土) 高松市峰山公園はにわつ子広場・小烏鳥水顕彰碑前 参加者32名(一般参加者含む)

* 高知県立牧野植物園視察(親睦行事) 4月9日(日)参加者14名

◆山の天気ライブ授業

日本山岳会創立120周年記念事業の一つとして、安全登山のための知識や技術を習得することを目的として、実施されたものである。講師・気象予報士、ヤマテン代表・猪熊隆之氏

* 座学 5月20日(土)、徳島市ふれあい健康館 参加者90人(一般50人含む)

* フィールドワーク 5月21日(日)、眉山山頂公園(徳島市)参加者20名

◆山岳古道調査 日本山岳会創立120周年記念事業として取り組んでいる事業である。

* 焼山寺道 十一番札所藤井寺〜十二番札所焼山寺までの約12kmの山道、巡礼者が転げ落ちるほどの難所であり「遍路ころがし」とも言われている。5月4日実施、参加者5名

* 大窪寺古道 香川県東讃地域にある結願寺に向かう歴史・文化的価値を体感できる古道である(おへんろ交流サロン

〜八八番大窪寺)。9月3日実施、参加者6名

* 石鎚山表参道今宮道 石鎚登山ロープウェイが昭和43年に開通するまでは、河口登山口から成就社に至る今宮道が石鎚山のメインルートであった。現在の状況は、利用者は多くはないものの登山道はしっかりしている。4月16日踏査。

* 別子銅山廢道(日浦登山口〜ダイヤモンド水〜銅山越〜東平〜遠登志) 廢道というものの、住友グループによって登山道そのほか多くの産業遺産が残されている。10月29日踏査。

◆自然保護活動 四国支部自然保護委員会企画の山行「森を知り楽しむ山歩き」を2回実施。6月10日、寒風山、参加者9名。10月21日、三嶺、参加者8名

◆自然公園等監視パトロール 国定公園・自然公園内の登山道や案内表示の破損状況、鳥獣の生息状況などの巡視パトロールを、NPO法人との連携により実施。時期は通年。

◆広報・出版事業 支部の年間活動記録である『四国山岳』第10号を6月に発行(年1回)。本部役員・全国各支部のほか四国内公立図書館などへ配布した。

今後の活動については、会員の高齢化が進行しているものの山岳に高い興味関心を今なお維持している会員が多い現状を踏まえ、それぞれの興味・体力に応じた、無理のない、息

の長い支部活動を継続していきたい、と思っっている。

(森山宏昭)

福岡支部

《会議》

1・令和5年度福岡支部通常総会報告

令和5年5月20日(土)14時開会 天神パインクレスト1階会議室
会員数・54名 総会出席・14名 委任状・21名 合計・35名
各議案が審議され、承認された。

総会後に記念報告会として、国境の山岳信仰「脊振山系の峯入り廻峰道を歩く」について浦支部長から報告があった。

2・役員会・原則各月第2木曜日に開催。

《プロジェクト・地域振興活動》

1・福岡・大分県境を歩く(耶馬溪から英彦山)延期

公益事業として、数回に分けて実施予定であったが、浦支部長の入院・逝去により延期とした。

これに代わり以下の《山行・野外活動》に記した忘年登山および新年登山の低山山行を、支部会員に限らず会友の参加も呼び掛けて行なった。

2・夏山フェスタin福岡2023(第6回)開催

6月24日(土)・25日(日) 電気ビル共創館4Fみらいホール
講演・女性初8000m峰全14座登頂を目指す福岡県出身の渡邊直子氏、登山Youtuberかほ氏、山本正嘉氏、近藤謙司氏、羽根田治氏などのセミナーを実施。来場者数・24日約1600人(2022年1700人)、25日約2900人(2022年2500人) 合計約4500人

3・九州5支部集会(東九州支部主催5支部懇談会)

8月5日(土)午後14時、法華院温泉山荘にて支部集会と懇談会(宿泊)講演:加藤英彦氏(前東九州支部長)、松田宏也氏(日本山岳会本部理事・千葉支部長) 8月6日(日)午前、「山の安全を祈る集い」

《山行・野外活動》

1・忘年登山&忘年懇親会開催

12月16日(土) 鐘撞山、忘年会会場・元気くらぶ 参加者14名

2・新年登山開催

3月3日(日) 叶ヶ岳・廣石山 参加者13名

《広報・出版活動》

1・支部報No.37を3月15日に発行した。

主な内容:『偉大なる諸先輩方の追悼特集号』、①浦一美支部長追悼文(太田五雄、渡部秀樹) ②中馬董人元支部長追悼文(米澤弘夫) ③石原國利さん追悼文(重藤秀世、尾登憲治) ④山行報告 立山・雨飾山山行報告(原義宣) ⑤脊振の藪山・

藪漕ぎの記録（松原稔）⑥上高地（柴田佳久）⑦令和5年度
支部活動報告、令和6年度支部計画など

（渡部秀樹）

北九州支部

I・2023年度の基本方針

今年度は役員の任期満了に伴い、支部長以下新しい体制の下で進められた。

まずは月例山行を楽しい登山にすることを掲げ、山行の充実化と会員の増加を図ることを基本方針とした。それには、今までの日常活動の煩雑な作業の簡素化と効率化を実施して山岳会本来の目的の遂行に力を注ぐために山行の充実化を目指す。その具体的な内容としては月例山行の内容と、支部長をはじめ役員の参画による活性化を図ることとした。支部報の発行を4回から3回にすること以外に、各委員会の自立に向けた会員の参画での活性化も提案している。次に簡素化と効率化を考えて2ヶ月に1回の役員会を、半分はリモート会議にした。

さらに新入会員の登山講習会の年間計画に一貫性の内容を持続して実施するようにした。年5回を実施し、この講習会の中で会員の固定化と増加を計画した。

次にコロナ禍で反省材料になった会員同士のコミュニケーション

シヨンの不足を補うために、LINEによる情報交換を立ち上げた。同時に支部のホームページの充実化を図った。

以上の基本方針を念頭に、次に掲げる事業を推進した。

II・事業報告

1・月例山行：14回／年

2・新入会員対象の入門講座：5回／年

3・登山教室：2回／年。

4・自然環境保全事業：4回／年 内訳は平尾台で絶滅危惧種ムラサキの監視活動と同じくセイタカアワダチソウの除去。

森林保全巡視活動やGeotrekking。

5・ポレポレ山行：9回／年

6・他支部との交流会：九州5支部懇談会（東九州支部主催）に5名参加。広島支部交流会に10名参加。

7・全国支部懇談会：（群馬支部主催）に6名が参加。

8・本部年次晚餐会：（本部主催）：6名が参加。

9・宮崎ウエストン祭は5名が参加。

III・諸行事

* 横有恒碑前祭：例年10月29日（最終の日曜日）に開催。本

部より2名、門司早朝登山の会より3名、山想倶楽部より

9名、毎日新聞社2名、当支部より21名の計37名が参加。

終了後下山して食事会。30名の参加。

* 夏山フェスタin福岡：6月24日・25日に開催された。6名

が参加。

IV・広報出版活動

会員相互の情報伝達メディアとして支部報「J・A・C北九だより」を7月、10月、1月に発行した。

なお、本年度は5月に100号特別記念の発刊もした。

V・次年度に向けて

以上が令和5年度の事業報告となるが、新体制でスタートしたが初年度は行事を消化することに精いっぱい的一年間だった。目標とする楽しい登山はできたのだろうか。新入会員は日本山岳会に前向きに取り組むだろうか。会員は増えるだろうか。令和6年度の方針も引き続きこれらの課題を背負いながら進行中だ。

多くの山行計画と事業計画の中で、本年度は安全に対する心構えや遭難対策マニュアルを作成し、会員に徹底していく方針も打ち出す。そして、できることから一歩一歩前へ歩いていき、登山を好きになる人を1人でも増やしていく活動が続ける所存だ。

(清家幸三)

熊 本 支 部

新型コロナウイルス感染症から解放され、積極的な活動計画が立案され実施された。一部行事をインフルエンザ流行や荒天に配慮し

て中止したが、全体としては行事山行を求めた会員で活発な行事が多かった。山岳古道調査もほぼ完了し、まとめに入った。

《会議》

支部総会 4月16日(日) 熊本県婦人会館 支部会員数32名中

出席15名、委任状12名 合計27名出席で適法に成立し開催。

役員会 毎月1回開催 熊本市大江校区公民館 参加役員9

名にて開催

《行事・事業》

* 4月23日(日) 春の森林巡視登山 二ツ岳(高千穂町)参加者

12名

* 5月2日(水)～6日(土) 北アルプス・奥穂高岳 参加者5名

* 5月14日(日) 千支の山(一般募集) 宝満山 参加者12名

* 5月28日(日) 春の登山教室 黒岳 参加者20名

* 6月11日(日) 登山技術講習・岩登り 予定場所使用不可中止

* 6月18日(日) 春の例会 釈迦岳、御前岳 参加者14名

* 7月16日(日) 自然観察教室(一般募集) 蓼原湿原 参加者24

名(うち一般参加13名)

* 7月30日(日) 登山技術講習・沢登り 俱利伽羅谷 参加者9

名

* 8月5日(土)～6日(日) 九州5支部集会 法華院山荘 参加者

11名

* 8月11日(金) 第8回山の日登山祭 小岱山 参加者179名

(講演会参加者40名)

- * 8月19日(土) ビールパーティ(於オーデン) 参加者22名
- * 9月23日(土) 九州脊梁トレイルラン大会支援 支援要請なく不参加
- * 10月14日(土) ファーストエイド講習会(於…阿蘇くじゅうユースホテル)参加者7名
- * 10月22日(日) 秋の登山教室(一般募集)市房山 参加者22名(うち一般参加6名)
- * 11月3日(金) 宮崎ウエストン祭 参加者15名、記念登山・祖母山周回 参加者9名
- * 11月19日(日) 秋の森林巡視登山 三ノ岳登山道整備 参加者15名
- * 12月1日(金)~21日(木) 山の写真展(於フード熊本市食品交流会館ギャラリー) 出展11名、出品36点
- * 12月10日(日) 登山報告会(於フード熊本市食品交流会館) 参加者12名、報告者3名、登山報告および山岳古道調査経過報告を行なった。
- * 1月13日(土) 新春晩餐会 於割烹居酒屋・番屋 参加者20名
- * 2月10日(土)~11日(日) 冬山登山講習会 荒天のため中止
- * 3月9日(土)~10日(日) 宮崎支部との交流登山 諸塚山 参加者6名

《広報・出版》

支部報発行56号、57号、58号 支部通信、毎月発行

《委員会報告》

- ・安全対策委員会 研修委員会 日本山岳会遭難対策委員会への登山計画書提出5件、安全登山のための山岳ファーストエイド講習会を開催
- ・海外活動委員会 活動休止中
- ・自然保護委員会 森林巡視登山を実施、九州森林管理局への森林巡視報告書報告2件
- ・山岳古道調査委員会「向霧立越」「阿蘇山」の古道担当。向霧立越は調査完了、阿蘇山の古道調査プロジェクトチームを中心に実地調査や資料の収集を行なった。調査結果を12月の登山報告会で報告。

《同好会報告》

- ・花を愛でる会 5月21日 荻岳 参加者8名、9月7日 一ノ峯二ノ峯 参加者12名、3月13日 黒岳 参加者13名
 - ・里山低山クラブ 5月7日 遠見山(中止)、11月12日 人吉四山(中止)、1月28日 大津山12名、3月24日 矢岳山(中止)
- (城戸邦晴)

東九州支部

コロナ禍も収まったが、コロナ禍により受けた傷が完全に修

復できたわけではない。コロナ禍がなければ、その間に新人会

員の加入、新たなレベルアップもできたかもしれないが、その負の部分のいかに取り戻し、日常に持つていくかが課題であった。本年4月に報告された人口戦略会議「自治体4割消滅可能性」の分析結果では、当地は九州内で一番減少率が高かった。

そのような中でもできることから始めた。平成29年に北九州支部で開催された九州5支部集会在、6年ぶりに令和5年にくじゅう連山の地で開催できたことは評価したい。九州内のJAC会員のつながりのきつかけとなった。また、JACユース交流会2023 in岐阜、第39回宮崎ウェストン祭、第36回全国支部懇談会（群馬支部主催）にも参加でき、交流が行なえた。

《会議》

*支部定期総会 4月22日(土)大分市・コンパルホール 出席者31名 委任状16名(会員数76名) 議案は全て承認された。

*役員会 おおむね2ヶ月に1度開催 大分西部公民館にて計7回

*会計監査 4月7日 大分西部公民館

*第1回 大分県「山の日」登山実行委員会(大分県山岳連盟・日本山岳会東九州支部・大分勤労者山岳連盟) 6月30日(木) 大分西部公民館 九重町・崩平山にて「山の日」登山を開催すると決定した。第2回「山の日」登山の反省会。8月31日(木) 大分市・コンパルホール

《公益的事業》

*山岳古道調査 「国東半島 祈りと修行の道」306・8kmの本部提出用報告書を作成し提出した。

*第10期登山入門教室 座学(2回)実践講座(4回)実施 受講生15名

*第20回青少年体験登山大会(青少年登山教室) 9月10日(日)久住山 45名

*「山の日登山」ふるさとの山を登ろう 8月11日 大分県「山の日」登山実行委員会事業として開催 崩平山 参加者72名

*スズタケ枯死とシカの食害調査 6月4日開催 10月1日集中豪雨道路崩壊により中止

*九州5支部集会 8月5日 法華院温泉山荘にて開催 福岡支部10名、熊本支部11名、宮崎支部4名、北九州支部5名、東九州支部29名

*山の安全を折る集い 8月6日 雨のため、法華院温泉山荘大広間にて開催した

*清掃登山および合宿登山 10月22日～23日 天候不良その他により中止

*祖母・傾・大崩ユネスコエコパーク 山のグレイディング・マップの調査監修を行ない、マップを発行した。

《共益事業》
*月例山行 テーマ「県境のピークに登る」「新大分百山に新た

に指定された山に登る」12回開催（2回は雨天により中止）

*リーダー育成研修事業 5回開催（1回は天候不良により未開催）

*祖母・傾・大崩ユネスコエコパーク 山のグレーディング・マップの実地調査2回、作業・検討会7回。

*山岳古道調査 国東半島における修験道「国東半島 祈りと修行の道」全ルート報告書作成した。

*忘年会 12月9日 やかた田舎の学校 参加16名、忘年登山は中津市・杵ノ木 参加22名

*喜寿お祝い登山 10月15日 清水山 喜寿該当者5名 参加37名

*支部ルーム開設 毎月第1金曜日午後6時から9時 大分西部公民館研修室を借りて、支部会員のミーティングや研修、諸会議の場として定期開設

*ユース交流会2023 岐阜県・高木山、伊木山 11月3日～5日 参加3名

*広島支部・東九州支部クライミング交流会 11月26日 八方ヶ岳 参加6名

*支部報の発行 101号～104号（年4回）
《次年度に向けて》

本年の月例山行のテーマは「レベルアップを目指そう。富士山に登ろう」とした。大分近県でも、遠方でも、大きな山登り

ができるようにしたい。できれば、海外の山々に出掛けるメンバーを育成したい。コロナ禍で数年開催できなかった「新入会員オリエンテーション」も本年4月に開催し、35名の新人たち（会友含む）に責任を果たせた。また、公益的事業の登山入門教室は拡大発展させ、それが当支部の発展につながるようと考えている。

（安東桂三）

宮崎支部

令和5年度は役員改選が行なわれ、新体制でのスタートとなった。引き続き会員の増強・支部の活性化に取り組みこととした。

新型コロナも5類に移行。コロナ禍で中止となっていた公益事業の「宮崎ウエストン祭」は、11月に高千穂町との共催で5年ぶりに開催され感慨深いものがあった。共益事業の定例登山研究会、定例山行なども会員の協力を得て、おおむね計画どおり実施することができた。

令和6年度も引き続き会員全員一体となって魅力のある支部づくりに努め、支部活動を盛り上げていきたい。以下、令和5年度の宮崎支部活動の概要を記す。

《会議》

* 令和5年度宮崎支部通常総会 4月8日、会員総数41名中38名(委任状含む)で開催し、全ての議案が可決された。

* 支部役員・委員長会議 毎月第1木曜日開催。12回全て開催(延べ参加者78名)

* 定例登山研究会 毎月第1木曜日開催。12回全て開催(延べ参加者180名)

《公益事業》

* ときめき家族登山…都合により中止

* 宮崎家庭裁判所からの少年委託登山 年1回(11月) 会員4名参加

* 宮崎ウエストン祭 高千穂町との共同開催で5年ぶりに開催(11月3日) 会員20名参加 総参加者約100名

* 諸塚山山開き 通常開催。諸塚村主催の前夜祭開催(熊本支部との交流会も兼ねる) 開山式(3月10日)と2週間にわたるクイズラリーなどのキャンペーン事業を実施。開山式には県内外から400名以上の山愛好家に参加。会員15名参加

* 森づくり活動

① 7月15日 双石山小谷登山道周辺の植樹後の下草刈り、総参加者数35名 うち会員14名
② 3月3日 田野の森育林作業 会員8名参加

* 環境保全活動

① 10月21日、2月18日 双石山登山道整備 総参加者81名

ち会員21名 ② 12月9日 双石山小谷登山口周辺県道脇清掃 参加者数32名うち会員15名 ③ 3月3日 育林作業 会員8名参加

《共益事業・定例山行等》

* 4月定例山行1 4月16日 鰐塚山山開き2 2名参加

* 5月定例山行1 5月13～14日 白鳥山 10名参加

* 5月定例山行1 5月28日 高千穂峰 22名参加

* 6月定例山行1 烏帽子岳(荒天により中止)

* 6月定例山行2 6月25日 丹助岳 13名

* 7月定例山行1 大幡山(荒天により中止)

* 7月定例山行2 7月23日 猪八重溪谷散策 18名参加

* 九州5支部集會イベント1 8月5～6日・6日の安全祈願

(中岳)は中止 5名参加

* 8月定例山行2 8月27日 大浪池 7名参加

* 9月定例山行1 9月9日 俵山・大矢岳(熊本県) 11名参加

加

* 9月定例山行2 9月21日 全国支部懇談会関連山行 谷川

岳(群馬県) 5名参加

* 10月定例山行1 10月7日 矢岳 12名

* 10月定例山行2 10月22日 高房山 10名

* 11月イベント1 11月3～4日 宮崎ウエストン祭・祖母山

行20名 総参加者100名 地元地区との交流会 総参加

者約300名

* 11月定例山行2 11月定例山行（山の日イベント）家一郷岳
15名 総参加者82名

* 12月定例山行1 12月9日 清掃登山 15名参加（山行前登
山口周辺清掃参加者32名）

* 1月定例山行1 1月13日 小松山 5名参加

* 1月定例山行2 1月28日 生目古墳と史跡散策 20名参加

* 2月定例山行1 2月10日 綾岳 12名参加

* 2月定例山行2 二ッ岳（荒天中止）

* 3月定例山行2 3月9～10日 諸塚山山開き 15名参加
総参加者400～450名・「熊本支部との交流会・登山」
を併せて開催

* 3月定例山行1 3月17日 双石山・加江田溪谷開き 20名

参加 総参加者79名

《出版事業》

* 「宮崎支部報」発行 5月15日（第81号）、9月15日（第82号）、
1月15日（第83号）

（日高研二）

委員会の活動報告

総務委員会

本会の運営をサポートする部門として、主要な各種会議・各種行事の運営・補助、入会案など等情報発信に関するパンフレットや各種資料の作成、JACCO入り商品の企画・販売などを担っている。定例として毎月第3月曜日夜に本部にて総務委員会を開催し、そのほかに各行事の打合せや事前準備のために年十数回、臨時の委員会や作業日を入れて運営に当たっている。令和5年4月からは、新型コロナウイルス感染症防止対応をしながらも、委員会活動通常化に戻し、定例委員会は月1回のリアル開催とした。ただ、コロナ禍前の状況に戻したわけではなく、仕事先や旅行先からも参加しやすいように、毎会議ごとにオンライン（Zoom）も併用設定し、委員会活動を停滞させず、かつ情報を共有する環境を整えた。以下に主要な会議・行事についての概要を記載しておく。

1・新入会員オリエンテーション

9月2日(土)、会場は本部ルーム104号室および集会室でのリアル開催（オンライン併用）

新入会員が早期に本会への理解を深め、また、充実したクラブライ

フを過ごせるよう、その年に入会した会員を対象に年1回開催している。今回から通常開催に戻した。橋本新会長の挨拶の後、平川理事による特別講演と参加会員の自己紹介。その後、会の歴史・組織・活動、山岳保険、ルーム・図書室・山岳研究所などの施設やWebサイトの利用方法などを動画も交えて説明した。また、委員会や同好会からリアルとオンラインで参加してもらい、それぞれ紹介と勧誘を行なった。今回から、コロナ禍を機にリノベーションを行っていた集会室、104号室を使用することとなったため、飲食が不可であることから、懇親会を外部のレストランに設定して開催することとした。当日は40名以上の新入会員がリアルとオンラインで集い、懇親会では、新会長ほか役員と総務委員、同好会関係者で新入会員を囲み、それぞれの抱負を伺いながら、山の話に花が咲いた。

2・同好会連絡会議

10月18日(月)、会場は本部の104号室にてリアル開催（オンライン併用）

28の登録がある同好会のうち、24同好会がリアルまたはオンライン（一部資料のみ）で出席。同好会活動の活性化を図り、業務上必要な事項を連絡するために年1回開催している。昨年度に続き、意見交換で

は高齢化による構成員の減少、活動回数の減少や休会などの課題が浮き彫りとなった。今後については、活動ができない同好会については、解散することも積極的に検討いただくとか、新しい交流による趣味や目的の合った登山のグループ結成については、同好会化も奨励していくなど、今の時代に合わせ今後の対応をしていく必要性も議論された。

3・JACオリジナルグッズの製作と販売

会員サービスの一環として（一般も購入可能）、オリジナルグッズを企画・製作している。これは、ロゴマーク付きのウェアや、JACの名前を冠したグッズを会員が所有することで得られる高揚感や、会員相互の一体感を創出することを目的としている。今回はパタゴニア様とコラボによるレインウェアを販売。年次晩餐会を中心にルームでの直販を実施し、特にカード決済を可能とする端末などの配備も行ない、利便性向上に寄与した。また、上高地の山研での宿泊記念販売やWebサイトでの販売も行なっている。今後も、こういったものがあつたらいいとか、こういうグッズが欲しいという会員からの意見も反映しながら、企画製作と販売を行ないたい。

4・支部連絡会議

12月2日(土)、年次晩餐会に先立って、京王プラザホテルの会議室でリアルな支部連絡会議が開催され、受付などの補助業務を行なった。特に昨今問題となっている情報連絡経費の削減に伴い、会員向けメールでの連絡について山岳会ドメインのグーグルアドレス(Gmail)の利用推奨と拡大に向け、各支部の理解をお願いしている。

5・第118回年次晩餐会と記念講演会・展示会

12月2日(土)、新宿の京王プラザホテルにて13～19時にリアル開催。今回より平時開催運営に戻した。コロナ禍でリアル開催中止を余儀なくされた間に、ホテルのバンケット代金は年々著しく高騰し、また、これに伴う参加費用も値上げを余儀なくされた中での開催となった。参加想定人数を300人とし、最終的に332名の会員の皆さんに足を運んでいただく形で開催できた。展示や図書交換会、そして、記念講演会も久しぶりの実施となった。過日、とても残念なニュースが世界中を駆け巡り、平出和也さん・中島健郎会員のK2での山岳事故により帰らぬ人となったが、おふたりで行なっていた「ティリチミール登頂」記念講演会において、肉声で登山のお話を聞いた最後の機会となつてしまったことは悲しい。おふたりのご冥福をお祈りするとともに、これまで挑戦してこられた偉業をたたえたい。

講演については、重廣会員らの「グレート・ヒマラヤ・トラバース」、「秩父宮記念山岳賞受賞記念講演」として、原山先生にもご登壇をいただいた。また、展示については、今回はアルパインスケッチクラブの絵画を中心に行ない、図書交換会は、平常時に戻しての応募希望者を募る形で多数の出品をいただいた。しかしながら、展示室、展示費用が晩餐会そのものの参加費用に重くのしかかることから、次年度については見送りの方向で、別途検討をせざるを得ないかもしれない。

6・海外登山報告会

3月16日(土) 学習院大学(目白) キャンパス内のカフェテリア杜に

て13～20時、海外登山報告と懇親会（意見交換会）を開催。一般会員向けの晩餐会と区別し、主に大学の山岳部学生会員向けに、日本山岳会の助成活動をより知っていただき、若手会員獲得と安全登山の啓蒙を目的として開催した。特に初回の今回は、本会ともつながりの深い学習院大学山桜会・輔仁会山岳部に全面協力を仰ぎ、同部との共同開催にて、学習院大学内の会場を借りる形で実施し、久しぶりに天皇陛下のご聴講も実現した。陛下は、報告会開催後に、それぞれの学生報告団体登壇者と懇談をされ、一人一人にねぎらいのお声を掛けられて、これからも安全にすばらしい登山の経験が積み重ねられていくことを祈念します、と締めくくられた。

間際のご案内であったにもかかわらず、報告会会場には131名の参加をいただき、また、学生との交流を目的とした懇親会も110名以上の参加となり、従来にない新しい時代を感じさせる行事であると、各方面から取り組みに対する評価をいただいた。（奥田有恒）

山行委員会

23年度は国内・海外（台湾）・お遍路の3つのテーマの山行を企画実施した。

①梅海新道 22年度に実施したが、定員を倍する応募があったため、再度実施した。

8月30日～9月3日 蓮華温泉―朝日岳―朝日小屋―梅海山荘―親不知 10名

白馬大雪渓が雪不足で通行止めのため、急遽、蓮華温泉から五輪尾根經由朝日小屋に。水不足が深刻で、北俣の水場で給水に30分を要する。

②2023年度新企画「会員の宿を訪ねる山旅シリーズ」

第1回 6月21～22日 霧ヶ峰ヒュッテジャヴェル（高橋保夫会員

経営）参加者10名、車山登山―霧ヶ峰―八島湿原

第2回 9月26～27日 尾瀬原の小屋（高妻潤一郎会員管理）参加

者9名、尾瀬ヶ原散策

③南八ヶ岳縦走 コロナ禍と台風で中止が続き、4年目にやっと実現できた 10月7日～10月9日。10名参加。

茅野駅集合⇨桜平―硫黄岳―硫黄岳山荘（泊）―横岳―赤岳―権現岳―青年小屋（泊）―観音平。快晴で出発。曇りから雨に変わり権現岳では小雪となった。強風、雨のため編笠山は登らず下山した。

《海外》台湾五岳

①玉山 5月24～28日 塔塔加登山口―排雲山荘―玉山主峰―排雲山

荘―塔塔加鞍部⇨東捕温泉 13名

塔塔加鞍部（2610m）から排雲山荘（3402m）までの登り。樹齢1600年の紅檜巨木を過ぎ、海底からの隆起を示す大峭壁を越える辺りから雨模様となり、山荘前では大雨になる。いつの間にか雨は遠のいて星空となり、全員2時45分に3952mの玉山

主峰に向けてゆっくりしたペースで出発する。8年前に初めてドローンで見た山頂は360度の展望抜群で、疲れも吹っ飛ぶ。排雲山荘まで慎重に下り、昨日は見る余裕もなかったシヤクナゲ、ツツジを堪能しながらの下山となった。東埔温泉では屋内大風呂を16～18時の間貸切にしてもらい、疲れをとる。

② 南湖大山 9月12～17日

勝光登山口⇨登山口⇨雲稜山荘⇨審馬陣山⇨南湖北山分岐⇨南湖北山⇨北峰⇨南湖山荘⇨主峰⇨東峰⇨南湖山荘⇨北峰⇨北山分岐⇨審馬陣小屋分岐⇨雲稜山荘⇨分岐⇨多加屯山⇨南湖大山登山口⇨勝光登山口⇨礁溪温泉 10名

名峰百岳に数えられる審馬陣山(3141m)、南湖北山(3536m)、南湖大山北峰(3592m)を登頂し、カールを下り、南湖山荘に着く。中華山岳協会・施坤福氏、東西協会の趙理事長と国際交流をする。リーダーが中華山岳協会のTシャツを着ていたため、すぐに打ち解けた。早朝に主峰登頂後、東峰(3639m)にも登れた。晴天に恵まれ360度の展望、すぐ近くに中央尖山、遠くに雪山が望める大パノラマを満喫した。

《お遍路》

いいとこ歩き遍路の続編と2024年は閏年のため、逆打ちで全て歩きを実施中、4月、10月、11月で結願する。

① いいとこ歩き遍路③ 愛媛・香川

10月12～16日 52番泰参事⇨79番天王寺 5名

① いいとこ歩き遍路④ 香川・高野山

11月11～14日 82番根香寺⇨88番大窪寺⇨1番靈山寺⇨高野山奥の院⇨金剛峯寺 7名

② 四国八十八ヶ所歩き遍路逆打ち① 香川

3月12～21日 88番大窪寺⇨55番南光坊⇨今治 12名

《反省点》

1 コロナ禍以降、山小屋宿泊予約が取りにくい。早めの予約が必要。
2 アルプスでは水不足が深刻化し、小屋によっては制限が多くかかっている。

《方向性》

首都圏での支部新設の動きもあり、首都圏の会員が対象となりがちだった山行委員会の役割も変わっていくものと思われる。今後は本部がリードしていくというより、支部を越えて会員が交流のきっかけとなるハブのような役割を担っていきたいと考えている。(長島泰博)

記念事業委員会

2025年に本会が創立120周年を迎えることを記念し、13の事業を展開中。記念事業のテーマは「温故知新」。登山文化を若い世代に継承し、よりよい登山社会・文化を創っていくことを念頭に置いている。以下、事業別の2023年度活動概略である。

1・グレート・ヒマラヤ・トラバース(GHT)

23年春はネパールのクーンブ山群からスタートし、ロールワーリン山群、ジュガール・ランタン山群を踏査。秋は4人がガネッシュ山群から始め、マナスル山群、アンナプルナ山群を踏査。年次晩餐会の講演会で報告を行なった。春秋、各4人参加。

2・ヒマラヤキャンプ

23年秋に3人の隊員とPJリーダー1人が、ネパール・カンチェンジュンガ山群の未踏峰、シャルプーVI峰（6076m）を目指した。登頂は成らなかつたが6000m地点に到達。隣のタナプー（5980m）に登頂。

3・カナダ・ユース

カナディアン・ロッキーやバカブーなどを対象としたクライミング合宿を3年にわたって開催。メンバーは全国の若手会員。合宿の意義と全国の若手会員の活動活性化、若手会員の増加を目的とする。23年は7人が2週間にわたってキャンモア周辺の岩場でクライミング。25年には初登頂100周年を迎えるアルバータ峰を予定。

4・エベレスト登頂記念フォーラム

「写真で振り返る日本人のエベレスト」連続巡回展の4回目を年次晩餐会会場で実施。また、マナスル登頂とエベレスト日本人初登頂をテーマにした「ヒトとモノ口座」を2回開催した。

5・コーカサスの桜

ジョージアのコーカサス山麓にある世界遺産の町メステリアからの要請もあり、25年春に日本の桜を植樹、それを契機に訪問ツアーや登

山隊派遣を計画。

6・日本・エクアドル外交関係樹立100周年記念合同登山

23年9月にエクアドル山岳連盟13人を日本に招聘し、富士山、槍ヶ岳、立山の合同登山を行なった。また、訪問先の山梨、信濃、富山各支部と交流。コロナで来日が延期になっていたが、19年のエクアドル訪問以来の再会を果たした。

7・全国山岳古道調査

120の古道を選定後、支部と協力しながら踏査中。信仰の道、生活の道、歴史の道に分類し、会員限定でホームページにデータを公開した。

8・引き継がれる山岳祭

全国にある各支部が参画する13の山岳祭を後世に継承しようと発足。山岳祭パンフレットを制作し会員や山岳祭参加者に配布。山岳祭にまつわる人物をモチーフにした記念切手を作成。支部間の交流も強める。

9・デジタルミュージアム

本会所蔵の資料（文書、絵画、写真、映像など）をデジタル上のミュージアムで公開することを計画。「ヒト」「モノ」をテーマに2回の講演を開催。

10・所蔵図書・資料デジタル化

本会所蔵図書・資料をデジタル化し一般公開する構想。会報「山」機関誌「山岳」の全バックナンバーをはじめとし、多数のデータをホー

ムページにて公開中。

11・日本山岳会人物史

『日本山岳会の歩みと近代登山史』（仮題）を執筆・編集集中。

12・人生100年時代の安全登山

人生100年時代に生涯を通じてどのように登山を楽しめるか。会員へのアンケートやインタビューを基に意義ある情報提供をする。

13・山の天気ライブ授業

23年度は四国、宮城、東京多摩支部の3支部で開催。3回の机上とライブ授業を合計した延べ参加人数は277人になる。（柏澄子）

国際委員会

2023年度の国際委員会には、通常業務として海外からの問い合わせ対応を行なっている。コロナ禍で国際的な往来が減っていたが、今年度は海外からの登山客が戻ってきており、日本の山を登りたいという問合せも少しずつ増えている。また、以前から海外の山岳雑誌やリサーチャーから過去の日本人クライマーの記録について照会を受けているが、JACの会員の人脉・知識や図書室の蔵書を活用して応えている。

さらに、各委員の活動も増えてきており、これに関して隔月で開催している定例の委員会で報告・ディスカッションを行なっている。

吉川正幸委員は、在ジョージア日本大使館と協力し、2025年5

月に桜の木を植樹するプロジェクトをJAC120周年記念事業の一環として進行を担っている。24年2月にジョージア大使を招き、JAC会員ほかを対象に、ジョージアの理解を深める懇親会を主催した。3月には同国を訪れ、植樹の準備として現地への苗木の搬送、植樹場所の下見や現地の人との交流を実現した。筆者（和田）は、昨年に続き11月にフランスで行なわれたピオレドール（クライミングの国際的な賞）の授賞式に出席し、会報でレポートした。（和田薫）

デジタルメディア（DM）委員会

DM委員会は本会の情報部門として、本会のホームページの管理運用やメールなどの管理、理事会運営のサポートなどを行なっている。

ホームページの管理運用では、ホームページでの広報活動あるいは公益活動として、DM委員会独自あるいは理事会をはじめとする支部・委員会・同好会が行なう情報発信活動のサポートとして、会の内外への情報発信や情報公開に務めている。また、会員活動の円滑化、持続化を図るためにも、情報発信や情報公開の支援を行なっている。

加えて、SNSを利用した情報の発信も行ない、さらにはサイト内のホームページの更新や改修作業、危機対応などを行なっている。

メールの管理では、支部アドレスや各組織のメーリングリストや転送メールなど、会務に関わるメールの管理を行なってきた。メールのトラブル相談にも対応している。また、会員向けメールマガジンも発

行している。

インターネット利用による2023年度の活動は、以下のとおり。

〔1〕Webサイトの運営・管理

年間を通し、支部報のアップ、イベントの公開、会内外への告知などを行なっている。

特にグレート・ヒマラヤ・トラバースをはじめとした海外遠征隊の現地からの報告はSNSでの配信であるため、SNSを利用していない会員のために、その都度ホームページに落とし込んでいる。

また、これまで情報がなかった首都圏の会員向けに、構想中の首都圏支部や本部の情報を集めた「首都圏情報サイト」を準備し、2024年4月から開始した。

ホームページ以外での会務のサポートは以下になる。

*オンライン会議用の機材「K A I G I O」設置のためのサポートを行なう。

*総会の中継…6月24日(土)。Zoomウェビナーで総会を中継。

*新入会員オリエンテーションをオンラインで…9月2日(土)。Zoomで集會室と新入会員などの参加者を結んだ。

*年次晩餐会で講演会を録画し配信…12月2日(土)。講演会をビデオ録画してYouTubeで配信した。

*海外登山報告会を録画…3月16日(土)。学習院大学で行なわれた「海外登山報告会2024」をビデオ録画し記録した。

〔2〕メールの運用

本会の会務および支部、委員会、同好会などの組織の活動を支援するために、送受信メール、転送メール、メーリングリストで専用のメールアドレスを作り、利用を促している。また、そのための登録・管理を行なっている。

世界的なネット環境の悪化で通信網のセキュリティが引き上げられ、不通メールへの対策が増えた。また、言語の壁が乗り越えられなかったのか「迷惑メール」の類が非常に多く届くようになった。

〔3〕メールマガジンの発行

メールマガジンは、配信希望を申請した会員と会員専用ページ閲覧のパスワード申請をした会員に送信されている。本会のイベントや登山関連の有用なニュース、あるいは訃報などの情報をおおむね隔週で配信している。また、配信したメールマガジンのバックナンバーをホームページに公開している。

〔4〕SNSの活用

ウェブサイトに掲載された記事のアクセス数向上や、本会のイベントなどの情報の閲覧者を増やすためにFacebookやTwitter、Instagramを活用している。特にオンライン配信では即効性が高く、参加者を増やしている。

〔5〕雪山天気予報

本会では気象遭難防止を目的に、北アルプス・エリアおよび八ヶ岳エリアを対象に、例年、年末年始とゴールデンウィークの2回、雪山天気予報配信を行なっている。今年度も例年どおり行なわれ、当委員

会でサポートした。

[e] Google Workspace の利用

2022年に日本山岳会はテックスリーブの利用資格認証を獲得し、Google Workspace の法人有償版を無料で利用している。Google アカウントを発行して、理事会や総務委員会、山岳古道調査プロジェクトなどで利用していたが、支部長および事務局長に配布して利用を広げた。事務局の Google ドライブに、各支部と事務局でデータを共有するドライブが設置された。
(永田弘太郎)

子どもと登山委員会

○富士山の洞窟探検

コロナ禍の4年を経て「家族登山普及委員会」の名称が「子どもと登山委員会」に変更となり、最初のイベントが「富士山の洞窟探検」に決まった。わくわくするような言葉の響き「富士山の洞窟探検」。探検という魅力的な言葉は伝わるらしい。HPでの告知が始まってすぐに電話が入り、口コミで参加希望のメールが届くようになった。わずかの間に5家族(15名)の参加が決まった。だが、当日、活動できるスタッフはわずか5名。この人数では、安全に引率できるか不安だ。メンバーの永田弘太郎会員に相談をすると、ユースから3名がスタッフとして名乗りを上げてくれた。そうか、こうして一緒に体験をしてもらうことで、委員会のメンバーが増えていくのかもしれない。



吉田胎内樹型前の記念撮影

成、保険の加入、洞窟までのタクシー確保など、すべきことがいくつもあった。なかでも自衛隊の演習地にある「雁の穴」と呼ばれる入山許可のやり取りは、1週間前に演習地で手榴弾による事故騒ぎがあり神経を遣った。

さて当日(6月1日)、見事な快晴となり、富士急行・富士山駅に4家族(1家族がキャンセル)12名とスタッフ8名が集結した。最初の探検地「船津胎内樹型」を目指す。ここは河口湖フィールドセンターが管理をしている「無戸室浅間神社」の境内の中。まずはセンターの担当者から、洞窟の歴史と洞窟内の様子などを聞く。子どもたちは、早く入りたくてしょうがない。

富士山の麓、目指す洞窟は3ヶ所。そのうちの2ヶ所については、一般には開放されていない洞窟だ。富士山からの溶岩流によって大きな樹木が重なるようにして燃え、その跡が空洞になったという「胎内溶岩樹型」。どれも国の天然記念物に指定されているため、計画書、入山申請書、入山費用の支払などが事前に必要となった。そのほかにもミニパンフレットの作

中は溶岩が造り上げた肋骨状の模様が壁に広がっていた。まるで大きな生き物が移動していったかのようだ。「母の胎内」「父の胎内」と呼ばれる空洞が約70m、出口まで続いている。慣れてくると子どもたちは、何度も入っていく。面白くて仕方ないらしい。4家族の探検が無事に終わって、次の「吉田胎内樹型」へ出発。一列になって、原生林の中を進んでゆく。

ハルゼミが涼しげに啼く新緑の中、溶岩が流れていった跡を眺めたり、キノコの前でしゃがんだりして歩くこと約40分、「吉田胎内樹型」に到着（写真）。鉄製のドアはチェーンによってロックされている。5歳のAくんが「僕が開ける」と手を挙げた。錠のかけ方がなかなか分からない。しばらくその様子を眺めていたが、スタッフの1人が優しく教えると、カチッと解錠した。こんな体験も貴重なのだ。

吉田胎内樹型は、864年の貞観の大噴火によって約60mの空洞が生まれた。スタッフを確認し、4家族が順番に洞窟に入っていく。吉田口遊歩道沿いにある「中の茶屋」でランチ、おやつ。となると子どもたちの足取りは軽くなった。

ランチが終わると本日メイン、コウモリのいる？「雁の穴」へ。「陸上自衛隊北富士駐屯地」の看板を確認して原生林の中を分け入っていく。踏み跡がわずかに残る道を、GPSを頼りに一列になって進むが、2度ほど道迷いをした。壊れかけた小さな看板をようやく見つける。森の中の窪地に大きな洞穴「崩れ穴」が現われた。歓声が上がった。「コウモリがいるの?」、子どもたちはドキドキだ。スタッフが

ヘッドランプを点けて入っていくと、突然黒い影が飛び出した。念願のコウモリに出会えたのだ。洞窟内のコウモリたちは眩しそうで、ひくひくと動いていた。スマホのシャッター音が何度も鳴った。

怪我人もなく、3つの洞窟探検が無事に終わった。1家族に1人のスタッフ、家族のように会話を重ねた半日、どの家族の顔にも笑みがあった。山登りもいいが、まずは自然を楽しむ。それも冒険が加わると子どもたちの目は輝く。子どもたちへ自然に触れる楽しさをこれからどう伝えていくか、次の委員会です話合うことになる。(渡辺龍哉)

会報編集委員会

本年度も出版社で編集経験のある節田重節（会員番号6720）と原邦三会員（同9080）の2人態勢で編集しており、前半部を節田が、後半部を原会員が担当して毎月、作業を進めている。

この3年間ほど、コロナ禍で会員たちの活動が停滞していたため、記事のネタ不足対策として「島の山旅への誘い」や「ご当地アルプス登山案内」などの連載記事を掲載してきたが、幸い好評を得たので9月号から後継企画として「山の名著再読」をスタートさせた。

本会の歴史は、図書室の歴史でもある。先人たちが遺した山の名著がたくさん所蔵されているので、宝の持ち腐れにならないよう大いに利用したいものである。連載では、できるだけ文庫版でも読める本を採り上げているので、ぜひ手に取ってもらいたい。

昨年度の会報発行に関する経費総額は912万7891円で、対前年比24万6588円の増額となっている。内訳は印刷・製本費が351万2850円で、月平均29万2738円。送送作業費が427万3001円で、月平均35万6083円。通信・運搬費が29万1067円、編集費が101万280円、取材費が4万693円となっている。諸物価高騰の折、印刷・製本や送送、通信などの経費が少しずつ値上がりしているのが増額の原因である。

(節田重節)

『山岳』編集委員会

2023年の『山岳』は編集作業の大幅な遅れと、また諸般の事情から10月始めに、ようやく校了の運びとなった。早くから原稿を執筆していただいた著者の方たちには、まずお詫びしたいと思います。

さて、表紙画には画家で写真家の小谷明氏にお願いして4年目を迎えた。今回の画は、クーンツ山群のエベレスト街道ではおなじみのカシテガとタムセルク。『山岳』にふさわしい絵柄を使用させていただいた。

巻頭の記録は3本。2年続けてペルー・アンデスの岩壁登攀に挑んだ北大山岳部OBの若いクライマーによる果敢な挑戦の記録となった。ブランカ山群のタウイラフ南西壁とビルカノタ山群のアウサンガテ北壁の記録は、それぞれに自分たちの感性を信じて挑んだ読み応えのある記録となった。続いて、創立120周年記念事業の第2回「グ

レート・ヒマラヤ・トラバース」の踏査記録を掲載。今回は、ネパール東部、チベット国境上の山域であるマカルー・エリア、6000mを越える3つのコルの通過が課題となった。ネパールの村の変貌の様子と、自動車道路延伸による庶民の暮らしの変化などを中心に報告してもらった。最後は、中島健郎会員によるアンナプルナ北面と南面の撮影記。南面では5695mのテント・ピークまで登攀して撮影、しかもドローンによる明け方の撮影は、これまで見たことのないアンナプルナ上空からの貴重な記録映像となっている。ただ、今回K2西壁での遭難は、何度も『山岳』に執筆してくれていただけに残念でない。心からお悔やみ申し上げます。

調査・研究は、やはり3本。期せずして山岳書に関連した内容が続いた。第3代日本山岳会会長の木暮理太郎といえは、『山の思ひ出』や『東京から見える山』が主要著作だが、南川金一会員による「東京市史稿」は、木暮の知られていない一面にスポットを当てた力作となった。続いて作家の近藤信行への追悼を兼ねた「小島烏水 山の風流使者伝」を再読して」が続く。執筆者の山本良三会員は、近藤の執筆の源泉を「山と人、山の文化」へのあくなき追究の姿勢」にあつたと説く。最後の原稿は「山岳書散逸の危機」と題した拙稿で、会員の高齢化とともに山岳書が散逸する可能性が高まり、その現状、対処法などを試考した原稿である。

紀行読物は2本。山の自然学研究会が行なったカムチャツカの自然と植物をまとめた記録であり、紀行である。観察できた植物を可能な

限り調査・記録した結果が綴られている。最後の片貝川の山旅は、北アルプス・剣岳の北方に連なる毛勝三山の紀行読物。田部重治、木暮理太郎、冠松次郎らの先人が残した紀行文や、早月尾根から剣岳に登った印象を思い返し、40年前に意を決して挑んだ紀行となっている。

今回の英文サマリーも、東京多摩支部の石塚嘉一会員にお願いした。時間がないところを大急ぎで翻訳してもらった。

冒頭にも記したが、今回は異例の事態によって、校了後に発送を1ヶ月半、遅らせることになった。執筆者や支部会員、各委員会の委員長には長く待っていただいた。重ねてお詫びしたいと思う。

なお製作費総額は372万3301円。内訳は、印刷・製本費258万5000円、発送作業・封筒代60万4383円、編集費49万6000円、その他経費3940円。印刷部数は4500部であった。

(神長幹雄)

支部事業委員会

猛威を振るった、新型コロナウイルス感染症もほぼ終息し、日本山岳会も例年どおりの活動が復活した。委員会も正常な状態での活動になったが、長いコロナ禍の影響は各方面に残り正常化に苦労した1年であった。

*2024年度特別事業補助金事業審査結果

今年度は9支部から申請があったが、全て昨年からの継続支部で、

残念ながら新規支部からの申請はなかった。事業内容はほとんどが昨年から継続事業であったが、関西支部は新規事業であり、昨年までの事業の区切りがついたための新規事業である。今年度の審査結果は以下のとおり理事会で承認された。福島支部は前年度と同じ「フリークライミング講習会」で7万5000円。神奈川支部は2年目継続事業で「3つのプロジェクトによる支部活性化」で19万円。埼玉支部は3年目継続で「第6期埼玉やま塾」で14万円。2年目申請の東九州支部は「リーダー育成のための研修事業」で15万円。山形支部は3年目事業の第2次「学校から見える山」イラスト・プレゼントで10万円。3年目になる東京多摩支部は「第11期初級登山教室」による会員増強および登山教室スタッフの充実事業で19万円。3年目事業になる千葉支部は「房総の山復興プロジェクト」で6万円。初年度企画の関西支部は「支部運営人材の育成」で19万円。2年目になる広島支部は「幸せなクラブライフになるために、JAC広島セミナー」で10万円となり、合計110万9500円の特別事業補助金となった。

*登山教室指導者養成講習会

第13回となる講習会を2024年3月9日(土)・10日(日)に公益財団法人 安藤スポーツ・食文化振興財団の支援により安藤百福記念・アウトドアアクティビティセンターで積雪期講習会を実施した。会場は新型コロナウイルスの影響での宿泊制限が募集時には解除されず、定員を超過参加希望者があり、山梨支部、東京多摩支部には人数制限をお願いしての開催となった。座学講義は、長野県警察山岳遭難救助隊副隊長・母

袋周作講師による「最近の遭難事故と救助活動」とJAC副会長・飯田肇講師による「日本に氷河がある——」とユースクラブ委員長・松原尚之講師の「チーム登山と初級の雪山技術」の講義があり、夕食後は講師を囲んで交歓会が行なわれた。講師への質問や各支部の情報交換など有意義な時間が持たれた。翌日の実技講習は晴天に恵まれ、松原講師、西田由宇・東海大学山岳部コーチ2名のほか千葉支部の平野直子アシスタントの講師陣で、チャーター・バスを利用して車坂峠に移動、水ノ塔山登山と実技講習が実施された。参加者は山梨支部5名、千葉支部3名、群馬支部3名、東京多摩支部4名、埼玉支部2名、越後支部2名、講師4名（うちアシスタント1名）、支部事業委員会から担当理事1名、スタッフ2名の総勢27名で行なわれた。

*山の天気ライブ授業

開催希望支部が多く、かつ講義とフィールドでのライブ授業の日程と多忙な講師との調整が難しく、ほとんどの支部が2年前に予定を調整して開催となっている。今年度は5月20・21日に四国支部。6月17・18日に宮城支部。8月5・6日に関西支部。12月9、10日に東京多摩支部の4支部で実施された。座学講義と連携したライブ授業は実践的で、会員以外の参加者も多く盛況であった。

*全国支部懇談会

神奈川県支部主催で全国から120名を超す参加者を迎え、5月25・26日に平塚市のグランドホテル神奈中で開催された。初日は市内湘南平で平塚市長臨席の下、第1回岡野金次郎碑前祭に参加し、夕食時に

懇親会が盛大に行なわれた。翌26日は三浦アルプス縦走の健脚班と鎌倉大仏ハイキング班に分かれ、懇親登山を楽しんだ。今年度は関西支部主催の予定。

(宮崎紘一)

図書委員会

図書室は、蔵書の保管と新刊書の補充による機能の充実、利用者の便宜を図ることを目的に運営されてきたが、ここ数年のコロナ禍の影響が大きく、これまでは利用促進にあまり積極的に関わってこられなかった。今後は、会員の皆さんに積極的に利用してもらえよう働き掛けていきたいと思う。

昨年からは始めた図書館巡りであるが、前回の長野県に続き今回は富山県の図書館、博物館を巡った。富山県在住の資料映像委員会の飯田肇委員長に音頭をとってもらい、まず宇奈月の黒部市歴史民俗資料館へ。特に隣接した黒部市図書館は山岳書も多く充実した内容だった。立山駅へ移動して立山砂防カルデラ博物館へ、飯田委員長自らに案内してもらった。その後、大山歴史民俗資料館に寄り、翌日は立山博物館と富山市の富山県立図書館へ。それぞれに館長や担当者からレクチャーを受け、館内を案内してもらった。どのような方向性で、どう運営をしているのか、今回も大変参考になった。

また、記念事業委員会PJの一環として、「エベレスト登頂50周年」の写真展を年次晩餐会に合わせ、12月2日の1日ではあるが開催する

ことができた。これで東京、豊岡、富山に続き、4回目の巡回展となった。

今年度も図書交換会は2回、開催することができた。5月20日、集会室と104号室の2部屋で、また、12月2日の年次晩餐会では京王プラザホテルの1室で開催された。特に年次晩餐会での図書交換会は、首都圏の会員だけでなく地方の支部会員も参加できるため、交流の場としても有効で、あれだけ多くの山岳書を実際に手に取って見られるメリットはかなり大きいと思う。なお、図書交換会での売り上げは総務委員会に寄付している。

また、今年度から会報委員会の協力の下に、「山岳名著再読」のコーナーを会報に掲載してもらっている。特に山岳書になじみの薄い若い会員を対象に、名著を選び、月2冊ずつ山岳書を紹介している。古典というより文庫で手に入る比較的新しい山岳書を図書委員に推薦してもらい、図書委員自らの思入れを交えながら紹介文を発表している。こうした活動とともに、毎月の例会で、各出版社から送られてくる書籍を選択し、会報「山」と年報『山岳』へ、継続的に図書紹介を掲載してもらっている。図書の選定、執筆の依頼、もしくは執筆して「図書紹介」欄に発表する活動であるが、毎月ほぼ常設のページとなり、図書を紹介している。

長年にわたって図書管理に努めてくれた田村典子さんが定年で退職、新たに豊泉仁美さんが図書担当となってくれた。田村さんには本当にお世話になり感謝に堪えない。また、豊泉さんには、今後も図書

室を支えて力になってほしいと思う。

図書委員会の歴史や伝統をいかに若い会員に引き継いでいくかが最近の課題であったが、少しずつではあるが、若い会員が増えてきたことで委員の年齢層にも幅が出てきた。今後も資料映像委員会やMCC（マウンテン・カルチャー・クラブ）と歩調を合わせながら、山の文化を若い世代に継承していきたいと思う。

（神長幹雄）

資料映像委員会

創立120周年記念事業としてのデジタルミュージアム開設を目指して、本会の収蔵品や人物などのデジタルコンテンツ作成を継続した。さらに、「山岳会のモノとヒト」講座を2回開催し、本会の貴重な所蔵品や人物について広く紹介した。また、第27回全国山岳博物館等連絡会議を継続開催して全国の山岳博物館と連携を図り、本会の所蔵資料などを広く紹介した。

所蔵資料の収集保存に関しては、導入したPC機器を活用して所蔵資料の整理、データベース化を図った。また、収蔵庫が手狭で保存状態が悪化しているため、外部の収蔵室をレンタルして所蔵品の維持管理を行なっている。実施した主な事業について以下に詳しく述べる。

*第27回全国山岳博物館等連絡会議

全国の連携館9館と情報交換、収蔵資料紹介、展示協力打合せなどを行なった。また、本会の博物館図書館視察活動について紹介した。

・開催場所 山岳会ルーム集会室(リモート会議併用)

・日程 2023年11月18日(土) 13時30分～16時

・参加館 北大山岳館、秩父宮記念スポーツ博物館、植村冒險館、深田久弥山の文化館、富山県立山博物館、富山県立山カルデラ砂防博物館、黒部市歴史民俗資料館、富山市大山歴史民俗資料館、ネパール国際山岳博物館など

・内容 各館から企画展や事業、リニューアル計画などについて紹介があり、情報交換を行なった。また、共通の課題として、所蔵図書重複の問題が挙げられ、本ネットワークなどでも重複本の情報交換の仕組みを作る提案がなされた。

*【山岳会のモノとヒト】講座の開催

本会が所蔵する日本の登山史にとって貴重な山岳資料を紹介する機会として、資料(モノ)とそれに関わる人物(ヒト)を紹介する講座を2回開催した。

①第1回【山岳会のモノとヒト】講座「マナスル」

・日時 2023年1月31日(水) 18時30分～20時30分

・場所 日本山岳会ルーム104号室およびリモート開催

・講師(ナビゲーター)・・中島健郎氏(石井スポーツ所属、本会会員)・

古野淳氏(本会前会長)

・内容 日本の登山界にとって画期的な出来事だった1956年の8000m峰マナスル初登頂を、本会で所蔵する映像、資料(モノ)、当時の隊長や隊員(ヒト)から振り返った。

②第2回【山岳会のモノとヒト】講座「エベレスト」

・日時 2023年3月4日(月) 18時30分～20時30分

・場所 日本山岳会ルーム104号室およびリモート開催

・講師(ナビゲーター)・・中島健郎氏(石井スポーツ所属、本会会員)・

古野淳氏(本会前会長)

・内容 マナスル初登頂以降の最大の課題であった1970年のエベレスト登頂を、映像と本会で所蔵する資料(モノ)、当時の隊員(ヒト)から振り返った。また、ナビゲーターのエベレスト体験も併せて紹介した。

*デジタルミュージアムに向けてのコンテンツの作成

収藏品、人物、遠征隊などの資料調査、デジタル化を行ない、デジタルミュージアムのコンテンツを作成した。令和5年度は、主にマナスル遠征隊、エベレスト遠征隊の所蔵資料の確認作業、映像の編集作業などを実施した。

*資料収蔵用トランクルームの借用

102号室に所蔵していた絵画、登山用具など約60点をレンタルルームへ移動して、良好な保存状態を保った。

*収集資料の収集、整理、保存、貸出

資料のデジタル化、データベース化を進めた。また、遠征隊資料、登山装備などの寄贈品の受け入れを行なった。さらに報道機関、博物館などへ所蔵資料の貸出しを行なった。

(飯田肇)

日本山岳会の定款には「山岳に関する研究並びに知識の普及及び健全な登山指導、奨励をなし、あわせて会員相互の連絡懇親をはかるとともに、登山を通じてあまねく体育、文化及び自然愛護の精神の高揚をはかることを目的とする」と記されている。登山に科学的な視点を加え、会員や一般の登山愛好者を含め、楽しくかつ安全に登山するための講演会や探索山行を開催した。

公益事業として、科学委員会主催で探索山行「伊吹山」を2023年6月10日(土)・11日(日)にJAC会員および科学委員15名、一般参加者24名の計39名で開催した。米原駅集合後、賤ヶ岳登山、伊吹山資料館で高橋学芸員から伊吹山全般の紹介と見学。伊吹山登山では石井誠治委員から植生の特徴や樹木や草花など解説があり、彦根城見学後、米原駅で解散となった。

また、公益事業として、科学委員会主催のフォーラム「登山を楽しむ」を2023年12月23日(土)、13時から17時に立正大学品川キャンパス・ロータスホールで開催した。科学委員会委員16名、JAC会員24名、一般参加者27名および講師3名(2名はJAC会員)で参加者総数は70名であった。講演1では、「富士山噴火と登山者」と題して、山梨県富士山科学研究所所長の藤井敏嗣氏(東京大学名誉教授)は、富士山噴火の特徴、ハザードマップ、避難計画、噴火警戒レベル、避難行動、登山者の特徴に関して講演された。講演2では、「こ

れでいいのか登山道—登山道のあるべき姿と今後を考える—」と題して、登山道法研究会代表の上幸雄氏(日本山岳会会員)からは、現状での登山道は、あやふやな存在である、登山道はいかにあるべきなのか、その問題を解決するためには何が必要か、「登山道」がなくなる日は来るのか、などについて興味深い講演があった。講演3では、「道迷いはなぜ起きる」と題して、フリーライターの羽根田治氏(日本山岳会会員)からは、登山における道迷いとは? 道迷い遭難に陥る典型的なパターン、なぜ引き返せないのか? などに関する講演があり、認知バイアスに関する解説であった。科学委員会ではフォーラム開催に際し、講師と参加者との有意義な意見交換を目的の一つとして計画したが、講演後の意見・コメント・提案など質疑応答が活発に行なわれ、講演内容の理解を深めることができた。

公益事業として、科学委員会主催で研修山行「埼玉県立嵐山史跡の博物館・菅谷館く大蔵館跡」を24年3月30日(土)、武蔵嵐山駅に9時40分集合、科学委員会委員8名で開催した。博物館・菅谷館から武蔵武士の足跡を訪ねながら、鎌形八幡神社、班溪寺、大蔵館跡、向徳寺、鎌倉街道を通って武蔵嵐山駅に戻った。

科学委員会では例会を毎月第3木曜日、18時30分〜20時30分に日本山岳会ルーム集会所およびZoomで開催した。

自主研修として23年7月20日(木)の例会時に、小崎委員による「上高地岳沢の水河地形」に関する講演を行なった。また、24年3月21日(木)の例会時に松本(敏)委員から研修山行「埼玉県立嵐山史跡の博物館・

24年、25年と3ヶ年にわたり継続される予定である。

一方、学生部であるが、青山学院大学山岳部3年の井之上琢磨君を委員長、22年度委員長だった慶義義塾山岳部4年の中田康太郎君が副委員長を務め、11月のクライミング&マラソン大会、12月の谷川雪上講習、2月の八ヶ岳アイス&雪山安全講習などを実施した。また、10月には富山県警察元山岳警備隊長・柳澤氏ほかを招き、講演会を実施した。学生部は井之上委員長が隊長となり2024年秋のヒマラヤ遠征を計画しており、メンバーに決まった学生たちは積極的にトレーニング山行も開始している。

ユースクラブという新しい組織が生まれ、支部交流も活発化しており、少しずつ進むべき方向性が見えてきたYOUTH CLUB委員会であるが、まだ圧倒的に不足しているのは、ユースクラブや学生部をリーダーとして引つ張ってくれるマンパワーである。遅々とした歩みではあるけれど、これからも継続的に仲間を増やしていければ、と考えている。

(松原尚之)

山岳研究所運営委員会

山岳研究所運営委員会は、毎月第2火曜日夜の定例のミーティングと4月下旬〜11月中旬の上高地開山期間中に山岳研究所（以下、山研と略）をベースに実施する建物設備の維持管理、会員サービスマニ業務およびミニ水力発電小委員会と連携した自然エネルギー利用研究、オン

ライン接続された観測機器による上高地エリアの気象観測などを活動の柱としている。

令和5年度は従来からの建物設備の保全作業に加え、建物改築以来30年近く使用していた畳の張り替え、敷布団の入れ替えなど会員サービスマニの面でも改善を図った。また、前年度からの検討課題である山研利用料の改定、管理人雇用条件の見直しについて令和6年度からの実施を目標に定例ミーティングの参加メンバーを中心に審議を重ねた。以下に令和5年度の主な活動を列挙する。

* 4月22〜23日 委員会関係者、管理人を含め総勢16名で山研の開所作業を実施。ミニ水力発電の共同研究先である神奈川工科大学の学生2名もメンバーに加わり、善六沢水源の取水口補修とサージタンクの更新用に流用する飲料水用ステンレス枡（遊休品）の改造作業も実施した。

* 6月2〜4日 ステンレス枡の改造を終え、配管材料とともに水源まで担ぎ上げ架台に固定。

* 8月19日 委員（神奈川工科大学教員）と学生2名が新規設計の取水口を水源に仮設置して取水性能の検証を実施。

* 9月11日 台湾・山岳関係行政人の山研視察があり、委員が対応。

* 9月20日 委員の手により故障した2階ゲストルームの照明器具交換と地下脱衣場の寒さ対策用ヒーターの電源コンセント増設工事を実施。

* 10月4日、7日 委員の手により腐食した木製の屋外階段手摺ほか

建物外構の補修を実施。

*10月15～17日 取水口～新サージタンクの配管を連結し、サージタンクまでの試験送水を実施。

*11月11～12日 委員会関係者、管理人および学生を含め総勢16名で山研の閉所作業を実施。

*11月17日 水道設備の水抜き立会いと閉所の最終確認を実施。

*11月30日 環境省への土地使用許可の更新申請を実施。

これらの活動のほか、上高地右岸水道組合の総会と3月に松本市内で開催された上高地町会の定期総会への出席、上高地開山祭、明神池お船祭りおよび上高地閉山式などの各種行事への参加、さんけんプロダクトの更新などを委員と管理人で分担し、対応に当たった。

なお、前述した利用料改定については、施設老朽化に伴う大型修繕への対応、建物光熱費、リネンクリーニング代の値上がりなど委員会への運営努力だけでは対応できないため、やむを得ず実施するものであり、会員の皆さんにはご負担増をお願いすることになるが、ご理解とご協力をお願いしたい。

(柴山信夫)

65歳からのエベレスト街道トレッキング	柳谷杞一郎	雷鳥社	1,980	B6変形判	255
【わ】					
Wildlife大雪山より	渡辺浩徳／写真・文	日本写真企画	3,850	A4変型判	110
わが回想の谿々<ヤマケイ文庫>	白石勝彦	山と溪谷社	1,100	文庫判	352
私の心の山 尾崎喜八選集<ヤマケイ文庫クラシックス>	尾崎喜八	山と溪谷社	2,310	文庫判	592
わたしの山登りアイデア帳	山下舞弓	山と溪谷社	1,870	A5判	144

『山と食欲と私』公式 鮎美の山ごはんレシピ3 [全国 山めぐり編]	日々野 信濃川日出雄／監修	山と溪谷社	1,210	B6判	128
山と友Ⅲ：第一巻 山 東京大 学運動会スキー山岳部 百周年 記念誌	東京大学山の会／編	東京大学山の会	非売	21cm	471
山と友Ⅲ：第二巻 友 東京大 学運動会スキー山岳部 百周年 記念誌	東京大学山の会／編	東京大学山の会	非売	21cm	315
山の家のスローバラード ⇨山中湖行ったり来たりのデュ アルライフ	東京 佐藤誠二郎	百年舎	2,200	四六判	264
山の憶い出 紀行編<ヤマケイ 文庫クラシックス>	木暮理太郎	山と溪谷社	2,420	文庫判	640
山登りを趣味にする ソロ登山 ステップアップガイド	かほ	マイナビ出版	1,738	A5判	128
山の本棚	池内 紀	山と溪谷社	1,980	四六変形判	472
山のメディスン 弱さをゆる し、生きる力をつむぐ	稲葉俊郎	ライフサイエンス出版	2,200	四六判	296
山は輝いていた：登る表現者た ち十三人の断章	神長幹雄／編	新潮社	737	文庫判	304
山は泊まってみなけりゃ分から ない	石丸謙二郎	敬文舎	1,650	四六判	256
やまをつくったものやまをこわ したもの 山のはなし 新装版	かこさとし	農山漁村文化協会	2,750	A4変形判	24
槍・穂高・上高地 地学ノート 地形を知れば山の見え方が変わる	竹下光士、原山 智	山と溪谷社	1,870	A5判	176
雪と氷にすむ生きものたち 雪 氷生態学への招待	竹内 望、植竹 淳、 幸島司郎	丸善出版	3,080	A5判	176
雪のくに移住日記 プナの森辺 に暮らす	星野秀樹	信濃毎日新聞社	2,200	A5判	172
ようこそ、山岳と大気がおりな す世界へ	上野健一	筑波大学出版会	2,970	A5判	112
ようこそ！ 富士山測候所へ 日本のてっぺんで科学の最前線 に挑む	長谷川敦	旬報社	1,760	四六判	194
吉阪隆正+U研究室：山岳建築	齊藤祐子／編、北田 英治／写真	建築資料研究社	2,750	A4判	64
吉田類の愛する低山30	吉田 類	NHK出版	1,925	A5判	160
【ら】					
リーダーシップとフォロワーシ ップ!! 未知への挑戦シリーズ ②山岳編	東近江市西堀築三郎 記念探検の殿堂	東近江市西堀築 三郎記念探検の 殿堂	非売	26cm	208
霊峰の文化史 世界遺産・富士 山と世界の山岳信仰	秋道智彌	勉誠社	3,520	A5判	360
列島の人々は火山災害にどのよ うに向き合ってきたのか 火山 災害考古学から今を考える	五味文彦／監修、桑 畑光博／編集	山川出版社	6,600	A5判	264
六十一歳、免許をとって山暮ら し	平野恵理子	亜紀書房	1,870	四六変形 判	256

分水嶺の謎 峠は海から生まれた	高橋雅紀	技術評論社	3,520	A5判	416
「冒険・探検」というメディア戦後日本の「アドベンチャー」はどう消費されたか	高井昌吏	法律文化社	3,630	A5判	312
ぼくたち、ここにいるよ 高江の森の小さないのち 増補版	アキノ隊員	影書房	2,200	菊判変形判	104
歩山録	上出遼平	講談社	1,870	四六判	224
穂高に遊ぶ 穂高岳山荘二代目主人 今田英雄の経営哲学	谷山宏典	山と溪谷社	2,200	四六判	224
北海道犬旅サバイバル	服部文祥	みすず書房	2,640	四六判	256
北海道の高山植物800種以上を取録した高山植物の決定版 改訂新版	梅沢 俊	北海道新聞社	3,080	A5変型判	368
北海道のヒグマ問題 市街地になぜ出て来るのか他	門崎允昭	北海道出版企画センター	1,100	A5判	54
北極男 冒険家ははじめました<ヤマケイ文庫>	荻田泰永	山と溪谷社	1,210	文庫判	344
【ま】					
またまたゆるる山歩き その気になったら山日和	西野淑子	東京新聞出版	1,320	四六判	128
まためぐりくる春に	古谷文俊	風景写真出版	2,800	A4横変型判	124
Massif du Mont-Blanc III Montagnes et Gens～山と人～	大野 崇	日本写真企画	3,410	A4変形判	96
幻のユキヒョウ 双子姉妹の標高4000m冒険記	ユキヒョウ姉妹	扶桑社	1,760	A5判	192
未完の巡礼 冒険者たちへのオマージュ<ヤマケイ文庫>	神長幹雄	山と溪谷社	1,210	文庫判	384
ミニマライズキャンプ入門	CAMP たかにい / 監修	朝日新聞出版	1,650	A5判	224
みんなが知りたい!北極・南極のひみつ 極地の「なりたち」と「いま」がわかる本	「北極・南極のひみつ」編集室	メイツ出版	1,848	A5判	128
持ち歩き出会ったときにすぐ引ける草花と雑草の図鑑 集録数520種	金田初代 / 文、金田洋一郎 / 写真	西東社	1,540	B6判	320
森を活かし森に生きる	宮林茂幸	東京農業大学出版会	3,740	A5判	407
【や】					
屋久島、そして雲ノ平へ	小梨里子	幻冬舎	1,760	四六判	260
野草図鑑 食草・葉草・毒草がわかる ハンディ版	金田洋一郎	朝日新聞出版	1,430	新書判	320
八ヶ岳南麓から	上野千鶴子	山と溪谷社	1,760	四六変型判	152
山と言葉のあいだ	石川美子	ベルリプロ	2,860	四六判	288
ヤマケイ入門&ガイド 雪山登山 改訂版	野村 仁 / 著、江崎善晴 / 画	山と溪谷社	2,200	A5判	244
山階鳥類研究所のおもしろくてためになる鳥の教科書<ヤマケイ文庫>	山階鳥類研究所	山と溪谷社	1,100	文庫判	336
山旅犬のナツ	服部文祥	河出書房新社	1,980	A6変型判	96

日本三百名山 山あるきガイド 上	JTBパブリッシング アウトドア編集部/ 編集	JTBパブリッシ ング	2,640	A5判	320
日本史のなかの中世日光山 忘 れられた全盛時代	永井 晋	文学通信	2,200	四六判	214
日本の岩場 上巻 改訂新版	菊地敏之/編	白山書房	2,310	A5判	160
日本の川 東日本編 源流から 河口へ巡る旅。	北中康文	文一総合出版	2,860	四六変型判	304
日本の山に棲む動物たち 日本 山岳会・休山会創立30周年に寄 せて	安間繁樹	休山会	非売	21cm	109
日本百高山の完全単独踏破	真木太一	文芸社	1,320	A5判	194
日本百名山クルマで行くベスト プラン 2024	JTBパブリッシング /編集	JTBパブリッシ ング	1,870	A5判	224
野と岳のすみばな 光と景と静 寂と	大森幹之	高文研	3,520	A4変形版	120
【は】					
はじめての富士山登頂 正しく 登る準備&体づくり徹底サポ ートBOOK	一般社団法人マウン トフジトレイルクラ ブ/監修	メイツユニバー サルコンテンッ ツ	1,892	A5判	128
裸の大地 第二部 犬糞事始	角幡唯介	集英社	2,530	四六判	360
パワースポット富士山 神宿る 山：河野満富士山写真集	河野 満	鳥影社	1,980	B5変型判	66
半日の山ハイク 丹沢、箱根足 柄、三浦湘南、北相模、横浜川 崎	樋口一郎	東京新聞出版	1,540	A5判	160
ビーストメイキング クライ マーのための保持力強化トレ ニング	ネッド・フィーハ リー/著、木村 彩 /翻訳	山と溪谷社	2,640	A5判	224
ヒグマは見ている 道新クマ担 記者が追う	内山岳志	北海道新聞社	1,430	B5判	104
ひとりぼっちの日本百名山<ヤ マケイ文庫>	佐古清隆	山と溪谷社	1,210	文庫判	368
ヒマラヤ山脈形成史 Mountain Building of the Himalayas	酒井治孝	東京大学出版会	7,200	27cm	210
100年前の鳥瞰図で見る 東海 道パノラマ遊歩	荻原魚雷/著、パノ ラマ地図研究会/編 集、清水吉康/イラ スト	大和書房	1,100	文庫判	320
100%クライミング人生	東 秀磯	山と溪谷社	1,980	四六判	336
風光の峰 雲上の溪 黒部源流 の山々	秦 達夫	日本写真企画	3,300	B5判	104
富士山と日本人 豊かな「富士 山学」への誘い	遠山敦子/編	静岡新聞社	1,980	A5判	320
富士を介して信を通じる：平川 義浩絵葉書コレクションにみる 富士山の姿	井上卓哉、静岡県富 士山世界遺産セン ター	風媒社	3,520	B5判	199
復刻版日本軍教本シリーズ 山 嶽地帯行動ノ参考 秘	佐山二郎/編集	潮書房光人新社	980	文庫判	272

知図を描こう！ あるいてあつめておもしろがる	市川 力	岩波書店	1,595	B6判	126
秩父ハイク 西武池袋線&秩父線・秩父鉄道沿線の山歩きと秩父三十四札所巡り	山と溪谷社／編集	山と溪谷社	1,870	A5判	160
中国・四国ゆったり山歩き 日帰りで楽しむ厳選コースガイド	山歩きの会・遊道山	メイツユニバーサルコンテンツ	1,980	A5判	144
土の声を「国策民営」リニアの現場から	信濃毎日新聞社編集部	岩波書店	2,640	B6判	242
剣の守人 富山県警察山岳警備隊	小林千穂	山と溪谷社	1,760	四六判	352
ツンドラの記憶 エスキモーに伝わる古事	八木 清／編訳・写真	閑人堂	2,420	A5変形判	112
テムズとともに 英国の二年間	徳仁親王	紀伊國屋書店	2,750	四六判	223
天気のことわざは本当に当たるのか考えてみた	猪熊隆之	ベレ出版	1,870	A5判	206
天空の限界集落 秩父〈浦山・太田部・大滝〉に生きる人びと	山口美智子	一葉社	3,300	四六判	372
天空の園 大雪山 神々の遊ぶ庭	両瀬いさお	共同文化社	2,420	A4変形判	80
天狗と修験者 山岳信仰とその周辺	宮本袈裟雄	法蔵館	1,320	文庫判	288
天災か人災か？ 松本雪崩裁判の真実	泉 康子	言視舎	2,750	A5判	328
登山史の森へ<ヤマケイ文庫>	遠藤甲太	山と溪谷社	1,650	文庫判	512
富山県警レスキュー最前線<ヤマケイ文庫>	富山県警察山岳警備隊／編、羽根田治他／著	山と溪谷社	1,100	文庫判	368
獲る 食べる 生きる：狩猟と先住民から学ぶ“いのち”の巡り	黒田未来雄	小学館	1,870	四六判	258
【な】					
ナイトハイクのススメ 夜山に遊び、闇を楽しむ 灯りを消して歩く新しいナイトハイクの技術とガイド<ヤマケイ新書>	中野 純	山と溪谷社	1,210	新書判	232
なぜ、あなたは、山に登るのか。答えはついに―人生とつなぐ山登り原論	岡 秀郎	文芸社	1,100	四六判	113
なぜ谷は「ヤ」とよむのか 鳥取の地名研究	古屋修二	今井出版	2,420	B5判	317
南極アトラス 最新の地図とデータで見る過去・現在・未来	ピーター・フレットウエル／著、渡邊研太郎／日本語版監修、藤井留美／翻訳	柊風舎	14,300	A4変型	220
No.1登山アプリのユーザーの声から生まれた YAMAP山登りベストコース 関東周辺版	株式会社ヤママップ	KADOKAWA	1,980	A5判	240
西シベリアの熊まつり 熊の魂を癒やす藝能の役割	チモフェイ・モルダノフ／著、星野 紘／編訳	国書刊行会	4,950	A5判	328

世界自然遺産 奄美の森・生き物図鑑	山口喜盛、山口尚子、山口森音、山口風音	南方新社	1,980	A5判	157
世界探検全集03 アジア放浪記	フェルナン・メンデス・ピント、江上波夫／翻訳	河出書房新社	2,420	四六変型判	292
世界探検全集13 中央アジア自動車横断	ジョルジュ・ル・フェーヴル／著、野沢協、宮前勝利／翻訳	河出書房新社	2,530	四六変型判	454
世界探検全集14 コン・ティキ号探検記	トール・ハイエルダール／著、水口志計夫／翻訳	河出書房新社	2,530	四六変型判	308
世界探検全集07 天山紀行	ピョートル・セミョーノフ＝チャン＝シャンスキイ／著、樹下 節／翻訳	河出書房新社	2,530	四六変型判	330
世界探検全集08 アフリカ探検記	デイヴィッド・リヴィングストン／著、菅原清治／翻訳	河出書房新社	2,750	四六変型判	316
世界探検全集04 カムチャツカからアメリカへの旅	ゲオルク・ヴィルヘルム・シュテラー／著、加藤九祚／翻訳	河出書房新社	2,420	四六変型判	260
ゼロから山女子始めてみました	ありを	KADOKAWA	1,485	A5判	192
全部、山が教えてくれた 林業のこれから 改訂版	高橋正二	幻冬舎	990	新書判	230
捜索者くヤマケイ文庫>	谷口ジロー	山と溪谷社	1,210	文庫判	344
壮年から百名山をめざす健康法42	位田博文	山と溪谷社	1,870	四六判	166
増補改訂版 詳しい地図で迷わず歩く 奥多摩・高尾500km	佐々木亨	山と溪谷社	2,200	A5判	208
そこにある山 人が一線を越えるとき	角幡唯介	中央公論新社	902	文庫判	288
備え力がつく！ 天気予報の見方聴き方	伊藤みゆき	近代消防社	2,420	A5判	252
【た】					
高尾・奥多摩・奥武蔵・秩父の山あるき 登山初心者から中級者まで	JTBパブリッシング 旅行ガイドブック編集部／編集	JTBパブリッシング	1,870	A5判	208
タジキスタン・パミール踏査隊	パミール・中央アジア研究会・高橋善数／編		非売	30cm	58
旅の彼方	若菜晃子	KTC中央出版	1,760	四六変型判	317
多摩ハイク 京王線 小田急線 JRで気軽に行ける 多摩丘陵・町田・高尾・青梅の山と街歩き	山と溪谷社／編集	山と溪谷社	1,760	A5判	128
丹沢・箱根日帰り山あるき 改訂版	中田真二	実業之日本社	1,870	A5判	144
地域森林管理の長期持続性 欧州・日本の100年から読み解く未来	志賀和人、山本伸幸、早松真智、平野悠一郎	日本林業調査会	4,400	A5判	340
地域森林とフォレスト 市町村から日本の森をつくる	鈴木春彦	築地書館	2,640	A5判	176

死に山：世界一不気味な遭難事故《ディアトロフ峠事件》の真相	ドニー・アイカー／著、安原和見／翻訳	河出書房新社	1,210	文庫判	408
死ぬか生きるか海・山・川 絶体絶命アウトドア体験談55	つり人社書籍編集部／編集	つり人社	1,650	四六判	352
シャモニーの谷に生まれてモンブランが仕事場	クリスチャン・モリエ／著、柴野邦彦／翻訳	未知谷	2,970	四六判	272
十大事故から読み解く山岳遭難の傷痕<ヤマケイ文庫>	羽根田治	山と溪谷社	1,210	文庫判	416
樹木が地球を守っている	ベーター・ヴォールレーベン／著、岡本朋子／翻訳	早川書房	2,090	四六判	280
証言 雪崩遭難	阿部幹雄	山と溪谷社	1,870	四六判	288
昭和登山への道案内 ベストセラー「日本登山大系」を旅する	白水社編集部／編集	白水社	2,420	四六判	202
植物のプロが伝える おもしろくてためになる植物観察の事典<ヤマケイ文庫>	大場秀章／監修	山と溪谷社	1,100	文庫判	340
調べてわかる！ 日本の山1 山のなりたちと地形 日本アルプス・六甲山・筑波山ほか	鈴木毅彦／監修	汐文社	3,300	AB判	40
調べてわかる！ 日本の山3 火山のしくみと防災の知恵	鈴木毅彦／監修	汐文社	3,300	AB判	40
調べてわかる！ 日本の山2 山のめぐみと人々の暮らし	鈴木毅彦／監修	汐文社	3,300	AB判	40
新・いわて名峰ガイド 早池峰山	太宰智志・八重樫理彦／監修	岩手日報社	1,540	A5判	84
新・いわて名峰ガイド 岩手山	岩手日報社／編	岩手日報社	1,540	A5判	80
新装版 山の怪奇 百物語	山村民俗の会／編集	河出書房新社	1,650	四六判	218
新・高みへのステップ：国立登山研修所指導者テキスト（第5部）	日本スポーツ振興センター／編	日本スポーツ振興センター国立登山研修所	非売	30cm	137
新・高みへのステップ：国立登山研修所指導者テキスト（第4部）	日本スポーツ振興センター／編	日本スポーツ振興センター国立登山研修所	非売	30cm	169
新編名もなき山へ 深田久弥随想選<ヤマケイ文庫>	深田久弥	山と溪谷社	1,100	文庫判	336
森林で何が起きているのか	吉川 賢	中央公論新社	924	新書判	256
スコット南極探検日記	R.F.スコット／著、中田 修／翻訳	羽衣出版	3,300	A5判	470
ステレオ写真で眺める明治日本まちとむらの暮らし、富士山への憧れ	井上卓哉	古今書院	3,300	B5変型判	96
晴天白日の秘峰 極西ネパールマ峰挑戦の記録	同志社大学山岳会／編	同志社大学山岳部	非売	28cm	133
世界一長い鉄道トンネル スイス・アルプス山脈をほりすすむ	笹沢教一／著、鈴木さちこ／イラスト	Gakken	1,650	A5判	160
世界が広がる！ 地図を読もう 地図記号からウェブ地図まで、知って、遊んで、使いこなす	今和泉隆行	誠堂新光社	2,750	B5変形判	80

くじゅう連山 四季の絶景登山ルート	西日本新聞社／編集	西日本新聞社	1,760	B5判	128
黒部源流山小屋暮らし<ヤマケイ文庫>	やまとけいこ	山と溪谷社	1,100	文庫判	272
激走! 日本アルプス大縦断TJAR2022挑戦は連鎖する	齊藤倫雄	集英社	2,090	四六判	300
現代アートを続けていたら、いつのまにかマタギの嫁になっていた	大滝ジュンコ	山と溪谷社	1,760	四六判	256
現場で熱を感じ探る 火山の仕事	宇井忠英	ベレ出版	2,420	A5判	304
皇室と華族の登山 スキー・スケートとの出会い	霞会館・山と溪谷社／編	霞会館	非売	30cm	304
高野街道を歩く	森下恵介	東方出版	3,080	A5判	236
国境の人 間宮林蔵	高橋大輔	草思社	2,200	四六判	328
これで死ぬ アウトドアに行く前に知っておきたい危険の事例集	羽根田治	山と溪谷社	1,430	四六変形判	144
【さ】					
最新版 女子の山登り入門 経験ゼロからのステップアップ	小林千穂	Gakken	1,485	A5判	144
在来植物の多様性がカギになる 日本らしい自然を守りたい	根本正之	岩波書店	968	新書判	190
さがみ大山まわりと祈りのみち 大山講73万戸、4万5千kmの現地調査記録	石井政夫	風人社	5,390	A4判	356
坂本直行論：原野に生きる	早川禎治	早川禎治	非売	20cm	262
雑草・山野草の呼び名事典 四季の散歩が楽しくなる 決定版	亀田龍吉	世界文化ブックス	2,090	A5判	360
里山一生命の小宇宙	今森光彦	クレヴィス	3,300	B4変型判	225
里山一水の匂いのするところ	今森光彦／撮影、滋賀県立美術館／監修	クレヴィス	1,980	A5判	156
サバイバル家族	服部文祥	中央公論新社	924	文庫判	288
山窩奇談 増補版	三角 寛	河出書房新社	990	文庫判	368
山岳・瀑布・渓谷を巡る 50年の記録	芝田宏和／著・写真	岐阜新聞社	2,200	A5判	243
山地と人間	専修大学文学部環境地理学科／編	専修大学出版局	2,640	四六判	265
散歩道の図鑑 あした出会える樹木100	亀田龍吉	山と溪谷社	1,760	B4判	192
四季折々の八ヶ岳を楽しむ69歳、しあわせを生み出す自然な暮らし	ウリウリばあちゃん／著、春日井康夫／撮影	ナツメ社	1,540	四六判	192
四季白馬 アルプスの楽園	菊池哲男	山と溪谷社	3,960	A4変型判	112
四国山地から世界をみる ゾミアの地球環境学	内藤直樹／編、石川登／編	昭和堂	3,080	A5判	352
自然アクセス：「みんなの自然」をめぐる旅	三俣 学	日本評論社	2,640	四六判	224

帰ってきた避難小屋 41軒収録 イラスト超図解!	橋尾歌子	山と溪谷社	1,760	A5判	176
書くことの不純	角幡唯介	中央公論新社	1,760	四六判	256
火山 地球の脈動と人との関わり	藤井敏嗣	丸善出版	1,650	新書判	280
火山に馳す 浅間大変秘抄	赤神 諒	KADOKAWA	2,090	四六変形判	320
火山のきほん：マグマってなんだろう？噴火はなぜ起きる？地球の活動を読み解く火山の話	下司信夫／著、斎藤雨泉／イラスト	誠文堂新光社	1,980	A5判	144
火山の事典 第2版 新装版	下鶴大輔、荒牧重雄、井田喜明、中田節也／編集	朝倉書店	26,400	B5判	592
風の花II 旅に咲く青いケシ	山下順子	Maplart	2,750	200×220	184
河川を巡る旅	西山 勉	東京図書出版	2,200	A5判	206
神奈川県の日帰り山あるき	中田真二	実業之日本社	1,870	A5判	128
かながわ山岳誌 県内のほぼすべての山の踏査記録と学術・文化情報	日本山岳会神奈川県支部	山と溪谷社	2,200	A5判	304
「身体」を忘れた日本人 JAPANESE, AND THE LOSS OF PHYSICAL SENSES<ヤマケイ文庫>	養老孟司、C.W.ニコル、青山聖子他	山と溪谷社	990	文庫判	252
樺太・北海道・上信越の山	増田 宏	白山書房	2,970	A5判	307
川は道 森は家	伊藤健次	福音館書店	1,430	B5変判	40
関西・中国四国・北陸の山ベストコース 多彩な山行を楽しむ88コース	JTBパブリッシングアウトドア編集部／編	JTBパブリッシング	1,870	A5判	192
紀伊山地はなぜ歴史の舞台になったか 山村の地域誌	米家泰作	古今書院	3,850	A5判	156
消えゆく飛驒の峠道	木下喜代男	岐阜新聞社	2,200	A5判	319
木が泣いている 日本の森で起こっていること	長濱和代	岩波書店	1,595	B6判	126
気象予報のための天気図のみかた 増補改訂新装版	下山紀夫	東京堂出版	5,500	A4判	256
北信濃への想い わたしを待つ風景	堀内利美	信濃毎日新聞社	4,950	210×200	108
北岳山小屋物語<ヤマケイ文庫>	樋口明雄	山と溪谷社	1,210	文庫判	376
岐阜県警レスキュー最前線<ヤマケイ文庫>	岐阜県警察山岳警備隊／編、羽根田治他／著	山と溪谷社	1,100	文庫判	368
キャンプの教科書 ゼロから楽しく始められる!	長谷部雅一／監修	ナツメ社	1,650	A5判	208
キャンプの名品哲学	CAMPLIFE編集部／編集	山と溪谷社	1,760	A5判	128
今日からはじめる山登り Let's start mountain climbing from today!	じゅごん大輔	KADOKAWA	1,760	A5判	192
巨樹・巨木図鑑 一度は訪れたい、全国の大樹たち	小山洋二	日本文芸社	2,860	B6変形判	288

山岳図書目録

書名	著者名	発行所	価格	判型	ページ数
【あ】					
アルパインクライミングルートガイド 北アルプス編 特選87ルート	廣川健太郎	山と溪谷社	3,850	B5判	208
蒼い静寂 上高地	栗田貞多男	信濃毎日新聞社	2,420	A4変判	108
アルパインクライマー5 単独登攀者・山野井泰史の軌跡	よこみぞ邦彦／作、山地たくろう／画	小学館	715	B6判	176
アルパインクライマー4 単独登攀者・山野井泰史の軌跡	よこみぞ邦彦／作、山地たくろう／画	小学館	715	B6判	176
アルプスと海をつなぐ 梅海新道 夢の縦走路を拓き、守り続ける人々<ヤマケイ文庫>	小野 健、吉田智彦	山と溪谷社	1,430	文庫判	384
いきものづきあいルールブック 街から山、川、海まで 知っておきたい身近な自然の法律	一日一種	誠文堂新光社	1,980	A5判	208
一生、山に登るための体づくり 新装版	石田良恵	マイナビ出版	1,650	A5判	128
犬ぞりで観測する北極のせかい 北極に通い続けた犬ぞり探検家が語る	山崎哲秀	repicbook	1,540	四六判	128
いのちのうちがわB面	石川竜一／写真、服部文祥／文	笠倉出版社	4,400	A4変型判	144
いわき道草花色図鑑	志田隆文	歴史春秋出版	2,750	B5判	178
岩魚の休日 釣れてよし、釣れなくてよし、人生竿一竿<ヤマケイ文庫>	桂 歌丸	山と溪谷社	990	文庫判	236
院長が教える 一生登れる体を作る食事術<ヤマケイ新書>	齋藤 繁	山と溪谷社	1,100	新書判	240
歌わないキビタキ 山庭の自然誌	梨木香歩	毎日新聞出版	1,980	四六判	296
絵でわかる樹木の知識 新版	堀 大才	講談社	2,640	A5判	272
エナガの重さはワンコイン 身近な鳥の魅力発見事典	くますけ／著、上田恵介／監修	山と溪谷社	1,650	四六判	192
大分二百五十山超 大分のかくれの名山たち第一集「喜瑞」	菅 博行	学術研究出版	1,900	A5判	291
「おかえり」と言える、その日まで 山岳遭難捜索の現場から	中村富士美	新潮社	1,540	四六変型判	160
尾瀬 奇跡の大自然	大山昌克	世界文化社	1,760	文庫版	256
おもしろすぎる山図鑑	ひげ隊長	主婦の友社	1,540	四六判	160
【か】					
回想と空想 松澤節夫 木口木版画集Ⅱ	松澤節夫	白山書房	2,000	184×195	59
改訂新版 栃木の山150	宇都宮ハイキングクラブ／編集	随想舎	1,980	A5判	336
改訂版 九州百名山地図帳 Atlas of the 100 famous mountains in Kyushu	山と溪谷社／編集	山と溪谷社	2,970	A4判	216

山岳図書目録 (2023年)

日本山岳会図書委員会

この「山岳図書目録」は、1年間に出版された山岳図書をリストアップして、それをまとめて整理し一覧にしたものです。書名は五十音順に掲載、メイン・タイトルを優先させて、文庫名などは後付けにしています。

毎月行なわれる定例の図書委員会では、新刊書籍を中心に独自に調査をしてきました。特にここ数年は、図書館流通センター（TRC）から資料を定期的に取り寄せることができるようになり、また山岳書に精通した図書委員に協力してもらい、その年に出版された山岳書のリストを作成しています。

また毎月出版されるこうした新刊書のリストを基にして、図書委員会では、本会図書室に必要と思われる書籍を選択し、寄贈してもらえるように依頼、図書室の充実を図っています。寄贈がかなわない図書は、委員会の予算のなかから購入して、図書室で管理しているものもあります。さらに会報「山」や『山岳』で、紹介すべき本を選択し、図書委員の協力のもと「図書紹介」欄で随時、紹介しています。

こうして集められた山岳図書ですが、いくつかの傾向が顕著にみられるようになってきました。特にここ数年、スマホやSNSの普及が著しく、「読書離れ」がさらに加速されているような気がします。山岳書の刊行点数自体も減少してきました。さらに、いわゆる山岳図書と呼ばれる読みものが減って、実用書と文庫、コミックなどが増えてきました。特にキャンプやたき火、レシピなどに関する実用書が大きな比率を占めるようになってきました。また安価で手軽な文庫本も多数出版されるようになってきましたし、はじめから文庫として出版される本も増えてきました。ただ数点ですが、読みものやノンフィクションのジャンルで目を引く書籍もあり、今後に期待したいところです。

*判型が数字で示されているものの単位はmm（天地×左右）、価格は原則として本体価格ですが、ごく一部税込みになっています。

Nanatsumori's Kanji name came, and also to celebrate his "kanreki"—60th birthday. As Nanatsumori has been from ancient times the mountain for worship and Yakushi Nyorai Buddha statues are enshrined on each of the mountain peaks, it was a wonderful memorial mountain trip to report his visit to the Chinese counterpart.

● Book Reviews

"Inuzori Kotohajime (Starting dog sledding)" by Yusuke Kakuhata, reviewed by Okitsugu Watanabe; "Shogen: Nadare Sonan (Witness accounts on avalanche disasters)" by Mikio Abe, reviewed by Eiji Morita; "Watashi no Kokoro no Tabi (Journey of my heart)" by Kihachi Ozaki, reviewed by Masayuki Kondo; "Raicho, Tonda (Rock ptarmigans flew)" by Yukio Kondo, reviewed by Tetsuro Kaji.

● In memoriam

Setsuko Yamaguchi (Ryokuso-kai member) by Midori Kondo; Kyoei Okuhara (former JAC Shinano section chief) by Itsuo Yonekura; Shokichi Sakurai (permanent member, Echigo section) by Riichi Yoshida; Atsushi Oishi (former Shizuoka section chief) by Ryouzou Yamamoto; Kazumi Ura (former Fukuoka section chief) by Hideki Watanabe

Mount Norikura Disaster and Nihei Takato—Memorial climbing held for the four dead in the 1905 mountain disaster

Kiyoo Kinoshita

In the Meiji era, many people came to ascend Mount Norikura. There are records of 500 to 600 people climbing the 3,026-meter mountain from Hirayu Hot Spring in Nagano Prefecture in one summer of the Meiji ear. Mount Norikura became a popular mountain to climb in the Meiji era when modern mountaineering was introduced, with such Western people as Gauland and Weston climbing the mountain. The mountain became even more popular after Usui Kojima, the founder of the Japanese Alpine Club, released his mountain travelogue in 1900, and many mountain lovers came to climb the mountain for pleasure, mingling with many worshipers clad in white robes. Amid such a burgeoning mountaineering miniboom, 13 mountaineers were involved in a disaster in the mountain in the midsummer of 1905 (the 38th year of Meiji), with four of them frozen to death. The disaster received widespread press coverage partly because the victims included Atsuhiko Komaki, a son of House of Peers member Masanari Komaki. The author of this article tries to get to the bottom of the truth and find the cause of the deadly disaster by examining newspaper reports in those days.

From Nanatsumori to Kyugisan—On Two Mountains in the Kanji Cultural Sphere

Toru Shibazaki

Nanatsumori is a group of seven mountains lying toward the north of Sendai City, Miyagi Prefecture, with the highest peak measuring 507 meters. It is such an irresistible mountain group, as the author says, that makes people want to climb at first glance. This mountain group, which can be seen well from the Aoba Castle site in Sendai, has another Kanji (Chinese character) name 七疑峰, which also is read Nanatsumori. The Kanji name was given by the Sendai Domain lord Date Tsunamura during the Edo Period after the mountain in China called Kyugisan (九疑山) where an ancient Chinese legendary leader, Emperor Shun, was buried. Nanatsumori's Kanji name contains the Chinese character “gi” (疑) taken from the legendary Chinese mountain's name. The author of this article visited Huan Province in China to see the mountain for himself and was deeply moved by the magnificent view of the craggy mountain. Upon returning home, he went climbing all the peaks of Nanatsumori in a day to report about his visit to the Chinese mountain from which

membership figures demonstrate. Very drastic changes and reforms are needed now, like the ongoing plan to establish a new Tokyo Metropolitan section.

Two Camps—The Youth Club’s New Initiatives Thought for Himalayan Camp

Yasuhiro Hanatani

This project mainly for young mountaineers to challenge unclimbed peaks in the Himalaya Mountains was launched in 2015 and has been promoted since the autumn of 2019 as one of the projects to mark the Japanese Alpine Club’ 120th anniversary. Its purposes are to offer chances for ascending unclimbed Himalayan peaks, create a place to gather for young members interested in mountaineering abroad, and build an organizational structure to provide as strong support as possible, including financial one. Participants in the project research and choose target peaks to climb for themselves, and conduct preparatory works continuously, such as information gathering, training and meetings for over one year to work out an expedition plan. After entering the area of the target mountain, they will keep updating their climbing plan with new information gathered there. In this piece, the author looks back on the progress of this project in these years.

Rocks, Mountains and Friends: Canada Youth Project’s Training Camp in Canada in 2023, 2024

Masayuki Matsubara

The author has focused on promoting exchanges with Youth Club members from across the country since taking over the Youth Club chairmanship, wishing to be of some help for young members to find partners to climb mountains together. Since members showed great interest in and enthusiasm for an idea of going to Canada through exchange meetings, the first Canadian training camp was held in June to July 2023. Seven members participated in the Canadian camp, which included climbing in the Canadian Rockies and mountaineering at Mount Athabasca in Alberta. In 2024, the Canada Youth Project was designated as one of the JAC’s 120th anniversary projects. Nine members participated in this year’s training camp, held from June to July, mainly at Squamish and Bugaboo, two major Canadian rock climbing sites in British Columbia.

photographs of breathtaking sceneries on a magnificent scale, such as those of the terrifyingly deep and narrow gorge and huge waterfalls.

The Third, Fourth ‘Great Himalaya Traverse’

Tsuneo Shigehiro, Osamu Yoshii and Kuniyuki Iida

This is the report of the third and fourth stages of the “Great Himalaya Traverse” explorations as part of the Japanese Alpine Club’s 120th anniversary projects. The third stage explored the mountain area from Khumbu to the Langtang Valley in the pre-monsoon season in April–May and also assessed the Nepal earthquake damage situation in these regions. This report also tells about an episode of the team getting lost on its way to cross Tilman’s Col. The fourth stage covered explorations of the central Himalaya areas of Manaslu mountains to Annapurna in the post-monsoon season of October–November. The team took a detour to the Namun La Pass to photograph the three great mountains around Manaslu—Manaslu, Himalchuli and Peak 29. This report contains daily logs of explorations, maps, schedules and travel times as well as accounts of costs needed for the third and fourth stages, so that the big picture of the two exploration plans can be understood better.

● The 10 Years of Reform

More than 10 Years of JAC as Public Interest Corporation

Koichi Miyazaki

It was in 2005 that the Japanese Alpine Club was told by the government to make a choice, within three years, between two options—to be a public interest incorporated association or a general incorporated association as its new status as part of the government’s public interest corporation reform efforts. At that time the JAC faced urgent tasks to deal with the aging membership and financial stringency due to its decreasing members. However, the JAC had to prioritize the handling of this public interest corporation issue over those urgent tasks. After many meetings, the JAC board of directors officially decided in April 2012 to make the JAC a public interest incorporated association. As a result of greater governance being required for the board of directors, the power of the JAC council relatively weakened, limiting better use of its talented resources within and without the council. During the six years until the decision was reached on the public interest corporation issue, the urgent problem of attending the aging membership had been put on the back burner—resulting in the progress of the membership aging, as the

● Special article

Biography:“Mountain feyer—Okano Kinjiro Hyoden”

Rieko Suzuki and Haruka Suzuki

This biography of the “solitary mountaineer” Kinjiro Okano by Rieko Suzuki and Haruka Suzuki traces Okano’s life, using recently found materials. Okano and Usui Kojima stood on the summit of Mount Yari in 1902 as the first Japanese mountaineers. After the climbing feat, Okano encountered with Walter Weston and developed a close relationship with him. Soon, he and Kojima were strongly encouraged by Weston to establish a Japanese mountaineering association like the one in his home country. Kojima became the first president of the Japanese Alpine Club and left his mark on the history of mountaineering in Japan. On the other hand, Okano remained little known and obscure. His name and contributions in the mountaineering circles were almost unknown until recently even to many JAC members. Why was he not remembered in history, as Kojima is, as the person who played an important role for founding the JAC? In this book, the authors review the position Okano should be given in the Japanese mountaineering community and trace the life of Okano, who lived his life in mountains and for mountaineering—using numerous materials his bereaved family members had kept and Okano’s diaries after the 1923 Great Kanto Earthquake, along with other mountaineering-related documents and witness accounts by related people.

● Records

Descending the Seti Khola Gorge in Annapurna

Ryoji Onishi

This is the record of the first expedition by climber Ryoji Onishi and canyoneer Akira Tanaka, who explored the gigantic gorge near the river head of Seti Khola in Annapurna from November to December 2022, using the canyoning (also canyoneering) techniques. They went on the second expedition to the area in February–March 2023. Before their feat, no one had ever entered this 5-kilometer-long gorge, one of the world’s largest gorges. Onishi and Tanaka stood on the bottom of the unexplored gorge by rappelling after carefully surveying it. They explored inside the gorge by descending with canyoning techniques to the bottom and ascended back using the fixed rope that had been set downstream in advance. They explored a section of the gorge between the right tributary and the middle part of the mainstream, which measured up to 300 meters deep from the surface to the bottom. This article describes the unprecedented exploration together with

SANGAKU

The Journal of the Japanese Alpine Club

Volume 119 No. 177

Issued September 2024

CONTENTS

Special article

- Biography: "Mountain fever—Okano Kinjiro Hyoden"
..... Rieko Suzuki and Haruka Suzuki..... (8)

Records

- Descending the Seti Khola Gorge in Annapurna Ryoji Onishi..... (40)
The Third, Fourth 'Great Himalaya Traverse'
..... Tsuneo Shigehiro, Osamu Yoshii and Kuniyuki Iida..... (58)

The 10 Years of Reform

- More than 10 Years of JAC as Public Interest Corporation..... Koichi Miyazaki..... (100)
Thought for Himalayan Camp Yasuhiro Hanatani..... (106)
Rocks, Mountains and Friends: Canada Youth Project's Training Camp in Canada in 2023,
2024..... Masayuki Matsubara..... (129)

Research/study

- Mount Norikura Disaster and Nihei Takato—Memorial climbing held for the four dead in
the 1905 mountain disaster Kiyoo Kinoshita..... (148)
From Nanatsumori to Kyugisan—On Two Mountains in the Kanji Cultural Sphere
..... Toru Shibazaki..... (162)

*

- Book Reviews (199)
In Memoriam (213)

*

- Minutes of Meeting for JAC during April/2023—March/2024 (237)
Report from the Local Sections during 2023—2024 (259)
Reports on Committee Activities during 2023—2024 (321)

- Catalogue of Japanese Mountain Books in 2023 (A19)
English Summary (A13)

The Japanese Alpine Club

(Founded 1905)

Address : 5-4 Yonban-cho Chiyoda-ku, Tokyo 102-0081

Office Bearers and Committee (May 2023)

President : HASHIMOTO Shiori

Vice-President : NAGATA Kotaro, KIRYU Koji

IIDA Hajime

Honorary Secretary : NAGASHIMA Yasuhiro

MINAMIHISAMATSU Hiromitsu

HIRAKAWA Youichirou

Auditor : ISHIKAWA Kazuki, SANO Tadanori

Commitee

MATSUDA Hironari

KUBOTA Kenji

KAWASE Keiichi

IKEDA Isao

MOCHIZUKI Kenji

HARADA Tomonori

SARUWATARI Ryotaro

Council

KANZAKI Tadao

ITAMI Tsuguyasu

SHIGEHIRO Tsuneo

OTANI Ryo

MORI Takeaki

NAKAYAMA Shigeaki

KUROKAWA Satoshi

YASUI Yasuo

KIYOTO Rokurou

SAKAI Hiroshi

FURUNO Kiyoshi

IIDA Kuniyuki

KASHIWA Sumiko

Chair of Local Section

Hokkaido : KUROKAWA Sinichi

Fukui : MORITA Makoto

Aomori : SUSUTA Hidemi

Yamanashi : KITAHARA Takahiro

Iwate : ABE Yoko

Shinano : AZUMA Hideki

Miyagi : SENGOKU Nobuo

Gifu : TOMEI Yutaka

Akita : SATO Kazushi

Shizuoka : NAKAMURA Hirokazu

Yamagata : SUZUKI Rio

Tokai : TAKAHASHI Reiji

Fukushima : WATANABE Nobuo

Kyoto-Shiga : KASATANI Shigeru

Ibaraki : ASANO katsumi

Kansai : MIZUTANI Toru

Tochigi : WATANABE Yuji

Sanin : SHIRANE Hitoshi

Gunma : NEI Yasuo

Hiroshima : MORITO Takao

Saitama : OOYAMA Kouiti

Sikoku : ONO Yasuhiro

Chiba : GOTO Masahiro

Fukuoka : URA Kazumi

ToKyo-tama : NOGUCHI Idumi

Kita-kyushu : TAKEMOTO Masayuki

Kanagawa : KOMITA Nobuo

Kumamoto : DOI Osamu

Echigo : KIRYU Koji

Higashikyushu : ANDOU Keizou

Toyama : KAJI Tetsuro

Miyazaki : HIDAKA Kenji

Ishikawa : TARUYA Michiaki

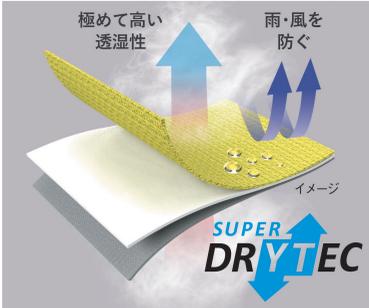
SINCE 1975

mont·bell

雨の登山を 快適で軽やかに

軽量、高透湿の3レイヤーレインウエア

高い透湿性を実現した新素材



極めて高い透湿性

雨・風を防ぐ

イメージ

SUPER DRYTEC

スーパー ドライテック® 3レイヤー

透湿性: **50,000 g/m²・24hrs** (JIS L-1099B-1法) (参考値)



コンパクトに収納可能
収納サイズ:7×7×15cm



168g

スーパー ドライテック® ピークシェル ジャケット

Men's #1128703 ¥24,200 (内税10%) ※女性用モデルもご用意しています

「スーパー ドライテック®」を使用したレインウエアラインアップ



3レイヤー生地
軽量・高透湿モデル
スーパー ドライテック®
ピークシェル ジャケット
Men's・Women's



軽量性と
耐久性を両立
スーパー ドライテック®
レイン ジャケット
Men's・Women's

詳しくはこちら



www.montbell.jp



0088-22-0031



06-6536-5740

公益社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club

—1905(明治38)年設立—

住所：〒102-0081 東京都千代田区四番町5-4 サンビューハイツ四番町

2023 年度役員・評議員・支部長名簿

会 長	橋本しをり			
副 会 長	永田弘太郎	桐生 恒治	飯田 肇	
常務理事	長島 泰博	南久松宏光	平川陽一郎	
理 事	松田 宏也	久保田賢次	川瀬 恵一	
	池田 功	望月 賢司	原田 智紀	
	猿渡良太郎			
監 事	石川 一樹	佐野 忠則		

評 議 員	神崎 忠男	伊丹 紹泰	重廣 恒夫	
	大谷 亮	森 武昭	中山 茂樹	
	黒川 恵	安井 康夫	清登 緑郎	
	坂井 広志	古野 淳	飯田 邦幸	
	柏 澄子			

支部長	北海道=黒川 伸一	青 森=須々田秀美	岩 手=阿部 陽子	
	宮 城=千石 信夫	秋 田=佐藤 和志	山 形=鈴木 理夫	
	福 島=渡部 展雄	茨 城=浅野 勝己	栃 木=渡邊 雄二	
	群 馬=根井 康雄	埼 玉=大山 光一	千 葉=松田 宏也	
	東京多摩=野口いづみ	神奈川=込田 伸夫	越 後=後藤 正弘	
	富 山=鍛冶 哲郎	石 川=樽矢 導章	福 井=森田 信人	
	山 梨=北原 孝浩	信 濃=東 英樹	岐 阜=東明 裕	
	静 岡=中村 博和	東 海=高橋 玲司	京都・滋賀=笠谷 茂	
	関 西=水谷 透	山 陰=白根 一	広 島=森戸 隆男	
	四 国=尾野 益大	福 岡=浦 一美	北九州=竹本 正幸	
	熊 本=土井 理	東九州=安東 桂三	宮 崎=日高 研二	

編集後記

7月29日、『山岳』の編集でバタバタしている最中、大変ショッキングなニュースが入ってきました。秩父宮記念山岳賞を受賞されている平出和也さんと、このところ『山岳』の常連執筆者でもあった中島健郎さんが、K2西壁で遭難されました。中島さんには、『山岳』の今号でもマナスルとダウラギリの撮影記をお願いしていました。本当に残念で言葉がありません。心からお悔やみ申し上げます。

さて、表紙画を画家で写真家の小谷明さんをお願いして5年目を迎えました。今回の画は、パタゴニア「バイネの夜明け」の油彩になりました。アルプス、ヒマラヤに続き『山岳』ならではの絵柄だと思います。

巻頭に特別読物として、岡野金次郎の評伝をもってきました。岡野といえば、小島烏水とともに1902年、日本人登山者として初めて槍ヶ岳の山頂に立った登山家です。ウエストンに強く山岳会創立を勧められましたが、岡野はやがて登山史から埋もれてしまします。なぜ登山史に名を残せなかったのか——。ひよんなことから岡野の足跡をたどり始めた筆者の鈴木利英子さん、遙さんは、その謎を解き明かそうとします。

記録は2本です。植村直己冒険賞を受賞した大西良治さんに、アンナプルナ山群セティ・コーラのゴルジュ帯下降を書いてもらいました。全長5kmにわたって続くゴルジュを懸垂下降して人類未踏の谷底に降り立ち、深く狭いゴルジュ、巨大な滝を探検した記録です。続いて創立120周年記念事業の第3回・4回の「グレート・ヒマラヤ・トラバース」の踏査記録です。3回は春季、クーンパ山群からラントタン谷へ、ティルマンのkolへの迷走が綴られ、4回は秋季、マナスル山群からアンナプルナ山群へ、マナスル三山についての踏査報告です。

日本山岳会が公益法人となつて約10年、ふたつの視点から振

り返つてもらいました。当時、JACは会員の高齢化、会員数減少に伴う財政の逼迫にどう対処するか喫緊の課題でしたが、公益法人化の議論が優先され、なかなか解決の糸口が見えませんでした。そうした現状を宮崎紘一さんに振り返ってもらいました。一方、ユースの流れに関する報告が2本続きます。創立120周年記念事業の一環として、花谷泰広さんがヒマラヤの未踏峰に挑戦する若い登山家たちの活動を、また、松原尚之さんにはカナダ合宿の成果を書いてもらいました。ともに若い会員たちを育て、牽引していこうとする意気込みが感じられます。

調査・研究も2本になりました。明治期、乗鞍岳で13人が遭難、4人が凍死する事故が起きました。木下喜代男さんは、発起人の一人である高頭仁兵衛が慰霊登山した様子や新聞記事などから遭難の真相に迫っています。次の七ツ森より九疑山へは、柴崎徹さんが、仙台近郊の七ツ森の歴史を調べ、中国・湖南省にある九疑山との関連性を实地踏査したうえで、漢字文化圏における二山について考察しています。

今回の英文サマリーも、東京多摩支部の石塚嘉一さんにお願ひしました。今回も大変急ぎ足で翻訳していただきました。

なお、今回から編集委員に市川純造会員に加わってもらいました。現役の書籍の編集者で、さつそくふたつの記事を担当してもらいました。また、来年から編集長を久保田賢次さんに譲ります。やはり若返りは喫緊の課題でもありますから。長い間、お世話になりました。ありがとうございます。

(神長幹雄)

『山岳』編集委員会

担当理事／久保田賢次、委員長／神長幹雄

委員／節田重節、市川純造、原邦三、小泉弘、成川隆顕、萩原浩司

山岳 第百十九年（通卷一七七号）
二〇二四年九月二十日発行

発行所 公益社 日本山岳会
団法人

東京都千代田区四番町五十四
サンビュールハイツ四番町

(〒一〇〇二一〇〇八一)

電話 〇三三二六一四四三三
振替口座 〇〇三〇一四八二九

発行人 橋本しをり
編集人 神長幹雄

印刷所 株式会社 東京印刷

定価三八五〇円

(本体三五〇〇円+税10%)

本誌掲載の記事、写真および地図の無断転載
を禁じます。